

おのれの中に預言者あるを知べし

第三十章

エホバの言われに臨みて言ふ 人の子よ汝イスラエルの牧者の事を預言せよ預言して彼ら牧者に言ふべし主エホバかく言ふ己を牧ふところのイスラエルの牧者は禍なるかな牧者は群を牧ふべき者ならずや 汝らは脂を食ひ毛を纏ひ肥たる物を屠りその群をば牧はざるなり 汝ら其弱きを強くせずその病る者を醫さずその傷ける者を養はず散されたる者をひきかへらず失たる者を尋ねず手荒に厳刻く之を治む 是は牧者なきに因て散り失せ野の諸の獣の餌となりて散失するなり 我羊は諸の山々に諸の高丘に迷ふ我羊全地の表に散りれど之を索す者なく尋ねる者なし

是故に牧者よ汝らエホバの言を聴け 主エホバ言たまふ我は活く我羊掠められわが羊野の諸の獣の餌となる又牧者あらず我牧者わが羊を尋ねず牧者己を牧ふてわが羊を牧はず 是故に牧者よ汝らエホバの言を聞け 主エホバ言たまふ視よ我牧者等を罰し吾羊を彼らの手に討問め彼等をしてわが群を牧ふことを止しめて再び己を牧ふことなからしめ又わが羊をかれらの口より救とりてかれらの食とならざらしむべし

主エホバかく言たまふ我みづからわが群を索して之を守らん 牧者がその散たる羊の中にある日にその群を守ることく我わが群を守り之がその雲深き暗き日に散たる諸の處よりこれを救ひとるべし 我かれらを諸の民の中より導き出し諸の國より集めてその國に携へりイスラエルの山の上と谷の中および國の凡の住居處にて彼らを養はん 善き牧場にて我かれらを牧はんその休息處はイスラエルの高山にあるべし彼處にて彼らは善き休息所に臥しイスラエルの山々の上にて肥たる牧場に草を食はん 主エホバいひたまふ我みづから我群を牧ひ之を憐しむべし 亡たる者は我これを尋ね逐はなれたる者はこれを引返り傷けられたる者はこれを養み病る者はこれを強くせん然と肥たる者と強き者は我これを滅さん我公道をもて之を牧ふべし 主エホバかく言たまふ汝等わが群よ我羊と羊の間および牡羊と牡山羊の間の審判をなさん 汝等は善き

牧場に草食ひ足をもてその残れる草を踏あらし又清たる水を飲み足をもてその殘餘を濁す是汝等にとりて小き事ならんや わが群汝等が足にて踏あらしたる者を食ひ汝等が足にて濁したる者を飲べけんや

是をもて主エホバかれらに言たまふ視よ我肥たる羊と瘦たる羊の間を審判くべし 汝等は脊と肩とをもて擠し角をもて弱き者を盡く衝て遂に之を外に逐散せり 是によりて我わが群を助けて再び掠められざらしめ又羊と羊の間をさばくべし 我かれらの上に一人の牧者をたてん其人かれらを牧ふべし是わが僕ダビデなり彼はかれらを牧ひ彼らの牧者となるべし 我エホバかれらの神とならん吾僕ダビデかれらの中に君たるべし我エホバこれを言ふ

我かれらと平和の契約を結び國の中より悪き獸を滅し絶つべし彼らすなはち安かに野に住み森に眠らん 我彼らおよび吾山の周圍の處々に福祉を下し時に隨ひて雨を降しめん是すなはち福祉の雨なるべし 野の樹はその實を結び地はその産物を出さん彼等は安然にその國にあるべし我がかれらの軛を碎き彼らをもとの僕となせる人の手より救ひいだす時に彼等は我のエホバなるを知べし 彼等は重ねて國々の民に掠めらるゝ事なく野の獸かれらを食ふことなかるべし彼等は安然に住はん彼等を懼れしむる者なかるべし 我かれらのために一の栽植處を起してその名を聞えしめん彼等は重ねて國の饑饉に滅ぶることなく再び外邦人の凌辱を蒙ることなかるべし 彼らはその神なる我エホバが己と共にあるを知り自己イスラエルの家はわが民なることを知るべし主エホバこれを言ふ 汝等はわが羊わが牧場の群なり汝等は人なり我は汝らの神なりと主エホバ言たまふ

第三十五章

爰にエホバの言われに臨みて言ふ 人の子よ汝の面をセイル山にむけ之にむかひて預言し之にいふべし主エホバかく言ふセイル山よ視よ我汝を罰し汝にむかひてわが手を伸べ汝を全く荒し 汝の邑々を滅すべし汝は荒はてん而して我のエホバなるを知にたらん 汝果しなき國を築きてイスラエルの人々をその艱難の時その終の罪の時に劍の手に付せり 是故に主エホバ言ふ我は活く我汝を血に

なさん血汝を追べし汝血を嫌はざれば血汝を追ん 我セイル山を全く荒し其處に往來する者を絶ち 殺されし者その山々に満すべし劍に殺されし者汝の岡々谷々および窪地窪地に仆れん 我汝を長に荒地となさん 汝の邑々には人の住むことあらじ汝等すなはち我のエホバなるを知にいたらん

汝言ふこの二箇の民二箇の國は我が所有なり我等これを獲んとエホバ其處に居せしなり 是故に主エホバは活く汝が恨をもて彼らに示したる忿怒と嫉惡に循ひて我汝に事をなさん我汝を鞠くことを以て我を彼等に示すべし 汝は我エホバの汝がイスラエルの山々にむかひて是は荒はて我儕の食に授かるといひて吐たる ところの諸の誘騙を聞たることを知にいたらん 汝等口をもて我にむかひて誇り我にむかひて汝等の言を多くせり我これを聞く 主エホバ斯いひたまふ全地の歡ぶ時に我汝を荒地となさん 汝イスラエルの家の産業の荒るを喜びたれば我汝をも然らすべしセイル山よ汝荒地とならんエドムも都て然るべし人衆すなはち我のエホバなるを知にいたらん

第三六章

人の子よ汝イスラエルの山々に預言して言べしイスラエルの山々よエホバの言を聽け 主エホバかく言たまふ敵汝等の事につきて言ふ嗚呼是等の舊き高處我儕の所有となると 是故に汝預言して言へ主エホバかく言ふ敵汝等を荒し四方より汝らを吞り是をもて汝等は國民の中の殘餘者の所有となり亦人の口齒にかゝりて噂せらる 然ばイスラエルの山々よ主エホバの言を聞け主エホバ山と岡と窪地と谷と減びたる荒跡と人の棄たる邑々即ちその周圍に殘れる國民に掠められ嘲けらるゝ者にかく言たまふ 即ち主エホバかく言たまふ我まことに吾が嫉妬の火焰をもやして國民の殘餘者とエドム全國の事を言り是等は心に歡樂を極め心に誇りて吾地をおのれの所有となし之を奪ひ掠めし者なり 然ばイスラエルの國の事を預言し山と岡と窪地と谷とに言ふべし主エホバかく言たまふ汝等諸の國民の羞辱を蒙りしに因て我わが嫉妬と忿怒を發して語れり 是をもて主エホバかく言たまふ我わが手を舉ぐ汝の周圍の諸の國民は必ず自身羞辱を蒙るべし

然どイスラエルの山々よ汝等は枝を生じわが民イスラエルのために實を結ばん此事遠からず成ん 我汝らに臨み汝らを眷みん汝らは耕されて種をまかるべし 我汝等の上に人を殖さん是皆悉くイスラエルの家の者なるべし邑々には人住み墟址は建直さるべし 我なんぢらの上に人と牲畜を殖さん是等は殖て多く子を生ん我汝らの上に昔時のごとくに人を住しめ汝らの初の時よりもまさされる恩恵を汝等に施すべし汝等は我がエホバなるを知にいたらん 我わが民イスラエルの人を汝らの上に歩ましめん彼等汝を有つべし汝はかれらの産業となり重ねて彼等に子なからしむることあらじ 主エホバかく言ひたまふ彼等汝らに向ひ汝は人を食ひなんぢの民をして子なからしめたりと言ふ 是故に主エホバ言たまふ汝ふたゝび人を食ふべからず再び汝の民を顧かしむべからず 我汝をして重ねて國々の民の嘲笑を聞しめじ汝は重ねて國々の民の羞辱を蒙ることあらす汝の民を顧かしむることあらじ主エホバこれを言ふ

エホバの言また我にのぞみて言ふ 人の子よ昔イスラエルの家その國に住み己の途と行爲とをもて之を汚せりその途は月穢ある婦の穢のごとくに我に見えたり 彼等國に血を流し且その偶像をもて國を汚したるに因て我わが怒を彼等に對ぎ 彼らを諸の國の民の中に散したれば則ち諸の國に散ぬ我かれらの道と行爲とにしたがひて彼等を鞠けり 彼等その往ところの國々に至りしが遂にわが聖き名を汚せり即ち人かれらを見てこれはエホバの民にしてかれの國より出來れる者なりと言ひ 是をもて我イスラエルの家がその至れる國々にて潰せしわが聖き名を惜めり

此故に汝イスラエルの家に言べし主エホバかく言たまふイスラエルの家よ我汝らのために之をなすにあらす汝らがその至れる國々にて汚せしわが聖き名のためになすなり 我國々の民の中に汚されたるわが大なる名即ち汝らがかれらの中にありて汚したるところの者を聖くせん國々の民はわが汝らに由て我の聖き事をその目の前にあらさん時我がエホバなるを知ん 我汝等を諸の民の中より導き出し諸の國より集めて汝らの國に

携三三いたり 清三三き水を汝等三三に濯三三ぎて汝等三三を清三三くならしめ汝等三三の諸三三の汚穢三三と諸三三の偶像三三を除三三きて汝ら三三を清三三むべし
 我三三新三三しき心を汝等三三に賜三三ひ新三三しき靈魂三三を汝ら三三の衷三三に賦三三け汝等三三の肉三三より石三三の心三三を除三三きて肉三三の心三三を汝ら三三に與三三へ
 吾三三靈三三を汝ら三三の衷三三に置三三き汝ら三三をして我三三が法三三度三三に歩三三ましめ吾三三律三三を守三三りて之三三を行三三はしむべし 汝等三三はわが汝ら三三の
 先祖等三三に與三三へし地に住三三て吾三三民三三とならん我三三は汝ら三三の神三三となるべし 我三三汝ら三三を救三三ひてその諸三三の汚穢三三を離三三れしめ殺三三物
 を召三三て之三三を増三三し饑饉三三を汝ら三三に臨三三ませず 樹三三の果三三と田野三三の作物三三を多三三くせん是三三をもて汝ら三三は重三三て饑饉三三の羞三三を國々三三の
 民三三の中に蒙三三ることあらし 汝ら三三はその惡三三き途三三とその善三三らぬ行三三爲三三を憶三三えてその罪三三とその憎三三むべき事三三のために自ら
 恨三三みん

主三三エホバ言三三たまふ我が之三三を爲三三は汝ら三三のためにあらず汝ら三三これを知三三れよイスラエルの家三三よ汝ら三三の途三三を悔三三て悔
 むべし 主三三エホバ言三三たまふ我三三汝ら三三の諸三三の罪三三を清三三むる日に邑々三三に人三三を住三三しめ墟址三三を再三三興三三しめん 荒三三たる地
 は前に往三三來三三の人々三三の目三三に荒三三地三三と見たるに引三三かへて耕三三さるゝに至三三るべし 人三三すなはち言三三ん此三三荒三三たりし地三三はエデン
 の園三三のごとくに成三三り荒三三滅三三び圯三三れたりし邑々三三は堅三三固三三なりて人三三の住三三に至三三れりと 汝ら三三の周圍三三に殘三三れる國々三三の民三三はす
 なはち我三三エホバが圯三三れし者三三を再三三興三三し荒三三たるところに栽三三植三三することを知三三にいたらん我三三エホバこれと言三三ふ之三三を爲三三ん
 主三三エホバ言三三たまふイスラエルの家三三我三三が是三三を彼ら三三のために爲三三んことをまた我三三に求三三むべきなり我三三群三三のごと
 くに彼ら三三人々三三を殖三三さん 荒三三たる邑々三三には聖三三き群三三のごとくエルサレムの節三三日三三の群三三のごとくに人三三の群三三満三三ん人々三三すな
 はち我三三がエホバなるを知三三べし

第三章

爰三三にエホバの手三三我三三に臨三三みエホバ我三三をして靈三三にて出三三行三三しめ谷三三の中に我三三を放三三賜三三ふ其三三處三三には骨三三充三三てり
 彼三三その周圍三三に我三三をひきめぐりたまふに谷三三の表三三には骨三三はなはだ多三三くあり皆三三はなはだ枯三三たり 彼三三わ
 れに言三三たまひけるは人三三の子三三よ是三三等の骨三三は生三三るや我三三言三三ふ主三三エホバよ汝三三知三三たまふ 彼三三我三三に言三三たまふ是三三等の骨三三に預三三言三三
 し之三三に言三三べし枯三三たる骨三三よエホバの言三三を聞三三け 主三三エホバ是三三らの骨三三に斯三三言三三たまふ視三三よ我三三汝ら三三の中に氣三三息三三を入三三しめて

汝等三三を生三三しめん 我三三筋三三を汝ら三三の上に作三三り肉三三を汝ら三三の上に生三三ぜしめ皮三三をもて汝ら三三を蔽三三ひ氣三三息三三を汝ら三三の中に與三三へて
 汝ら三三を生三三しめん汝ら三三我三三がエホバなるを知三三ん

我三三命三三ぜられしごとく預三三言三三しけるが我三三が預三三言三三する時に骨三三あり骨三三うごきて骨三三と骨三三あひ聯三三る 我三三見三三しに筋三三その
 上三三に出三三きたり肉三三生三三じ皮三三上三三よりこれを蔽三三ひしが氣三三息三三その中にあらず 彼三三また我三三に言三三たまひけるは人三三の子三三よ氣三三息三三に
 預三三言三三せよ人三三の子三三よ預三三言三三して氣三三息三三に言三三へ主三三エホバ言三三たまふ氣三三息三三よ汝三三四方三三の風三三より來三三り此三三殺三三されし者等三三の上三三に
 呼三三吸三三きて是三三を生三三しめよ 我三三命三三ぜられしごとく預三三言三三せしかば氣三三息三三これに入三三て皆三三生三三きその足三三に立三三ち甚三三だ多三三くの群三三衆三三
 となれり

斯三三て彼三三われに言三三たまふ人三三の子三三よ是三三等の骨三三はイスラエルの全三三家三三なり彼ら三三言三三ふ我三三らの骨三三は枯三三れ我三三らの望三三は竭三三く
 我三三情三三絶三三はつるなりと 是三三故三三に預三三言三三して彼ら三三に言三三へ主三三エホバ言三三たまふ吾三三民三三よ我三三汝等三三の墓三三を啓三三き汝ら三三をその墓三三
 より出三三きたらしめてイスラエルの地三三に至三三らしむべし 我三三が民三三よ我三三汝ら三三の墓三三を開三三きて汝ら三三を其三三墓三三より出三三きたらし
 むる時三三汝ら三三は我三三のエホバなるを知三三ん 我三三わが靈三三を汝ら三三の中三三におきて汝ら三三を生三三しめ汝ら三三をその地三三に安三三んぜしめん
 汝等三三すなはち我三三エホバがこれと言三三ひ之三三を爲三三たることを知三三にいたるべし

エホバの言三三我三三にのぞみて言三三ふ 人三三の子三三よ汝三三一片三三の木三三を取三三てその上三三にユダおよびその侶三三なるイスラエルの
 子孫三三と書三三き又三三一片三三の木三三をとりてその上三三にヨセフおよびその侶三三なるイスラエルの全三三家三三と書三三べし是三三はエフライム三三の木
 なり 而三三して汝三三これ三三を俱三三にあはせて一三三の木三三となせ是三三汝三三の手三三の中三三にて相三三聯三三らん 汝三三の民三三の人々三三汝三三に是三三は何三三の意三三
 なるか我三三儕三三に示三三さざるやと言三三ふ時は 此三三れに言三三ふべし主三三エホバ言三三たまふ我三三エフライム三三の手にあるヨセフと
 その侶三三なるイスラエルの支三三派三三の木三三を取三三り之三三をユダの木三三に合三三せて一三三の木三三となしわが手にて一三三とならしめん 汝三三が
 書三三つけたるところの木三三を彼ら三三の目三三のまへにて汝三三の手にあらしめ 此三三れらに言三三ふべし主三三エホバ言三三たまふ我三三イ
 スラエルの子孫三三をその往三三るところの國々三三より出三三し四方三三よりかれを集三三めてその地三三に導三三き 其三三の地三三に於三三て汝ら三三を一三三

民となしてイスラエルの山々にをらしめん一人の王彼等全体の王たるべし彼等は重て二の民となることあらず
 再び二の國に分れざるべし 彼等またその偶像とその憎むべき事等およびその諸の愆をもて身を汚すことあら
 じ我かれらとその罪を犯せし諸の住處より救ひ出してこれを清むべし而して彼らはわが民となり我は彼らの
 神とならん

わが僕ダビデかれらの王とならん彼ら全体の者の牧者は一人なるべし彼らはわが律法にあゆみ吾法度をま
 もりてこれを行はん 彼ら是我僕ヤコブに我が賜ひし地に住ん是其先祖等が住ひし所なり彼處に彼らとその子
 及びその子の子としなへに住はん吾僕ダビデ長久にかれらの君たるべし 我かれらと和平の契約を立ん是は
 彼らに永遠の契約となるべし我かれらを堅うし彼らを殖しわが聖所を長久にかれらの中におかん 我が住所
 は彼らの上にあるべし我かれらの神となり彼らわが民とならん わが聖所長久にかれらの中にあるにいたら
 ば國々の民は我のエホバにしてイスラエルを清むる者なるを知らん

第三八章

エホバの言我にのぞみて言ふ 人の子よロシ、メセクおよびトバルの君たるマゴグの地の王ゴ
 グに汝の面をむけ之にむかひて預言し 言べし主エホバかく言たまふロシ、メセク、トバルの君ゴ
 グよ視よ我なんちを罰せん 我汝をひきもどし汝の腮に鉤をほどとして汝および汝の諸の軍勢と馬とその騎者
 を曳いだすべし是みな其服粧に美を極め大楯小楯をもち凡て剣を執る者にして大軍なり ペルシヤ、エチオピ
 アおよびフテこれとともにあり皆楯と盔をもつ ゴメルとその諸の軍隊北の極のトガルマの族とその諸の軍隊
 など衆多の民汝とともにあり

汝準備をなせ汝と汝にあつまれるところの軍隊みな備をせよ而して汝かれらの保護となれ 衆多の日の
 後なんち罰せられん末の年に汝かの劍をのがれてかへり衆多の民の中より集りきたれる者の地にいたり久しく荒
 ゐたるイスラエルの山々にいたらん是は國々より導きいだされて皆安然に住ふなり 汝その諸の軍隊および

衆多の民をひきぬて上り暴風のごとく至り雲のごとく地を覆はん
 主エホバかくいひたまふ其日に汝の心に思想おこり悪き謀計をくはだてよ 言ん我平原の邑々にのぼり
 穩にして安然に住る者等にいたらん是みな石垣なくして居り關も門もあらざる者なりと 斯して汝物を奪ひ
 物を掠め汝の手をかへして彼の人の住むにいたれる墟址を攻め又かの國々より集りきたりて地の境區にすみて群
 と財寶をもつところの民をせめんとす シバ、デダン、タルシンの商賈およびその 諸の小獅子汝に言ん汝物を
 奪はんとて來れるや汝物を掠めんために軍隊をあつめしや金銀をもちさり群と財寶を取り多くの物を奪はんとす
 るやと

是故に人の子よ汝預言してゴグに言へ主エホバかくいひたまふ其日に汝わが民イスラエルの安然に住むを
 知ざらんや 汝すなはち北の極なる汝の處より來らん衆多の民汝とともにあり皆馬に乗る其軍隊は大にしてそ
 の軍勢は夥多し 而して汝わが民イスラエルに攻きたり雲のごとくに地を覆はんゴグよ末の日にこの事あらん
 すなはち我汝をわが地に攻きたらしめ汝をもて我の聖事を國々の民の目のまへにあらはして彼らに我をしらし
 むべし

主エホバかく言たまふ我の昔日わが僕なるイスラエルの預言者等をもて語りし者は汝ならずや即ち彼ら其
 頃年ひさしく預言して我汝を彼らに攻きたらしめんと語り 主エホバいひたまふ其日すなはちゴグがイスラエ
 ルの地に攻來らん日にわが怒面にあらはるべし 我嫉妬と燃たつ怒をもて言ふ其日には必ずイスラエルの地に
 大なる震動あらん 海の魚空の鳥野の獸凡て地に匍ふところの昆蟲凡て地にある人わが前に震へん又山々崩れ
 崩れたふれ石垣みな地に仆れん 主エホバいひたまふ我劍をわが諸の山に召きたりて彼をせめしめん人々の劍
 その兄弟を撃べし 我疫病と血をもて彼の罪をたゞさん我漲ぎる雨と雷と火と硫黄を彼とその軍勢および彼と
 ともなる多の民の上に降すべし 而して我わが大なることと聖きことを明かにし衆多の國民の目のまへに我を

示さん彼らはすなはち我のエホバなることをしるべし

第三章

人の子よゴグにむかひ預言して言へ主エホバかく言たまふロシ、メセク、トバルの君ゴグよ視よ我

らしめ 汝の左の手より弓をうち落し右の手より矢を落しむべし 汝と汝の諸の軍勢および汝ともなる民

はイスラエルの山々に仆れん我汝を諸の類の鷲鳥と野の獸にあたへて食しむべし 汝は野の表面に仆れん

我これを言ばなりと主エホバ言たまふ 我マゴグと島々に安然に住る者と共に火をおくり彼らをして我のエホバ

なるを知しめん 我わが聖き名をわが民イスラエルの中に知しめ重てわが聖き名を汚さしめじ國々の民すなは

ち我がエホバにしてイスラエルにありて聖者なることを知るにいたらん 主エホバいひたまふ視よ是は來れり

成れり是わが言る日なり 茲にイスラエルの邑々に住る者出きたり 甲冑大楯小楯弓矢手鎗手矛および槍を

燃し焚き之をもて七年のあひだ火を燃さん 彼ら野より木をとりきたること無く林より木をきりとらずして

甲冑をもて火を燃しまた己を掠めし者をかすめ己の物を奪ひし者の物を奪はん主エホバこれを言ふ

其日に我イスラエルにおいて曠地をゴグに與へん是往來の人の谷にして海の東にあり是往來の人を斃げん

其處に人ゴグとその群衆を埋めこれをゴグの群衆の谷となづけけん イスラエルの家之を埋めて地を清むるに七

月を費さん 國の民みなこれを埋め之によりて名をえん是我が榮光をあらはす日なり 彼等定れる人を選む

其人國の中をゆきめぐりて往來の人とともにかの地の面に遺れる者を埋めてこれを清む七月の終れる後かれら尋

ぬることをなさん 國を行巡る者往來し人の骨あるを見るときはその傍に標をたつれば死人を埋むる者これを

ゴグの群衆の谷に埋む 邑の名もまた群衆ととなへられん斯かれら國を清めん

人の子よ主エホバかく言ふ汝諸の類の鳥と野の諸の獸に言べし汝等集ひ來り我が汝らのために殺せる

ところの犧牲に四方より聚れ即ちイスラエルの山々の上なる大なる犧牲に臨み肉を食ひ血を飲め 汝ら勇士の

肉を食ひ地の君等の血を飲め牡羊羔羊牡牛牡牛など凡てバシヤンの肥たる畜を食へ 汝らわが汝らのため
に殺せるところの犧牲につきて飽まで脂を食ひ醉まで血を飲べし 汝らわが席につきて馬と騎者と勇士と諸
の軍人に饜べしと主エホバいひたまふ

我わが榮光を國々の民にしめさん國々の民みな我がおこなふ審判を見我がかれらの上に加ふる手を見るべ

し 是日より後イスラエルの家我エホバの己の神なることを知ん 又國々の民イスラエルの家の據へうつさ

れしは其惡によりしなるを知べし彼等われに背きたるに因て我わが面を彼らに隠し彼らをもその敵の手に付したれ

ば皆劍に仆れたり 我かれらの汚穢と惡惡としたがひて彼ら待ひわが面を彼等に隠せり

然ば主エホバかく言たまふ我今ヤコブの俘擄人を歸しイスラエルの全家を憐み吾聖き名のために熱中せん

彼らその地に安然に住ひて誰も之を怖れしむる者なきに至る時はその我にむかひて爲たるところの諸の悖れ

る行爲のために愧べし 我かれらを國々より導きかへりその敵の國々より集め彼らをもて我の聖き事を衆多の

國民にしめす時 彼等すなはち我エホバの己の神なるを知ん是は我かれらを國々に移し又その地にひき歸りて

一人をも其處にのこさざればなり 我わが靈をイスラエルの家にそまきたれば重て吾面を彼らに隠さじ主エホ

バこれを言ふ

第四章

我らの據へ移されてより二十五年邑の撃破られて後十四年その年の初の月の十日其日にエホバの

手われに臨み我を彼處に携へ往く 即ち神異象の中に我をイスラエルの地にたづさへゆきて甚だ

高き山の上におろしたまふ其處に南の方にあたりて邑のごとき者建てり 彼我をひきて彼處にいたりたまふに

一箇の人あるを見るその面容は銅のごとくにして手に麻の繩と間竿を執り門に立てり 其人われに言けるは

人の子よ汝目をもて視耳をもて聞き我が汝にしめす諸の事に心をとめよ汝を此にたづさへしはこれを汝にしめさ

んためなり汝が見る所の事を盡くイスラエルの家に告よと

斯ありて視るに家の外の四周に墻垣ありその人の手に六キユビトの間竿ありそのキユビトは各一キユビトと一手潤なり彼その墻の厚を量るに一竿ありその高もまた一竿あり 彼東向の門にいたりその階をのぼりて門の闕を量るに其潤一竿あり即ち第一の闕の潤一竿なり 守房は長一竿廣一竿守房と守房の間は五キユビトあり内の門の廊の傍なる門の闕も一竿あり 内の門の廊を量るに一竿あり 又門の廊を量るに八キユビトありその柱は二キユビトなりその門の廊は内にあり 東向の門の守房は此旁に三箇彼處に三箇あり此三みな其寸尺おなじ柱もまた此處彼處ともにその寸尺おなじ 門の入口の廣をはかるに十キユビトあり門の長は十三キユビトなり 守房の前に一キユビトの界あり彼旁の界も一キユビトなり守房は此旁彼旁ともに六キユビトなり 彼また此守房の屋背より彼屋背まで門をはかるに入口より入口まで二十五キユビトあり 柱は六十キユビトに作れる者なり門のまはりに庭ありて柱にまでおよぶ 入口の門の前より内の門の廊の前いたるまで五十キユビトあり 守房と門の内面の周圍の柱とに閉窓あり墻垣の差出たる處にもしかり内面の周圍には窓あり柱には棕櫚あり

彼また我を外庭に携ゆくに庭の周圍に設けたる室と鋪石あり鋪石の上に三十の室あり 鋪石は門の側にありて門の長におなじ是下鋪石なり 彼下の門の前より内庭の外の前までの廣を量るに東と北とに百キユビトあり

又外庭なる北向の門の長と寬をはかれり 守房その此旁に三箇彼旁に三箇あり柱および差出たる處もあり是は前の門の寸尺のごとく長五十キユビト潤二十五キユビトなり 其窓と差出たる處と棕櫚は東向の門にある者の寸尺と同じ七段の階級を経て上るに差出たる處その前にあり 内庭の門は北と東の門に向ふ彼門より門までを量るに百キユビトあり 彼また我を南に携ゆくに南向の門ありその柱と差出たる處をはかるに前の寸尺の如し 是とその差出たる處の周圍に窓あり彼窓のごとしその門は長五十キユビト潤二十五キユビトなり 七段の階級をへて登るべし 差出たる處その前にありその柱の上には此旁に一箇彼旁に一箇の棕櫚あり 内庭に南向の門あり門より門まで南の方をはかるに百キユビトあり

彼我を携へて南の門より内庭に至る彼南の門をはかるにその寸尺前のごとし 其守房と柱と差出たる處は前の寸尺のごとしその門と差出たる處の周圍とに窓あり門の長五十キユビト潤二十五キユビトなり 差出たる處周圍にありその長二十五キユビト潤五キユビト 其差出たる處は外庭に出づその柱の上に棕櫚あり八段の階級をへて升るべし

彼また内庭の東の方に我をたづさへゆきて門をはかるに前の寸尺の如し 其守房と柱および差出たる處は寸尺前のごとしその門と差出たる處の周圍とに窓あり門の長五十キユビト潤二十五キユビト 其差出たる處は外庭にいつ柱の上には此旁彼旁に棕櫚あり八段の階級をへて升るべし

彼われを北の門にたづさへゆきてこれを量るに寸尺おなじ 其守房と柱と差出たる處ありその周圍に窓あり門の長五十キユビト潤二十五キユビト 其柱は外庭に出づ柱の上に此旁彼旁に棕櫚あり八段の階級をへて升るべし

門の柱の傍に戸のある室あり其處は燔祭の牲を洗ふところなり 門の廊に此旁に二の臺彼旁に二の臺あり其上に燔祭罪祭愆祭の牲畜を屠るべし 北の門の入口に升るに外面に於て門の廊の傍に二の臺あり亦他の旁にも二の臺あり 門の側に此旁に四の臺彼旁に四の臺ありて八なり其上に屠ることを爲す 升口に琢石の四の臺あり長一キユビト半廣一キユビト半高一キユビトなり燔祭および犠牲を宰るところの器具をその上に置く 内の周圍に一手寬の曲釘うちてあり犠牲の肉は臺の上におかる 内の門の外において内庭に謳歌人の室あり一は北の門の側にありて南にむかひ一は南の門の側にあり

て北にむかふ 彼われに言ふ此南にむかへる室は殿をまもる祭司のための者 北にむかへる室は壇をまもる祭司のための者なり彼等はレビの子孫の中なるザドクの後裔にしてエホバに近よりて之に事ふるなり 而して彼庭をはかるに長百キュビト寛百キュビトにして四角なり殿の前に壇あり 彼殿の廊に我をひきゆきて廊の柱を量るに此旁も五キュビト彼旁も五キュビトあり門の廣は此旁三キュビト彼旁三キュビトなり 廊の長は二十キュビト寛は十一キュビト階級によりて升るべし柱にそふて柱あり此旁に一箇彼旁に一箇

第四章

彼殿に我をひきゆきて柱を量るに此旁の寛六キュビト彼旁の寛六キュビト幕屋の寛なり 戸の寛は十キュビト戸の側柱は此旁も五キュビト彼旁も五キュビト彼量るに其長四十キュビト廣二十キュビトあり 内にいりて戸の柱を量るに二キュビトあり戸は六キュビト戸の淵は七キュビト 彼量るに其長二十キュビト廣二十キュビトにして殿に向ふ彼に言けるは是至聖所なり

彼室の壁を量るに六キュビトあり室の周囲の連接屋の寛は四キュビトなり 連接屋は三階にして各三十の間あり室の壁周囲の連接屋の側において連接屋は之に連りて堅く立つ然れども室の壁に挿入て堅く立るにあらず 連接屋は上にいたるに隨ひて廣くなり行く即ち家の圍牆家の四周に高くのぼれば家は上廣くして下のより上のにのぼる様は中の割合にしたがふなり 我室に高き處あるを見る連接屋の基は一竿に足てその連接處まで六キュビトなり 連接屋にある外の壁の厚は五キュビト室の連接屋の傍の隙もまた然り 室の間にあたりて家の四周に廣二十キュビトの處あり 連接屋の戸は皆かの隙にむかふ一の戸は北にむかひ一の戸は南にむかふ其隙たる處は四周にありて廣五キュビトなり

西の方にあたる離處の前の建物は廣七十キュビトその建物の周囲の壁は厚五キュビト長九十キュビト 彼殿をはかるにその長百キュビトあり離處とその建物とその隙は長百キュビト 殿の面および離處の

東面は廣百キュビトなり

彼後なる離處の前の建物の長を量れり其此旁彼旁の廊下は百キュビトありまた内殿と庭の廊を量り 彼の三にある處の闕と閉窓と周囲の廊下を量れり闕の對面に當りて周圍に嵌板あり窓まで地を量りしが窓は皆蔽ふてあり 戸の上なる處 内室と外の處および内外の周囲の諸の壁まで量ることをなせり ケルビムと棕櫚と造りてあり二のケルビムの間毎に一本の棕櫚ありケルビムには二の面あり 此旁には人の面ありて棕櫚にむかひ彼旁には獅子の面ありて棕櫚にむかふ家の周圍に凡て是のごとく造りてあり 地より戸の上までケルビムと棕櫚の設あり殿の壁も然り

殿には四角の戸柱あり聖所の前にも同形の者あり 壇は木にして高三キュビト長二キュビトなり是に隅木ありその臺と其周圍も木なり彼われに言けるは是はエホバの前の壇なり 殿と聖所とは二の戸あり 其の戸に二の扉あり是二の開扉なり此戸に二箇彼戸に二箇の扉あり 殿の戸にケルビムと棕櫚つくりてあり壁におけるがごとし外の廊の前に木の段あり 廊の横壁と家の連接屋と段には此旁彼旁に閉窓と棕櫚あり

第二章

彼われを携へ出して北におもむく路よりして外庭にいたり我を室に導く是は北の方にありて離處に對ひ建物に對ひをる 二 その百キュビトの長ある所の前に至るに戸は北の方にあり寛は五十キュビト 内庭の二十キュビトなる處に對ひ外庭の鋪石に對ひ廊下の上に廊下ありて三なり 室の前に寛十キュビトの路あり又内庭にいたる處の百キュビトの路あり室の戸は北にむかふ 其の建物の上の室は下の中のとに比れば狭し是は廊下の爲に其場を削らるればなり 是等は三階にして庭の柱の如くは柱あらす是をもて上のは下の中よりもその場狭し 室の前にあたりて外に垣あり室にそひて外庭にいたる其長五十キュビト 外庭の室の長は五十キュビトにして殿に對ふ所は百キュビトあり 其の下の方より是等の室いづ外庭よりこれに往ときは其入口東にあり

一〇 南の庭垣の廣き方にあたり離處とその建物にむかひて室あり 二 北の方なる室のごとく其前に路あり
 三 その長寛およびその出口その建築みな同じ 四 その入口のごとく南の方なる室の入口も然り路の頭に入口あり
 五 是は垣に連るところの路にて東より來る路なり

六 彼われに言けるは離處の前なる北の室と南の室は聖き室にしてエホバに近くところの祭司の至聖き物を
 七 食ふべき所なり其處に於て最聖き物素祭罪祭愆祭の物を置べし其處は聖ければなり 八 祭司は入るときは
 九 聖所より外庭に出べからず彼等職掌を行ふところの衣服を其處に置べし是聖ければなり而して他の衣を着て民
 一〇 に屬するの處に近くべし

一一 彼内室を量ることを終て東向の門の路より我を携へ出して四方を量れり 一二 彼間竿をもて東面を量るに
 一三 その周圍間竿五百竿あり 一四 又北面をはかるにその周圍間竿五百竿あり 一五 また南面をはかるに間竿五百竿
 一六 あり 一七 また西面にまはりて量るに間竿五百竿あり 一八 斯四方を量れり周圍に牆ありその長五百竿寛五百竿
 一九 聖所と俗所とを區別つなり

第三章

一 彼われを携へて門にいたる其門は東に向ふ 二 時にイスラエルの神の榮光東よりきたりしがそ
 三 の壁大水の音のごとくにして地その榮光に照さる 四 其状を見るに我がこの邑を滅しに來りし時に
 五 見たるところの狀の如くに見ゆ又ケバル河の邊にて我が見しところの形のごとき形の者あり我すなはち俯伏す
 六 エホバの榮光東向の門よりきたりて室に入る 七 靈われを引あけて内庭にたづさへいるにエホバの榮光室に
 八 充る

九 我聽に室より我に語ふ者あり又人ありてわが傍に立つ 一〇 彼われに言たまひけるは人の子よ吾位のある
 一一 所我脚の跡のふむ所此にて我長久にイスラエルの子孫の中に居んイスラエルの家とその王等再びその姦淫とその
 一二 王等の屍骸およびその崇邱をもてわが聖き名を汚すことなるべし 一三 彼らその圖をわが圖の側に設け其門柱

一四 をわが門柱の傍に設けたれば我と其等との間には只壁一重ありしのみ而して彼ら憎むべき事等をおこなひて吾が
 一五 聖名を汚したるが故に我怒りてかれらを滅したり 一六 彼ら今はその姦淫とその王等の屍骸をわが前より除き去ん
 一七 我また彼らの中に長久に居べし

一八 人の子よ汝この室をイスラエルの家に示せ彼らその惡を悔ちまたこの式様を量らん 一九 彼らその爲たる
 二〇 諸の事を愧なば彼らに此室の製法とその式様その出入口その一切の製法その一切の則その一切の製法その
 二一 一切の法をしらしめよ是をかれらの目の前に書て彼らにその諸の製法とその一切の則を守りてこれを爲しむべし
 二二 室の法は是なり山の頂の上なるその地は四方みな最聖し是室の法なり

二三 壇の寸尺はキュビトをもて言ば左のごとしそのキュビトは一キュビトと手寛あり壇の底は一キュビト寛一
 二四 キュビトその周圍の邊は半キュビト是壇の臺なり 二五 土に坐れる底座より下の層まで二キュビト寛一キュビト又
 二六 小き層より大なる層まで四キュビト寛一キュビトなり 二七 正壇は四キュビト壇の上の面に四の角あり 二八 壇の上
 二九 の面は長十二キュビト寛十二キュビトにしてその四面角なり 三〇 その層は四方とも長十四キュビト寛十四キュビ
 三一 トその四周の縁は半キュビトその底は四方一キュビトその階は東に向ふ

三二 彼われに言けるは人の子よ主エホバかく言たまふ壇を建て其上に燔祭を獻げ血を灑ぐ日には是をその則と
 三三 すべし 三四 主エホバかく言ふ汝レビの支派ザドクの裔にして我にちかづき事ふる所の祭司等に積なる牡牛を罪祭
 三五 として與ふべし 三六 又その血を取てこれをその四の角と層の四隅と四周の邊に抹り斯して之を清め潔ようすべし
 三七 汝罪祭の牛を取てこれを聖所の外にて殿の中の定まれる處に焚べし 三八 第二日に汝全き牡山羊を罪祭に

三九 獻ぐべし即ちかれら牡牛をもて清めしごとく之をもて壇を清むべし 四〇 汝潔禮を終たる時は積なる牡牛の全き
 四一 者および群の全き牡羊を獻ぐべし 四二 汝これをエホバの前に持きたるべし祭司等これに塊を撒かけ燔祭としてエ
 四三 ホバに獻ぐべし 四四 七日の間汝日々に牡山羊を罪祭に供ふべしまた彼ら積なる牡牛と群の牡羊との全き者を

二六 供ふべし 七日の間かれら壇を潔くしこれを清めその手を満すべし 是等の日満て八日にいたりて後は祭司
二七 等汝らの燔祭と酬恩祭をその壇の上に奉へん我悦びて汝らを受納べし主エホバこれを言たまふ

第四四章

一 斯て彼我を引て聖所の東向なる外の門の路にかへるに門は閉てあり エホバすなはち我に言
二 たまひけるは此門は閉おくべし開くべからず此より誰も入るべからずイスラエルの神エホバ此より
三 入たれば是は閉おくべきなり その君は君たるが故にこの内に坐してエホバの前に食をなさん彼は門の廊の路
四 より入りまたその路より出ん

五 彼また我をひきて北の門の路より家の前に至りしが視るにエホバの榮光エホバの家に満たれば我俯伏け
六 るに エホバわれに言たまふ人の子よエホバの家の諸の則とその諸の法につきて我が汝に告るところの諸の事
七 に心を用ひ目を注ぎ耳を傾け又殿の入口と聖所の諸の出口に心を用ひよ 而して悻れる者なるイスラエルの
八 家に言べし主エホバイスラエルの家よ汝らその行ひし諸の憎むべき事等をもて足りとせよ 即ち汝等
九 は心にも割禮をうけず肉にも割禮をうけざる外國人をひきたりて吾聖所にあらしめてわが家を汚し又わが食
十 なる脂と血を獻ぐることを爲り斯汝らの諸の憎むべき事の上に彼等また吾契約を破れり 汝ら我が聖物を守
十一 る職守を怠り彼らをして我が聖所において汝らにかはりて我の職守を守らしめたり

十二 主エホバかく言たまふイスラエルの子孫の中に居るところの諸の異邦人の中凡て心に割禮をうけず肉に
十三 割禮をうけざる異邦人はわが聖所に入るべからず 亦レビ人も迷へるイスラエルがその憎むべき偶像をした
十四 ひて我を棄て迷ひし時に我を棄てきたる者はその罪を蒙るべし 即ち彼らは吾が聖所にありて下僕となり家
十五 の門を守る者となり家にて下僕の業をなさん又彼ら民のために燔祭および犧牲の牲畜を殺し民のまへに立てこれ
十六 に事へん 彼等その偶像の前にて民に事へイスラエルの家を蒙かせて罪におちいらしめたるが故に主エホバ
十七 言ふ我手をあけて彼らを罰し彼らをしてその罪を蒙らしめたり 彼らは我に近づきて祭司の職をなすべからず

十八 至聖所にきたりわが諸の聖き物に近よるべからずその恥とその行ひし諸の憎むべき事等の報を蒙るべし
十九 我かれらをして宮守の職務をおこなはしめ宮の諸の業および其中に行ふべき諸の事を爲しむべし

二十 然どザドクの裔なるレビの祭司等すなはちイスラエルの子孫が我を棄て迷離し時にわが聖所の職守を守
二十一 りたる者等は我に近づきて事へ我まへに立ち脂と血をわれに獻げん主エホバこれを言ふなり 即ち彼等わが
二十二 聖所にいり吾が臺にちかづきて我に事へわが職守を守るべし 彼等内庭の門にいる時は麻の衣を衣べし内庭
二十三 の門および家において職をなす時は毛服を身につくべからず 首には麻の冠をいたゞき腰には麻の袴を穿つ
二十四 べし汗のいづるごとくに身をよそほふべからず 彼ら外庭にいづる時すなはち外庭にいでて民に就く時はその
二十五 職をなせる所の衣服を脱てこれを聖き室に置き他の衣服をつくべし是その服をもて民を聖くすること無らんため
二十六 なり 彼ら頭を剃べからず又髪を長く長すべからずその頭髪を剪るべし 祭司たる者は内庭に入るときに酒を
二十七 のむべからず 又寡婦および去れたる婦を妻にめとるべからず唯イスラエルの家の出なる處女を娶るべし又は
二十八 祭司の妻の寡となりし者を娶るべし 彼らわが民を教へ聖き物と俗の物の區別および汚れたる物と潔き物の
二十九 區別を之に知しむべし 争論ある時は彼ら起て判決き吾定例にしたがひて斷決をなさん我が諸の節期におい
三十 て彼らわが法と憲を守るべく又わが安息日を聖くすべし 死人の許にいたりて身を汚すべからず只父のため母
三十一 のため息子のため息女のため兄弟のため夫なき姉妹のためには身を汚すも宜し 斯る人にはその潔齋の後なほ
三十二 七日を數へ加ふべし 彼聖所にいたり内庭にいり聖所にて職を執行ふ日には罪祭を獻ぐべし主エホバこれ
三十三 を言ふ

三十四 彼らの産業は是なり即ち我これが産業たり汝らイスラエルの中に彼らに所有を與ふべからず我すなはち
三十五 これが所有たるなり 祭物および罪祭愆祭の物は是等を彼等食ふべし凡てイスラエルの中の奉納物は彼らに歸す
三十六 諸の物の初實の初および凡て汝らが獻ぐる諸の献物みな祭司に歸すべし汝等その諸の麥粉の初を祭司に與ふ

べし是汝の家に幸福あらしめんためなり 鳥にもあれ獸にもあれ凡て自ら死にたる者又は裂ころされし者をば 祭司たる者食ふべからず

第四章

汝ら鐵をひき地をわかちて産業となす時は地の一分を取り聖き者となしてエホバに献ぐべし其長は二萬五千寬は一萬なるべし是は其四方周圍凡て聖し 此中聖所に屬する者は長五百寬五百にして周圍四角なり又五十キユピトの隙地その周圍にあり 汝この量りたる處より長二萬五千寬一萬の場を度り取るべし此うちに聖所至聖所を設くべし 是は地の聖場なりエホバに近づき事ふる聖所の役者なる祭司等に屬すべし是はこれらの家を建てまた聖所を設くる聖地なり 又長二萬五千寬一萬の處家に事ふるレビ人に屬し其所有に二十の室あるべし 其の献げたる聖地に並びて汝ら寬五千長二萬五千の處を分ち邑の所有となすべし是はイスラエルの全家に屬す 又君たる者の分はかの献げたる聖地と邑の所有の此處彼處にあり献げたる聖地に沿ひ邑の所有に沿ひ西は西にわたり東は東に渉るべし西の極より東の極まで其長は支派の分の一と等し イスラエルの中に彼が有るところの者は地にあり吾君等は重てわが民を處ぐるることなくイスラエルの家にその支派にしたがひて地を與へおかん

主エホバかく言たまふイスラエルの君等よ汝ら足ことを知れ處ぐることを掠むる事を止め公道と公義を行へ我民を逐放すことを止よ主エホバこれを言ふ 汝ら公平き權衡公平きエバ公平きパテを用ふべし エバとパテとはその量を同じうすべし即ちパテもホメル二の十分一を容れエバもホメル二の十分一を容るべしホメルに準じてその度量を定むべし シケルは二十ゲラに當る二十シケル二十五シケル十五シケルを汝等マネとなすべし 汝らが献ぐべき献物は左のごとし一ホメル二の小麥の中よりエバの六分一を献げ一ホメル二の大麥の中よりエバの六分一を献ぐべし 油の例油のパテは是のごとし一コルの中よりパテの十分一を献ぐべしコルは十パテを容る者にて即ちホメルなり十パテ一ホメルとなればなり 又イスラエルの朕なる地より群二百ごとに一箇の羊を出して素祭および燔祭酬恩祭の物に供へ民の罪を贖ふことに用ひしむべし主エホバこれを言ふ 國の民みなこの獻物をイスラエルの君にもちきたるべし 又君たる者は祭日朔日安息日およびイスラエルの家の諸の節期に燔祭素祭灌祭を奉ぐべし即ち彼イスラエルの家の贖罪をなすために罪祭素祭燔祭酬恩祭を執行なすべし 主エホバかく言たまふ正月の元日に汝積なる全き牡牛を取り聖所を清むべし 又祭司は罪祭の牲の血を取りて殿の門柱にぬり壇の屏の四隅と内庭の門の柱に塗べし 月の七日に汝等また迷ふ人および拙き者のために斯なして殿のために贖をなすべし

正月の十四日に汝ら逾越節を守り七日の間 祝をなし無酵パンを食ふべし その日に君は己のため又國の諸の民のために牡牛を備へて罪祭となし 七日の節筵の間七箇の牡牛と七箇の牡羊の全き者を日々七日の間備へてエホバに燔祭となし又牡山羊を日々備へて罪祭となすべし 彼また素祭として一エバを牡牛のために一エバを牡山羊のために備へ油一ヒンをエバに加ふべし 七月の十五日の節筵に彼また罪祭燔祭素祭および油を是のごとく七日の間備ふべし

第六章

主エホバかく言たまふ内庭の東向の門は事務をなすところの六日の間は閉ぢ置き安息日にこれを開き又月朔にこれを開くべし 君たる者は外より門の廊の路をとほりて入り門の柱の傍に立つべし祭司等その時かれの爲に燔祭と酬恩祭を備ふべし彼は門の關において禮拜をなして出べし但し門は暮まで閉べからず 國の民は安息日と月朔とにその門の入口においてエホバの前に禮拜をなすべし 君が安息日にエホバに獻ぐる燔祭には六の全き羔羊と一の全き牡羊を用ふべし 又素祭は牡羊のために一エバを用ふべし羔羊のために用ふる素祭はその手の出しうる程を以し一エバに油一ヒンを加ふべし

月朔には積なる一頭の全き牡牛および六の羔羊と一の牡羊の全き者を用ふべし 素祭は牛のために一エバ牡羊のために一エバ羔羊のために其手のおよぶ程を備へ一エバに油一ヒンを加ふべし 君は來る時に門の廊の

路より入りまたその路より出べし

九 國の民祭日にエホバの前に来る時は北の門より入りて禮拜をなせる者は南の門より出で南の門より入る者は北の門より出べし其入たる門より歸るべからず眞直に進みて出べし 一〇 君彼らの中にありてその入る時に入りその出る時に出べし 一一 祭日と祝日には素祭として牛のために一エバ牡羊のために一エバ羔羊のためにその手を出し得る程を備へ一エバに油一ヒンを加ふべし 一二 君もし自ら好んでエホバに燔祭を備へんとし又は自ら好んで酬恩祭を備へんとせば彼のために東向の門を開くべし彼は安息日に爲ごとくその燔祭と酬恩祭を備ふべし又彼が出たる時はその出たる後に門を閉べし

一三 汝日々一歳の全き羔羊一箇を燔祭としてエホバに備ふべし即ち朝ごとにこれを備ふべし 一四 汝朝ごとに素祭をこれに加ふべし即ち一エバの六分一と麥粉を湯す油一ヒンの三分一とを素祭としてエホバに獻ぐべし是は長久に續くところの例典なり 一五 即ち朝ごとに羔羊と素祭と油とを燔祭にそなへて止ことなかるべし

一六 主エホバかく言たまふ君もし其子の一人に讓物をなす時は是はその人の産業となりその子孫に傳はりて之が所有となるべし 一七 然ど若その産業の中をその僕の一人に與ふる時は是は解放の年までその人に屬し居て遂に君にかへるべし彼の産業は只その子孫にのみ傳はるべきなり 一八 君たる者は民の産業を取て民をその所有より逐放すべからず只己の所有の中をその子等に傳ふべし是わが民のその所有をはなれて散ことなからんためなり

一九 斯て彼門の傍の入口より我をたづさへりて北向なる祭司の聖き室にいたるに西の奥に一箇の處あり 二〇 彼われに言けるは是は祭司が惣祭および罪祭の物を煮素祭の物を焼くところなり斯するはこれを外庭に携へいでて民を聖くすることなからんためなり 二一 彼また我を外庭に携へいでして庭の四隅をとほらしむるに庭の隅々にもまた庭あり 二二 即ち庭の四隅に庭の設ありてその長二十キユビト廣三十キユビトなり四隅の處その寸尺みな同じ 二三 凡てその四の周圍なるその建物の下に煮紅の處造りてあり 二四 彼われに云けるは是等は家の役者等が民の犧牲の品を煮る厨房なり

第七章

一 斯てかれ我を室の門に携へかへりしが室の閣の下より水の東の方に流れ出るあり室の面は東にむかひをりその水下より出で室の右の方よりして壇の南より流れ下る 二 彼北の門の路より我を携へいでして外面をまはらしめ東にむかふ外の門にいたらしむるに水門の右の方より流れ出づ

三 その人東に進み手に皮繩を持て一千キユビトを度り我に水をわたらしむるに水際骨にまでおよぶ 四 彼また一千を度り我を渉らしむるに水際骨にまでおよぶ而してまた一千を度り我を渉らしむるに水際骨にまで及ぶ 五 また一千を度るに早わが渉るあたはさる河となり水高くして潤くほどの水となり徒渉すべからざる河とはなりぬ

六 彼われに言けるは人の子よ汝これを見とめたるやと乃ち河の岸に沿て我を將かへり 七 我歸るに河の岸の此方彼方に甚だ衆多の樹々生ひ立るあり 八 彼われに言ふこの水東の境に流れゆきアラバにおち下りて海に入る是海に入ればその水すなはち醫ゆ 九 凡そ此河の往ところには諸の動くところの生物みな生ん又甚だ衆多の魚あるべし此水到るところにて醫すことをなせばなり此河のいたる處にては物みな生べきなり 一〇 漁者その傍に立んエングデよりエネグライムまでは網を張る處となるべしその魚はその類にしたがひて大海の魚のごとく甚だ多からん 一一 但しその澤地と濕地とは愈ることあらずして鹽地となりるべし 一二 河の傍その岸の此旁彼旁に食はるゝ果を結ぶ諸の樹生ぞだんその葉は枯すその果は絶す月々新しき果をむすべし是はその水の邊より流れいづればなりその果は食となりその葉は藥とならん

一三 主エホバかく言たまふ汝らイスラエルの十二の支派の中に地を分ちてその産業となさしむるにはその界を斯さだむべしヨセフは二分を得べきなり 一四 汝ら各々均しく之を獲て産業とすべし是は我が手をあけて汝らの先祖等に與へし者なり斯この地汝らに歸して産業とならん 一五 地の界は左のごとし北は大海よりヘテロンをへてゼダデの方にいたり

二七 ダマスコの界とハマチの界の間なるシブライムにいたりハウランの界なるハザルハチコンにいたる 海よりの界
 二八 はダマスコの界のハザルエノンにいたる北の方においてはハマチその界たり北の方は是のごとし 東の方はハ
 二九 ウラン、ダマスコ、ギレアデとイスラエルの地との間にヨルダンあり汝らかの界より東の海までを量るべし東の方
 三〇 は斯のごとし 南の方はタマルよりメリボチカデシにおよび河に沿て大海にいたる南の方は是のごとし 西
 三一 の方は大海にしてこの界よりハマチにおよぶ西の方は是のごとし

汝らイスラエルの支派にしたがひて此地を汝らの中にわかつべし 汝ら籤をもて之を汝らの中に分ち又
 汝らの中にをりて汝らの中に子等を擧げたる異邦人の中に分ちて産業となすべし斯る人は汝らにおけることイス
 ラエルの子孫の中に生れたる本國人のごとし彼らも汝らと共に籤をひきてイスラエルの支派の中に産業を得べし
 異邦人にはその住ところの支派の中に汝らに之に産業を興ふべし主エホバこれを言たまふ

第四八章

支派の名は是のごとしダンの一分は北の極よりヘテロン之路の傍にいたりハマチにいたり北に
 おもむきてダマスコの界なるハザルエノンにいたりハマチの傍におよぶ是の東の方と西の方なり
 アセルの一分はダンの界にそひて東の方より西の方にわたる ナフタリの一分はアセルの界にそひて東の方
 より西の方にわたる マナセの一分はナフタリの界にそひて東の方より西の方にわたる エフライムの一分
 はマナセの界にそひて東の方より西の方にわたる ルベンの一分はエフライムの界にそひて東の方より西の方
 にわたる ユダの一分はルベンの界にそひて東の方より西の方にわたる

ユダの界にそひて東の方より西の方にわたる處をもて汝らが献ぐるところの献納地となすべし其廣二萬五
 千其東の方より西の方にわたる長は他の一分のごとし聖所はその中にあるべし 即ち汝らがエホバに献ぐ
 るところの献納地は長二萬五千廣一萬なるべし この聖き献納地は祭司に屬し北は二萬五千西は廣一萬東は
 廣一萬南は長二萬五千エホバの聖所その中にあるべし ザドクの子孫たる者すなはち我が職守をまもりイス

ラエルの子孫が迷謬し時にレビ人の迷ひしごとく迷はざりし者の中聖別られて祭司となれる者に是は屬すべし
 その献げたる地の中より一分の至聖き献納地かれらに屬してレビの境界に沿ふ

レビ人の地は祭司の地にならびて其長二萬五千廣一萬なり即ちその都の長二萬五千その廣一萬なり 彼
 らこれを賣べからず換べからず又その地の初實は人にわたすべからず是エホバに屬する聖物なればなり

彼二萬五千の處に沿て残れる廣五千の處は俗地にして邑を建て住家を設くべし又郊地となすべし邑その中
 にあるべし その廣狭は左のごとし北の方四千五百南の方四千五百東の方四千五百西の方四千五百 邑の
 郊地は北二百五十南二百五十東二百五十西二百五十 聖き献納地にならびて餘れる處の長は東へ一萬西へ一萬
 なり是は聖き献納地に並びその産物は邑の役人の食物となるべし 邑の役人はイスラエルの諸の支派より出て
 その職をなすべし その献納地の總體は豎二萬五千横二萬五千なりこの聖き献納地の四分の一にあたる處を取
 て邑の所有となすべし

聖き献納地と邑の所有との此旁彼旁に餘れる處は君に屬すべし是はすなはち献納地の二萬五千なる所に沿
 て東の界にいたり西はかの二萬五千なる所にそひて西の界に至りて支派の分と相並ぶ是君に屬すべし聖き献納地
 と室の聖所とはその中間にあるべし 君に屬する所の中間にあるレビ人の所有と邑の所有の兩傍ユダの境と
 ベニヤミンの境の間にある所は君の所有たり

その餘の支派はベニヤミンの一分東の方より西の方にわたる シメオンの一分はベニヤミンの境にそひ
 て東の方より西の方にわたる イッサカルの一分はシメオンの境にそひて東の方より西の方にわたる ゼブ
 ルンの一分はイッサカルの境にそひて東の方より西の方にわたる ガドの一分はゼブルンの境にそひて東の方
 より西の方にわたる 南の方はその界ガドの境界にそひてタマルよりメリボチカデシにおよび河に沿て大海に
 いたる 是は汝らが籤をもてイスラエルの支派の中にわかつて産業となすべき地なりその分は斯のごとし 主

エホバこれと言たまふ

邑の出口は斯のごとしなはち北の方の廣四千五百あり 邑の門はイスラエルの支派の名にしたがひ北に三あり即ちルベンの門一ユダの門一レビの門一 東の方も四千五百にして三の門あり即ちヨセフの門一ベニヤミンの門一ダンの門一 南の方も四千五百にして三の門ありすなはちシメオンの門一イッサカルの門一ゼブルンの門一 西の方も四千五百にしてその門三あり即ちガドの門一アセルの門一ナフタリの門一 四周は一萬八千あり邑の名は此日よりエホバ此に在すと云ふ
エゼキエル書 をはり

但以理書

第一章

ユダの王エホヤキムの治世の第三年にバビロンの王ネブカデネザル、エルサレムにきたりて之を攻圍みしに 主ユダの王エホヤキムと神の家の器具幾何とをかれの手にわたしたまひければ 則ちこれをシナルの地に携へゆきて己の神の家にいたりその器具を己の神の庫に藏めたり 茲に王寺人の長アシベナズに命じてイスラエルの子孫の中より王の血統の者と貴族たる者幾何を召寄しむ 即ち身に疵なく容貌美しくして一切の智慧の道に類く知識ありて思慮深く王の宮に侍るに足る能幹ある少き者を召寄しめこれにカルデヤ人の文學と言語とを學ばせんとす 是をもて王は命を下して日々に王の用ゐる 饌と王の飲む酒とを彼らに與へしめ三年の間かく彼らを養ひ育てしめんとす是の後に彼らをして王の前に立ことを得せしめんとて 是等の中にユダの人ダニエル、ハナニヤ、ミシヤエル、アザリヤありしが 寺人の長かれらに名をあたへてダニエルをベルテシャザルと名けハナニヤをシャテラクと名けミシヤエルをメシヤクと名けアザリヤをアベデネゴと名く

然るにダニエルは王の用ゐる饌と王の飲む酒とをもて己の身を汚すまじと心に思ひさだめたれば己の身を汚さざらしめんことを寺人の長に求む 以前よりエホバ、ダニエルをして寺人の長の慈悲と寵愛とを蒙らしめたまふ 是において寺人の長ダニエルに言けるは吾主なる王すでに命をくだして汝らの食物と汝らの飲物とを預たしめたまへば我かれを畏る恐くは彼なんぢらの面の其同輩の少者等と異にして憂色あるを見ん然る時は汝らのために我首王の前に危からん 寺人の長はメルザル官をしてダニエル、ハナニヤ、ミシヤエル及びアザリヤを監督らせ置たればダニエル之に言けるは 請ふ十日の間 儂等を驗したまへ即ち我らには菜蔬を與へて食せ水を與へて飲せよ 而して我らの面と王の饌を食ふ少者どもの面とを較べ見 汝の視るところにしたがひて

彼等を待ひたまへと

是において彼この事を聴いれ十日のあひだ彼らを諭しけるが 十日の後にいたりて見るに王の膳を食へる諸の少者よりも彼らの面は美しくまた肥え膩つきてありければ 王は彼らに曰く汝らに分なる餅と彼らの飲べき酒とを撤きさりて菜蔬をこれに與へたり

この四人の少者には神知識を得させ諸の文學と智慧に類からしめたまへりダニエルはまた能く各種の異象と夢兆を曉る 王かねて命をくだし少者どもを召いるに迄に經べき日を定めおきしがその日數も過たるに因て寺人の長かれらを引てネブカデネザルの前にいたりければ 王かれらと言談へり彼ら一切の中にはダニエル、ハナニヤ、ミシャエル、アザリヤに比ぶ者あざりければこの四人は王の前に侍れり 王かれらに諸の事を詢たづね見に彼らは智慧の學においてその全國の博士と法術士に愈ること十倍なり 王はダニエルはクロス王の元年までありき

第二章

ネブカデネザルの治世の二年にネブカデネザル夢を見それがために心に思ひなやみて復睡ること能はざりき 是をもて王は命を下し王のためにその夢を解せんとして博士と法術士と魔術士とカルデヤ人とを召しめられたれば彼ら來りて王の前に立つ 王すなはち彼らにむかひ我夢を見その夢の義を知んと心に思ひなやむと言ければ 王はカルデヤ人等スリア語をもて王に申しけるは願くは王長壽かれ諸の僕等にその夢を語りたまへ我らその解明を進めたてまつらんと 王はたへてカルデヤ人に言けるは我すでに命を出せり汝等もしその夢とこれが解明とを我に示さざるにおいては汝らの身は切裂れ汝らの家は剛にせられん 又汝らもしその夢とこれが解明を示さば賸物と賞資と大なる尊榮とを我より獲ん然ばその夢と之が解明を我に示せ 彼らまた對へて言けるは願くは王僕どもにその夢を語りたまへ然ば我らその解明を奏すべしと 王はたへて言けるは我あきらかに知る汝らは吾命の下りしを見るが故に時を延さんことを望むなり 汝らもしその夢を我に示さずば

汝らを處置するの法は只一のみ汝らは相語らひて虚言と妄誕なる詞を我前にのべて時の變るを待んとするなり汝ら今先その夢を我に示せ然すれば汝らがその解明をも我にしめし得ることを我しらんと 王はカルデヤ人等とたへて王の前に申しけるは世の中には王のその事を示し得る人一箇もなし是をもて王たる者主たる者君たる者等の中に斯る事を博士または法術士またはカルデヤ人に問たづねし者絶てあらざるなり 王の問たまふその事は甚だ難し肉身なる者と共に居ざる神々を除きては王の前にこれを示すことを得る者無るべしと 斯りしかば王怒を發し大に憤りバビロンの智者をことごとく殺せと命じたり 即ち此命くだりければ智者等は殺されんとせり 又ダニエルとその同僚をも殺さんともめたり

茲に王の侍衛の長アリオタ、バビロンの智者等を殺さんとして出きたりければダニエル遠慮と智慧とをもて之に應答せり 王ははち王の高官アリオタに對へて言けるは王なにとて斯すみやかにこの命を下したまひしやとアリオタその事をダニエルに告しらせられたれば 王はダニエルに曰く汝が王に乞求めて言ふ暫くの時日を賜へ然ばその解明を王に奏せんと

斯てダニエルその家にかへりその同僚ハナニヤ、ミシャエルおよびアザリヤにこの事を告しらせ 共にこの秘密につき天の神の憐憫を乞ひダニエルとその同僚等をしてその他のバビロンの智者とともに減びざらしめんことを求めたりしが 王はダニエルに曰く汝の同僚の中にこの秘密を示されければダニエル天の神を稱讚ふ 即ちダニエル應へて言けるは永遠より永遠にいたるまでこの神の御名は讀まざるべきなり智慧と權能はこれが有なればなり 彼は時と期とを變じ玉を戯し王を立て智者に智慧を興へ賢者に知識を賜ふ 彼は深妙秘密の事を顯し幽暗にあるところの者を知らたまふまた光明彼の裏にあり 王が先祖等の神よ汝は我に智慧と權能を賜ひ今われらが汝に乞求めたるところの事を我にしめし給へば我感謝して汝を稱讚ふ即ち汝は王のかの事を我らに示したまへり 是においてダニエルは王がバビロンの智者等を殺すことを命じおけるアリオタの許にいたり

即ちいりてこれに言けるはバビロンの智者等を殺す勿れ我を王の前に引いたれよ我その解明を王に奏上ぐべしと
 得たり是者その解明を王にまうしあけん 王こたへてベルシャザルと名くるダニエルに言けるは汝は我が見
 たる夢とその解明とを我に知らしむるを得るやと ダニエルはち應へて王の前に言けるは王の問たまふ
 秘密は智者法術士博士ト筮師などを王に奏上ぐることを得ず 然と天に一の神ありて秘密をあらはし給ふ
 彼後の日に起らんところの事の如何なるかをネブカデネザル王に知らせたまふなり汝の夢汝が牀にありて想見
 たまひし汝の胸中の異象は是なり 王よ汝牀にいりし時將來の事の如何を想ひまはしたまひしが秘密を顯す者
 將來の事の如何を汝にしめし給へり 我がこの示現を蒙れるは凡の生る者にまさりて我に智慧あるに由にあら
 ず唯その解明を王に知しむる事ありて王のつひにその心に想ひたまひし事を知にいたり給はんがためなり
 王よ汝は一箇の巨なる像の汝の前に立るを見たまへり其像は大きくしてその光輝は常ならずその形は長ろし
 くあり 其像は頭は純金胸と兩腕とは銀腹と腿とは銅 腰は鐵脚は一分は鐵一分は泥土なり 汝見て
 居たまひしに遂に一箇の石人手によらずして墜れて出でその像の鐵と泥土との脚を擧てこれを碎けり 斯りし
 かばその鐵と泥土と銅と銀と金とは皆ともに碎けて夏の禾場の糠のごとくに成り風に吹はらはれて止るところ
 無りき而してその像を擧たる石は大なる山となりて全地に充り
 是の夢なり我らその解明を王の前に陳ん 王よ汝は諸王の王にいませり即ち天の神汝に國と權威と
 能力と尊貴とを賜へり また人の子等野の獸畜および天空の鳥は何處に在る者にもあれ皆これを汝の手に與へ
 て汝にこれをことごとく治めしめたまふ汝はすなはち此金の頭なり 汝の後に汝に劣る一の國おこらんまた第
 三に銅の國おこりて全世界を治めん 第四の國は堅きこと鐵のごとくならん鐵は能く萬の物を毀ち碎くなり
 鐵の是等をごとくとく打碎くがごとく其國は毀ちかつ碎くことをせん 汝その足と足の趾を見たまひしに一分

は陶人の泥土一分は鐵なりければその國は分裂たる者ならん又汝鐵と粘土との混和たるを見たまひたればその國
 は鐵のごとく強からん その足の趾の一分は鐵一分は泥土なりしてごとくその國は強きところもあり脆きところ
 も有ん 汝が鐵と粘土との混りたるを見たまひしごとく其等は人草の種子と混らん然ど鐵と泥土との相合せざ
 るごとく彼と此と相合すること有じ この王等の日に天の神一の國を建たまはん是は何時までも滅ぶること無
 らん此國は他の民に歸せず却てこの諸の國を打破りてこれを滅せん是は立ちて永遠にいたらん かの石の人手
 によらずして山より墜れて出で鐵と銅と泥土と銀と金とを打碎きしを汝が見たまひしは即ちこの事なり大御神
 この後に起らんところの事を王に知らせたまへるなりその夢は眞にしてこの解明は確なり
 是においてネブカデネザル王は俯伏てダニエルを拜し禮物と香をこれに獻ぐることを命じたり 而して
 王こたへてダニエルに言けるは汝がこの秘密を明かに示すことを得たるを見れば誠に汝らの神は神等の神王等の
 主にして能く秘密を示す者なりと かくて王はダニエルに高位を授け種々の大なる賜物を與へてこれをバビ
 ロン全州の總督となしまたバビロンの智者等を統る者の首長となせり 王またダニエルの願によりてシヤデラ
 クとメシヤクとアベデネゴを擧てバビロン州の事務をつかさどらしめたりダニエルは王の宮に在る
 第三章 茲にネブカデネザル王一箇の金の像を造れりその高は六十キュビトその横の廣は六キュビトなり
 官庫官 法官 士師および州郡の諸有司を召集めそのネブカデネザル王の立たる像の告成禮に臨ましめんとせり
 是においてその州牧將軍方伯刑官庫官法官士師および州郡の諸有司等はネブカデネザル王の立たる像
 の告成禮に臨みそのネブカデネザル王の立たる像の前に立り 時に傳令者大聲に呼はりて言ふ諸民 諸族 諸音
 よ汝らは斯命ぜらる 汝ら喇叭 簫 琵琶 瑟 箏 樂器などの諸の樂器の音を聞く時は俯伏しネブカデネザル王の
 立たまへる金像を拜すべし 凡て俯伏て拜せざる者は即時に火の燃る爐の中に投こまるべしと 是をもて

二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 九 八 七 六 五 四 三 二 一

ト筮師等きたりしに因て我その夢を彼らに語りけるに彼らはその解明を我にしめすことを得ざりき かくて後
 ダニエルわが前に來り彼の名は吾神の名にしたがひてベルテシャザルと稱へられその裏には聖神の靈やどれり
 我その夢を彼の前に語りて曰けらく 博士の長ベルテシャザルよ我しる汝の裏には聖神の靈やどれば如何なる
 秘密も汝には難き事なし我が夢に見たるところの事等を聞きその解明を我に告げよ 我が床にありて見たる吾
 腦中の異象は是のごとし我觀しに地の當中に一の樹ありてその丈高かりしが 二 その樹長じて強固なり天に達す
 るほどの高となりて地の極までも見えたり 三 その葉は美しくその果は饒にして一切の者その中より食を得ま
 た野の獸その蔭に臥し空の鳥その枝に棲み凡て血氣ある者みな是によりて身を養ふ 我床にありて得たる腦中
 の異象の中に一箇の齋齋者一箇の聖者の天より下るを見たりしが 彼聲高く呼はりて斯いへり此樹を伐たふし
 その枝を斫はなしその葉を搯おとしその果を打散し獸をしてその下より逃はしらせ鳥をしてその枝を飛さらしめ
 よ 但しその根の上の斬株を地に遺しおき鐵と銅の索をかけて之を野の草の中にあらしめよ是は天よりくだ
 る露に濡れまた地の草の中にて獸とその分を同じうせん 又その心は變りて人間の心のごとくならず獸の心を
 棄て七の時を經ん 此の事は齋齋者等の命によりこの事は聖者等の言による是至高者人間の國を治めて自己の
 意のままにこれを人に與へまた人の中の最も賤き者その上に立たまふといふ事を一切の者に知しめんがためなり
 我ネブカデネザル王この夢を見たりベルテシャザルよ汝その解明を我に述よ我國の智者は孰も皆その解明
 を我に示すことを得ざりしが汝は之を能せん其は汝の裏には聖神の靈やどればなりと
 二 其の時ダニエル又の名はベルテシャザルといふ者暫時の間驚き居り心に深く懼れたれば王これに告て言
 りベルテシャザルよ汝この夢とその解明のために懼るゝにおよばずとベルテシャザルすなはち答へて言けらく我
 主よ願くはこの夢汝を惡む者の上にかゝらん事を願くは此解明汝の敵にのぞまんことを 汝が見たまひし樹
 すなはちその長じて強くなり天に達するほどの高となりて地の極までも見えたり 三 その葉は美しくその果は

二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 九 八 七 六 五 四 三 二 一

饒にして一切の者その中より食を得またその下に野の獸臥しその枝に空の鳥棲たる者 王よ是はすなはち汝な
 り汝は長じて強くなり汝の勢ひは盛にして天におよび汝の權は地の極にまでおよべり 王また一箇の齋齋者
 一箇の聖者の天より下りて斯言ふを見たまへり云くこの樹を伐たふして之をそこなへ但し其根の上の斬株を地に
 遺しおき鐵と銅の索をかけて之を野の草の中にあらしめよ是は天より下る露に濡れ野の獸とその分を同じうし
 て七の時を經ん 王よその解明は是の如し是即ち至高者の命にして王我主に臨まんとする者なり 即ち汝は
 逐れて世の人と離れ野の獸とともに居り牛のごとくに草を食ひ天よりくだる露に濡れん是の如くにして七の時を
 經て汝つひに知ん至高者人間の國を治めて自己の意のままに之を人に與へ給ふと 又彼らその樹の根の上の斬
 株を遺しおけと言たれば汝の國は汝が主たりと知にいたる時まで汝を離れん 然ば王よ吾諫を容れ 後を
 おこなひて罪を離れ 貧者を憐みて惡を離れ 然らば汝の平安あるひは長く續かん
 二 此の事みなネブカデネザル王に臨めり 十二箇月を経て後王バビロンの王宮の上を歩みたり 王すな
 はち語りて言ふ此大なるバビロンは我が大なる力をもて建て京城となし之をもてわが威光を耀かす者ならずや
 二 その言なほ王の口にある中に天より聲降りて言ふネブカデネザル王よ汝に告ぐ汝は國の位を失はん 汝は
 逐れて世の人と離れ野の獸と共に居り牛のごとくに草を食はん斯の如くにして七の時を経て汝つひに知ん至高者
 人間の國を治めて己れの意のままにこれを人に與へたまふと 其の時直にこの事ネブカデネザルに臨み彼は逐
 れて世の人に離れ牛のごとくに草を食ひてその身は天よりくだる露に濡れ終にその髪の毛は鬣の羽のごとくなり
 其の爪は鳥の爪のごとくなりなりぬ
 二 斯てその日の満たる後我ネブカデネザル目をあげて天を望みしにわが分別性我に歸りたれば我至高者に
 感謝しその永遠に生る者を讃かつ崇めたり彼の御宇は永遠の御宇彼の國は世々かぎり無し 地上の居民は凡て
 無き者のごとし天の衆群にも地の居民にも彼は其の意のままに事をなしたまふ誰も彼の手をおさへて汝なんぞ然

するやと言ふことを得る者なし。この時わが分別性かく我に歸りたりしがわが國の榮光につきてはまた我の尊嚴と光耀我にかへれり且また大臣牧伯等我に請求めて我ふたゞび國の祚を踐み前よりも著しく威光を増たり。是において我ネブカデネザル今は天の王を讃頌へかつ崇む彼の作爲は凡て眞實彼の道は正義自ら高ぶる者は彼能くこれを卑くしたまふ。

第五章

ベルシャザル王その大臣一千人のために酒宴を設けその一千人の者の前に酒を飲たりしが酒を携へいたれと命ぜり是王とその大臣および王の妻妾等みな之をもて酒を飲んとてなりき。是をもてそのエルサレムなる神の宮の内院より取たりし金の器を携へたりければ王とその大臣および王の妻妾等これをもて飲めり。すなはち彼らは酒をのみて金銀銅鐵木石などの神を讃たへたりしが。

その時に人の手の指あらはれて燭臺と相對する王の宮の粉壁に物書り王その物書る手の末を見たり。是において王の愉快なる顔色は變りその心は思ひなやみて安からず腿の關節はゆるみ膝はあひ撃り。王すなはち大聲に呼はりて法術士カルデヤ人卜筮師等を召きたらしめ而して王バビロンの智者等に告て言ふこの文字を讀みその解明を我に示す者には紫の衣を衣せ頸に金の鏈をかけさせて之を國の第三の牧伯となさんと。王の智者等は皆きたりしかどもその文字を讀こと能はずまたその解明を王にしめすこと能はざりければ。ベルシャザル王おほいに思ひなやみてその顔色を失へりその大臣等もまた驚き懼れたり。

時に大后王と大臣等の言を聞てその酒宴の室にいりきたり大后すなはち陳て言ふ願くは王長壽かれ汝心に思ひなやむ勿れまた顔色を失ふにおよばず。汝の國に聖神の靈のやどれる一箇の人あり汝の父の代に彼聰明了知および神の智慧のごとき智慧あることを顯せり汝の父ネブカデネザル王すなはち汝の父の王彼を立て博士法術士カルデヤ人卜筮師等の長となせり。彼はダニエルといへる者なるが王これにベルシャザルといふ名

を與へたり彼は心の殊勝たる者にて了知あり知識ありて能く夢を解き隱語を解き難問を解くなり然ばダニエルを召されよ彼の解明をしめさんと。

是においてダニエル召れて王の前に至りければ王ダニエルに語りて言ふ汝は吾父の王がユダより曳きたりしユタの俘囚人なるそのダニエルなるか。我聞になんぢの裏には神の靈やどりをりて汝は聰明了知および非凡の智慧ありと云ふ。我智者法術士等を吾前に召よせてこの文字を讀しめその解明を我にしめさんと爲たれども彼らはこの事の解明を我にしめすことを得ず。我聞に汝は能く物事の解明をなしかつ難問を解くと云ふ然ば汝もし能くこの文字を讀みその解明を我に示さば汝に紫の衣を衣せ金の素を汝の頸にかけさせて汝をこの國の第三の牧伯となさんと。

ダニエルこたへて王に言けるは汝の賜物は汝みづからこれを取り汝の醜物はこれを他の人に與へたまへ然ながら我は王のためにその文字を讀みその解明をこれに知せてまつらん。王至高神汝の父ネブカデネザルに國と權勢と榮光と尊貴を賜へり。彼に權勢を賜ひしによりて諸民諸族諸音みな彼の前に慄き畏れたり彼はその欲する者を殺しその欲する者を活しその欲する者を上げその欲する者を下しとなり。而して彼心に高ぶり氣を剛愎にして驕りしかばその國の位をすべりてその尊貴を失ひ。逐れて世の人と離れその心は獸のごとくに成りその住所は野馬の中にあり牛のごとくに草を食ひてその身は天よりの露に濡たり是のごとくにして終に彼は至高神の人間の國を治めてその意のままに人を立たまふといふことをしるにいたれり。ベルシャザルよ汝は彼の子にして此事を盡く知るといへども猶その心を卑くせず。却つて天の主にもかひて自ら高ぶりその家の器皿を汝の前に持きたらしめて汝と汝の大臣と汝の妻妾等それをもて酒を飲み而して汝は見ことも聞ことも知こともあらぬ金銀銅鐵木石の神を讃頌ふることを爲し汝の生命をその手に握り汝の一切の道を主どりたまふ神を崇むることをせず。是をもて彼の前よりこの手の末いできたりてこの文字を書るなり。

その書る文字は是のごとしメネ、メネ、テケル、ウバルシン、その言の解明は是のごとしメネ(數へたり)は神、汝の治世を數へてこれをその終に至らせしを謂なり、テケル(秤れり)は汝が權衡にて秤られて汝の重の足らざることを顯れたるを謂なり、ペレス(分たれたり)は汝の國の分たれてメデアとベルシヤに與へらるゝを謂なり

是においてベルシヤザル命を降してダニエルに紫の衣を着せしめ金の鏈をこれが頸にかけさせて彼は國の第三の牧伯なりと布告せり

カルデア人の王ベルシヤザルはその夜の中に殺され、メデア人ダリヨスその國を獲たり此時ダリヨスは六十二歳なりき

第六章

ダリヨスはその國に百二十人の牧伯を立てることを善とし即ちこれを立て全國を治理しめ、また彼らの上に監督三人を立てたりダニエルはその一人なりき是はその州牧をして此三人の前にその職を述しめて王に損失の及ぶこと無らしめんためなりき、ダニエルは心の殊勝たる者にしてその他の監督および州牧等に勝りたれば王かれを立て全國を治めしめんとせり

是においてその監督と州牧等國事につきてダニエルを訟ふる隙を得んとしたりしが何の隙をも何の咎をも見いだすことを得ざりき其は彼は忠義なる者にしてその身に何の咎もなく何の過失もなかりければなり、是においてその人々言けるはこのダニエルはその神の例典について之が隙を獲にあらざればついにこれを訟ふるに由なしと、すなはちその監督と州牧等王の許に集り來りて斯王に語りダリヨス王上願くは長壽かれ、國の監督將軍州牧牧伯方伯等みな相議りて王に一の律法を立て一の禁令を定めたまはんことを求めんとす王よその事は是の如し即ち今より三十日の内は唯汝にのみ願事をなさしめ若汝をおきて神または人にこれをなす者あらば凡て獅子の穴に投げられんといふ是なり、然ば王よねがはくはその禁令を立てその詔書を認めメデアとベルシヤの諸

ることなき律法のごとくに之をして變らざらしめたまへと、王すなはち詔書をしたためてその禁令を出せり

茲にダニエルはその詔書を認めたることを知りて家にかへりけるがその二階の窓のエルサレムにむかひて開ける處にて一日に三度づつ膝をかゞめて禱りその神に向て感謝せり是はその時の前よりして斯なし居たればなり

斯りしかばその人々馳よりてダニエルがその神にむかひて禱りかつ求めをるを見あらはせり、而して彼ら進みきたり王の禁令の事につきて王に奏上して言けるは王よ汝は禁令をしたため出し今より三十日の内には只な

んちにのみ願事をなさしめ若し汝をおきて神または人にこれをなす者あらば凡てその者を獅子の穴に投げられんと定めたまへるならずやと王こたへて言ふ其事は眞實にしてメデアとベルシヤの律法のごとく廢べからざる者なり

彼らまた對へて王の前に言けるは王よユダの俘虜人なるダニエルは汝をも汝の認め出し給ひし禁令をも願みずして一日に三度づつ祈禱をなすなりと、王この事を聞てこれがために大に愁ひダニエルを救はんと心を用ひ

即ちこれを拯けんと力をつくして日の入る頃におよびければ、その人々また王の許に集みきたりて王に言けるは王よ知りたまへメデアとベルシヤの律法によれば王の立たる禁令または法度は變べからざる者なりと

是において王命を下しければダニエルを曳きたりて獅子の穴に投げられたり王ダニエルに語りて言ふ願くは汝が恒に事ふる神汝を救はんことをと、時に石を持ちたりてその穴の口を塞ぎければ王おのれの印と大臣等の

印をもてこれに封印をなせり是ダニエルの處置をして變ることなからしめんためなりき、斯て後王はその宮にかへりけるがその夜は食をなさずまた嬪等を召よせずして全く寢ることをせざりき

而して王は朝まだきに起いでてその獅子の穴に急ぎいたりしが、穴にいたりける時哀しげなる聲をあげてダニエルを呼びすなはち王ダニエルに言けるは活神の僕ダニエルよ汝が恒に事ふる神汝を救ふて獅子の害を免

れしむることを得しや、ダニエル王にいひけるは願くは王長壽かれ、吾神その使をおくりて獅子の口を閉させたまひたれば獅子は我を害せざりき其は我の尊なき事かれの前に明かなればなり王よ我は汝にも惡しき事を

なざりしなりと 是において王おほいに喜びダニエルを穴の中より出せと命じければダニエルは穴の中より出されけるがその身に何の害をも受をらざりき是は彼おのれの神を頼みたるによりてなり

かくて王また命を下しかのダニエルを論奏せし者等を曳きたらせて之をその妻子とともに獅子の穴に投いれしめたるにその穴の底につかざる内に獅子はやくも彼らを攫みてその骨までもごとく咬砕けり

是においてダリヨス王全世界に住る諸民 諸族 諸音に詔書を頒てり云く願くは大なる平安なんぢらにあれ 今我詔命を出す我國の各州の人みなダニエルの神を畏れ敬ふべし是は活神にして永遠に立つ者またその國は 亡びずその權は終極まで續くなり 是は救を施し拯をなし天においても地においても休徴をほどこし奇蹟を おこなふ者にてすなはちダニエルを救ひて獅子の力を免れしめたりと

このダニエルはダリヨスの世とベルシャヤ人クロスの世においてその身榮えたり

第七章

バビロンの王ベルシャザルの元年にダニエルその牀にありて夢を見腦中に異象を得たりしが即ちその夢を記してその事の大意を述べ ダニエル述て曰く我夜の異象の中に見てありしに四方の

天風大海にむかひて烈しく吹きたり 四箇の大なる獸海より上りきたれりその形はおのおの異なり 第一のは獅子の如くにして鷲の翼ありけるが我見てをりしに是はその翼を抜とられまた地より起され人のごとく足にて立せられ且人の心を賜はれり 第二の獸は熊のごとくなりき是はその體の一方を擧げその口の齒の間に三の脇骨を啣へ居けるが之にむかひて言る者あり曰く起あがりて許多の肉を食へと 其後に我見しに豹のごとき獸いでたりしがその背には鳥の翼四ありこの獸はまた四の頭ありて統轄權をたまはれり 我夜の異象の中に見しにその後第四の獸いでたりしが是は長しく猛く大に強くして大なる 鐵の齒あり食ひかつ咬砕きてその殘餘をば足にて踏つけたり是はその前に出たる諸の獸とは異なりてまた十の角ありき 我その角を考へ觀つゝありけるにその中にまた一箇の小さい角出きたりしがこの小さい角のために先の角三箇その根より抜おちたりこの小さい角

には人の目のごとき目ありまた大なる事を言ふ口あり

我觀つゝありしに遂に寶座を置列ぶるありて日の老たる者座を占めたりしがその衣は雪のごとくに白くその髪の毛は漂潔めたる羊の毛のごとし又その寶座は火の焰にしてその車輪は燃る火なり 而して彼の前より一道の火の流わきいづ彼に仕ふる者は千々彼の前に侍る者は萬々審判すなはち始めて書を開けり 其の角の大なる事を言ふ聲によりて我觀つゝありけるが我が見る間にその獸は終に殺され體を壊はれて燃る火に投げられたり

またその餘の獸はその權威を奪はれたりしがその生命は時と期に至るまで延されたり 我また夜の異象の中に觀てありけるに人の子のごとき者雲に乗て來り日の老たる者の許に到りたればすなはちその前に導きけるに 之に權と榮と國とを賜ひて諸民 諸族 諸音をしてこれに事へしむその權は永遠の權にして移りさらず又その國は亡ぶることなし

是において我ダニエルその體の内を憂へしめわが腦中の異象のために思ひなやみたれば 十なはち其處にたてる者の一箇に就てこの一切の事の眞意を問けるに其者われにこの事の解明を告しらせて云く この四の大なる獸は地に興らんとする四人の王なり 然ど終には至高者の聖徒國を受け長久にその國を保ちて世世限りなからんと 是において我またその第四の獸の眞意を知んと欲せり此獸は他の獸と異なりて至畏ろしくその齒は 鉄その爪は銅にして食ひかつ咬砕きてその殘餘を足にて踏つけたり 此獸の頭には十の角ありしが其他に また一の角いできたりしかば之がために三の角抜おちたり此角には目ありまた大なる事を言ふ口ありてその状はその同類よりも強く見えたり我またこの事を知んと欲せり 我觀つゝありけるに此角聖徒と戰ひてこれに勝たりしが 終に日の老たる者來りて至高者の聖徒のために公義をおこなへり而してその時いたりて聖徒國を獲たり 彼かく言り第四の獸は地上の第四の國なり是は一切の國と異なり全世界を并吞しこれを踏つけかつ打破らん その十の角はこの國に興らんとする十人の王なり之が後にまた一人興るべし是は先の者と異なり且その

王三人を倒すべし 三三 かれ至高者に敵して言を出しかつ至高者の聖徒を惱まさん彼また時と法とを變んことを望まん聖徒は一時と二時と半時を経るまで彼の手付されてあらん 三六 斯て後審判はじまり彼はその權を奪はれて終極まで滅び亡ん 三七 而して國と權と天下の國々の勢力とはみな至高者の聖徒たる民に歸せん至高者の國は永遠の國なり諸國の者みな彼に事へかつ願はん 三八 その事此にて終れり我ダニエルこれを思ひまはして大に憂へ顔色も變りぬ我この事を心に藏む

第八章

我ダニエル前に異象を得たりしが後またベルシャザルの第三年にいたりて異象を得たり 一 我

異象を見たり我これを見たる時に吾身はエラム州なるシュジャンの城にあり我が異象を見たるはウライ河の邊においてなりき 二 我目を擧て觀しに河の上に一匹の牡羊立をり之に二の角ありてその角共に長かりしが一の角はその他の角よりも長かりきその長者は後に長たるなり 三 我觀しにその牡羊西北南にむかひて低觸りけるが之に敵ることを得る獸一匹も無くまたその手より救ひいだすことを得る者絶てあらざりき是はその意にまかせて事をなしその勢威はなはだ盛なりき 四

我これを考へ見つゝありけるに一匹の牡山羊全地の上を飛わたりて西より來りしがその足は土を履ざりきこの牡山羊は目の間に著明しき一の角ありき 五 此者さきに我が河の上に立るを見たる彼の二の角ある牡羊に向ひ來り熾盛なる力をもて之の所に跑いたりけるが 六 我觀てあるに牡羊に近づくに至りて之にむかひて怒を發し牡羊を擧てその二の角を碎きたるに牡羊には之に敵る力なかりければこれを地に打倒して陥つたり然るにその牡羊をこれが手より救ひ得る者あらざりき 七 而してその牡山羊甚だ大きくなりけるがその盛なる時にあたりてかの大なる角折れその代に四の著明しき角生じて天の四方に對へり 八

またその角の一よりして一の小き角いできたり南にむかひ東にむかひ美地にむかひて甚だ大きくなり天軍におよぶまでに高くなりその軍と星數箇を地に投ぐだしてこれを踏つけ 九 又自ら高ぶりてその軍の

主に敵しその常供の物を取のぞきかつその聖所を毀てり 一〇 一軍罪の故によりて常供の物とともに棄られたり彼者はまた眞理を地に擲ち事をなしてその意志を得たり 一一 かくて我聞に一箇の聖者語ひをりしが又一箇の聖者ありてその語ひをる聖者にむかひて言ふ常供の物と荒廢を來らす罪とにつきて異象にあらはれたるところの事聖所とその軍との棄られて陥つけらるゝ事は何時まで斯てあるべきかと 一二 彼すなはち我に言けるは二千三百の朝夕をかさぬるまで斯てあらん而して聖所は潔めらるべし 一三

我ダニエルこの異象を見てその意義を知んと求めをりける時人のごとく見ゆる者わが前に立り 一四 時に我聞にウライ河の兩岸の間より人の聲出て呼はりて言ふダニエルよこの異象をその人に曉らしめよと 一五 彼すなはち我の立る所にきたりしがその到れる時に我おそれて仆れ伏たるに彼われに言けるは人の子よ曉れ此異象は終の時にかゝはる者なりと 一六 彼の我に語ひける時我は氣を喪へる狀にて地に俯伏をりしが彼我に手をつけて我を立て言けるは 一七 視よ我忿怒の終に起らんとする事の汝に知せん此事は終末の期におよびてあらん 一八 汝が見たるかの二の角ある牡羊はメディアとベルシャの王なり 一九 またかの牡山羊はギリシャの王その目の間の大なる角はその第一の主なり 二〇 またその角をれてその代に四の角生じればその民よりして四の國おこらん然と第一の者の權勢には及ばざるなり 二一 彼らの國の末にいたり罪人の罪貫盈におよびて一人の王おこらんその額は狂惡にして巧に詭譎を言ひ 二二 その權勢は熾盛ならん但し自己の能力をもて之を致すに非ずその毀滅ことを爲は常ならず意志を得て事を爲し權能ある者等と聖民とを滅さん 二三 彼は機巧をもて詭譎をその手に行ひ遂げ心につづから高ぶり平和の時に衆多の人を打滅しまた君の君たる者に敵せん然と終には人手によらずして滅されん 二四 前に告たる朝夕の異象は眞實なり汝その異象の事を秘しおけ是は衆多の日の後に有べき事なり 二五 是において我ダニエル疲れはて、數日の間病わづらひて後興いでて王の事務をおこなへり我はこの異象の事を案ひて駭けり人もまたこれを曉ることを得ざりき 二六

第九章

メデア人アハシユエロスの子ダリヨスがカルデヤ人の王とせられしその元年、すなはちその世の元年に我ダニエル、エホバの言の預言者エレミヤにのぞみて告たるその年の數を書によりて

曉れり即ちその言にエルサレムは荒て七十年を経んとあり

是において我面を主エホバに向け斷食をなし麻の衣を着灰を蒙り祈りかつ願ひて求むることをせり

即ち我わが神エホバに轉り懺悔して言り嗚呼大にして畏るべき神なる主自己を愛し自己の誠命を守る者のために契

約を保ち之に恩恵を施したまふ者よ、我等は罪を犯し悖れる事を爲し惡を行ひ叛逆を爲して汝の誠命と律法を

離れたり、我等はまた汝の僕なる預言者等が汝の名をもて我らの王等君等先祖等および全國の民に告たる所に

聽したがはまりしなり、主よ公義は汝に歸し羞辱は我らに歸せりその状今日のごとし即ちユダの人々エルサレ

ムの居民およびイスラエルの全家の者は近き者も遠き者も皆汝の逐やりたまひし諸の國々にて羞辱を蒙れり是

は彼らが汝に背きて獲たる罪によりて然るなり、主よ羞辱は我儕に歸し我らの王等君等および先祖等に歸す是

は我儕なんちに向ひて罪を犯したればなり、憐愍と赦宥は主たる我らの神の裏にあり其は我らこれに叛きたれ

ばなり、我らはまた我らの神エホバの言に違はずエホバがその僕なる預言者等によりて我らの前に設けたまひ

し律法を行はざりしなり、抑イスラエルの人は皆汝の律法を犯し離れざりて汝の言に違はざりき是をもて神の

僕モーセの律法に記したる呪詛と誓詞我らの上に斟きかれり是は我らこれに罪を獲たればなり、即ち神は

大なる災害を我らに蒙らせたまひてその前に我らと我らを鞠ける士師とにむかひて宣ひし言を行ひとげたまへり

かのエルサレムに臨みたる事の如きは普天の下に未だ會て有ざりしなり、モーセの律法に記したる如くにこの

災害すべて我らに臨みしかども我らはその神エホバの面を和めんと爲すその惡を離れて汝の眞理を曉らんとも

爲ざりき、是をもてエホバ心にかけて災害を我らに降したまへり我らの神エホバは何事をなしたまふも凡て

公義いまずなり然るに我らはその言に違はざりき、主たる我らの神よ汝は強き手をもて汝の民をエジプトの地

より導き出して今日のごとく汝の名を揚たまふ我らは罪を犯し惡き事を行へり、主よ願くは汝が是まで公義

御行爲を爲たまひし如く汝の邑エルサレム汝の聖山より汝の忿怒と憤恨を取離し給へ其は我らの罪と我らの先祖

の惡のためにエルサレムと汝の民は我らの周圍の者の笑柄となりたればなり、然ば我らの神よ僕の禱と願を

聽たまへ汝は主にいませばかの荒る汝の聖所に汝の面を輝かせたまへ、我神よ耳を傾けて聽たまへ目を啓

きて我らの荒蕪たる狀を觀汝の名をもて稱へらる、邑を觀たまへ我らが汝の前に祈禱をたてまつるは自己の公義

によるに非ず唯なんちの大なる憐愍によるなり、主よ聽いたたまへ主よ聽いて行ひたまへ

この事を遅くしたまふなかれわが神よ汝みづからのために之をなしたまへ其は汝の邑と汝の民は汝の名をもて

稱へらるればなり

我かく言て祈りかつわが罪とわが民イスラエルの罪を懺悔し我神の聖山の事につきてわが神エホバのまへ

に願をたてまつりる時、即ち我祈禱の言をのべる時我が初に眞象の中に見たるかの人ガブリエル迅速に飛

て晚の祭物を獻ぐる頃我許に達し、我に告げ我に語りて言けるはダニエルよ今我なんちを救へて了解を得せし

めんとて出きたれり、汝が祈禱を始むるに方りて我言を受たれば之を汝に示さんとて來れり汝は大に愛せらる

る者なり此言を了りその現れたる事の驗を與れ

汝の民と汝の聖邑のために七十週を定めおかる而して惡を抑へ罪を封じ愆を贖ひ永遠の義を携へ入り眞象

と預言を封じ至聖者に膏を灌がん、汝曉り知べしエルサレムを建なほせといふ命令の出づるよりメッシャたる君

の起るまでに七週と六十二週ありその街と石垣とは擾亂の間に建なほされん、その六十二週の後メッシャ起れん

但し是は自己のために非ざるなりまた一人の君の民きたりて邑と聖所とを毀たんその終は洪水に由れる如くな

るべし戰爭の終るまでに荒蕪すでに國を、彼一週の間衆多の者と固く契約を結ばん而して彼その週の半に犧牲

と供物を獻せんまた殘暴可惡者羽翼の上に立たん斯てつひにその定まれる災害殘暴るゝ者の上に斟ぎくぞらん

第一〇章

一 ベルシヤの王クロスの三年にベルテシャザルといふダニエル一の事の黙言を得たるがその事は眞實にしてその戦争は大なり彼その事を曉りその示現の義を曉れり 當時我ダニエル三七日の間哀めり 即ち三七日の全く満るまでは旨き物を食す肉と酒とを口にいれずまた身に膏油を抹ざりき 正月の二十四日に我ヒデケルといふ大河の邊に在り 目を舉て望觀しに一箇の人ありて布の衣を衣ウバズ金の帶を腰にしめをり その體は黄金色の玉のごとくその面は電光の如くその目は火の焰のごとくその手とその足の色は磨ける銅のごとくその言ふ聲は群衆の聲の如し この示現は唯我ダニエル一人これを觀たり我と備なる人々はこの示現を見ざりしが何となくその身大に慄きて逃かくれたり 故に我ひとり遺りたるがこの大なる示現を觀るにおよびて力ぬけさり顔色まつたく變りて毫も力なかりき 我その語ふ聲を聞けるがその語ふ聲を聞る時我は氣を喪へる狀にて俯伏し面を土につけたりしに

一〇 一の手ありて我に捫りければ我戰ひながら跪づきて手をつきたるに 彼われに言けるは愛せらるゝ人ダニエルよ我が汝に告る言を曉れよ汝まつ起あがれ我は今汝の許に遣されたるなりと彼がこの言を我に告る時に我は戰ひて立り 彼すなはち我に言けるはダニエルよ懼るゝ勿れ汝が心をこめて悟らんとし汝の神の前に身をなやませるその初の日よりして汝の言はずでに聽れたれば我汝の言によりて來れり 然るにベルシヤの國の君二十一日の間わが前に立差がりけるが長たる君の一なるミカエル來りて我を助けたれば我勝留りてベルシヤの王等の傍にをる 我は末の日に汝の民に臨まんとするところの事を汝に曉らせんとて來れりまた後の日に關はる所の異象ありと かれ是等の言を我に宣たる時に我は面を土につけて居り辭を措ところ無りしが 人の子のごとき者わが唇に捫りければ我すなはち口を開きわが前に立る者に陳て言り我主よこの示現によりて我は長怖にたへず全く力を失へり 此わが主の僕いかでか此わが主と語ふことを得んとその時は我まつたく力を失ひて氣息も止らんばかりなりしが

一〇 二 人の形のごとき者ふたゝび我に捫り我に力をつけて 言けるは愛せらるゝ人よ懼るゝ勿れ安んぜよ心強かれ心強かれと斯われに言ければ我力づきて曰り我主よ語りたまへ汝われに力をつけたまへりと 彼われに言けるは汝は我が何のために汝に臨めるかを知るや我今また歸りゆきてベルシヤの君と戰はんとす我が出行ん後にギリシヤの君きたらん 但し我まづ眞實の書に記されたる所を汝に示すべし我を助けて彼らに敵る者は汝らの君ミカエルのみ

第一章

一 我はまたメデア人ダリヨスの元年にかれを助け彼に力をそへたる事ありしなり 我いま眞實を汝に示さん視よ此後ベルシヤに三人の王興らんその第四の者は富ること一切の者に勝りその富強の大なるを待みて一切を激發してギリシヤの國を攻ん また一箇の強き王おこり大なる威權を振ふて世を治めその意のまゝに事を爲ん 但し彼の正に旺盛なる時にその國は破裂して天の四方に分れん其は彼の兒孫に歸せず又かれの振ひしほどの威權あらす即ち彼の國は拔とられて是等の外なる者等に歸せん

二 南の王は強からん然どその大臣の一人これに逾て強くなり威權を振はんその威權は大なる威權なるべし 年を経て後彼等相結ばん即ち南の王の女子北の王に適て和好を圖らん然どその胸には力なしましたその王およびその胸は立ことを得じこの女とこれを導ける者とこれを生せたる者とこれに力をつけたる者はみな時におよびて付されん

三 斯て後この女の根より出たる芽興りて之に代り北の王の軍勢にむかひて來りこれが城に打いりて之を攻て勝を得 之が神々鑄像および金銀の貴き器具をエジプトに携へさらん彼は北の王の上に立て年を重ねん 彼南の王の國に打入ことあらん然ど自己の國に退くべし

四 その子等また憤激して許多の大軍を聚め進みきたり溢れて往來しその城まで攻寄せん 是において南の王大に怒り出きたりて北の王と戰ふべし彼大軍を興してこれに當らん然れどもその軍兵はこれが手に付されん

二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 〇九 〇八 〇七 〇六 〇五 〇四 〇三 〇二 〇一

大軍すなはち興りて彼心に高ぶり數萬人を仆さん然れどもその勢力はこれのために増さじ 二二 また北の王は退きて初よりも大なる軍兵を興し或時すなはち或年數を経て後かならず大兵を率ゐ莫大の輜重を備へて攻來らん 二三 是時にあたりて衆多の者興りて南の王に敵せん又なんちの民の中の奸惡人等みづから高ぶりて事を爲しつひに預言をして應ぜしめん即ち彼らは自ら仆るべし 二四 茲に北の王襲ひきたり壘を築きて堅城を攻おとさん南の王の腕はこれに當ることを得じ又その撰拔の民もこれに當る力なかるべし 二五 之に攻きたる者はその意に任せて事をなさんその前に立ことを得る者なかるべし彼は美しき地に到らんその地はこれがために荒さるべし 二六 彼その全國の力を盡して打入んとその面をこれに向べれどまたこれと和好をなして婦人の女子を之に與へん然るにその婦人の女子は之がために身を滅すに至り何事をも成あたはず毫も彼のために益する所なかるべし 二七 またその面を島々にむけて之を多く取らん茲に一人の大將ありて彼が興へたる恥辱を雪ぎその恥辱をかれの身に與へかへさん 二八 かくて彼その面を自己の國の城々に向ん而して終に置き付けて亡ん 二九 彼に代りて興る者は榮光の國に人を出して租税を徴せん但し彼は忿怒にも戰鬥にもよらずして數日の内に滅せせん 三〇 また之にかはりて起る者は賤まるゝ者にして國の尊榮これに歸せざらん然れども彼不意に來り巧言をもて國を獲ん 三一 洪水のごとき軍勢かれのために押流されて敗れん契約の君たる者も然らん 三二 彼は之に契約をむすびて後詭詐を行ひ上りきたりて僅少の民をもて勢を得ん 三三 彼すなはち不意にきたりてその國の膏腴なる處に攻りりその父もその父の父も爲ざりしところの事をばはん彼はその奪ひたる物掠めたる物および財寶を衆人の中に散すべし彼は謀略をめぐらして堅固なる城々を攻取べし時の至るまで斯のごとくならん 三四 彼はその勢力を奮ひ心を勵まし大軍を率ゐて南の王に攻よせん南の王もまた自ら奮ひ甚だ大なる強き軍勢をもて迎へ戦はん然ど謀略をめぐらして攻るが故にこれに當ることを得ざるべし 三五 すなはち彼の珍膳に與り食ふ者彼を倒さんその軍兵溢れん打死する者衆かるべし 三六 此二人の王は害をなさんと心にはかり同席に共に食して詭詐を言ん

二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 〇九 〇八 〇七 〇六 〇五 〇四 〇三 〇二 〇一

然どもその志ならざるべし定まれる時のいたる迄は其事終らじ 二八 彼は莫大の財寶をもちて自己の國に歸らん彼は聖約に敵する心を懷きて事をなし而してその國にかへらん 二九 定まれる時にいたりて彼また進みて南に到らん然ど後の模様は先の模様のごとくならざらん 三〇 即ちキツテムの船かれに到るべければ彼力をおとして還り聖約にむかひて忿怒をもらして事をなさん而して彼歸りゆき聖約を棄る者と相謀らん 三一 彼より胸おこりて聖所すなはち堅城を汚し常供の物を撤除かせかつ殘暴可惡者を立ん 三二 彼はまた契約に關て罪を獲る者等を巧言をもて引誘して背かせん然どその神を知る人々は力ありて事をなさん 三三 民の中の穎悟者ども衆多の人を教ふるあらん然ながら彼らは暫時の間刃にかゝり火にやかれ擄はれ掠められ等して仆れん 三四 その仆るゝ時にあたりて彼らは少しく扶助を獲ん又衆多の人詐りて彼らに合せん 三五 また穎悟者等の中にも仆るゝ者あらん斯のごとく彼らの中に試むる事淨むる事潔よくする事おこなはれて終の時にいたらん即ち定まれる時まで然るべし 三六 此王その意のまゝに事をおこなひ萬の神に逾て自己を高くし自己を大にし神々の神たる者にむかひて大言を吐き等して忿怒の息む時までその志を得ん其はその定まれるところの事成ざるべからざればなり 三七 彼はその先祖の神々を顧みず婦女の愉快を思はずまた何の神をも顧みざらん其は彼一切に逾て自己を大にすればなり 三八 彼は之の代に軍神を崇め金銀珠玉および寶物をもてその先祖等の識ざりし神を崇めん 三九 彼はこの異邦の神に由り要害の城々にむかひて事を爲ん凡て彼を尊ぶ者には彼加ふるに榮を以てし之をして衆多の人を治めしめ土地をこれに分ち與へて賞賜とせん 四〇 終の時にいたりて南の王彼と戦はん北の王は車と馬と衆多の船をもて大風のごとく之に攻寄せ國に打いりて潮のごとく溢れ渉らん 四一 彼はまた美しき國に進み入ん彼のために亡ぶる者多かるべし然どエドム、モアブ、アンモン人の中の第一なる者などは彼の手を免かれん 四二 彼國々にその手を伸さんエジプトの地も免かれがたし

彼は遂にエジプトの金銀財寶を手に入れんリプエ人とエテオピア人は彼の後に従はん 彼東と北より報知を得て周章ふためき許多の人を滅し絶んと大に忿りて出ゆかん 彼は海の間において美しき聖山に天幕の宮殿をしつらはん然ど彼つひにその終にいたらん之を助くる者なかるべし

第二章

その時汝の民の人々のために立つところの大なる君ミカエル起あがらん是艱難の時なり國ありてより以來その時にいたるまで斯る艱難ありし事なかるべしその時汝の民は救はれん即ち書にしるされたる者はみな救はれん また地の下に睡りをる者の中衆多の者目を醒さんその中永生を得る者ありまた恥辱を蒙りて限なく羞る者あるべし 穎悟者は空の光輝のごとくに輝かんまた衆多の人を義に導ける者は星のごとくなりて永遠にいたらん ダニエルよ終末の時まで此言を秘し此書を封じおけ衆多の者跋渉らん而して知識増べしと

茲に我ダニエル觀に別にまた二箇の者ありて一箇は河の此岸の岸にあり一箇は河の彼岸の岸にありけるがその一箇の者かの布の衣を衣て河の水の上に立る人にむかひて言ひ此奇跡は何の時にて終るべきやと我聞にかの布の衣を衣て河の水の上に立る人天にむかひてその右の手と左の手を擧げ永久に生る者を指て誓ひて言ひその間は一時と二時と半時なり聖民の手の碎くること終らん時に是等の事みな終るべしと 我聞たれども曉ることを得ざりき我また言ひわが主よ是等の事の終は何ぞやと 彼いひけるはダニエルよ往け此言は終極の時まで秘しかつ封じ置るべし 衆多の者淨められ潔よくせられ試みられん然ど悪き者は悪き事を行はん悪き者は一人も曉ること無るべし然ど穎悟者は曉るべし 常供の者を除き殘暴可惡者を立ん時よりして一千二百九十日あらん 待をりて一千三百三十五日に至る者は幸福なり 汝終りに進み行け汝は安息に入り日の終りに至り起て汝の分を享ん

ダニエル書 をはり

欠

欠

一八 誓約をむすびまた弓箭をり戦争を全世界よりのぞき彼らをして安らかに居しむべし 一九 われ汝をめとりて永遠にいたらん公義と公平と寵愛と憐憫とをもてなんちを娶り 二〇 かはることなき眞實をもて汝をめとるべし 汝エホバをしらん

二一 エホバいひ給ふその日われ應へん我は天にこたへ天は地にこたへ 二二 地は穀物と酒と油とに應へまた是等のものはエズレルに應へん 二三 我わがためにかれを地にまき憐まれざりし者をあはれみわが民ならざりし者にかひて汝はわが民なりといはんかれらは我にむかひて汝はわが神なりといはん

第三章

一 エホバわれに言給ひけるは汝ふたゝび往てエホバに愛せらるれども轉りてほかのもろもろの神におこなふ婦人をあいせよ 二 われ銀十五枚おほむぎ一ホメル半をもてわが爲にその婦人をえたり 三 我これにいひけるは汝おほくの日わがためにとゞまりて淫行をなすことなく他の人にゆくことなかれ我もまた汝にむかひて然せん 四 イスラエルの子衆は多くの日王なく君なく犠牲なく表柱なくエホバなくテラビムなくして居らん 五 その後イスラエルの子衆はかへりてその神エホバとその王ダビデをたづねもとめ末日にをのゝきてエホバとその恩恵とにむかひてゆかん

第四章

一 イスラエルの子衆よエホバの言を聴けエホバこの地に住る者と争辨たまふ其は此地には誠實なく愛情なく神を知る事なければなり 二 たゞ詭偽凶殺盜姦淫のみにして互に相襲ひ血血につゞき流る 三 このゆゑにその地うれひにしづみ之にすむものはみな野のけもの空のとりとともにおとろへ海の魚もまた絶はてん 四 されど何人もあらそふべからずいましむ可らず汝の民は祭司と争ふ者の如くなれり 五 汝は盡つまつき汝と借なる預言者は夜つまつかん我なんちの母を亡すべし 六 わが民は知識なきによりて亡ざるなんち知識を棄つるによりて我もまた汝を棄てわが祭司たらしめじ

汝おのが神の律法を忘るゝによりて我もなんちの子等を忘れん 彼らは大なるにしたがひてますます我に罪を犯せば我かれらの榮を辱に變へん 彼らはわが民の罪をくらひ心をかたむけてその罪をかすを願へり このゆゑに民の遇ふところは祭司もまた同じわれその途をかれらにきたらせその行爲をもて之にむくゆべし かれらは食へども飽す淫行をなせどもその數まさすその心をエホバにとむることを止ればなり

淫行と酒と新しき酒はその人の心をうばふ わが民木にむかひて事をとふその杖かれらに事をしめす是かれら淫行の靈にまよはされその神の下を離れて淫行を爲すなり 彼らは山々の巔にて犧牲を獻げ岡の上にて香を焚き橡樹 楊樹 栗樹の下にてこの事をおこなふ此はその樹蔭の美しきによりてなりこゝをもてなんちらの女子は淫行をなしなんちらの兒婦は姦淫をおこなふ 我なんちらのむすめ淫行をなせども罰せずなんちらの兒婦かんいんをおこなへども刑せじ其はなんちらもみづから離れゆきて妓女とともに居り淫婦とともに獻物をそなふればなり悟らざる民はほろぶべし

イスラエルよ汝淫行をなすともユダに罪を犯さす勿れギルガルに往なかれベテアペンに上るなかれエホバは活くと曰て誓ふなかれ イスラエルは頑強なる牛のごとくに頑強なり今エホバ羔羊をひろき野にはなてるが如くして之を牧はん エフライムは偶像にむすびつらなれりその爲にまかせよ かれらの酒はくされかれらの淫行はやまずかれらの楯となるべき者等は恥を愛しいたく之を愛せり かれは風の翼につままれかれらはその禮物によりて恥辱をかうむらん

第五章

祭司等よこれを聴けイスラエルの家よ耳をかたむけよ王のいへよ之にこゝろを注よさばきは汝等罪にしづみたり我かれらをごとく懲しめん 我はエフライムを知るイスラエルはわれに隠るゝところ無し エフライムよなんぢ今すでに淫行をなせりイスラエルはすでに汚れたり かれらの行爲かれらをしてその神に

歸ること能はざらしむそは淫行の靈その衷にありてエホバを知ることなければなり イスラエルの驕傲はその面にむかひて證をなしその罪によりてイスラエルとエフライムは什れユダもまた之とともにたふれん かれらは羊のむれ牛の群をたづさへ往てエホバを尋ね求めん然どあふことあらじエホバ既にかれらより離れ給ひたればなり かれらエホバにむかひ貞操を守らずして他人の子を産り新月かれらとその産業とをともに滅さん

なんぢらギベアにて角をふきラマにてラッパを吹ならしベテアペンにて呼はりて言へベニヤミンよなんぢの後にありと 罰せらるゝの日にエフライムは荒廢れん我イスラエルの支派の中にならず有るべきことを示せり ユダの牧伯等は境界をうつすもののごとくなれり我わが震怒を水のごとくに彼らのうへに斟がん エフライムは甘んじて人のさだめたるところに従ひあゆむがゆゑに鞭をうけて辱げられん われエフライムには靈のごとくユダの家には腐朽のごとし エフライムおのれに病あるを見ユダおのれに傷あるをみたり斯てエフライムはアツスリヤに往きヤレブ王に人をつかはしたれど彼はなんちらを醫すことをえず又なんちらの傷をのぞきさることを得ざるべし われエフライムには獅子のごとくユダの家にはわかき獅子のごとし我しも我は抓撻てさり掠めゆけども救ふ者なかるべし 我ふたゝびわが處にかへりゆき彼らがその罪をくいてひたすらわが面をたづね求むるまで其處にをらん彼らは艱難によりて我をたづねもとむることをせん

第六章

來れわれらエホバにかへるべしエホバわれらを抓撻たまひたれどもまた醫すことをなし我傷をうち給ひたれどもまたその傷をつむむことを爲したまふ可ればなり エホバは二日ののちわれらを活かへし三日にわれらを起せたまはん我らその前にて生ん この故にわれらエホバをしるべし切にエホバを知ること求むべしエホバは晨光のごとく必ずあらはれいで雨のごとくわれらにのぞみ後の雨のごとく地をうるほし給ふ

エフライムよ我なんぢに何をなさんやユダよ我なんぢに何をなさんやなんぢの愛情はあしたの雲のごとく

またたぐちにきゆる露のごとし 此のゆゑにわれ預言者等をもてかれらを撃ちわが口の言をもてかれらを殺せりわが審判はあらはれいづる光明のごとし われは愛情をよろこびて犠牲をよろこばず神をしるを悦ぶこと燻祭にまされり 然るに彼らはアダムのごとく誓をやぶりかしこにて不義をわれにおこなへり ギレアデは悪をおこなふもの邑にして血の足跡そのなかに徧し 祭司のともがらは山賊の群のごとく伏伺して人をそこなひシケムに往く大路にて人をころす彼等はかくのごとき悪きことをおこなへり われイスラエルのいへに憎むべきことあるを見たりかの處にてエフライムは淫をおこなふイスラエルは汚れたり ユダよ我わが民の俘囚をかへさんときまた汝のためにも種刈をそなへん

第七章

われイスラエルを置さんときエフライムの愆とサマリヤのあしきわざと露るかれらは詐詭をおこなひ内には偷盗いあるあり外には山賊のむれ掠めざるあり かれら心にわがその一切の悪をしたためたることを思はず今その行爲はかれらを圍みふさぎて皆わが目前にあり かれらはその悪をもて王を悦ばせその詐詭をもてろもろの牧伯を悦ばせり かれらはみな姦淫をおこなふ者にしてパンを作るものに焼るゝ爐のごとし担粉をこねてその發酵ときまでしばらく火をおこすことをせざるのみなり われらの王の日にもろもろの牧伯は酒の熱によりて疾し王は嘲るものとともに手を伸ぶ かれら伏伺するほどに心を爐のごとくして備をなすそのパンを焼くものは終夜ねむりにつき朝におよばまた煙のごとく燃ゆ かれらはみな爐のごとくに熱してその審士をやくそのもろもろの王はみな仆るかれらの中には我をよぶもの一人だになし

エフライムは異邦人にいりまじるエフライムはかへさざる餅となれり かれは他邦人らにその力をのまるれども之をしらず白髪その身に雜り生れどもこれをさとらず イスラエルの驕傲はその面にむかひて證をなすかれらは此もろもろの事あれどもその神エホバに歸ることをせず又もとむることをせざるなり エフライムは智慧なくして愚なる鴿のごとし彼等はエジプトにむかひて呼求めまたアッスリヤに往く 我かれらの往るとき

わが網をその上にはりて天空の鳥のごとくに引墮し 前にその公會に告しごとく かれらを懲しめん 禍なるかなかれらは我をはなれて迷ひいでたり敗壞かれらにきたらんかれらは我にむかひて罪ををかしたり我かれらを罵はんとおもへどもかれら我にさからひて詭言をいへり かれら誠心をもて我をよばず唯牀にありて哀號べりかれらは穀物とあたらしき酒のゆゑをもて相集りかつわれに逆らふ 我かれらを教へその腕をつよくせしかども彼らはわれにもとりて悪きことを謀る かれらは歸るされども至高者にかへらず彼らはたのみがたき弓のごとし彼らのもろもろの牧伯はその舌のあらき言によりて剣にたふれん彼らは之がためにエジプトの國にて嘲笑をうくべし

第八章

ラッパをなんちの口にあてよ敵は驚のごとくエホバの家にのぞめりこの民わが契約をやぶりわが律法を犯しよによる かれら我にむかひてわが神よわれらイスラエルはなんちを知れりと叫ばん イスラエルは善をいみきらへり敵これを追ん かれら王をたてたり然れども我によりて立しにあらすかれら牧伯をたてたり然れども我がしらざるところなり彼らまたその金銀をもて己がために偶像をつくれりその造れるは毀ちすてられんが爲にせしにことならず サマリヤよなんちの積は忌きらふべきものなりわが怒かれらにむかひて燃ゆかれら何れの時に犯罪なきにいたらん 此の積はイスラエルより出づ匠人のつくれる者にして神にあらすサマリヤの積はくだけて粉とならん かれらは風をまきて狂風をかりとらん種ところは生長る穀物なくその穂はみのらざるべしとひ實るとも他邦人これを呑ん

イスラエルは既に呑れたり彼等いま列國の中において悦ばれざる器のごとく視做るゝなり 彼らは獨り野の驢馬のごとくアッスリヤにゆけりエフライムは物を餽りて戀人を得たり かれら列國の民に物を餽りたりと雖も今われ彼等をつどへ集む彼らは諸侯伯の王に負せらるゝ重擔のために衰へ始めん エフライムは多くの祭壇を造りて罪を犯すこの祭壇はかれらが罪に陥る階とはなれり 我かれらのために

律法をしるして 数件の簡條を示したれど 彼らは反て之を異物とおもへり かれらは我に獻ふべき物を獻ふれども 只肉をそなへて 己みづから之を食ふ エホバは之を納たまはず 今かれらの愆を記え 彼らの罪を罰したまはん 彼らはエジプトに歸るべし 一四
 イスラエルは己が造主を忘れてもろもろの社廟を建て ユダは塚をとりまはせる邑を多く増し加へたり 然どわれ火をその邑々におくりて 諸の城を焼じさん

第九章

イスラエルよ 異邦人のごとく喜びすさむ 勿れなんち淫行をなして 汝の神を離る 汝すべての麥の打場にて 賜はる淫行の賞賜を愛せり 一
 打場と酒酔とはかれらを養はし 亦あたらしき酒もむなしくならん 二
 かれらはエホバの地にとどまらず エフライムはエジプトに歸り アッスリヤにて汚穢たる物を食はん 彼等はエホバにむかひて酒を灌ぐべき者にあらず その祭物はエホバの悦びたまふ所にあらず かれらの犠牲は喪に居もののパンのごとし 凡てこれを食ふものは汚るべし 彼等のパンは只おのが食ふためにのみ用ひべくして エホバの家に入るべきにあらず 三
 なんぢら集會の日と エホバの節會の日とに何をなさんとするや 視よ かれら滅亡の故によりて 去ゆきぬ エジプトかれらをあつめ メンピスかれらを葬らん 疾藜かれらが銀の寶物を獲いば 彼らの天幕に蔓らん 刑罰の日きたり 應報の日きたれり イスラエルこれを知ん 預言者は愚なるもの靈に感じたるものは狂へるものなり 四
 これ汝の惡おほく 汝の怨恨おほいなるに因る 五
 エフライムは我が神にならべて 他の神をも 佇望めり 預言者の一切の途は鳥を捕ふる者の網のごとく 且その神の室の中に 怨恨を懷けり 六
 かれらはギベアの日のごとく 甚だしく惡き事を行へり エホバはその惡をこゝろに記て 其の罪を罰したまはん 七
 在昔われイスラエルを見ること 荒野の葡萄のごとく 汝らの先祖等を見ること 無花果樹の始にむすべる 最先の果の如くなし 八
 彼等はバアルベオルにゆきて 身を恥辱にゆだね 其の愛する物とともに 憎むべき者とはなれり 九
 エフライムの榮光は鳥のごとく 飛ざらん 即ち産ことも 孕むことも 妊娠ことも なかるべし 一〇
 假令かれら子等を育つるとも 我その子を喪ひて 遺る人なきにいたらしめん 我が離るゝ時 かれらの禍大なる哉 一一
 われ エフライムを美地に植て ツロのごとく なし かも エフライムはその子等を携へ いだして 人を殺す者に付さんとす 一二
 エホバよ 彼らに與へたまへ 汝なにを與へんとしたまふや 孕まざる胎と 乳なき乳房とを與へたまへ 一三
 かれらが凡の惡は ガルガルにあり 此故に 我かしこにて之を惡めり 其の行爲あしければ 我が家より 逐いだし 重て愛することをせじ 其の牧伯等は みな悖れる者なり 一四
 エフライムは 擊れ 其の根は かれて 果を結ぶまじ 若し産こと あらば 我その胎なる愛しむ實を殺さん 一五
 かれら聽従はざるによりて 我が神これを棄たまふべし かれらは列國民のうち 流離人とならん 一六

イスラエルは果をむすびて 茂り 榮る 葡萄の樹 其の果の多くなるがまゝに 祭壇をまし 其の地の鰥かなるがまゝに 偶像を美しくせり 一
 かれらは二心をいだけり 今かれら罪せらるべし 神はその祭壇を打毀ち 其の偶像を折棄てたまはん 二
 かれら今いふべし 我儕神を畏れざりしに 因て 我らに王なし 此の王はわれらのために 何をかなさんと 三
 かれらは虚しき言をいだし 偽の誓をなして 約をたつ 審判は烟の畝にも えいづる 南嶺のごとし 四
 サマリヤの居民は ベテアベンの嶺の故によりて 戰慄かん 其の民とこれを悦ぶ 祭司等は 其の榮のうせたるが爲に なげかん 五
 嶺は アッスリヤに携へられ 禮物として ヤレブ王に 獻げらるべし 六
 エフライムは 羞をかう ური 七
 イスラエルはおのが計議を取らん 八
 サマリヤは ぼろびその王は 水のうへの木片のごとし 九
 イスラエルの罪なる アベンの 崇邱は 荒はて 荆棘と 蒺藜 其の壇のうへには 茂らん 其の時 かれら山に むかひて 我儕をおほへ 陵に むかひて 我儕のうへに 倒れよといはん 一〇

第一〇章

イスラエルよ 汝はギベアの日より 罪をかせり 彼等はそこに 立り 邪惡のひとびとを 攻たりし 戰爭はギベアにて かれらに 及ばざりき 一
 我思ふまゝに 彼等を いましめん 彼等その二の罪につながらん 時 もろもろの民あつまりて 之をせめん 二
 エフライムは 馴されたる 牝牛のごとくにして 穀をふむことを 好むされど われその 美しき頸に

物を負しむべし我エフライムに鞭をかけんユダは耕しヤコブは土塊をくだかん

なんぢら義を生ずるために種をまき憐憫にしたがひてかりとり又新地をひらけ今はエホバを求むべき時なり終にはエホバきたりて義を雨のごとく汝等のうへに降せたまはん なんぢらは悪をたがへし不義を獲をさめ虚偽の果をくらへりこは汝おのれの途をたのみ己が勇士の數衆きをたのめるに縁る この故になんぢらの民のなかに擾亂おこりて汝らの城はことごとく打破られんシャルマンが戦門の日にベテアルベルを打破りしにことならず母その子とともに碎かれたり なんぢらの大なる惡のゆゑによりてベテアル如此なんぢらに行へるなりイスラエルの王はあしたに滅びん

第一章

イスラエルの幼かりしとき我これを愛しぬ我わが子をエジプトより呼いだしたり かれらは呼るゝに隨ひていよいよその呼者に遠ざかり且もろもろのバアルに犠牲をさしげ離たる偶像に香を焚り われエフライムに歩むことををしへ彼等をわが腕にのせて抱けり然どかれらは我にいやされたるを知ず われ人にもちゐる素すなはち愛のつなをもて彼等をひけり我がかれらを待ふは鞭をその腰より擧ぐるもののごとくにして彼等に食物をあたへたり

かれらはエジプトの地にかへらじ然どかれらがエホバに歸らざるによりてアッスリヤ人その王とならん 劍かれらの諸邑にまはりゆきてその關門をこぼち彼らをその謀計の故によりて滅さん わが民はともすれば我にはなれんとする心あり人これを招きて上に在るものに屬しめんとすれども身をおこすもの一人だになし

エフライムよ我が汝をすてんやイスラエルよ我が汝をわたさんや我が汝をアデマのごとくせんや争でなんぢをゼボイムのごとく爲んやわが心わが衷にかはりて我の愛憐ことごとく燃おこれり 我わが烈しき震怒をほどこすことをせじ我かかねてエフライムを滅すことをせじ我は人にあらず神なればなり我は汝のうちにあります聖者なりいかりをもて臨まし かれらは獅子の吼ることごとくに聲を出したまふエホバに隨ひて歩まん

エホバ聲を出したまへば子等は西より急ぎ來らん かれらエジプトより鳥のごとくアッスリヤより鶴のごとくに急ぎ來らん我かれらをその家々に住はしむべし是エホバの聖言なり

エフライムは謊言をもてイスラエルの家は詐偽をもて我を圍めりユダは神と信ある聖者とに屬きみつかずみ漂蕩をれり

第二章

エフライムは風をくらひ東風をおひ日々詐偽と暴逆とを増くはヘアッスリヤと契約を結び油をエジプトに餽れり エホバはユダと争辨をなしたまふヤコブをその途にしたがひて罰しその行爲にしたがひて報いたまふ ヤコブは胎にゐし時その兄弟の腫をとらへまた己が力をもて神と角力あらそへり かれは天の使と角力あらそひて勝ちなきて之に恩をもとめたり彼はベテアルにて神にあへり其處にて神われらに語ひたまへり これは萬軍の神エホバなりエホバは其記念の名なり 然ばなんぢの神にかへり矜恤と公義とをまもり恒になんぢの神を仰ぐべし

彼はカナン人(商賈)なりその手に詭詐の權衡をもち好であざむき取ことをなす エフライムはいふ誠にわれは富る者となれり我は身に財寶をえたり凡てわが勢したることの中に罪をうべき不義を見いだす者なかるべし 我エホバはエジプトの國をいでしより以來なんぢらの神なり我いまも尙なんぢを幕屋にすまはせて節會の日のごとくならしめん 我もろもろの預言者にかたり又これに益々おほく異象をしめしたり我もろもろの預言者に托して譬喩をまうく ギレアデは不義なる者ならずや彼らは全く虚しかれらはギルガルにて牛を犠牲に獻ぐかれらの祭壇は圍の畝につみたる石の如し ヤコブはアラムの野にけゆけりイスラエルは妻を得んために人に事へ妻を得んために羊を牧へり エホバ一人の預言者をもてイスラエルをエジプトより導きいだし一人の預言者をもて之を護りたまへり エフライムは怒を激ふること極ではなはだしその主かれが流し血をかれが上にとゞめその恥辱をかれに歸らせたまはん

第三章

エフライム言を出せば人をのけり彼はイスラエルのなかに己をたかうしバアルにより罪を犯して死たりしが今も尙ます罪を犯しその銀をもて己のために像を鑄その機巧にしたがひて偶像を作る是みな工人の作なるなり彼らは之につきていふ犠牲を獻ぐる者はこの横に吻を接べしと 是によりて彼らは朝の雲のごとく速にきえうする露のごとく打場より大風に吹散さるゝ穀穀のごとく窓より出ゆく煙のごとくならん

されど我はエジプトの國をいでてより以來なんちの神エホバなり爾われの外に神を知ことなし我のほかに救者なし 我さまに荒野にて水なき地にて爾を顧みたり かれらは秣場によりて食に飽き飽くによりてその心たかぶり是によりて我を忘れたり 斯るがゆゑに我かれらに對ひて獅子の如くなり途の傍にひそみうかゞふ約のごとくならん われ子をうしなへる熊のごとく彼らに向ひてその心腹を裂き獅子の如くこれを食はん野の獸これを攫断るべし

イスラエルよ汝の滅ぶるは我に背き汝を助くる者に背くが故なり 汝のもろもろの邑に汝を助くべき汝の王は今いづくにかあるなんちらがその王と牧伯等とを我に與へよと言たりし士師等は今いづくにかある われ忿怒をもて汝に王を與へ憤恨をもて之をうばひたり エフライムの不義は包まれてありその罪はをさめたくはへられたり 劬勞にかゝれる婦のかなしみ之に臨まん彼は愚なる子なり時に臨みてもなほ産門に入らず 我かれらを陰府の手より贖はん我かれらを死より贖はん死よなんちの疫は何處にあるか陰府よなんちの災は何處にあるか悔改はかくれて我が目に見えず

彼は兄弟のなかにて果を結ぶこと多けれども東風吹きたりエホバの息荒野より吹おこらん之がためにその泉は乾その源は涸れんその積蓄へたるもろもろの寶貴器皿は掠め奪はるべし サマリヤはその神にそむきたれば刑せられ劍に斃れんその嬰兒はなげくだかれその孕たる婦は割れん

第四章

イスラエルよ汝の神エホバに歸れよ汝は不義のために仆れたり 汝ら言詞をたづさへ來りエホバに歸りていへ 諸の不義は赦して善ところを受納れたまへ斯て我らは唇をもて牛のごとくに汝に獻げん アッスリヤはわれらを援けし我らは馬に騎らじまたふたゝび我憐みづからの手にて作れる者にむかひわが神なりと言じ孤兒は爾によりて憐憫を得べければなりと

我かれらの叛逆を醫し悦びて之を愛せん我が怒はかれを離れ去たり 我イスラエルに對しては露のごとくならん彼は百合花のごとく花さきレバノンのごとく根をはらん その枝は茂りひろがり其美麗は橄欖の樹のごとくその芬芳はレバノンのごとくならん その蔭に住む者かへり來らんかれらは穀物の如く活かへり葡萄樹のごとく花さきその馨香はレバノンの酒のごとくなるべし エフライムはいふ我また偶像と何のあづかる所あらんやと我これに應へたり我かれを顧みん我は蒼翠の松のごとし汝われより果を得ん

誰か智慧ある者ぞその人はこの事を曉らん 誰か穎悟ある者ぞその人は之を知ん エホバの道は凡て直し 義者は之を歩む然ど罪人は之に顧かん

ホセア書をばり

一 かもびすしきかな無数の民審判の谷にありてかもびすしエホバの日審判の谷に近づくが故なり 二 日も月も暗くなり星その光明を失ふ 三 エホバ、シオンよりよびとどろかしエルサレムより聲をはなち天地を震ひうごかしたまふ然れどエホバはその民の避所イスラエルの子孫の城となりたまはん 四 かくて汝ら我はエホバ汝等の神にして我聖山シオンに住むことをしるべしエルサレムは聖き所となり他國の人は重ねてその中をかよふまじその日山にあたらしき酒滴り岡に乳流れユダのもろもろの河に水流れエホバの家より泉水流れいでてシツラムの谷に灌がん 五 エジプトは荒すたれエドムは荒野とならん是はかれらユダの子孫を虐げ辜なき者の血をその國に流したればなり 六 されどユダは永久にすまひエルサレムは世々に保たん 七 我さきにはかれらが流しし血の罪を報いざりしが今はこれをむくいんエホバ、シオンに住みたまはん 八 ヨエル書 をはり

亞摩士書

第一章

一 テコアの牧者の中なるアモスの言是はユダの王ウジヤの世イスラエルの王ヨアシの子ヤラバアムの世地震の二年前に彼が見されたる者にてイスラエルの事を論るなり其言に云く
 二 エホバ、シオンより呼號りエルサレムより聲を出したまふ牧者の牧場は衰きカルメル嶺は枯る
 三 エホバかく言たまふダマスコは三の罪あり四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ即ち彼らは鐵の打禾車をもてギレアデを打ち 我ハザエルの家に火を遣りベネハダデの宮殿を焚ん 我ダマスコの關を碎きアベンの谷の中よりその居民を絶のぞきベテエデンの中より王の杖を執る者を絶のぞかんスリアの民は擡へられてキルにゆかんエホバこれを言ふ
 四 エホバかく言たまふガザは三の罪あり四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ即ち彼らは俘囚をことごとく曳ゆきてこれをエドムに付せり 我ガザの石垣の内に火を遣り一切の殿を焚ん 我アシドドの中よりその居民を絶のぞきアシケロンの中より王の杖を執る者を絶除かん我また手を反してエクロンを撃んベリシテ人の遣れる者亡ぶべし主エホバこれを言ふ
 五 エホバかく言たまふツロは三の罪あり四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ即ち彼らは俘囚をことごとくエドムに付したまふ兄弟の契約を忘れたり 我ツロの石垣の内に火を遣り一切の殿を焚ん
 六 エホバかく言たまふエドムは三の罪あり四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ即ち彼らは劍をもてその兄弟を追ひ全く憐憫の情を斷ち恒に怒りて人を害し永くその憤恨をたくはへたり 我テマンに火を遣りボツラの一切の殿を焚ん
 七 エホバかく言たまふアンモンの人々は三の罪あり四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ即ち彼らは

その國境を廣めんとてギレアデの孕める婦を割たり 我ラバの石垣の内に火を放ちその一切の殿を焚ん是は戰鬪の日に吶喊の聲をもて爲され暴風の日に旋風をもて爲されん 彼らの王はその牧伯等と諸共に擄へられて往んエホバこれを言ふ

第二章

エホバかく言たまふモアブは三の罪あり四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ即ち彼はエドムの王の骨を焼て灰となせり 我モアブに火を遣りケリオオの一切の殿を焚んモアブは躁擾と吶喊の聲と喇叭の音の中に死ん 我その中より審判長を絶除きその諸の牧伯を之とともに殺さんエホバこれを言ふ

エホバかく言たまふユダは三の罪あり四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ即ち彼らはエホバの律法を輕んじその法度を守らずその先祖等が従ひし偽の物に惑はさる 我ユダに火を遣りエルサレムの諸の殿を焚ん

エホバかく言たまふイスラエルは三の罪あり四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ即ち彼らは義者を金のために賣り貧者を鞋一足のために賣る 彼らは弱き者の頭に地の塵のあらんことを喘ぎて求め柔かき者の道を曲げ又父子ともに一人の女子に行て我聖名を汚す 彼らは質に取れる衣服を一切の壇の傍に敷きてその上に偃し罰金をもて得たる酒をその神の家に飲む

獨に我はアモリ人を彼らの前に絶たりアモリ人はその高きこと香柏のごとくその強きこと橡の樹のごとくなりしが我その上の果と下の根とをほろぼしたり 我は汝らをエジプトの地より携へるのばり四十年のあひだ荒野において汝らを導き終にアモリ人の地を汝らに獲させたり 我は汝らの子等の中より預言者を興し汝らの少者の中よりナザレ人を興したりイスラエルの子孫よ然るにあらすやエホバこれを言ふ 然るに汝らはナザレ人に酒を飲ませ預言者に命じて預言するなかれと言り

視よ我麥束を積滿せる車の物を壓するがごとく汝らを壓せん 其の時は疾走者も逃るに暇あらす強き者もその力を施すを得ず勇士も己の生命を救ふこと能はず 弓を執る者も立ことを得ず足蹠の者も自ら救ふたはず馬に騎れる者も己の生命を救ふこと能はず 勇士の中の心剛き者もその日には裸にて逃んエホバこれを言ふ

第三章

イスラエルの子孫よエホバが汝らにむかひて言ところ我がエジプトの地より導き上りし全家にむかひて言ところの此言を聴け 地の諸の族の中に我たゞ汝ら而已を知れりこの故に我なんぢらの諸の罪のために汝らを罰せん 二人もし相會せずば争で共に歩かんや 獅子もし獲物あらすば豈林の中に吼んや猛獅子もし物を攫ますば豈その穴より聲を出さんや もし鷹の設なくば鳥あに地に張れる網にかゝらんや網もし何の得るところも無くば豈地よりあがらんや 邑にて喇叭を吹かば民おどろかさらんや邑に災禍のおこるはエホバのこれを降し給ふならずや 夫主エホバはその隠れたる事をその僕なる預言者に傳へずしては何事をも爲たまはざるなり 獅子吼ゆ誰か懼れざらんや主エホバ言語たまふ誰か預言せざらんや

アシドドの一切の殿に傳へエジプトの地の一切の殿に宣て言へ汝等サマリヤの山々に集りその中にある大なる紛亂を觀その中間におこなはるゝ處遇を觀よ エホバいひたまふ彼らは正義をおこなふことを知す處け取し物と奪ひたる物とをその宮殿に積蓄ふ 是故に主エホバかく言たまふ敵ありて此國を攻かこみ汝の權力を汝より取下さん汝の一切の殿は掠めらるべし エホバかく言たまふ牧羊者は獅子の口より羊の兩足あるひは片耳を取かへし得るのみサマリヤに於て床の隅またはダマスコ錫の榻に坐するイスラエルの子孫もその救はるゝこと是のごとくならん

萬軍の神主エホバかく言たまふ汝ら聽てヤコブの家に證せよ 我イスラエルの諸の罪を罰する日にはベテルの壇を罰せん其壇の角は折て地に落べし 我また冬の家および夏の家をうたん象牙の家ほろび大きな

家失んエホバこれを言ふ

第四章

一 パシヤンの牝牛等よ汝ら此言を聴け汝らはサマリヤの山に居り弱者を虐げ 貧者を壓し又その主上に臨むその日には人汝らを鉤にかけ汝等の遺餘者を釣魚鉤にかけて曳いださん 汝らは各々その前なる石垣の破壊たる處より奔出てハルモンに逃往んエホバこれを言ふ

二 汝らベテルに往て罪を犯しギルガルに往て益々おほく罪を犯せ朝ごとに汝らの犠牲を携へゆけ三日ごとに汝らの什一を携へゆけ 酔いたる者を感謝祭に獻げ願意よりする禮物を召てこれを告示せイスラエルの子孫よ汝らは斯するを好むなりと主エホバ言たまふ

三 また我汝らの一切の邑に於て汝らの齒を清からしめ汝らの一切の處において汝らの食を乏しからしめたり然るに汝らに我に歸らずとエホバ言給ふ また我收穫までには尙三月あるに雨をとめて汝らに下さずかの邑には雨を降しこの邑には雨をふらさざりき此田圃は雨を得彼田圃は雨を得ずして枯れたり 二三の邑別の一の邑に躓めきゆきて水を飲ども飽くことあたはず然るに汝らに我に歸らずとエホバ言たまふ 我枯死歿と朽腐徳とをもて汝等を撃なやませりまた汝らの衆多の園と葡萄園と無花果樹と橄欖樹とは蝗これを食へり然るに汝らに我に歸らずとエホバ言たまふ 我なんぢらの中にエジプトに爲し如く疫病をおこし剣をもて汝らの少き人を殺しまふ 汝らの馬を奪さり汝らの營の臭氣をして騰りて汝らの鼻を撲しめたり然るも汝らに我に歸らずとエホバいひたまふ 我なんぢらの中の邑を滅すことソドム、ゴモラを神の滅したまひし如くしたれば汝らは火焰の中より取

いだしたる燃柴のごとくなれり然るも汝らに我に歸らずとエホバ言たまふ 二 イスラエルよ然ば我かく汝に行はん我是を汝に行ふべければイスラエルよ汝の神に會ふ準備をせよ 彼は即ち山を作りなし風を作り出し人の思想の如何なるをその人に示したまた晨光をかへて暗黒となし地の高處を踏む者なりその名を萬軍の神エホバといふ

第五章

一 イスラエルの家よ我が汝らに對ひて宣る此言を聴け是は哀歎の歌なり 處女イスラエルは仆れて復起あがらず彼は己の地に扑倒さる之を扶け起す者なし 主エホバかく言たまふイスラエルの家においては前に千人出たる邑は只百人のみのこり前に百人出たる邑は只十人のみのこらん

二 エホバかくイスラエルの家に言たまふ汝ら我を求めよさらば生べし べテルを求むるなかれギルガルに往なかれベエルシバに赴くなかれギルガルは必ず擄へられゆきべテルは無に歸せん 汝らエホバを求めよ然ば生べし恐くはエホバ火のごとくにヨセフの家に落くだりたまひてその火これを燒んべテルのためにこれを熄す者一人もあらじ 汝ら公道を茵蔯に變じ正義を地に擲つる者よ 罪愆および參宿を造り死の蔭を變じて朝となし晝を暗くして夜となし海の水を呼て地の面に溢れさする者を求めよその名はエホバといふ 彼は滅亡を忽然強者に臨ましむ滅亡つひに城に臨む

三 彼らは門にありて勸戒る者を惡み正直を言ふ者を忌嫌ふ 汝らは貧き者を踐つけ麥の禮物を之より取るこの故に汝らは鑿石の家を建しと雖どもその中に住ことあらじ美しき葡萄園を作りしと雖どもその酒を飲ことあらじ 我知る汝らの愆は多く汝らの罪は大なり汝らは義き者を虐げ賄賂を取り門において貧き者を推枉ぐ是故に今の時は賢き者黙す是惡き時なればなり

四 汝ら善を求めよ惡を求めざれば汝ら生べしまた汝らが言ごとく萬軍の神エホバ汝らと偕に在さん 汝ら惡を惡み善を愛し門にて公義を立よ萬軍の神エホバあるひはヨセフの遺れる者を憐れみたまはん 是故に主たる萬軍の神エホバかく言たまふ諸の衙衛にて啼ことあらん諸の大略にて人哀哉哀哉と呼ん又農夫を呼きたりて哀哭しめ啼女を招きて啼しめん また諸の葡萄園にも啼こと有べし其は我汝らの中を通るべければなりエホバこれを言たまふ

一八 エホバの日を望む者は禍なるかな 汝ら何とてエホバの日を望むや 是は昏くして光なし 人獅子の前を
逃れて熊に遇ひ又家にいりてその手を壁に附て蛇に咬るゝに宛も似たり 二〇 エホバの日は昏くして光なく暗にし
て輝なきに非ずや

二一 我は汝らの節筵を惡みかつ藐視むまた汝らの集會を悦ばじ 二三 汝ら我に燔祭または素祭を獻ぐるとも我こ
れを受納れじ 汝らの肥たる積の感謝祭は我これを顧みじ 二五 汝らの歌の聲を我前に絶て 汝らの琴の音は我これを
聽じ 公道を水のごとくに正義をつきさる河のごとくに流れしめよ

二六 イスラエルの家よ 汝らは四十年荒野に居し 間繼性と供物を我に獻けたりしや 二七 かへつて 汝らは汝らの王
シクテを負ひ 汝らの偶像キウンを負へり 是即ち 汝らの神とする星にして 汝らの自ら作り設けし者なり 二八 然ば我
汝らをダマスコの外に移さん 萬軍の神となふるエホバこれを言たまふ

第六章

一 身を安くしてシオンに居る者思ひわづらはすして サマリヤの山に居る者 諸の國にて勝れたる國
の中なる聞え高くして イスラエルの家に就きたがはるゝ者は禍なるかな 二 カルネに涉りゆき
彼處より大ハマテに至りまたベリシテ人のガテに下りて 視よ 其等は此二國に愈るや 彼らの土地は汝らの土地より
も大なるや 汝等は災禍の日をもて尙還しと爲し 強暴の座を近づけ 自ら象牙の牀に臥し 寢臺の上に身を伸
し 群の中より羔羊を取り 圍の中より犢牛を取て食ひ 琴の音にあはせて 唱ひ 噪ぎ ダビテのごとくに樂器を製り
出し 大罽をもて酒を飲み 最も貴とき膏を身に塗り ヨセフの艱難を憂へざるなり

七 是故に 今彼等は擄はれて 俘囚人の眞先に立て 往んかの身を伸したる者等の 嘯の聲止べし 八 萬軍の神エホ
バ言たまふ 主エホバ已を指て誓へり 我ヤコブが誇る所の物を忌嫌ひ その宮殿を惡む 我この邑と その中に充る者と
を付すべし 九 一家に十人遺りをるとも 皆死ん 一〇 而して その親戚すなはち之を焚く者 その死骸を家より運び
いださんとて之を取あげ またその家の奥に潜み居る者に向ひて 他になほ汝とともに居る者あるやと言ふとき 對へ

て一人も無しと言ん 此時かの人また言べし 黙せよ エホバの名を口に擧ること有べからずと 二 視よ エホバ命を下
し 大なる家を擧て 墟址とならしめ 小き家を擧て 微塵とならしめたまふ

三 馬あに能く岩の上を走らんや 人あに牛をもて岩を耕へすことを得んや 然るに 汝らは公道を毒に變じ 正義の
果を南嶺に變じたり 汝らは無物を喜び 我情は自分の力をもて角を得しにあらざやと言ふ 是をもて 萬軍の
神エホバ言たまふ イスラエルの家よ 我一の國を起して 汝らに敵せしめん 是はハマテの入口より アラバの川までも
汝らをなやまさん

第七章

一 主エホバの我に示したまへるところ 是のごとし 即ち 草の再び生ずる時に あたりて 彼蝗を造りたま
ふ その草は王の刈たる後に 生じたるものなり 二 その蝗地の青物を食盡し 後われ言り 主エホバよ
願くは 赦したまへ ヤコブは 小し 争でか立ことを得んと 三 エホバその行へる事につきて 悔をなし 我これを爲じと
言たまふ

四 主エホバの我に示したまへる所 是のごとし 即ち 主エホバ火をもて 罰せんとて 火を呼たまひければ 火大淵を
焚き また産業の地を焚かんとす 五 時に 我言り 主エホバよ 願くは 止みたまへ ヤコブは 小し 争でか立ことを得んと
六 エホバその行へる事につきて 悔をなし 我これをなさじと 主エホバ言たまふ

七 また 我に示したまへるところ 是のごとし 即ち 準繩をもて 築ける石垣の上に エホバ立ち 其の手に 準繩を執た
まふ 八 而して エホバ我にむかひ アモス 汝何を見るや と言たまひければ 準繩を見ると 我答へしに 主また言たまは
く 我準繩を我民 イスラエルの中に 設く 我再び 彼らを見過しにせじ 九 イサクの崇邱は 荒され イスラエルの聖所
は 毀たれん 我剣をもちて ヤラベアムの家に 起むかはん

一〇 時に ベテルの祭司 アマジヤ、イスラエルの王 ヤラベアムに 言遣しけるは イスラエルの家の眞中にて アモス
汝に 叛けり 彼の 諸の言には 此地も 塔るあたはざるなり 一 一 即ち アモスかく言り ヤラベアムは 剣によりて 死ん

イスラエルは必ず據へられてゆきてその國を離れんと 而してアマジャ、アモスに言けるは先見者よ汝往てユダの地に逃れ彼處にて預言して汝の食物を得よ 然どベタルにては重ねて預言すべからず是は王の聖所王の宮なればなり

アモス對へてアマジャに言けるは我は預言者にあらずまた預言者の子にも非ず我は牧者なり桑の樹を作る者なりと 然るにエホバ羊に従ふ所より我を取り往て我民イスラエルに預言せよとエホバわれに宣へり 今エホバの言を聽け汝は言ふイスラエルにむかひて預言する勿れイサクの家にもむかひて言を出すなかれと 是故にエホバかく言たまふ汝の妻は邑の中にて妓婦となり汝の男子女子は劍に斃れ汝の地は繩をもて分たれん而して汝は穢れたる地に死にイスラエルは據られゆきてその國を離れん

第八章

主エホバの我に示したまへるところ是のごとし即ち熟したる果物一箇あり エホバわれにむかひてアモス汝何を見るやと言たまひければ熟したる果物一箇を見るところたへしにエホバ我に言たまはく我民イスラエルの終いたれり我ふたゝび彼らを見過しにせじ 主エホバ言たまふ其日には宮殿の歌は哀哭に變らん死屍おびたゞしくあり人これを過き處に投棄ん默せよ

汝ら喘ぎて負き者に迫り且地の困難者を滅す者よ之を聽け 汝らは言ふ月朔は何時過去んか我儕穀物を賣んとす安息日は何時過去んか我ら麥倉を開かんとなす我らエバを小さくしシケルを大きくし偽の權衡をもて欺く事をなし 銀をもて賤しき者を買ひ鞋一足をもて負き者を買ひかつ屑麥を賣いださんと エホバ、ヤコブの榮光を指て誓ひて言たまふ我かならず彼等の一切の行爲を何時までも忘れじ 之がために地震はざらんや地に住る者みな哭かざらんや地みな河のごとく噴あがらんエジプトの河のごとく湧あがり又沈まん 主エホバ言たまふ其日には我日をして眞晝に沒せしめ地をして白晝に暗くならしめ 汝らの節筵を悲傷に變らせ汝らの歌を盡く哀哭に變らせ一切の人に麻布を腰に纏はしめ一切の人に頂を剃しめ其日をして獨子を喪へる哀傷のごとくならしめ其終をして苦き日のごとくならしめん

主エホバ言たまふ視よ日至らんとすその時我饑饉を此國におくらん是はパンに乏しきに非ず水に濁くに非ずエホバの言を聽ことこの饑饉なり 彼らは海より海とさまよひ歩き北より東と奔まはりてエホバの言を求めん然ど之を得ざるべし その日には美しき處女も少き男もともに渴のために絶いらん かのサマリヤの罪を指て誓ひダンよ汝の神は活くと言ひまたベエルシバの路は活くと語る者等は必ず仆れん復興することあらじ

第九章

我觀るに主壇の上に立て言たまはく柱の頭を擧て鬘を震はせ之を打碎きて一切の人の首に落かゝたすからじ 假令かれら陰府に掘くだるとも我手をもて之を其處より曳いださん假令かれら天に擧のぼるとも我これを其處より曳おろさん 假令かれらカルメル山の巔に匿るとも我これを搜して其處より曳いださん假令かれら海の底に匿れて我目を逃るとも我蛇に命じて其處にて之を咬しめん 假令かれらその敵に據はれゆくとも我劍に命じて其處にて之を殺さしめん我かれらの上に我目を注ぎて災禍を降さん福祉を降さん

主たる萬軍のエホバ地に捫れば地鏘けその中に住む者みな哀む即ち全地は河のごとくに噴あがりエジプトの河のごとくにまた沈むなり 彼は樓閣を天に作り穹蒼の基を地の上に置よまた海の水を呼て地の面にこれを斟ぐなり其名をエホバといふ

エホバ言たまふイスラエルの子孫よ我は汝らを視ことエチオピア人を視がごとくするにあらずや我はイスラエルをエジプトの國よりベリシテ人をカフトルよりスリア人をキルより導き來りしにあらずや 視よ我主エホバその目を此罪を犯すところの國に注ぎ之を地の面より滅し絶ん但し我はヤコブの家を盡くは滅さじエホバこれを言ふ 我すなはち命を下し飾にて物を飾ふがごとくイスラエルの家を萬國の中にて飾はん一粒も地に落ざるべし 我民の罪人即ち災禍われらに及ばず我らに降らじと言る者等は皆劍によりて死ん

二 其日には我ダビデの倒れたる幕屋を興しその破壊を修繕ひその傾圮たるを興し古代の日のごとくに之を建
 三 なほすべし 而して彼らはエドムの遺餘者および我名をもて稱へらるゝ一切の民を獲ん此事を行ふエホバかく
 四 言ふなり 二五 エホバ言ふ視よ日いたらんとすその時には耕者は刈者に相繼ぎ葡萄を踐む者は播種者に相繼がん
 五 また山々には酒滴り岡は皆鎔て流れん 二六 我わが民イスラエルの俘囚を返さん彼らは荒たる邑々を建なほして
 六 其處に住み葡萄園を作りてその酒を飲み園園を作りてその果を食はん 二七 我かれらをその地に植つけん彼らは
 七 我がこれに與ふる地より重ねて拔とらるゝことあらじ汝の神エホバこれを言ふ
 アモス書 をはり

阿巴底亞書

オバデヤの預言

一 主エホバ、エドムにつきて斯いひたまふ我らエホバより出たる音信を聞けり一人の使者國々の民の中に遣
 二 されて云ふ起よ我儕起てエドムを攻撃んと 二 我汝をして國々の中において小き者たらしむ汝は大に藐視らるゝ
 三 なり 山崖の巖屋に居り高き處に住む者よ汝が心の傲慢なんちを欺けり汝の心の中に謂ふ誰か我を地に曳
 四 くだすことを得んと 汝たとひ驚のごとくに高く擧り星の間に巢を造るとも我そこより汝を曳くださんエホバ
 五 これを言たまふ
 六 盜賊汝に來り強盜夜なんちに來り竊むともその心に滿るときは止ざらんや嗚呼なんちは滅されて絶ゆ葡萄
 七 を摘む者汝にいたるも尙幾何を遺さざらんや 嗚呼エサウは搜されその隠しおける物は探りいださる 汝と

一 汝はその兄弟ヤコブに暴虐を加へたるに因て恥辱なんちを蒙はん汝は永遠に至るまで絶るべし 二 汝が遠
 二 く離れて立をりし日即ち異邦人これが財寶を奪ひ他國人これが門に進入りエルサレムのために鐵を擧たる日に
 三 は汝も彼らの一人のごとくなりき 汝は汝の兄弟の日すなはちその災禍の日を觀るべからず又ユダの子孫
 四 の滅亡の日を喜ぶべからずその苦難の日には汝口を大きく開べからざるなり 我民の滅ぶる日には汝その門に
 五 入べからず其滅ぶる日には汝その患難を見べからず又その滅ぶる日には汝その財寶に手をかく可らず 汝路の
 六 辻々に立てその逃亡者を斬べからず其患難の日にこれが遺る者を付すべからず
 七 エホバの日萬國に臨むこと通し汝の爲せること汝も爲られ汝の應報なんちの首に歸すべし 汝等のわ
 八 が聖山にて飲してとく萬國の民も恒に飲ん即ちみな飲かつ嘔りて從前より有ざりし者のごとく成ん
 九 シオン山には救はるゝ者等をりてその山聖所とならんまたヤコブの家はその産業を獲ん ヤコブの家は
 一〇 火となりヨセフの家は火鎖となりエサウの家は藁とならん即ち彼等これが上に燃てこれを焚んエサウの家には遺
 一一 る者一人も無にいたるべしエホバこれを言なり 南の人はエサウの山を獲平地の人はベリシテを獲ん又彼らは
 一二 エフライムの地およびサマリヤの地を獲ベニヤミンはギレアデを獲ん かの據はれゆきしイスラエルの軍族は
 一三 カナン人に屬する地をザレバテまで取んセバラデにあるエルサレムの俘虜人は南の邑々を獲ん 然る時に救者
 一四 シオンの山に上りてエサウの山を轉かん而して國はエホバに歸すべし
 一五 オバデヤ書 をはり

約 拿 書

第一章

エホバの言アミタイの子ヨナに臨めりいはく 起てかの大なる邑ニネベに往きこれを呼はり責めよそは其惡わが前に上り來ればなりと しかるにヨナはエホバの面をさけてタルシシへ逃れんと起てヨツバに下り行けるが機しもタルシシへ往く舟に遇ければその價値を給へエホバの面をさけて僧にタルシシへ行んとてその舟に乘れり

時にエホバ大風を海の上に起したまひて烈しき颶風海にありければ舟は幾んど破れんとせり かゝりしかば船夫恐れて各おのれの神を呼び又舟を軽くせんとてその中なる載荷を海に投すたり然るにヨナは舟の奥に下りて臥て酣睡せり 船長來りて彼に云けるは汝なんぞかく酣睡するや起て汝の神を呼べあるひは彼われらを眷顧て淪じざらしめんとかくて人衆互に云けるは此災の我儕にのぞめるは誰の故なるかを知らんがため去來圖を擧んとやがて圖をひきしに圖ヨナに當りければ みな彼に云けるはこの災禍なにゆゑに我らにのぞめるか請ふ告げよ汝の業は何なるや何處より來れるや汝の國は何處ぞや何處の民なるや ヨナ彼等にいひけるは我はヘブル人にして海と陸とを造りたまひし天の神エホバを畏るゝ者なり 是に於て船夫甚だしく懼れて彼に云けるは汝なんぞ其事をなせしやとその人々はかれがエホバの面をさけて逃れしなるを知れり其はさきにヨナ彼等に告たればなり

遂に船夫彼にいひけるは我儕のために海を靜かにせんには汝に如何がなすべきや其は海いよいよ甚だしく狂瀆たればなり ヨナ彼等に曰けるはわれを取りて海に投いれよさらば海は汝等の爲に靜かにならんそはこの大なる颶風の汝等にのぞめるはわが故なるを知ればなり されど船夫は陸に漕もどさんとつとめたりしが終にあたはざりき其は海かれらにむかひていよいよ烈しく瀆たればなり ことにおいて彼等エホバに呼はりて曰け

欠

欠

米迦書

第一章

ユダの王ヨタム、アハズおよびヒゼキヤの代にモレシテ人ミカに臨めるエホバの言是すなはち

サマリヤとエルサレムの事につきて彼が示されたる者なり

萬民よ聽け地とその中の者よ耳を傾けよ主エホバ汝らに對ひて證を立たまはん即ち主その聖殿より之を立たまふべし 視よエホバその處より出てくだり地の高處を踏たまはん 山は彼の下に融け谷は裂けたり火の前なる蟻のごとく坡に流るゝ水の如し 是みなヤコブの怒の故イスラエルの家の罪のゆゑなりヤコブの怒とは何かサマリヤにあらずやユダの崇邱とは何かエルサレムにあらずや 是故に我サマリヤを野の石堆となし葡萄を植る處と爲し又その石を谷に投おとしその基を露さん 其の石像はみな碎かれその獲たる價金はみな火にて焚れん我その偶像をことごとく毀たん彼妓女の價金よりこれを積たれば是はまた歸りて妓女の價金となるべし

我これがために哭き咷ばん衣を脱ぎ裸體にて歩行ん山犬のごとくに哭き駝鳥のごとくに啼ん サマリヤの傷は醫すべからざる者にてすでにユダに至り我民の門エルサレムにまでおよべり ガテに傳ふるなかれ泣さけぶ勿れベテレアフラにて我塵の中に寝びたり サビルに住る者よ汝ら裸になり辱を蒙りて進みゆけザアナンに住る者は敢て出ずベテエゼルの哀哭によりて汝らは立處を得ず マロテに住る者は己の幸福につきて思ひな

やむ其は災禍エホバより出てエルサレムの門に臨めばなり ラキシに住る者よ馬に車をつなげラキシはシオンの女の罪の根本なりイスラエルの怒は汝の中に見ゆ この故に汝モレセテガテに離別の禮物を與へよアクジブの家々はイスラエルの王等におけること人を欺く溪川のごとくなるべし マレシヤにすめる者よ我また汝の地を獲べき者を汝に携へ往べしイスラエルの榮光アドラムに往ん 汝その悦ぶところの子等の故によりて汝の鬘を剃おろせ汝の首の剃し處を大きくして驚のごとくにせよ其は彼等捕へられて汝を離るればなり

第二章

その牀にありて不義を圖り惡事を工夫する者等には禍あるべし彼らはその手に力あるが故に天を家掠め人を虐げてその産業をかすむ 是故にエホバかく言たまふ視よ我此族にむかひて災禍を降さんと謀る 汝らはその頸を是より脱すること能はじまた首をあげて歩くこと能はざるべし其時は災禍の時なればなり 汝らには人汝らにつきて詩を作り悲哀の歌をもて悲哀て言ん事既にいたれり我儕は盡く滅さる彼わが民の産業を人に與ふ如何なれば我よりこれを離すや我儕の田圃を遠逆者に分ち與ふ 然ば汝らエホバの會衆の中には箴によりて繩をうつ者一人も有じ

第三章

預言する勿れ彼らは預言す彼らは是等の者等にむかひて預言せじ恥辱彼らを離れざるべし 汝ヤコブの家と稱へらるる者よエホバの氣短からんやエホバの行爲是のごとくならんや我言は品行正直者の益とならざらんや 然るに我民は近頃起りて敵となれり汝らは夫の戰爭を避て心配なく過るところの者等に就てその衣服の外衣を奪ひ 我民の婦女をその悦ぶところの家より逐いだしその子等より我の妝飾を永く奪ふ 起て去れ是は汝らの安息の地にあらす是は已に汚れたれば必ず汝らを滅さん其滅亡は劇かるべし 人もし風に歩み詭言を宣べ我葡萄酒と濃酒の事につきて汝に預言せんと言ことあらばその人はこの民の預言者とならん ヤコブよ我かならず汝をことごとく集へ必ずイスラエルの遺餘者を聚めん而して我之を同一に置てゴヅラの羊のごとく成しめん彼らは人數衆きによりて牧場の中なる群のごとくにその聲をたてん 打破者かれらに先だちて登り彼ら途に門を打敗り之を通りて出ゆかん彼らの王その前にたちて進みエホバの首に立たまふべし

第四章

我言ふヤコブの首領よイスラエルの家の侯伯よ汝ら聽け公義は汝らの知べきことに非ずや 汝らは善を惡み惡を好み民の身より皮を剥ぎ骨より肉を剔り 我民の肉を食ひその皮を剥ぎその骨を碎きこれを切きさみて鍋に入る物のごとくし鼎の中に入れて肉のごとくす 然ば彼時は彼らエホバに呼はるるともエホバかれらに應へたまはじ却てその時には面を彼らに隠したまはん彼らの行惡ければなり 我民を惑す預言者は齒にて嚙べき物を受る時は平安あらんと呼はれども何をその口に與へざる者にむかひては戰闘の準備をなすエホバ彼らにつきて斯いひたまふ 然ば汝らは夜に遣べし復興象を得じ黑暗中に遣べし復ト兆を得じ日はその預言者の上をはなれて渡りその上は晝も暗かるべし 見者は愧を抱きト者は面を隠らめ 皆共にその唇を掩はん神の垂應あらざればなり 然れども我はエホバの御靈によりて能力身に滿ち公義および勇氣衷に滿ればヤコブにその愆を示しイスラエルにその罪を示すことを得

第五章

ヤコブの家の首領等およびイスラエルの家の牧伯等公義を惡み一切の正直事を曲る者よ汝ら之を聽け 彼らは血をもてシオンを建て不義をもてエルサレムを建つ 其首領等は賄賂をとりて審判をなし其の祭司等は値錢を取て教誨をなす又その預言者等は銀子を取て占トを爲しエホバに倚頼みて云ふエホバわれらと僭に在すにあらすや然ば災禍われらに降らじと 是によりてシオンは汝のゆゑに田圃となりて耕へされエルサレムは石堆となり宮の山は樹の生しげる高處とならん

第六章

末の日にいたりてエホバの家の山諸の山の嶺に立ち諸の嶺にこえて高く聳へ萬民河のごとく之に流れ歸せん 即ち衆多の民來りて言ん去來我儕エホバの山に登りヤコブの神の家にゆかん エホバその道を我らに教へて我らにその路を歩ましめたまはん律法はシオンより出でエホバの言はエルサレムより出べければなり 彼衆多の民の間を轉き強き國を規戒め遠き處にまでも然したまふべし彼らはその劍を鋤に打かへその鎗を録に打かへん國と國とは劍を擧て相攻めすまた重て戰爭を習はじ 皆その葡萄の樹の下に坐しその無花果樹の下に居ん之を懼れしむる者なかるべし萬軍のエホバの口これを言ふ 一切の民はみな各々その神の名によりて歩む然れども我らはわれらの神エホバの名によりて永遠に歩まん

第七章

エホバ言たまふ其日には我かの足蹇たる者を集へかの散されし者および我が苦しめし者を聚め 其の

足蹇たる者をもて遺餘民となし遠く逐やられたりし者をもて強き民となさん而してエホバ、シオンの山において今より永遠にこれが王とならん 羊樓シオンの女の山上最初の權汝に歸らん即ちエルサレムの女の國祚なちに歸るべし

汝なにとて喚叫ぶや汝の中に王なきや汝の讒者絶果しや汝は産婦のごとくに痛苦を懐くなり シオンの女と産婦のごとく劬勞て産め汝は今邑を出て野に宿りバビロンに往ざるを得ず彼處にて汝救はれんエホバ汝を彼處にて汝の敵の手より嘔ひ取り給ふべし 今許多の國民あつまりて汝におしよせて言ふ願くはシオンの汚されんことを我ら目にシオンを觀てなぐさまんと 然ながら彼らはエホバの思念を知らずまたその御謀議を曉らずエホバ麥束を打場にあつむるごとくに彼らを聚め給へり シオンの女よ起てこなせ我なんちの角を鐵にし汝の蹄を銅にせん汝許多の國民を打碎くべし汝かれらの掠取物をエホバに獻げ彼らの財産を全地の主に奉納べし

第五章

軍隊の女よ今なんち集りて隊をつくれ敵われらを攻圍み杖をもてイスラエルの士師の頰を撃つ 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

ベテレヘム、エフラタ汝はユダの郡中にて小き者なり然れどもイスラエルの君となる者汝の中より我ために出べしその出る事は古昔より永遠の日よりなり 是故に産婦の産おとすまで彼等を付しおきたまはん然る後その遺れる兄弟イスラエルの子孫とともに歸るべし 彼はエホバの力に由りその神エホバの名の威光によりて立てその群を牧ひ之をして安然に居しめん今彼は大きな者となりて地の極にまでおよばん 彼は平和なりアツスリヤ人われらの國に入り我らの宮殿を踏あらさんとする時は我儕七人の牧者八人の人君を立てこれに當らん 彼ら劍をもてアツスリヤの地をほろぼしエムロデの地の邑々をほろぼさんアツスリヤの人我らの地に攻入り我らの境を踏あらす時には彼その手より我らを救はん ヤコブの遺餘者は衆多の民の中に在ること人に頼ず世の人を俟ずしてエホバより降る露の如く青草の上にふりしく雨の如くならん ヤコブの遺餘者の國々をりを衆多の民の中にをる様は林の獸の中に獅子の居ることく羊の群の中に猛き獅子の居ることくならんその過

るときは踏みかつ裂くことをなす救ふ者なし 望らくは汝の手汝が諸の敵の上にあげられ汝がもろもろの仇ごとごとく絶れんことを

エホバ言たまふ其日には我なんちの馬を汝の中より絶ち汝の車を毀ち 汝の國の邑々を絶し汝の一切の城をことごとく圮さん 我また汝の手より魔術を絶ん汝の中に卜筮師無にいたるべし 我なんちの彫像および柱像を汝の中より絶ん汝の手にて作れる者を汝重て拜むこと無るべし 我また汝のアシラ像を汝の中より拔たふし汝の邑々を滅さん 而して我忿怒と憤恨をもてその聽従はざる國民に仇を報いん

第六章

請ふ汝らエホバの宣まふところを聽け汝起あがりて山の前に辯争へ崗に汝の聲を聽しめよ 山よ地の易ることなき基よ汝らエホバの辯争を聽けエホバその民と辯争を爲しイスラエルと論ぜん 我民よ我何を汝になしや何において汝を疲勞たるや我にむかひて證せよ 我はエジプトの國より汝を導きのぼり奴隸の家より汝を贖ひいだしモーセ、アロンおよびミリアムを遣して汝に先だたしめたり 我民よ請ふモアブの王バラクが謀りし事およびベオルの子バラムがこれに應へし事を念ひシツテムよりギルガルにいたるまでの事等を念へ然らば汝エホバの正義を知ん

我エホバの前に何をもちゆきて高き神を拜せん燔祭の物および當歳の積をもてその御前にいたるべきか エホバ數千の牡羊萬流の油を悦びたまはんか我愆のためにわが長子を獻げんか我靈魂の罪のために我身の産を獻げんか 人よ彼さきに善事の何なるを汝に告たりエホバの汝に要めたまふ事は唯正義を行ひ憐憫を愛し謙遜りて汝の神とともに歩む事ならずや

エホバの聲邑にむかひて呼はる智慧ある者はなんちの名を仰がん汝ら笞杖および之をおくらんと定めし者に聽け 惡人の家に猶惡財ありや詛ふべき縮小たる升ありや 我もし正からざる權術を用ひ袋に偽の硝子をいれおかば争で潔からんや 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

爲す 是をもて我も汝を撃て重傷を負はせ汝の罪のために汝を滅す 汝は食ふとも飽す腹はつねに空ならん
 汝は移すともつひに拯ふことを得じ汝が拯ひし者は我これを剣に付すべし 汝は種播とも刈ることあらず橄欖
 を踐ともその油を身に抹ることあらず葡萄を踐ともその酒を飲ことあらず 汝らはオムリの法度を守りアハブ
 の家の一切の行爲を行ひて彼等の謀計に違ふ是は我をして汝を荒さしめ且その居民を胡虜となさしめんが爲なり
 汝らはわが民の恥辱を任べし

第七章

我は禍なるかな我の景況は夏の果物を採る時のごとく運れる葡萄を斂むる時に似たり食ふべき
 葡萄あること無く我が心に嗜む初結の無花果あること無し 善人地に絶ゆる人の中に直き者なし皆
 血を流さんと伏て伺ひ各々網をもてその兄弟を獵る 兩手は惡を善なすに急がし牧伯は要求め裁判人は賄賂を
 取り力ある人はその心の惡き望を言あらはし斯共にその惡をあざなひ合す 彼らの最も善き者も荊棘のごとく
 最も直き者も刺ある樹の垣より惡し汝の觀望人の日すなはち汝の刑罰の日いたる彼らの中に今混亂あらん 汝
 ら伴侶を信する勿れ朋友を恃むなかれ汝の懐に寢る者にむかひても汝の口の戸を守れ 男子は父を藐視め
 女子は母に背き媳は姑に背かん人の敵はその家の者なるべし

我はエホバを仰ぎ望み我を救ふ神を望み俟つ我神われに聽たまふべし 我敵人よ我につきて喜ぶなかれ
 我仆るれば興あがる幽暗に居ればエホバ我の光となりたまふ エホバわが訴訟を理し我ために審判をおこなひ
 たまふまで我は忍びてその忿怒をかうむらん其は我これに罪を得たればなりエホバつひに我を光明に携へいだし
 給はん而して我エホバの正義を見ん わが敵これを見ん汝の神エホバは何處にをるやと我に言る者恥辱をかう
 むらん我かれを目に見るべし彼は街衢の泥のごとくに踏つけらるべし 汝の垣を築く日いたらん其日には法度
 遠く徙るべし その日にはアッスリヤよりエジプトの邑々より人々汝に來りエジプトより河まで海より海まで
 山より山までの人々汝に來り就ん その日地はその居民の故によりて荒はつべし是はその行爲の果報なり

汝の杖をもて汝の民即ち獨離れてカルメルの中の林にをる汝の産業の羊を牧養ひ之をして古昔の日のご
 とくバシヤンおよびギレアデにおいて草を食はしめたまへ 汝がエジプトの國より出來し日のごとく我よしぎ
 なる事等を彼にしめさん 國々の民見てその一切の能力を取ちその手を口にあてんその耳は聾となるべし
 彼らは蛇のごとくに壘を銘め地に匍ふ者のごとくにその城より振ひて出で戰慄て我らの神エホバに誇り汝の
 ために懼れん

何の神か汝に如ん汝は罪を赦しその産業の遺餘者の愆を見過したまふなり神は憐憫を悦ぶが故にその忿怒
 を永く保ちたまはず 一 ふたゝび顧みて我らを憐み我らの愆を踏つけ我らの諸の罪を海の底に投しづめたまはん
 汝古昔の日われらの先祖に誓ひたりし其眞實をヤコブに賜ひ憐憫をアブラハムに賜はん

拿 翁 書

第一章

ニネベに關る重き預言エルコシ人ナホムの異象の書
 エホバは妬みかつ仇を報ゆる神エホバは仇を報ゆる者また忿怒の主エホバは己に逆らふ者に
 仇を報い己に敵する者にむかひて憤恨を含む者なり エホバは怒ることの速く能力の大なる者また罰すべき者
 をば必ず赦すことを爲さざる者エホバの道は旋風に在り大風に在り雲はその足の塵なり 彼海を指斥て之を乾か
 し河々をしてごとく涸しむバシヤンおよびカルメル草木は枯れレバノンの花は凋む 彼の前には山々ゆ
 るぎ嶺々溶く彼の前には地墳上り世界およびその中に住む者皆ふきあげらる 誰かその憤恨に當ることを得ん

誰かその燃る忿怒に堪ることを得ん其震怒のそぐこと火のごとし嚴も之がために裂く エホバは善なる者に
して患難の時の要害なり彼は己に倚頼む者を善知たまふ 彼みなざる洪水をもてその處を全く滅し己に敵する
者を幽暗處に逐やりたまはん

汝らエホバに對ひて何を謀るや彼全く滅したまふべし患難かさねて起らじ 彼等むすびからまれる
荆棘のごとくなるとも酒に浸りをも乾ける藁のごとくに焚つくさるべし エホバに對ひて惡事を謀る者
一人汝の中より出て邪曲なる事を勤む エホバかく言たまふ彼等全くしてその數夥多しかるとも必ず交たふさ
れて皆絶ん我前にはなんちを苦めたれども重て汝を苦めじ いま我かれが汝に負せし鞭を碎き汝の縛を切はな
すべし

エホバ汝の事につきて命令を下す汝の名を負ふ者再び播るゝこと有じ汝の神々の室より我雕像および鑄像
を除き絶べし我汝の墓を備へん汝輕ければなり

嘉音信を傳ふる者の脚山の上に見ゆ彼平安を宣ぶユダよ汝の節筵を行ひ汝の誓願を果せ邪曲なる者重て
汝の中を通らざるべし彼は全く絶る

第二章

擊破者攻のほりて汝の前に至る汝城を守り路を窺ひ腰を強くし汝の力を大に強くせよ エホバ
はヤコブの榮を舊に復してイスラエルの榮のごとくしたまふ其は掠奪者これを掠めその葡萄蔓を壞
ひたればなり その勇士は楯を紅にしその軍兵は紅に身を甲ふ其行伍を立つる時には戰車の鐵灼爍て火の
ごとし鎗また閃めきふるふ 戰車街衢に狂ひ奔り大路に推あふ其形狀火炬のごとく其疾く馳すること電光の
如し 彼その將士を愾ひいだす彼らはその途にて躓き仆れその石垣に奔ゆき大楯を備ふ 河々の門啓け宮消
うせん この事定まれり彼は裸にせられて擡はれゆきその宮女胸を打て鴿のごとくに啼くべし
ニホベはその建し日より以來水の滿る池に似たりしがその民今は逃奔る止れ止れと呼ども後を顧る者なし

白銀を奪へよ黄金を奪へよその寶物限なく諸の貴とき器用夥多し 滅亡たり空虚なれり荒果たり心は消え
膝は慄ひ腰には凡て劇しき痛あり面はみな色を失ふ 獅子の穴は何處ぞや少獅子の物を食ふ處は何處ぞや
雄獅子雌獅子その小獅子とともに彼處に歩むに之を懼れしむる者なし 雄獅子は小獅子のために物を嚙ころし
雌獅子の爲に物をくびり殺しその掠獲たる物をもて穴に充しその裂殺しし物をもて住所に滿す 萬軍のエホバ
言たまふ視よ我なんちに臨む我なんちの戰車を焚て煙となすべし汝の少き獅子はみな劍の殺す所とならん我また
汝の獲物を地より絶べし汝の使者の聲かさねて聞ゆること無らん

第三章

禍なるかな血を流す邑その中には全く詭譎および暴行充ち掠め取ること息まず 鞭の音あり
輪の轟く音あり馬は躍り跳ね車は輾り行く 騎兵馳のほり劍きらめき鎗ひらめく殺さるゝ者夥多
しくして死屍山を爲し死骸限なし皆死屍に躓きて倒る 是はかの魔術の主なる美しき妓女多く淫行を行ひその
淫行をもて諸國を奪ひその魔術をもて諸族を惑したるに因てなり 萬軍のエホバ言たまふ視よ我なんちに臨む
我なんちの裳褌を掲げて面の上にまで及ぼし汝の陰所を諸民に見し汝の羞る所を諸國に見すべし 我また穢
はしき物を汝の上に投かけて汝を辱しめ汝をして糞物とならしめん 凡て汝を見る者はみな汝を避て奔り去り
ニホベは亡びたりと言ん誰か汝のために哀かんや何處よりして我なんちを弔ふ者を尋ね得んや

汝あにノアモンに愈らんやノアモンは河々の間に立ち水をその周圍に環らし海をもて壩となし海をもて垣
となせり かつその勢力たる者はエテオピア人およびエジプト人などにして限あらずフチ人ルビ人等汝を助け
たりき 然るに是も俘囚となりて擡はれてゆきその子女は一切の衝の隅々にて投付られて碎け又その尊貴者は
鐵にて分たれ其大なる者はみな鎖に繋がれたり 汝もまた醉せられて終に隠匿ん汝もまた敵を避て逃るゝ處を
尋ね求めん 汝の城々はみな初に結びし果のなれる無花果樹のごとし之を擡がせばその果落て食はんとする者
の口にある 汝の中にある民は婦人のごとし 汝の地の門はみな汝の敵の前に廣く開きてあり火なんちの嗣を

二 焚ん 汝水を汲て圍まるゝ時の用に備へ汝の城々を堅くし泥の中に入れて踐て石灰を作りかつ互燒瘡を修理へよ
 三 其處にて火汝を燒き劍なんちを斬ん其なんちを滅すこと吸蝗のごとくなるべし汝吸蝗のごとく數多からば
 四 多かれ汝群蝗のごとく數多からば多かれ 汝はおのれの商賈を空の屋よりも多くせり吸蝗掠めて飛さる
 五 汝の重臣は群蝗のごとく汝の軍長は蝗の群のごとし寒き日には垣に巢窟を構へ日出きたれば飛て去るその
 六 在る處を知る者なし 一八 アッスリヤの王よ汝の牧者は睡り汝の貴族は臥す又なんちの民は山々に散るるを棄む
 七 者なし 汝の傷は愈ること無し汝の劍は重し汝の事を聞およぶ者はみな汝の故によりて手を拍ん誰か汝の
 八 悪行を恒に身に受ざる者やある
 九 ナホム書 をはり

ハバクク書

第一章

一 預言者ハバククが示を蒙りし預言の重負
 二 エホバよ我呼はるに汝の我に聽たまはざること何時までぞや我なんちにむかひて強暴を訴ふ
 三 れども汝は助けたまはざるなり 汝なにとて我に害惡を見せたまふや何とて艱難を瞻望居たまふや奪掠および
 四 強暴わが前に行はる且爭論あり鬪評おこる 是によりて律法弛み公義正しく行はれず惡き者義しき者を圍むが
 五 故に公義曲りて行はる

六 汝ら國々の民の中を望み觀おどろけ駭け汝らの日に我一の事を爲ん之を告る者あるとも汝ら信ぜざらん
 七 視よ我カルデア人を興さんとす是すなはち猛くまた荒き國人にして地を縱横に行めぐり己の有ならざる住處を
 八 奪ふ者なり 是は懼るべく又驚くべし其是非威光は已より出づ 其の馬は約よりも迅く夜求食する豺狼よりも

疾し其騎兵は跑まはる即ちその騎兵は遠き處より來る其飛ことは物を食はんと急ぐ鷹のごとし 是は全く強暴
 のために來り其面を前にむけて頻に進むその俘虜を寄集むることは砂のごとし 是は王等を侮り君等を笑ひ諸
 の城々を笑ひ土を積あげてこれを取ん 斯て風のごとくに行めぐり進みわたりて罪を獲ん是は己の力を神とす
 二 エホバわが神わが聖者よ汝は永遠より在すに非ずや我らは死なじエホバよ汝は是を審判のために設けたま
 へり譬よ汝は是を懲戒のために立たまへり 汝は目清くして肯て惡を觀たまはざる者肯て不義を視たまはざる
 者なるに何ゆゑ邪曲の者を觀すて置たまふや惡き者の己にまさりて義しき者を吞噬ふに何ゆゑ汝黙し居たまふや
 三 汝は人をして海の魚のごとくならしめ君あらぬ昆蟲のごとくならしめたまふ 彼駒をもて之を盡く釣あげ
 網をもて之を寄せ集め引網をもて之を捕ふるなり是に因て彼歡び樂しむ 是故に彼その網に犠牲を獻けその
 引網に香を焚く其は之がためにその分肥まさりその食饌になりたればなり 然ど彼は其の網を傾けつゝなほ
 四 たえず國々の人を惜みなく殺すことをするならんか

第二章

一 我わが觀望所に立ち成樓に身を置ん而して我候ひ望みて其われに何と宣まふかを見わが訴言に我
 二 みづから何と答ふべきかを見ん エホバわれに答へて言たまはく此默示を書しして之を板の上
 三 に明白に鐫つけ奔りながらも之を讀べからしめよ 此默示はなほ定まれる時を俟てその終を急ぐなり偽ならず
 四 若し遅くあらば待べし必ず臨むべし滯滞りはせじ
 五 視よ彼の心は高ぶりその中にありて直からず然ど義き者はその信仰によりて活べし かの酒に耽る者は
 六 邪曲なる者なり驕傲者にして安んぜず彼はその情慾を陰府のごとくに潤くすまた彼は死のごとし又足ことを知す
 七 萬國を集へて己に歸せしめ萬民を聚めて己に就しむ 其等の民みな諺語をもて彼を評し嘲弄の詩歌をもて彼を
 八 諷せざらんや即ち言ん己に屬せざる物を積累ぬる者は禍なるかな斯て何の時にまでおよばんや嗟かの質物の重荷
 九 を身に負ふ者よ 汝を噬む者にはかに興らざらんや汝を惱ます者醒出ざらんや汝は之に掠めらるべし 汝

衆多の國民を掠めしに因てその諸の民の遺れる者なんぢを掠めん是人の血を流しに因るまた強暴を地上に行ひて邑とその内に住る一切の者とに及ぼせしに因るなり

災禍の手を免れんがために高き處に巢を構へんとして己の家に不義の利を取る者は禍なるかな 汝は事を圖りて己の家に恥辱を來らせ衆多の民を滅して自ら罪を取れり 石垣の石叫び建物の梁これに應へん

血をもて邑を建て惡をもて城を築く者は禍なるかな 諸の民は火のために勞し諸の國人は虚空事のために疲る是は萬軍のエホバより出る者ならずや エホバの榮光を認むるの知識地上に充て宛然海を水の掩ふが如くならん

人に酒を飲せ己の忿怒を酌和へて之を酔せ而して之が陰所を見んとする者は禍なるかな 汝は榮譽に飽すして羞辱に飽り汝もまた飲て汝の不割禮を露はせエホバの右の手の杯汝に巡り來るべし汝は汚なき物を吐て榮耀を掩はん 汝がレバノンに爲たる強暴と獸を懼れしめしその殲滅とは汝の上に報いきたるべし是人の血を流しに因りまた強暴を地上に行ひて邑とその内に住る一切の者とに及ぼしに因るなり

雕像はその作者これを刻みたりとて何の益あらんや又鑄像および偽師は語はぬ偶像なればその像の作者これを作りて頼むとも何の益あらんや 木にむかひて興ませと言ひ語はぬ石にむかひて起たまへと言ふ者は禍なるかな是めに教誨を爲んや視よ是は金銀を著せたる者にてその中には全く氣息なし 然りといへどもエホバはその聖殿に在ますぞかし全地その御前に黙すべし

第三章

シギヨノテに合せて歌へる預言者ハバククの祈禱 エホバよ我なんぢの宜ふ所を聞て懼る エホバよこの諸の年の中間に汝の運動を活潑かせたまへ 此諸の年の間にこれを顯現したまへ 怒る時にも憐憫を忘れ給はざれ 神テマンより來り聖者バラン山より臨みたまふセラ 其榮光諸天を蔽ひ 其讚美世界に徧ぬし その朗耀は日のごとく光線その手より出づ 彼處はその權能の隠るゝ所なり 疫病その前に先だち

六七

行き熱病その足下より出づ 彼立て地を震はせ觀まはして萬國を戰慄しめたまふ 永久の山は崩れ常盤の岡は陷る 彼の行ひたまふ道は永久なり 我觀るにクシヤンの天幕は銀難に罹りミデアンの地の帳幕は震ふ エホバよ汝は馬を驅り汝の拯救の車に乗たまふ 是河にむかひて怒りたまふなるか 河にむかひて汝の忿怒を發したまふなるか 海にむかひて汝の憤恨を洩し給ふなるか 汝の弓は全く囊を出で杖は言をもて言かためらる セラ 汝は地を裂て河となし給ふ 山々汝を見て震ひ 洪水溢れわたり 淵聲を出してその手を高く擧ぐ 汝の奔る矢の光のため汝の鎗の電光のごとき閃爍のために 日月その住處に立とゞまる 汝は憤ほりて地を行めぐり 怒りて國民を踏つけ給ふ 汝は汝の民を救んとて出きたり 汝の膏沃げる者を救はんとて臨みたまふ 汝は惡き者の家の頭を碎きその石礎を露はして頸におよぼし給へり 汝は彼の鎗をもてその將帥の首を刺とほし給ふ 彼らは我を散さんとて大風のごとくに進みきたる 彼らは貧き者を密に吞ほるほす事をもてその樂とす 汝は汝の馬をもて海を乗とほり大水の逆巻ところを涉りたまふ 我聞て腸を斷つ 我唇その聲によりて震ふ 腐朽わが骨に入り我下體わななく 其は我患難の日の來るを待ばなり 其時には即ち此民に攻寄る者ありて之に押過らん

二七

その時には無花果の樹は咲き葡萄の樹には果ならず橄欖の樹の産は空くなり 田圃は食糧を出さず 園には羊絶え小屋には牛なかるべし 然ながら我はエホバによりて樂み 我拯救の神によりて喜ばん 主エホバは我力にして我足を鹿の如くならしめ 我をして我高き處を歩ましめ給ふ 伶長これを我琴にあはすべし

西番雅書

第一章

一 アモンの子ユダの王ヨシヤの世にゼバニヤに臨めるエホバの言ゼバニヤはクシの子クシはグダ
リヤの子グダリヤはアマリヤの子アマリヤはヒゼキヤの子なり

二 エホバ言たまわれ地の面よりすべての物をはらひのぞかん 三 われ人と獸畜をほろぼし空の鳥海の魚

および鹽碱になる者と悪人とを滅さん我かならず地の面より人をほろぼし絶んエホバこれを言ふ 四 われユダと

エルサレムの一切の居民との上に手を伸ん我この處よりかの漏のこれるパールを絶ちケマリムの名を祭司と與に

絶ち 五 また屋上にて天の衆軍を拜む者エホバに誓を立て、拜みながらも亦おのれの王を指て誓ふことをする者

六 エホバに侍り離るる者エホバを求めず尋ねざる者を絶ん

七 汝主エホバの前に黙せよそはエホバの日近づきエホバすでに犠牲を備へその招くべき者をさだめ給ひたれ

八 エホバの犠牲の日に我もろもろの牧伯と王の子等および凡て異邦の衣服を著る者を罰すべし 九 その

日には我また凡て鬪をとびこえ強暴と誑譎をもて獲たる物をおのが主の家に満す者等を罰せん 一〇 エホバ曰たま

はくその日には魚の門より呼號の聲おこり下邑より喚く聲おこり山々より大なる敗壞おこらん 一一 マクアシの

民よ汝ら叫べ其は商賣する民悉くほろび銀を捨ふる者悉く絶たればなり 一二 その時はわれ燈をもちてエルサレ

ムの中を尋ねん而して津の上に居著て心の中にエホバは禍をもなさず災をもなさずといふものを罰すべし

一三 かれらの財寶は掠められ彼らの家は荒果んかれら家を造るともその中に住ことを得ず葡萄を植るともその

葡萄酒を飲ことを得ざるべし

一四 エホバの大なる日近づけり近づきて速かに來る焉よ是エホバの日なるぞ彼處に勇士のいたく叫ぶあり

一五 その日は忿怒の日患難および痛苦の日荒かつ亡ぶるの日黑暗またをぐらき日濃き雲および黒雲の日 箴を

一七 ふき鬪聲をつくり堅き城を攻め高き櫓を攻るの日なり 一七 われ人々に患難を蒙らせて首者のごとくに惑ひあるか

しめん彼らエホバにむかひて罪を犯したればなり彼らの血は流されて塵のごとくなり彼らの肉は捨られて糞土

のごとくなるべし 一八 かれらの銀も金もエホバの烈き怒の日はかれらを救ふことあたはず全地その嫉妬の火

に吞るべし即ちエホバ地の民をことごとく滅したまはん其事まことに速なるべし

一九 汝等羞恥を知ぬ民早く自ら内に省みよ 二〇 夫日は世變のごとく過ぎざる然ば詔言のいまだ行はれ

二一 ざる先エホバの烈き怒のいまだ汝等に臨まざる先エホバの忿怒の日のいまだ汝等にきたらざるさき

二二 自ら省みるべし 二三 すべてエホバの律法を行ふ斯地の 遷るものよ汝等エホバを求め公義を求め謙遜を求めよ

二三 然すれば汝等エホバの忿怒の日に或は匿さるることあらん

二四 夫ガザは棄られアシケロンは荒はてアシドドは白晝に逐はられエタロンは拔さるるべし 二五 海濱に住る

者およびケレテの國民は禍なるかなベリシテ人の國カナンよエホバの言なんちらを攻む我なんちを滅して住者

なきに至らしむべし 二六 海邊は必らず牧場となり牧者の洞および羊の牢そこに在ん 二七 此地はユダの家の殘餘れ

る者に歸せん彼ら其處にて草飼ひ暮に至ればアシケロンの家に臥んそは彼らの神エホバかれらを顧みその俘囚を

歸したまふべければなり

二八 我すでにモアブの嘲弄とアンモンの子孫の罵詈を聞けり彼らはわが民を嘲り自ら誇りて之が境界を侵せし

二九 是故に萬軍のエホバ、イスラエルの神言たまふ我は活く必ずモアブはソドムのごとくなりアンモンの

子孫はゴモラのごとくなりならん是は共に蕁麻の蔓延る處となり鹽坑の地となり長久に荒はつべし我民の遣れる

者かれらを掠めわが國民の餘されたる者かれらを獲ん 三〇 この事の彼らに臨むはその傲慢による即ち彼ら萬軍の

エホバの民を嘲りて自ら誇りたればなり 三一 エホバは彼等に對ひては長ろしくましました地の 諸の神を毀し滅し

たまふなり 諸の國の民おのその處より出てエホバを拜まん

二 エテオピア人よ汝等もまたわが剣にかゝりて殺さる 一三 エホバ北に手を伸てアツスリヤを滅したまはん亦
 ニネベを荒して荒野のごとき旱地となしたまはん 一四 而して畜の群もろもろの類の生物その中に伏し鷓鴣および
 刺鴉其柱の頂に住み囀る者の聲窓の内にきこえ荒落たる物崗の上に積り香柏の板の細工露蟻になるべし 一五 是
 邑は驕り傲ぶりと安泰に立をり惟我あり我の外には誰もなしと心の中に言つゝありし者なるが斯も荒はて畜獸
 の臥す處となる者かな此を過る者はみな嘶きて手をふるはん

第三章

一 此暴虐を行ふ悖りかつ汚れたる邑は禍なるかな 二 是は聲を聴いれず教誨を承ずエホバに依頼ま
 すおのれの神に近よらず 三 その中にをる牧伯等は吼る獅子のごとくその審士は明且まで何をも
 遺さざる夜求食する狼のごとしその預言者は傲りかつ詐る人なりその祭司は聖物を汚し律法を破ることをなせ
 り 四 その中にいますエホバは義くして不義を行ひたまはず朝な朝な己の公義を顯して缺ることなし然るに不義な
 る者は恥を知ず 五 我國々の民を滅したればその楯は凡て荒たり我これが楯を荒涼れしめれば往來する者なし
 その邑々は滅びて人なく住む者なきに至れり 六 われ前に言ひ汝たゞ我を畏れまた警教を受べし然らばその住家は
 我が凡て之につきて定めたる所の如くに滅されざるべしと然るに彼等は夙に起て己の一切の行狀を壊れり
 エホバ曰たまふ是ゆゑに汝らわが起て獲物をする日いたるまで我を俟て我もろもろの民を集へ諸の國を
 聚めてわが憤恨とわが烈き忿怒を盡くその上にそゝがんと思ひ定む全地はわが嫉妬の火に燒ほるばるべし
 一〇 その時われ國々の民に清き唇をあたへ彼らをして凡てエホバの名を呼しめ心をあはせて之につかへしめん
 二〇 わが散せし者等の女即ち我を拜む者エテオピアの河々の彼旁よりもきたりてわれに禮ものをささぐべし
 二二 その日には汝われに對てをかきたりし諸の行爲をもて羞を得ることなかるべしその時には我なんぢの中より
 高ぶり樂む者等を除けば汝かかねてわが聖山にて傲り高ぶることなければなり 二三 われ柔和にして貧き民をなん
 ぢの中にのこさん彼らはエホバの名に依頼むべし 二四 イスラエルの遺れる者は惡を行はず詭をいはずその口の

うちには詐偽の舌なし彼らは草食ひ臥やすまん之を懼れしむる者なかるべし

二五 シオンの女よ歡喜の聲を擧よイスラエルよ樂み呼はれエルサレムの女よ心のかぎり喜び樂め 二六 エホバ
 すでに汝の鞫を止め汝の敵を逐はらひたまへりイスラエルの王エホバ汝の中にいます汝はかかねて災禍にあふ
 ことあらじ 二七 その日にはエルサレムに向ひて言あらん懼るゝなかれシオンよ汝の手をしなへ垂るゝなかれと
 二八 なんぢの神エホバなんぢの中にいます彼は拯救を施す勇士なり彼なんぢのために喜び樂み愛の餘りに歡し
 汝のために喜びて呼はりたまふ 二九 われ節會のことにつきて憂ふるものを集めん彼等は汝より出し者なり恥辱
 かれらに蒙むること重負のごとし 三〇 視よその時われ汝を慮遇る者を盡く處置し足蹙たるものを救ひ逐はなた
 れたる者を集め彼らをして其羞辱を蒙りし一切の國にて稱譽を得させ名を得させし 三一 その時われ汝らを携へ
 その時われ汝らを集むべし我なんぢらの目の前において汝らの俘囚をかへし汝らをして地上の萬國に名を得させ
 稱譽を得させしエホバこれを言ふ
 三二 ゼバニヤ書をばり

ハガイ書

第一章

一 ダリヨス王の二年六月其月の一日にエホバの言預言者ハガイによりてシャルテルの子ユダの方伯
 ゼルバベルおよびヨザダクの子祭司の長ヨシユアに臨めりいはく 二 萬軍のエホバかくいひたまふ
 是民はエホバの殿を建べき時期未だ來らずといへり 三 エホバの言また預言者ハガイによりて臨めり曰く 此
 殿かく毀壞をれば汝等板をもてはれる家に居るべき時ならんや 四 されば今萬軍のエホバかく曰たまふ汝等おの
 れの行爲を省察べし 五 汝らは多く播ども収入るところは少く食へども飽ことを得ず飲ども満足ことを得ず衣れ

ども暖きことを得ず又工價を得るものはこれを破れたる袋に入る

萬軍のエホバかく曰たまふ汝等おのれの行爲を省察べし 山に上り木を携へ来て殿を建てよさすれば我

これを悦び又榮光を受んエホバこれを言ふ なんぢら多く得んと望みたりしに反て少かりき又汝等これを家に

携へ歸りし時我これを吹はらへり萬軍のエホバいひたまふは何故ぞやは我が殿毀壞をるに汝等おの己の室

に走り至ればなりこの故になんぢらの上の天は雨露を止め地はその産物を止めたり且われ地にも山にも穀物に

も新酒にも油にも地の生ずる物にも人にも家畜にも手のもろもろの工にもすべて毀壞を召きかうむらしめたり

シヤルテルの子ゼルバベルとヨザダクの子祭司の長ヨシユアおよびその残れるすべての民ともに其神エホ

バの聲と預言者ハガイの言に聴したがへり是は其神エホバかれを遣したまひしに因る民みなエホバの前に敬畏た

り 時にエホバの使者ハガイ、エホバの命により民に告て曰けるは我なんぢらと偕に在りとエホバ曰たまふと

エホバ、シヤルテルの子ユダの方伯ゼルバベルの心とヨザダクの子祭司の長ヨシユアの心およびその残れる

すべての民の心をふりおこしたまひければ彼等來りて其神萬軍のエホバの殿にて工作を爲り 此れダリヨス王

の二年六月二十四日なりき

第二章

七月其月の二十一日エホバの言預言者ハガイによりて臨めり曰く シヤルテルの子ユダの方伯

ゼルバベルとヨザダクの子祭司の長ヨシユアおよびその残れる一切の民に告よ なんぢら遣れる

者の中この殿の從前の榮光を見しものは誰ぞや今これを如何に見るやかの殿にくらぶれば是は汝らの目に何もな

きが如く見ゆるにあらすや エホバ曰たまふゼルバベル上自ら強くせよヨザダクの子祭司の長ヨシユア上自ら

強くせよエホバ言たまふこの地の民上自らつよくしてはたらけ我なんぢらとともに在り萬軍のエホバこれを言ふ

汝らがエジプトよりいでし時わがなんぢらに約せし言およびわが靈なほなんぢらの中に留れり懼るゝなかれ

萬軍のエホバかくいひたまふいま一度しばらくありてわれ天と地と海と陸とを震動はん 又われ萬國を震動

はんまた萬國の願ふところのもの來らん又われ榮光を以てこの殿に充滿さん萬軍のエホバこれを言ふ 銀も我

ものなり金もわが物なりと萬軍のエホバいひたまふ この殿の後の榮光は從前の榮光より大ならんと萬軍のエ

ホバいひたまふこの處においてわれ平康をあたへんと萬軍のエホバいひたまふ

ダリヨスの二年九月二十四日エホバのことは預言者ハガイによりて臨めり曰く 萬軍のエホバかく曰た

まふ律法につきて祭司に問ふて曰ふべし 人衣の裾にて聖肉を携へたらんにその裾もしパン或は菓あるひは酒

あるひは油あるひは他の食物に捫らばそれは聖ものとなるや祭司たち答へて曰けるはしからず ハガイまた

いひけるは屍體に捫りて汚れしもの若これらの物にさはらば其ものはけがるべきや祭司等こたへて曰けるは汚れ

ん ことゝに於てハガイ答へて曰けるはエホバ曰たまふ我前此民もかくの如くまた此國もかくの如し又其手の

一切のわざもかくのごとく彼等がその處に獻ぐるものもけがれたるものなり また今われ汝らに乞この日より

以前すなはちエホバの殿にて石の上に石の置れざりし時を憶念べし かの時には二十升もあるべき麥束につま

てわづかに十を得また酒樽につきて五十桶汲んとせしにたゞ二十を得たるのみ 汝が手をもて爲せる一切の事

に於てわれ不實穂と朽腐穂とを以てなんぢらを撃りされど汝ら我にかへらざりきエホバこれを言ふ なんぢ

らこの日より以前を憶念みよ即ち九月二十四日よりエホバの殿の基を置し日までをおもひ見よ 種子なほ倉に

あるや葡萄の樹無花果の樹石榴の樹橄欖の樹もいまだ實を結ばざりき此日よりのちわれ汝らを恵まん

此月の二十四日にエホバのことは再びハガイに臨めり曰く ユダの方伯ゼルバベルに告よわれ天地を

震動ん 列國の位を倒さんまた異邦の諸國の權勢を滅さん又車および之に駕る者を倒さん馬および之に騎る者

もおのおの其伴侶の劍によりてたふれん 萬軍のエホバ曰たまはくシヤルテルの子わが僕ゼルバベルよエホバ

いふその日に我なんぢを取りなんぢを印の如くにせんそはわれ汝をえらびたればなり萬軍のエホバこれを言ふ

ハガイ書をはり

第一章

ダリヨスの二年八月エホバの言イドの子ベレキヤの子なる預言者ゼカリヤに臨めり云く
エホバは汝らに歸れ萬軍のエホバは我も汝らに歸らん 萬軍のエホバは我も汝らに歸らん
汝らに歸れ萬軍のエホバは我も汝らに歸らん 汝らに歸れ萬軍のエホバは我も汝らに歸らん
呼はりて言ひ萬軍のエホバは我も汝らに歸らん 汝らに歸れ萬軍のエホバは我も汝らに歸らん
耳を我に傾けざりきエホバは我も汝らに歸らん 汝らに歸れ萬軍のエホバは我も汝らに歸らん
なる預言者等に我が命じたる吾言とわが法度とは汝らの父等に追及たるに非ずや然ゆゑに彼らかへりて言ひ萬軍
のエホバは我らの道に循ひ我らの行に循ひて我らに爲んと思ひたまひし事を我らに爲たまへり

ダリヨスの二年十一月すなはちセバテといふ月の二十四日にエホバの言イドの子ベレキヤの子なる預言者
ゼカリヤに臨めり云く 我夜觀しに一箇の人赤馬に乗て谷の裏なる烏枯樹の中に立ちその後赤馬 駝馬 白馬
をる 我わが主よ是等は何ぞやと問けるに我と語ふ天の使われにむかひて是等の何なるをわれ汝に示さんと
言ひ 烏枯樹の中に立る人答へて言けるは是等は地上を遍く歩かしめんとてエホバの遣したまひし者なりと
彼ら答へて烏枯樹の中に立るエホバの使に言けるは我ら地上を行めぐり觀しに全地は穢にして安し

エホバの使こたへて言ふ萬軍のエホバは我いつまでエルサレムとユダの邑々を恤みたまはざるか汝はこれ
を怒りたまひてすでに七十年になりぬと エホバは我と語ふ天の使に嘉言慰言をもて答へたまへり
かくて我と語ふ天の使に言けるは汝呼はりて言へ萬軍のエホバは我いつまでエルサレムとユダの邑々を恤みたまはざるか
しく心を熱して嫉妬おもひ 安居せる國々の民を太く怒る其は我すこしく怒りしに彼ら力を出して之に害を加
へたればなり エホバは我と語ふ天の使に言けるは我ら地上を行めぐり觀しに全地は穢にして安し

れ量繩エルサレムに張られん 汝また呼はりて言へ萬軍のエホバは我いつまでエルサレムとユダの邑々を恤みたまはざるか
ふたゞびシオンを慰め再びエルサレムを簡びたまふべしと

かくて我目を舉て觀しに四の角ありければ 我に語ふ天の使に是等は何なるやと問しに彼われに答へけ
るは是等はユダ、イスラエルおよびエルサレムを散したる角なりと 時にエホバ四箇の鍛冶を我に見し給へり
我是等は何を爲んとて來れるやと問しに斯こたへ給へり是等の角はユダを散して人にその頭を擧しめざりし
者なるが今この四箇の者來りて之を成しかのユダの地にむかひて角を擧て之を散せし諸國の角を擧たんとす

第二章

茲に我目を舉て觀しに一箇の人量繩を手に執居ければ 汝は何處へ往くやと問しにエルサレム
を置りてその廣と長の幾何なるを觀んとすと我に答ふ 時に我に語ふ天の使出行たりしが又一箇
の天の使出行たりて之に會ひ 之に言けるは走ゆきてこの少き人に告げ言へエルサレムはその中に人と畜と
饑なるによりて野原のごとくに廣く亘るべし エホバは我と語ふ天の使に言けるは我ら地上を行めぐり觀しに全地は穢にして安し

エホバは我と語ふ天の使に言けるは我ら地上を行めぐり觀しに全地は穢にして安し
エホバは我と語ふ天の使に言けるは我ら地上を行めぐり觀しに全地は穢にして安し
エホバは我と語ふ天の使に言けるは我ら地上を行めぐり觀しに全地は穢にして安し

エホバは我と語ふ天の使に言けるは我ら地上を行めぐり觀しに全地は穢にして安し
エホバは我と語ふ天の使に言けるは我ら地上を行めぐり觀しに全地は穢にして安し
エホバは我と語ふ天の使に言けるは我ら地上を行めぐり觀しに全地は穢にして安し

第三章

一 彼祭司の長ヨシユアがエホバの使の前に立ちサタンのその右に立てこれに敵しをるを我に見す
二 エホバ、サタンに言たまひけるはサタンよエホバ汝をせむべし即ちエルサレムを簡びしエホバ汝
をいましむ是は火の中より取いだしたる燃柴ならずやと
三 ヨシユア汚なき衣服を衣て使の前に立をりしが
エホバ己の前に立る者等に告て汚なき衣服を之に脱せよと宣ひまたヨシユアに向ひて觀よ我なんぢの罪を汝の
身より取のぞけり汝に美服を衣すべしと宣へり
四 我また深き冠冕をその首に冠らせよと言り是において深き
冠冕をその首に冠らせ衣服をこれに衣すエホバの使は立をる

五 エホバの使證してヨシユアに言ふ
六 萬軍のエホバかく言たまふ汝もし我道を歩みわが職守を守らば我
家を司どり我庭を守ることを得ん我また此に立る者等の中に往來する路を汝に與ふべし
七 祭司の長ヨシユアよ
請ふ汝と汝の前に坐する汝の同僚とともに聽べし彼らは即ち前表となるべき人なり我かならず我僕たる枝を來ら
すべし
八 ヨシユアの前に我が立つところの石を視よ此一箇の石の上に七箇の目あり我自らその彫刻をなす萬軍
のエホバこれを言ふなり我この地の罪を一日の内に除くべし
九 萬軍のエホバ言たまふ其日には汝等のおの互
に相招きて葡萄の樹の下無花果の樹の下にあらん

第四章

一 我に語へる天の使また來りて我を呼醒せり我は睡れる人の呼醒されしごとくなりき
二 彼我にむ
かひて汝何を見るやと言ければ我いへり我觀に惣金の燈臺一箇ありてその頂に油を容る器ありまた
燈臺の上に七箇の燈臺ありその燈臺は燈臺の頂にありて之に各七本づつの管あり
三 また燈臺の側に
橄欖の樹二本ありて一は油を容る器の右にあり一はその左にあり
四 我答へて我と語ふ天の使に問言けるは我主
よ是等は何ぞやと
五 我と語ふ天の使我に答へて汝是等の何なるを知らるかと言しにより我主よ知すとわれ言り
六 彼また答へて我に言けるはゼルバベルにエホバの告たまふ言は是のことし萬軍のエホバ宣ふは是は權勢に由らず
能力に由らず我靈に由るなり
七 ゼルバベルの前にあたる大山よ汝は何者ぞ汝は平地とならん彼は恩恵あれ

八 之に恩恵あれと呼はる聲をたて、頭石を曳いださん
九 エホバの言われに臨めり云く
一〇 ゼルバベルの手この室
の石礎を置たり彼の手これを成終ん汝しらん萬軍のエホバ我を汝等に遣したまひしと
一一 誰か小き事の日を觀視
むる者ぞ夫の七の者は遍く全地に往來するエホバの目なり準繩のゼルバベルの手にあるを見て喜ばん
一二 我また彼に問て燈臺の右左にある此二本の橄欖の樹は何なるやと言ひ
一三 重ねてまた彼に問て此二本の金
の管によりて金の油をその中より料き出す二枝の橄欖は何ぞやと言しに
一四 彼われに答へて汝
是等の何なる
を知らるかと言ければ我主よ知すと言けるに
一五 彼言らく是等は油の二箇の子にして
一六 全地の主の前に立つ
者なり

第五章

一 我また目を舉て觀しに卷物の飛あり
二 彼われに汝何を見るやと言ければ我言ふ我卷物の飛ぶを
見る其長は二十キユビトその寬は十キユビト
三 彼またわれに言けるは是は全地の表面を往めぐる
呪詛の言なり凡て竊む者は卷物のこの面に照して除かれ凡て誓ふ者は卷物の彼の面に照して除かるべし
四 萬軍
のエホバのたまふ我これを出せり是は竊盜者の家に入りまた我名を指て偽り誓ふ者の家に入てその家の中に宿り
その木と石とを並せて盡く之を焼べしと

五 我に語へる天の使進み來りて我に言けるは請ふ目を舉てこの出きたれる物の何なるを見よ
六 これは何な
るやと我言ければ彼言ふ此出來れる者はエバ升なり又言ふ全地において彼等の形狀は是のことしと
七 かくて鉛
の圓き蓋を取あぐれば一人の婦人エバ升の中に坐し居る
八 彼是は罪惡なりと言てその婦人をエバ升の中に投げ
れ鉛の鏢をその升の口に投かぶらせたり
九 我また目を舉て觀しに婦人二人出きたれり之に鶴の翼のごとき翼あ
りてその翼風を含む彼等そのエバ升を天地の間に持擧ぐ
一〇 我すなはち我に語ふ天の使にむかひて彼等エバ升を
何處へ携へゆくなるやと言けるに
一一 彼我に言ふシナルの地にて之がために家を建んとてなり是は彼處に置られ
てその臺の上に立ん

第六章

我また目を擧て觀しに四輛の車二の山の間に出来たりその山は鋼の山なり 第一の車には赤馬を著け第二の車には黒馬を着け 第三の車には白馬を着け第四の車には白點なる強馬を著く 我すなはち我に語ふ天の使に問て我主よ是等は何なるやと言けるに 天の使こたへて我に言ふ是は四の天風にして全地の主の前より罷り出たる者なり 黒馬は北の地をさして進み行き白馬その後に従ふ又白點馬は南の地をさして進みゆき 強馬は進み出て地を徧く行めぐらんとす彼なんちら行き地を徧くめぐれと言たまひければ則ち地を行めぐれり 彼われを呼て我に告て言ふこの北の地に往る者等は北の地にて我靈を安んず

エホバの言われに臨めり曰く 汝かの囚虜人の中の者ヘルダイ、トビヤおよびエダヤより取ことをせよ即ちその日に汝かれらがバビロンより歸りて宿りをるゼバニヤの子ヨシャの家に到り 金銀を取て冠冕を造りヨザダクの子なる祭司の長ヨシユアの首にこれを冠らせ 彼に語りて言べし萬軍のエホバ斯言たまふ視よ人のりその名を杖といふ彼おのれの處より生いでてエホバの宮を建ん 即ち彼者エホバの宮を建て尊榮を帯びその位に坐して政事を施しその位にありて祭司とならん此二の者の間に平和の計議あるべし 惜またその冠冕はヘレム、トビヤ、エダヤおよびゼバニヤの子ヘンの記念のために之をエホバの殿に納むべし 遠き處の者等來りてエホバの殿を建ん而して汝らは萬軍のエホバの我を遣したまひしなるを知いたらん汝らもし汝らの神エホバの聲に聽したがはゞ是のごとくなるべし

第七章

ダリヨス王の四年の九月すなはちキスリウといふ月の四日にエホバの言ゼカリヤに臨めり 二ベタルかの時シヤレゼル、レゲンメレクおよびその從者を遣してエホバを和めさせ かつ萬軍のエホバの室にをる祭司に問しめ且預言者に問しめて言けらく我今まで年久しく爲きたりしごとく尙五月をもて哭きかつ齋戒すべきやと ことにおいて萬軍のエホバの言われに臨めり云く 國の諸民および祭司に告て言へ汝らは七十年のあひだ五月と七月とに斷食しかつ哀哭せしがその斷食せし時果して我にむかひて斷食せしや 汝

ら食ひかつ飲は全く己のために食ひ己のために飲ならすや 在昔エルサレムおよび周圍の邑々人の住みありて平安なりし時南の地および平野にも人の住みをりし時に已往の預言者によりてエホバの宣ひたりし言を汝ら知ざるや

エホバの言ゼカリヤに臨めり云く 萬軍のエホバかく宣へり云く正義き審判を行ひ互に相愛しみ相憐め寡婦 孤兒 旅客および貧者を虐ぐるなかれ人を害せんといふ心に圖る勿れと 然るに彼等は背て耳を傾けず脊を向け耳を鈍くして聽す 且その心を金剛石のごとし萬軍のエホバがその御靈をもて已往の預言者によて傳へたまひし律法と言詞に聽したがはざりき是をもて大なる怒萬軍のエホバより出て臨めり 彼かく呼はりたれども彼等聽ざりき其ごとく彼ら呼はるとも我聽じ萬軍のエホバこれを言ふ 我かれらをその識ざる諸の國に吹散すべし其後にてこの地は荒て往來する者なきに至らん彼等かく美しき國を荒地となす

第八章

萬軍のエホバの言われに臨めり曰く 萬軍のエホバかく言たまふ我シオンのために甚だしく心を熱して妬く思ひ大なる忿怒を起して之がために妬く思ふ 二 エホバかく言たまふ今我シオンに歸れり我エルサレムの中に住んエルサレムは誠實ある邑と稱へられ萬軍のエホバの山は聖山と稱へらるべし 萬軍のエホバかく言たまふエルサレムの街衢には再び老たる男老たる女坐せん皆年高くして各々杖を手持べし 又またその邑の街衢には男の兒女の兒滿て街衢に遊び戯れん 萬軍のエホバかく言たまふこの事その日には此民の遺餘者の目に奇といふとも我目に何の奇きこと有んや萬軍のエホバこれを言ふ 萬軍のエホバかく言たまふ視よ我わが民を日の出る國より日の入る國より救ひ出し かれらを携へ來りてエルサレムの中に住しめん彼ら是我民となり我は彼らの神となりて共に誠實と正義に居ん

萬軍のエホバかく言たまふ汝ら萬軍のエホバの室なる殿を建んとて其基礎を置たる日に起りし預言者等の口の言詞を今日聞く者よ汝らの腕を強くせよ 此日の先には人も工の價を得ず獸畜も工の價を得ず出者も入者も

二 仇の故をもて安然ならざりき 即ちわれ人々をして互に相攻しめたり 然れども今は我此民の遺餘者に對する
 三 こと曩の日の如くならずと萬軍のエホバ言たまふ 即ち平安の種子あるべし 葡萄の樹は果を結び地は産物を出
 四 し天は露を與へん 我この民の遺餘者にこれを盡く獲さすべし ユダの家およびイスラエルの家よ 汝らが國々
 五 の中に呪詛となりしごとく此度は我なんぢらを救ふて祝言とならしめん 懼るゝ勿れ 汝らの腕を強くせよ
 六 萬軍のエホバかく言たまふ 昔汝らの先祖我を怒らせし時に我これに災禍を降さんと思ひて之を悔ざりき
 七 萬軍のエホバこれを言ふ 是のごとく我また今日エルサレムとユダの家に福祉を降さんと思ふ 汝ら懼るゝ勿れ
 八 汝らの爲べき事は是なり 汝ら各々がひに眞實を言べし 又汝等の門にて審判する時は眞實を執て平和の審判
 九 を爲べし 汝等すべて人の災害を心に圖る勿れ 偽の誓を好む勿れ 是等はみな我が惡む者なりとエホバ言た
 十 まふ

一 萬軍のエホバの言われに臨めり云く 萬軍のエホバかく言たまふ 四月の斷食 五月の斷食 七月の斷食 十月
 二 の斷食かへつてユダの家の宴樂となり欣喜となり佳節となるべし 惟なんぢら眞實と平和を愛すべし 萬軍のエ
 三 ホバかく言たまふ 國々の民および衆多の邑の居民來り就ん 即ちこの邑の居民往てかの邑の者に向ひ我儕すみ
 四 やかに往てエホバを和め 萬軍のエホバを求めんと 言んに我も往べしと答へん 衆多の民強き國民エルサレムに
 五 來りて 萬軍のエホバを求めエホバを和めん 萬軍のエホバかく言たまふ 其日には 諸の國語の民十人にてユダ
 六 ヤ人一箇の裾を拉へん 即ち之を拉へて言ん 我ら汝らと與に往べし 其は我ら神の汝らと借にいますを聞たればなり
 七

第九章

一 エホバの言詞の重負ハデラクの地に臨むダマスコはその止る所なり エホバ世の人を呑みイスラエ
 二 ルの一切の支派を呑みたまへばなり 之に果するハマテも然り ツロ、シドンも亦はなはだ伶俐け
 三 れば同じく然るべし ツロは自己のために城廓を構へ銀を塵のごとくに積み金を街衢の土のごとくに積み
 四 り 視よ 主これを攻取り海にて之が力を打ほるばしたまふべし 是は火にて焚うせん アシケロンこれを見て懼れ

七六 ガザもこれを見て太く慄ふ エクロンもその望む所の者辱しめらるゝに因て亦然り ガザには王絶え アシケロンには
 一 住者なきに至らん * アシドドにはまた雜種の民すまん 我ベリシテ人が誇る所の者を絶べし 我これが口より
 二 血を取除き之が齒の間より憎むべき物を取除かん 是も遠りて我儕の神に歸し ユダの牧伯のごとくに成べし またエ
 三 クロンはエブス人のごとくになるべし

八 我わが家のために陣を張て敵軍に當り之をして往來すること無らしめん 慮過者かさねて通ること無るべし
 九 我いま我目をもて親ら見ればなり
 一〇 シオンの女よ 大に喜べ エルサレムの女よ 呼はれ 視よ 汝の王 汝に來る彼は正義して拯救を賜り 柔和にして
 一 驢馬に乗る 即ち牝驢馬の子なる駒に乗るなり 我エフライムより車を絶ち エルサレムより馬を絶ち 戰爭弓も絶
 二 るべし 彼國々の民に平和を諭さん 其政治は海より海に及び 河より地の極におよぶべし

二二 汝についてはまた汝の契約の血のために 我かの水なき坑より 汝の被俘人を放ち出さん 望を懐く被俘人
 二一 よ 汝等城に歸れ 我今日もなほ告て言ふ 我かならず倍して 汝等に責ふべし 我ユダを張て弓となし エフライムを
 二〇 矢となして之につがへん シオンよ 我汝の人々を振起して ギリシャの人々を攻しめ 汝をして大丈夫の劍のごとくな
 一 らしむべし エホバこれが上に顯れて その箭を電光のごとくに射いだしたまはん 主エホバ 喇叭を吹ならし 南の
 二 暴風に乗て 出來まさん 萬軍のエホバ 彼らを護りたまはん 彼等は食ふことを爲し 投石器の石を踏つけん 彼等は
 三 飲ことを爲し 酒に酔ふごとくに聲を擧ん 其これに盈さるゝことは 血を盛る 鉢のごとく 祭壇の隅のごとくなるべし
 四 彼らの神 エホバ 當日に 彼らを救ひ その民を羊のごとくに救ひたまはん 彼等は冠冕の玉のごとくに なりて 其地
 五 に輝くべし 其の福祉は如何計ぞや 其美麗は如何計ぞや 穀物は童男を長ぜしめ 新酒は童女を長ぜしむ

第一〇章

一 汝ら春の雨の時に 雨をエホバに乞へ 埃ホバ 電光を造り 大雨を人々に賜ひ 田野において 草薺を各々
 二 に賜ふべし 夫テラビムは空虚事を言ひ 筮師はその見る所眞實ならずして 虚偽の夢を語る其

慰むる所は徒然なり是をもて民は羊のごとくに迷ひ牧者なきに因て憫む 我牧者にむかひて怒を發す我牡山羊を罰せん萬軍のエホバての群なるユダの家を顧み之をしてその美しき軍馬のごとくならしめたまふ 隅石彼より出で釘かれより出で軍弓かれより出で幸たる者みな齊く彼より出ん 彼等戦ふ時は勇士のごとくにして街衛の泥の中に敵を蹂躪らんエホバかれらとともに在せば彼ら戦はん馬に騎れる者等すなはち腕を抱くべし 我ユダの家を強くしヨセフの家を救はん我かれらを恤むが故に彼らをして歸り住しめん彼らは我に棄られし事なきが如くなるべし我は彼らの神エホバなり我かれらに聴べし エフライム人は勇士に等しくして酒を飲たること心に歡ばん其子等を見て喜びエホバに因て心に樂まん

我かれらに向ひて嘯きて之を集めん其は我これを贖ひたればなり彼等は昔殖増たるとくに殖増ん 我かれらを國々の民の中に播ん彼等は遠き國において我をおぼえん彼らは其子等とともに生ながらへて歸り來るべし 我かれらをエジプトの國より携へかへりアッスリヤより彼等を集めギレアデの地およびレバノンに彼らを携へゆかんその居處も無きほどなるべし 彼艱難の海を通り海の浪を擊破りたまふナイルの淵は盡く濁るアッスリヤの傲慢は卑くせられエジプトの杖は移り去ん 我彼らをしてエホバに由て強くならしめん彼等はエホバの名をもて歩まんエホバこれを言たまふ

第一章

レバノンよ汝の門を啓き火をして汝の香柏を焚しめよ 松よ叫べ香柏は倒れ威嚴樹はそこなはれたりバシヤンの櫟よ叫べ高らかなる林は倒れたり 牧者の叫ぶ聲あり其榮そこなはれたればなり 猛き獅子の吼る聲ありヨルダンの叢そこなはれたればなり

我神エホバかく言たまふ宰らるべき羊を牧へ 之を買ふ者は之を宰るとも罪なし之を賣る者は言ふ我富を得ればエホバを祝すべしと其牧者もこれを惜まざるなり エホバ言たまふ我かさねて地の居民を惜まじ視よ我人を各々その鄰人の手に付しその王の手に付さん彼ら地を荒すべし我これを彼らの手より救ひ出さじ 我すな

はち其宰らるべき羊を牧り 是は最も憫然なる羊なり 我みづから二本の杖を取り一を恩と名け一を結と名けてその羊を牧り 我一月に牧者三人を絶り我心に彼らを厭ひしが彼等も心に我を惡めり 我いへり我は汝らを飼はじ死者は死に絶るゝ者は絶れ遺る者は互にその肉を食ひあふべし 我恩といふ杖を取て之を折れり是諸の民に立し我契約を廢せんとしてなりき 是はその日に廢せられたり是に於いてかの我に聴したがひし憫然なる羊は之をエホバの言なりしと知り 我彼らに向ひて汝等もし善と視なば我價を我に授けよ若しからずば止めよと言ければ彼等すなはち銀三十を權りて我價とせり エホバ我に言たまひけるは彼等に我が估價せられしその善價を陶人に投あたへよと我すなはち銀三十を取てエホバの室に投いれて陶人に歸せしむ 我また結といふ杖を折れり是ユダとイスラエルの間の和好を絶んとてなりき

第二章

イスラエルにかゝはるエホバの言詞の重負

エホバ即ち天を舒べ地の基を置る人のうちの靈魂を造る者言たまふ 視よ我エルサレムをしてその周圍の國民を踞踏はする杯とならしむべしエルサレムの攻圍まるゝ時はユダにも及ばん 其日には我エルサレムをして諸の國民に對ひて重石とならしむべし之を持擧る者は大傷を受ん地上の諸國みな集りて之に攻寄べし エホバ言たまふ當日には我一切の馬を撃て駭かせその騎手を撃て狂はせん而して我ユダの家の上に我目を開き諸の國民の馬を撃て首になすべし ユダの牧伯等その心の中に謂んエルサレムの居民はその神萬軍のエホバに由て我力となるべしと 當日には我ユダの牧伯等をして薪の下にある火盤のごとく麥束の下にある炬火のごとくならしむべし彼等は右左にむかひその周圍の國民を盡く焚んエルサレム人はなほエルサレム

にてその本の處に居ることを得べし エホバまづユダの幕屋を救ひたまはん是ダビデの家の榮およびエルサレムの居民の榮のユダに勝ること無らんためなり 當日エホバ、エルサレムの居民を護りたまはん彼らの中の弱き者もその日にはダビデのごとくなるべしまたダビデの家は神のごとく彼らに先だつエホバの使のごとくなるべし その日には我エルサレムに攻きたる國民をことごとく滅すことを務むべし

我ダビデの家およびエルサレムの居民に恩恵と祈禱の靈をそゝがん彼等はその刺たりし我を仰ぎ觀獨子のために哭くがごとく之がために哭き長子のために悲しむがごとく之がために痛く悲しまん その日にはエルサレムに大なる哀哭あらん是はメギドン谷なるハダゲリンモンに在し哀哭のごとくなるべし 國中の族おのの別れ居て哀哭べし即ちダビデの家の族別れ居て哀哭きその妻等別れ居て哀哭きその妻等別れ居て哀哭かん レビの家の族別れ居て哀哭きその妻等別れ居て哀哭きシメイの族別れ居て哀哭きその妻等わかれ居て哀哭かん その他の族も凡て然りすなはち族おのおの別れ居て哀哭きその妻等別れ居て哀哭くべし

第三章

その日罪と汚穢を清むる一の泉ダビデの家とエルサレムの居民のために開くべし 萬軍のエホバ言たまふ其日には我地より偶像の名を絶のぞき重て人に記憶らるゝこと無らしむべし我また預言者および汚穢の靈を地より去しむべし 人もしなほ預言することあらば其生の父母これに言ん汝は生べからず汝はエホバの名をもて虚偽を語るなりと而してその生の父母これが預言しをを刺ん その日には預言者ども預言するに方りてその異象を羞ん重て人を欺かんために毛衣を纏はじ 彼言ん我は預言者にあらず地を耕へず者なり即ち我は若き時より人に買れたりと 若これに向ひて然らば汝の兩手の間の傷は何ぞやと言あらば是は我が愛する者の家にて受たる傷なりと答へん

萬軍のエホバ言たまふ劍よ起て我牧者わが伴侶なる人を攻よ牧者を撃て然らばその羊散らん我また我手を

小き者等の上に伸べし エホバ言たまふ全地の人二分は絶れて死に三分の一はその中に遺らん 我その三分の一を携へて火にいれ銀を熬分ることと之を熬分け金を試むることとに之を試むべし彼らわが名を呼ん我これにこたへん我これは我民なりと言ん彼等またエホバは我神なりと言ん

第四章

視よエホバの日來る汝の貨財奪はれて汝の中にて分たるべし 我萬國の民を集めてエルサレムは邑より絶れし その時エホバ出きたりて其等の國人を攻撃たまはん在昔その軍陣の日に戦ひたまひしごとくなるべし 其日にはエルサレムの前に當りて東にあるところの橄欖山の上に彼の足立たん而して橄欖山その真中より西東に裂て甚だ大なる谷を成しその山の半は北に半は南に移るべし 汝ら我山の谷に迷いらん其山の谷はアザルにまで及ぶべし汝らはユダの王ウジヤの世に地震を避て逃しごとくに逃ん我神エホバ來りたまはん 諸の聖者なんちともなるべし その日には光明なかるべく輝く者消うすべし 茲に只一日あるべしエホバこれを知らまふ是は晝にもあらず夜にもあらず夕暮の頃に明くなるべし その日に活る水エルサレムより出でその半は東の海にその半は西の海に流れん夏も冬も然あるべし

エホバ全地の王となりたまはん其日には只エホバのみ只その御名のみにならん 全地はアラバのごとくなりてゲバよりエルサレムの南のリンモンまでの間のごとくなるべし而してエルサレムは高くなりてその故の處に立ちベニヤミンの門より第一の門の處に及び隅の門にいたりハナニエルの成樓より王の酒樽倉までに渉るべし

その中には人住ん重て呪詛あらじエルサレムは安然に立べし エルサレムを攻撃し 諸の民にエホバ災禍を降してこれを撃なやましたまふこと是のごとくなるべし即ち彼らその足にて立る中に肉腐れ目その孔の中にて腐れ舌その口の中にて腐れん その日にはエホバかれらをして大に狼狽しめたまはん彼らは各々人の手を執へん此手と彼手撃あふべし ユダもまたエルサレムに於て戦ふ

べしその四周の一切の國人の財寶金銀衣服など甚だ多く聚められん 又馬騾駱駝驢馬およびその諸畜の一切の家畜の蒙る災禍もこの災禍のごとくなるべし
エルサレムに攻きたりし諸の國人の遺れる者はみな歳々に上りきてその王なる萬軍のエホバを拜み結茅の節を守るにいたるべし 地上の諸族の中その王なる萬軍のエホバを拜みにエルサレムに上らざる者の上には凡て雨ふらざるべし 例はエジプトの族もし上り來らざる時はその上に雨ふらじエホバその結茅の節を守りに上らざる一切の國人を撃なやます災禍を之に降したまふべし エジプトの罪凡て結茅の節を守りに上らざる國人の罪是のごとくなるべし その日には馬の鈴にまでエホバに聖とするさん又エホバの室の鍋は壇の前の鈴と等しかるべし エルサレムおよびユダの鍋は都て萬軍のエホバの聖物となるべし凡そ犠牲を獻ぐる者は來りてこれを取り其中にて祭肉を煮ん其日には萬軍のエホバの室に最早カナン人あらざるべし
ゼカリヤ書 をはり

馬拉基書

第一章

これマラキに托てイスラエルに臨めるエホバの言の重負なり
エホバ曰たまふ我汝らを愛したり然るに汝ら云ふ汝いかに我情を愛せしやとエホバいふエサウはヤコブの兄に非ずやされど我はヤコブを愛し エサウを惡めり且つわれ彼の山を荒し其嗣業を山犬にあたへたり エドムは我情ほろぼされたれども再び荒たる所を建んといふによりて萬軍のエホバかく曰たまふ彼等は建んされど我これを倒さん人は彼等を惡境とよび又エホバの恒に怒りたまふ人民と稱へん 汝らこれを目に

見て云んエホバはイスラエルの地に大なりと

子は其父を敬ひ僕はその主を敬ふされば我もし父たらば我を敬ふこと安にあるや我もし主たらば我をおそるゝこと安にあるやなんぢら我が名を藐視る祭司よと萬軍のエホバいひたまふ然るに汝曹はいふ我情何に汝の名を藐視りしやと 汝ら汚れたるパンをわが壇の上に獻げしかして言ふ我情何に爾を汚せしやと汝曹エホバの臺は卑しきなりと云しがゆゑなり 汝ら盲目なる者を犠牲に獻ぐるは惡に非ずや又跛足なるものと病者を獻ぐるは惡に非ずや今これを汝の方伯に獻げよされば彼なんぢを悦ぶや汝を受納るや萬軍のエホバこれをいふ 請ふ汝ら神に我らをあはれみ給はんことをとめよこれらは凡て汝らの手になれり彼なんぢらを納んや萬軍のエホバこれを言ふ 汝らがわが壇の上にいたづらに火をたくこと無らんために汝らの中一人扉を閉づる者あらまほしわれ汝らを悦ばず又なんぢらの手より獻物を受じと萬軍のエホバいひ給ふ 日の出る處より没る處までの列國の中に我名は大なん又何處にても香と潔き獻物を我名に獻げんそはわが名列國の中に大なるべければなりと萬軍のエホバいひ給ふ しかるになんぢらこれを變したりそは爾曹はエホバの臺は汚れたりまた其果すなはちその食物は卑しと云ばなり なんぢらは又如何に煩勞しきことにあらずやといひ且これを藐視たり萬軍のエホバこれをいふ又なんぢらは奪ひし物跛足たる者病る者を携へ來れり汝らかく獻物を携へ來ればわれ之を汝らの手より受けけんやエホバこれをいひ給へり 群の中に牡あるに誓を立て、疵あるものをエホバに獻ぐる詐僞者は詛はるべしそは我は大なる王また我名は列國に畏れらるべきなればなり萬軍のエホバこれをいふ
第二章 祭司等よ今この命令なんぢらにあたへらる 萬軍のエホバいひたまふ汝等もし聽きたがはずわれすでに此等を詛へり汝らこれを心にとめざりしに因てなり 視よ我なんぢらのために種をいましめんまた糞すなはち汝らの犠牲の糞を汝らの面の上に撒さん汝らこれとともに携へさられん わが此命令をなんぢらに

下し與ふるは我契約をしてレビに保たしめんためなるを汝ら知るべし萬軍のエホバこれをいふ Ⅲ わが彼と結びし契約は生命と平安とにあり我がこれを彼に與へしは彼にわれを畏れしめんが爲なり彼われを懼れわが名の前にをのりけり Ⅳ 眞理の法彼の口に在て不義その口唇にあらす彼平安と公義をとりて我とともにあゆみ又多の人を不義より立歸らせたりき Ⅴ 夫れ祭司の口唇に知識を持つべく又人彼の口より法を諮詢べしそは祭司は萬軍のエホバの使者なればなり Ⅵ しかるに汝らは道を離れ衆多の人を法に躓かせレビの契約を壞りたり萬軍のエホバこれをいふ Ⅶ 汝らは我道を守らず法をおこなふに當りて人に偏りし故にわれも汝らを一切の民の前に輕められまた賤められしむ

Ⅷ 我儕の父は皆同一なるにあらすやわれらを造りし神は同一なるにあらすや我儕先祖等の契約を破りて各々おのれの兄弟にいつはりを行ふは何ぞ Ⅸ ユダは誓約にそむけりイスラエル及びエルサレムの中には憎むべき事行はるすなはちユダはエホバの愛したまふ聖所を毀して他神の女をめとれり Ⅹ エホバこれをおこなふ人をば主なるものを事ふる者をもヤコブの幕屋よりのぞきたまはん萬軍のエホバに献物をさしぐるものにもまた然り Ⅺ つぎに又なんぢらはこれをなせり即ち涙と泣と歎とをもてエホバの壇をおほはしめたり故に彼もはや献物を顧みずまたこれを汝らの手より悦び納たまはざるなり Ⅻ 汝らはなほ何故ぞやと言ふそは是はエホバ汝となんちの若き時の妻の間にいりて證をなしたまへばなり彼はなんぢの伴侶汝が契約をなせし妻なるに汝誓約に背きてこれを棄つ Ⅼ エホバは只一を造りたまひしにあらすやされども彼にはなほ靈の餘ありき何故にひとつのみなりしや是は神を敬虔の裔を得んが爲なりき故になんぢら心に謹みその若き時の妻を誓約にそむきて棄るなかれ Ⅽ イスラエルの神エホバいひたまふわれは離縁を惡みまた虚遇をもて其衣を蔽ふ人を惡む故に汝ら誓約にそむきて妻を待遇はざるやう心につしむべし萬軍のエホバこれをいふ Ⅾ なんぢらは言をもてエホバを煩勞はせりされど汝ら言ふ何にわづらはせしやと如何となればなんぢら凡て

惡をなすものはエホバの目に善と見えかつ彼に悦ばると言ひまた審判の神は安にあるやといへばなり

第三章

Ⅰ 視よ我わが使者を遣さんかれ我面の前に道を備へんまた汝らが求むるところの主すなはち汝らの悦樂ぶ契約の使者忽然その殿に來らん視よ彼來らんと萬軍のエホバ云たまふ Ⅱ されど其來る日に

は誰か堪えんやその顯著る時には誰か立えんや彼は金をふきわくるものの火の如く布晒の灰汁のごとくならんかれは銀をふきわけてこれを潔むる者のごとく坐せん彼はレビの裔を潔め金銀の如くかれらをきよめん而して彼等は義をもて献物をエホバにさしげん Ⅳ その時ユダとエルサレムの献物はむかしの日のごとく又先の年のごとくエホバに悦ばれん Ⅴ われ汝らにちかづきて審判をなし巫術者にむかひ姦淫を行ふ者にむかひ偽の誓をなせる者にむかひ Ⅵ 傭人の賃金をかすめ寡婦と孤子をしへたけ異邦人を推枉げ我を畏れざるものどもにむかひて速に證をなさんと萬軍のエホバ云たまふ Ⅶ それわれエホバは易らざる者なり故にヤコブの子等よ汝らは亡されずなんぢら其先祖等の日よりこのかたわが律例をはなれてこれを守らざりき我にかへれわれ亦なんぢらに歸らん萬軍のエホバこれと言ふ然るに汝らはわれら何においてかへるべきやと言ひ Ⅸ ひと神の物をぬすむことをせんやされど汝らはわが物を盜めり汝らは又何において汝の物をぬすみしやといへり十分の一および献物に於てなり Ⅹ 汝らは呪詛をもて詛はるまたなんぢら一切の國人はわが物をぬすめり Ⅺ わが殿に食物あらしめんために汝ら什一をすべて我倉にたづさへきたれ而して是をもて我を試みわが天の窓をひらきて容べきところなきまでに恩澤を汝らにそくや否やを見るべし萬軍のエホバこれを言ふ Ⅻ 我また嚼食ふ者をなんぢらの爲に抑へてなんぢらの地の産物をやぶらざらしめん又なんぢらの葡萄の樹をして時のいたらざる前にその實を園におとさざらしめん萬軍のエホバこれをいふ Ⅼ 又萬國の人なんぢらを幸福なる者ととなへんそは汝ら樂しき地となるべければなり萬軍のエホバこれをいふ

Ⅽ エホバ云たまふ汝らは言詞をばけしくして我に逆らへりしかるも汝らは我儕なんぢにさからひて何を

二〇 いひしやといへり 汝らは言らく神に服することは徒然なりわれらその命令をまもりかつ萬軍のエホバの前に
 二一 悲みて歩みたりとて何の益あらんや 今われらは驕傲ものを幸福なりと稱ふまた悪をおこなふものも盛になり
 二二 神を試むるものすらも救はると

二六 その時エホバをおそるゝ者互に相かたりエホバ耳をかたむけてこれを聴たまへりまたエホバを畏るゝ者
 二七 およびその名を記憶る者のためにエホバの前に記念の書をかきしるせり 萬軍のエホバいひたまふ我わが設く
 二八 る日にかれらをもて我責となすべしまた人の己につかふる子をあはれむがごとく我彼等をあはれまん 二九 その時
 三〇 汝らは更にまた義者と悪きものと神に服するものと事へざる者との區別をしらん

第四章

一 萬軍のエホバいひたまふ視よ爐のごとくに焼る日來らんすべて驕傲者と悪をおこなふ者は藁の
 二 ごとくにならん其きたらんとする日彼等を焼つくして根も枝ものこらざらしめん 三 さて我名を
 四 おそるゝ汝らには養の日いでて昇らんその翼には醫才能をそなへん汝らは牢よりいでし棧の如く躍跳ん 又な
 五 んちらは悪人を踐つけん即ちわが設くる日にかれらは汝らの脚の掌の下にありて灰のごとくならん萬軍のエホバ
 六 これを言ふ

七 なんちらわが僕モーセの律法をおぼえよすなはち我がホレブにてイスラエル全體のために彼に命ぜし法度
 八 と誠命をおぼゆべし 視よエホバの大なる畏るべき日の來るまへにわれ預言者エリヤを汝らにつかはさんかれ
 九 父の心にその子女を慈はせ子女の心にその父をおもはしめん是は我が來りて詛をもて地を撃ことなからんため
 一〇 なり

マラキ書をばり

我らの主なる救主イエス・キリストの

新約聖書

改譯

二十七卷

新約聖書

第二十九卷

新約聖書の主イエスキリスト

新約聖書目次

書名	章	頁
マタイ福音書	二八章	一
マルコ福音書	一六章	四七
ルカ福音書	二四章	七六
ヨハネ福音書	二一章	一二五
使徒行傳	二八章	一六四
ローマ人への書	一六章	二一三
コリント人への前の書	一六章	二三四
コリント人への後の書	一三章	二五四
ガラテヤ人への書	六章	二六七
エペソ人への書	六章	二七四
ピリピ人への書	四章	二八一
コロサイ人への書	四章	二八六
テサロニケ人への前の書	五章	二九一
テサロニケ人への後の書	三章	二九六

書名	章	頁
テモテへの前の書	六章	二九九
テモテへの後の書	四章	三〇五
テトスへの書	三章	三〇九
ピレモンへの書	一章	三一二
ヘブル人への書	一三章	三一四
ヤコブの書	五章	三三〇
ペテロの前の書	五章	三三五
ペテロの後の書	三章	三四一
ヨハネの第一の書	五章	三四五
ヨハネの第二の書	一章	三五〇
ヨハネの第三の書	一章	三五一
ユダの書	一章	三五二
ヨハネの黙示録	二二章	三五四
以上		

新約聖書目次

マタイ	マタイ	マタイ	マタイ
一	二	三	四
五	六	七	八
九	一〇	一一	一二
一三	一四	一五	一六
一七	一八	一九	二〇
二一	二二	二三	二四
二五	二六	二七	二八
二九	三〇	三一	三二
三三	三四	三五	三六
三七	三八	三九	四〇
四一	四二	四三	四四
四五	四六	四七	四八
四九	五〇	五一	五二
五三	五四	五五	五六
五七	五八	五九	六〇
六一	六二	六三	六四
六五	六六	六七	六八
六九	七〇	七一	七二
七三	七四	七五	七六
七八	七九	八〇	八一
八二	八三	八四	八五
八六	八七	八八	八九
九〇	九一	九二	九三
九五	九六	九七	九八
九九	一〇〇	一〇一	一〇二
一〇三	一〇四	一〇五	一〇六
一〇七	一〇八	一〇九	一一〇
一一一	一一二	一一三	一一四
一一五	一一六	一一七	一一八
一一九	一二〇	一二一	一二二
一二三	一二四	一二五	一二六
一二七	一二八	一二九	一三〇
一三一	一三二	一三三	一三四
一三五	一三六	一三七	一三八
一三九	一四〇	一四一	一四二
一四三	一四四	一四五	一四六
一四七	一四八	一四九	一五〇
一五二	一五三	一五四	一五五
一五七	一五八	一五九	一六〇
一六一	一六二	一六三	一六四
一六五	一六六	一六七	一六八
一七〇	一七一	一七二	一七三
一七五	一七六	一七七	一七八
一八〇	一八一	一八二	一八三
一八五	一八六	一八七	一八八
一九〇	一九一	一九二	一九三
一九五	一九六	一九七	一九八
二〇〇	二〇一	二〇二	二〇三
二〇五	二〇六	二〇七	二〇八
二一〇	二一一	二一二	二一三
二一五	二一六	二一七	二一八
二二〇	二二一	二二二	二二三
二二五	二二六	二二七	二二八
二三〇	二三一	二三二	二三三
二三五	二三六	二三七	二三八
二四〇	二四一	二四二	二四三
二四五	二四六	二四七	二四八
二五〇	二五一	二五二	二五三
二五五	二五六	二五七	二五八
二六〇	二六一	二六二	二六三
二六五	二六六	二六七	二六八
二七〇	二七一	二七二	二七三
二七五	二七六	二七七	二七八
二八〇	二八一	二八二	二八三
二八五	二八六	二八七	二八八
二九〇	二九一	二九二	二九三
二九五	二九六	二九七	二九八
三〇〇	三〇一	三〇二	三〇三
三〇五	三〇六	三〇七	三〇八
三一〇	三一〇	三一〇	三一〇

マタイ傳福音書

一 アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系圖

二 アブラハム、イサクを生み、イサク、ヤコブを生み、ヤコブ、ユダとその兄弟らとを生み、ユダ、タマルによりてパレスとザラとを生み、パレス、エスロンを生み、エスロン、アラムを生み、アラム、アミナダブを生み、アミナダブ、ナアソンを生み、ナアソン、サルモンを生み、サルモン、ラハブによりてボアズを生み、ボアズ、ルツによりてオベデを生み、オベデ、エツサイを生み、エツサイ、ダビデ王を生めり。

三 ダビデ、ウリヤの妻たりし女によりてソロモンを生み、ソロモン、レハベアムを生み、レハベアム、アビヤを生み、アビヤ、アサを生み、アサ、ヨサバテを生み、ヨサバテ、ヨラムを生み、ヨラム、ウジヤを生み、ウジヤ、ヨタムを生み、ヨタム、アハズを生み、アハズ、ヒゼキヤを生み、ヒゼキヤ、マナセを生み、マナセ、アモンを生み、アモン、ヨシヤを生み、バビロンに移さるる頃、ヨシヤ、エコニヤとその兄弟らとを生めり。

新約聖書 マタイ傳 第一章一節 二一節

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

三 バプテスマを施さん。手には箕を持ちて禾場をきよめ、
 四 その麥は倉に納め、穀は消えぬ火にて焼きつくさん」
 五 ここにイエス、ヨハネにバプテスマを受けんとて、
 六 ガリラヤよりヨルダンに來り給ふ。ヨハネ之を止めんと
 七 して言ふ「われは汝にバプテスマを受くべき者なるに、
 八 反つて我に來り給ふか」イエス答へて言ひたまふ「今は
 九 許せ、われら斯く正しき事をことごとく爲さざるは、
 一〇 當然なり」ヨハネ乃ち許せり。イエス、バプテスマを
 一一 受けて直ちに水より上り給ひしとき、視よ、天ひらけ、
 一二 神の御靈の、鳩のごとく降りて己が上にきたるを見給ふ。
 一三 また天より聲あり、曰く「これは我が愛しむ子、わが
 一四 悦ぶ者なり」
 一五 第四節 ここにイエス御靈によりて荒野に導かれ給
 一六 ふ。惡魔に試みられんとするなり。四十日四十夜斷食し
 一七 て、後に飢ゑたまふ。試むる者きたりて言ふ「汝もし神
 一八 の子ならば、命じて此等の石をパンと爲らしめよ」答へ
 一九 て言ひ給ふ「人の生くるはパンのみによるにあらず、神
 二〇 の口より出づる凡ての言に由る」と録されたり」ここに
 二一 惡魔イエスを聖なる都につれゆき、宮の頂上に立たせて
 二二 言ふ「汝もし神の子ならば己が身を下に投げよ。それは
 二三 汝の地と死の蔭とに坐する者に、光のほれり」

「なんぢの爲に御使たちに命を給はん。
 彼ら手にて汝を支へ、その足を踏まざらん」
 石にうち當つること無からしめん」
 と録されたるなり」イエス言ひたまふ「主なる汝の神を
 試むべからず」と、また録されたり「惡魔またイエスを
 最高き山につれゆき、世のもろもろの國と、その榮華と
 を示して言ふ、汝もし平伏して我を拜せば、此等を皆
 なんぢに與へん」ここにイエス言ひ給ふ「サタンよ、退
 け」主なる汝の神を拜し、ただ之にのみ事へ奉るべし」
 と録されたるなり」ここに惡魔は離れ去り、視よ、御使
 たち來り事へぬ。
 イエス、ヨハネの囚はれし事をききて、ガリラヤに
 退き、後ナザレを去りて、ゼブルンとナフタリとの境な
 る、海邊のカペナウムに到りて住み給ふ。これは預言者
 イザヤによりて云はれたる言の成就せん爲なり。曰く、
 「ゼブルンの地、ナフタリの地、
 海の邊、ヨルダンの彼方、
 異邦人のガリラヤ、
 暗きに坐する民は、大なる光を見、
 死の地と死の蔭とに坐する者に、光のほれり」

一七 この時よりイエス教を宣へはじめて言ひ給ふ「なん
 一八 ぢら悔改めよ、天國は近づきたり」
 一九 かくて、ガリラヤの海邊をあゆみて、二人の兄弟ベ
 二〇 テロといふシモンとその兄弟アンデレとが、海に網うち
 二一 をるを見給ふ、かれらは漁人なり。これに言ひたまふ
 二二 「我に従ひきたれ、さらば汝ら人を漁る者となさん」
 二三 かれら直ちに網をすてて従ふ。更に進みゆきて、また
 二四 二人の兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネとが、
 二五 父ゼベダイとともに舟にありて網を繕ひをるを見て呼び
 二六 給へば、直ちに舟と父とを置きて従ふ。
 二七 イエスあまねくガリラヤを巡り、會堂にて教をな
 二八 し、御國の福音を宣べつたへ、民の中のもろもろの病
 二九 もろもろの疾患をいやし給ふ。その噂あまねくシリヤ
 三〇 に弘り、人々すべての惱めるもの、即ちさまざまの病と
 三一 苦痛とに罹れるもの、惡鬼に憑かれたるもの、癩癩および
 三二 び中風の者などを連れ來りたれば、イエス之を醫したま
 三三 ふ。ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ及びヨ
 三四 ルダンの彼方より、大なる群衆きたり従へり。
 三五 第五節 イエス群衆を見て、山にのぼり、坐し給へ
 三六 ば、弟子たち御許にきたる。イエス口をひらき、教へて

三 言ひたまふ、「幸福なるかな、心の貧しき者、天國は
 四 その人のものなり。幸福なるかな、悲しむ者、その人は
 五 慰められん。幸福なるかな、柔和なる者、その人は地を
 六 嗣がん。幸福なるかな、義に飢ゑ渴く者、その人は飽く
 七 ことを得ん。幸福なるかな、憐憫ある者、その人は憐憫
 八 を得ん。幸福なるかな、心の清き者、その人は神を見ん。
 九 幸福なるかな、平和ならしむる者、その人は神の子と
 一〇 稱へられん。幸福なるかな、義のために責められたる者、
 一一 天國はその人のものなり。我がために、人なんぢらを
 一二 罵り、また責め、詐りて各様の惡しきことを言ふとき
 一三 は、汝ら幸福なり。喜びよろこべ、天にて汝らの報は
 一四 大なり。汝等より前にありし預言者たちをも、斯く責め
 一五 たりき。
 一六 汝らは地の鹽なり、鹽もし効力を失はば、何をもて
 一七 か之に鹽すべき。後は用なし、外にすてられて人に踏ま
 一八 るのみ。汝らは世の光なり。山の上にある町は隠るる
 一九 ことなし。また人は燈火をともして升の下におかず、
 二〇 燈臺の上におく。かくて燈火は家にある凡ての物を照す
 二一 なり。かくのごとく汝らの光を人の前にかがやかせ。
 二二 これ人の汝らが善き行爲を見て、天にいます汝らの父を

崇めん爲なり。また預言者を毀つために來れりと思ふな。
 毀たんとして來らず、反つて成就せん爲なり。誠に汝らに
 告ぐ、天地の過ぎ往かぬうちに、律法の一語、一畫も廢
 ることなく、ことごとく全うせらるべし。この故にもし
 此等のいと小き誠命の一つをやより、且その如く人に教
 ふる者は、天國にて最小き者と稱へられ、之を行ひ、
 かつ人に教ふる者は、天國にて大なる者と稱へられん。
 我なんぢらに告ぐ、汝らの義、學者・パリサイ人に勝
 らずば、天國に入ること能はず。
 古への人に「殺すなかれ、殺す者は審判にあふべ
 し」と云へることあるを汝等きけり。されど我は汝らに
 告ぐ、すべて兄弟を怒る者は、審判にあふべし。また兄
 弟に對ひて、愚者よといふ者は、衆議にあふべし。また
 痴者よといふ者は、ゲヘナの火にあふべし。この故に汝
 もし供物を祭壇にささぐる時、そこに兄弟に怨まるる
 事あるを思ひ出さば、供物を祭壇のまへに遺しおき、先
 づ往きて、その兄弟と和睦し、然るのち來りて、供物を
 ささげよ。なんぢを訴ふる者とともに途に在るうちに、
 早く和解せよ。恐らくは、訴ふる者なんぢを審判人に

わたし、審判人は下役にわたし、遂になんぢは獄に入れ
 られん。まことに汝に告ぐ、一厘ものこりなく償はず
 ば、其處をいづること能はず。
 「森淫するなかれ」と云へることあるを汝等きけり。
 されど我は汝らに告ぐ、すべて色情を懷きて女を見る
 ものは、既に心のうち森淫したるなり。もし右の目なん
 ぢを頭かせば、抉り出して棄てよ、五體の一つ亡びて、
 全身ゲヘナに投げ入れられぬは益なり。もし右の手なん
 ぢを頭かせば、切りて棄てよ、五體の一つ亡びて、全身
 ゲヘナに往かぬは益なり。また「妻をいだす者は隠縁狀
 を與ふべし」と云へることあり。されど我は汝らに告ぐ、
 淫行の故ならて其の妻をいだす者は、これに森淫を行は
 しむるなり。また出されたる女を娶るものは、森淫を行
 ふなり。
 また古への人に「いつはり誓ふなかれ、なんぢの誓
 は主に果すべし」と云へる事あるを汝ら聞けり。されど
 我は汝らに告ぐ、一切ちかふな、天を指して誓ふな、神
 の御座なればなり。地を指して誓ふな、神の足臺なれば
 なり。エルサレムを指して誓ふな、大君の都なればな
 り。己が頭を指して誓ふな、なんぢ頭髮一筋だに白く

し、また黒くし能はねばなり。ただ然り然り、否否とい
 へ、之に過ぐるは惡より出づるなり。
 「目には目を、齒には齒を」と云へることあるを汝ら
 聞けり。されど我は汝らに告ぐ、惡しき者に抵抗ふな。
 人もし汝の右の頬をうたば、左をも向けよ。なんぢを訟
 へて下衣を取らんとする者には、上衣をも取らせよ。人
 もし汝に一里ゆくことを強ひなば、共に二里ゆけ。なん
 ぢに請ふ者にあたへ、借らんとする者を拒むな。
 「なんぢの隣を愛し、なんぢの仇を憎むべし」と云へ
 ることあるを汝等きけり。されど我は汝らに告ぐ、汝ら
 の仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ、これ天にい
 ます汝らの父の子とならん爲なり。天の父は、その日を
 惡しき者のうへにも善き者のうへにも昇らせ、雨を正し
 き者にも正しからぬ者にも降らせ給ふなり。なんぢら己
 を愛する者を愛すとも何の報をか得べき、取税人も然す
 るにあらざるや。兄弟にのみ挨拶すとも何の勝ることか
 ある、異邦人も然するにあらざるや。さらば汝らの天の父
 の愛が如く、汝らも全かれ。
 汝ら見られたために己が義を人の前にて行
 はぬやうに心せよ。然らずば、天にいます汝らの父より

報を得じ。
 さらば施濟をなすとき、偽善者が人に崇められんと
 て會堂や街にて爲すごとく、己が前にラツパを鳴すな。
 誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報を得たり。汝は施濟
 をなすとき、右の手のなすことを左の手に知らすな。是
 はその施濟の隠れん爲なり。さらば隠れたるに見たまふ
 汝の父は報い給はん。
 なんぢら祈るとき、偽善者の如くあらざれ。彼らは
 人に顯さんとて、會堂や大路の角に立ちて祈ることを好
 む。誠に汝らに告ぐ、かれらは既にその報を得たり。な
 んぢは祈るとき、己が部屋にいり、戸を閉ぢて、隠れた
 るに在す汝の父に祈れ。さらば隠れたるに見給ふなんぢ
 の父は報い給はん。また祈るとき、異邦人の如くいたづ
 らに言を反復すな。彼らは言多きによりて聽かれんと思
 ふなり。さらば彼らに效ふな。汝らの父は求めぬ前に、
 なんぢらの必要なる物を知りたまふ。この故に汝らは斯
 く祈れ。「天にいます我らの父よ、顯はくは御名の崇めら
 れん事を、御國の來らんことを、御意の天のごとく地に
 も行はれん事を、我らの日用の糧を今日もあたへ給へ。
 我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債

二一 をも免し給へ。我らを嘗試に遇はせず、惡より救ひ出し
二二 たまへ。汝等もし人の過失を免さば、汝らの天の父も汝
二三 らを免し給はん。もし人を免さずば、汝らの父も汝らの
二四 過失を免し給はじ。

二五 なんぢら斷食するとき、偽善者のごとく、悲しき
二六 面容をすな。彼らは斷食することを人に顯さんとて、
二七 その顔色を善ふなり。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその
二八 報を得たり。なんぢは斷食するとき、頭に油をぬり、顔
二九 をあらへ。これ斷食することの人に顯れずして、隠れた
三〇 るに在す汝の父にあらはれん爲なり。さらば隠れたるに
三一 見たまふ汝の父は報い給はん。

三二 なんぢら己がために財寶を地に積むな、ここは蟲と
三三 錆とが損ひ、盗人うがちて盗むなり。なんぢら己がため
三四 に財寶を天に積み、かしこは蟲と錆とが損はず、盗人う
三五 がちて盗まぬなり。なんぢの財寶のある所には、なんぢ
三六 の心もあるべし。身の燈火は目なり。この故に汝の目た
三七 だしくば、全身あかるからん。されど汝の目あしくば、
三八 全身くらからん。もし汝の内の光、闇ならば、その闇い
三九 かばかりぞや。人は二人の主に乗ね事ふること能はず、
四〇 或はこれを憎み彼を愛し、或はこれに親しみ彼を輕しむ

四一 べければなり。汝ら神と富とに兼ね事ふること能はず。
四二 この故に我なんぢらに告ぐ、何を食ひ、何を飲まんと
四三 生命のことを思ひ煩ひ、何を著んと體のことを思ひ煩ふ
四四 な。生命は糧にまさり、體は衣に勝るならずや。空の鳥
四五 を見よ、播かず、刈らず、倉に收めず、然るに汝らの天
四六 の父は、これを養ひたまふ。汝らは之よりも遙に優る
四七 者ならずや。汝らの中たれか思ひ煩ひて身の長一尺を加
四八 へ得んや。又なにゆゑ衣のことを思ひ煩ふや。野の百合
四九 は如何にして育つかを思へ、勞せず、紡がざるなり。さ
五〇 れど我なんぢらに告ぐ、榮華を極めたるソロモンに、
五一 その服裝この花の一つにも及かざりき。今日ありて明日
五二 燼に投げ入れらるる野の草をも、神はかく裝ひ給へば、
五三 まして汝らをや。ああ信仰うすき者よ。さらば何を食
五四 ひ、何を飲み、何を著んとて思ひ煩ふな。是みな異邦人
五五 の切に求むる所なり。汝らの天の父は、凡てこれらの物
五六 の汝らに必要なを知り給ふなり。まづ神の國と神の義
五七 とを求めよ、さらば凡てこれらの物は汝らに加へらるべ
五八 し。この故に明日のことを思ひ煩ふな、明日は明日みづ
五九 から思ひ煩はん。一日の苦勞は一日にて足れり。

六〇 なんぢら人を審くな、審かれざらん爲な
六一 廣く、之より入る者おほし。生命にいたる門は狭く、
六二 その路は細く、之を見出す者すくなし。
六三 偽預言者に心せよ、羊の扮装して來れども、内は羆
六四 ひ掠むる豺狼なり。その果によりて彼らを知るべし。茨
六五 より葡萄を、薊より無花果をとる者あらんや。斯く、す
六六 べて善き樹は善き果をむすび、惡しき樹は惡しき果をむ
六七 す。善き樹は惡しき果を結ぶこと能はず、惡しき樹は
六八 よき果を結ぶこと能はず。すべて善き果を結ばぬ樹は、
六九 伐られて火に投入せらる。さらばその果によりて彼ら
七〇 を知るべし。我に對ひて主よ主よといふ者、ことごとくは
七一 天國に入らず、ただ天にいます我が父の御意をおこなふ
七二 者のみ、之に入るべし。その日おほくの者われに對ひて
七三 「主よ、主よ、我らは汝の名によりて預言し、汝の名に
七四 よりて惡鬼を逐ひいだし、汝の名によりて多くの能力あ
七五 る業を爲ししにあらざや」と言はん。その時われ明白に
七六 告げん「われ斷えて汝らを知らず、不法をなす者よ、我
七七 を離れされ」と。
七八 さらば凡て我がこれらの言をききて行ふ者を、磐の
七九 上に家をたてたる慧き人に擬へん。雨ふり流みなぎり、
八〇 風ふきて其の家をうてど倒れず、これ磐の上に建てられ

二一 己がさばく審判にて己もさばかれ、己がはかる量
二二 にて己も量らるべし。何ゆゑ兄弟の目にある塵を見て、
二三 おのが目にある梁木を認めぬか。視よ、おのが目に梁木
二四 のあるに、いかで兄弟にむかひて、汝の目より塵をとり
二五 除かせよと言ひ得んや。偽善者よ、まづ己が目より梁木
二六 をとり除け、さらば明かに見えて、兄弟の目より塵を取り
二七 のぞき得ん。
二八 聖なる物を犬に與ふな。また眞珠を豚の前に投ぐ
二九 な。恐らくは足にて踏みつけ、向き反りて汝らを噛み
三〇 やぶらん。
三一 求めよ、さらば與へられん。尋ねよ、さらば見出さ
三二 ん。門を叩け、さらば開かれん。すべて求める者は得
三三 たづぬる者は見いだし、門をたたく者は開かるなり。
三四 汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を與へ、魚
三五 を求めんに蛇を與へんや。さらば、汝ら惡しき者ながら、
三六 善き賜物をその子らに與ふるを知る。まして天にいます
三七 汝らの父は、求める者に善き物を賜はざらんや。さらば
三八 凡て人に爲られんと思ふことは、人にも亦その如くせ
三九 よ。これは律法なり、預言者なり。
四〇 狭き門より入れ、滅にいたる門は大きく、その路は

四一 廣く、之より入る者おほし。生命にいたる門は狭く、
四二 その路は細く、之を見出す者すくなし。
四三 偽預言者に心せよ、羊の扮装して來れども、内は羆
四四 ひ掠むる豺狼なり。その果によりて彼らを知るべし。茨
四五 より葡萄を、薊より無花果をとる者あらんや。斯く、す
四六 べて善き樹は善き果をむすび、惡しき樹は惡しき果をむ
四七 す。善き樹は惡しき果を結ぶこと能はず、惡しき樹は
四八 よき果を結ぶこと能はず。すべて善き果を結ばぬ樹は、
四九 伐られて火に投入せらる。さらばその果によりて彼ら
五〇 を知るべし。我に對ひて主よ主よといふ者、ことごとくは
五一 天國に入らず、ただ天にいます我が父の御意をおこなふ
五二 者のみ、之に入るべし。その日おほくの者われに對ひて
五三 「主よ、主よ、我らは汝の名によりて預言し、汝の名に
五四 よりて惡鬼を逐ひいだし、汝の名によりて多くの能力あ
五五 る業を爲ししにあらざや」と言はん。その時われ明白に
五六 告げん「われ斷えて汝らを知らず、不法をなす者よ、我
五七 を離れされ」と。
五八 さらば凡て我がこれらの言をききて行ふ者を、磐の
五九 上に家をたてたる慧き人に擬へん。雨ふり流みなぎり、
六〇 風ふきて其の家をうてど倒れず、これ磐の上に建てられ

二六 たる故なり。すべて我がこれらの言をききて行はぬ者
二七 を、沙の上に家を建てたる愚なる人に擬へん。雨ふり
二八 流みなぎり、風ふきて其の家をうてば、倒れてその顛倒
二九 はなはだしし。

一八 イエスこれらの言を語りてへ給へるとき、群衆その
一九 教に驚きたり。それは學者らの如くならず、權威ある者
二〇 のごとく教へ給へる故なり。

二一 八章 イエス山を下り給ひしとき、大なる群衆
二二 これに従ふ。視よ、一人の癩病人もとに來り、拜して
二三 言ふ「主よ、御意ならば、我を潔くなし給ふを得ん」
二四 イエス手をのべ、彼につけて「わが意なり、潔くなれ」
二五 と言ひ給へば、癩病ただちに潔れり。イエス言ひ給ふ
二六 「つつしみて誰にも語るな、ただ往きて己を祭司に見
二七 せ、モーセが命じたる供物を献げて、人々に證せよ」

二八 イエス、カペナウムに入り給ひしとき、百卒長きた
二九 り、請ひていふ「主よ、わが僕、中風を病み、家に臥し
三〇 ゐて甚く苦しめり」イエス言ひ給ふ「われ往きて醫さ
三一 ん」百卒長こたへて言ふ「主よ、我は汝をわが屋根の
三二 下に入れまつるに足らぬ者なり。ただ御言のみを賜へ、
三三 さらば我が僕はいえん。我みづから權威の下にある者

三四 なるに、我が下にまた兵卒ありて、此に「ゆけ」と言へば
三五 往き、彼に「きたれ」と言へば來り、わが僕に「これを
三六 爲せ」といへば爲すなり」イエス聞きて怪しみ、從へる
三七 人々に言ひ給ふ「まことに汝らに告ぐ、かかる篤き信仰
三八 はイスラエルの中の一人にだに見しことなし。又なんぢ
三九 らに告ぐ、多くの、東より西より來り、アブラハム、
四〇 イサク、ヤコブとともに天國の宴につき、御國の子らは
四一 外の暗きに逐ひ出され、そこにて哀哭・切齒すること
四二 ならん」イエス百卒長に「ゆけ、汝の信するごとく汝に
四三 なれ」と言ひ給へば、このとき僕いえたり。

四四 イエス、ベテロの家に入り、その外姑の熱を病みて
四五 臥しをるを見、その手に觸り給へば、熱去り、女おきて
四六 イエスに事ふ。夕になりて、人々、惡鬼に憑かれたる者
四七 をおほく御許につれ來りたれば、イエス言にて靈を逐ひ
四八 いだし、病める者をことごとく醫し給へり。これは預言
四九 者イザヤによりて「かれは自ら我らの疾患をうけ、我ら
五〇 の病を負ふ」と云はれし言の成就せん爲なり。

一 イエス舟にのり、渡りて己が町にきたり給
二 ふ。視よ、中風にて床に臥しをる者を、人々みもとに
三 連れ來れり。イエス彼らの信仰を見て、中風の者に言ひ
四 たまふ「子よ、心安かれ、汝の罪ゆるされたり」視よ、或
五 學者ら心の中にいふ「この人は神を演すなり」イエス
六 その思を知りて言ひ給ふ「何ゆゑ心に惡しき事をおもふ
七 か。汝の罪ゆるされたりと言ふと、起きて歩めと言ふ
八 と、孰か易き。人の子地にて罪を赦す權威あることを汝
九 らに知らせん爲に」ここに中風の者に言ひ給ふ
一〇 「起きよ、床をとりて汝の家にかへれ」彼おきてその家
一一 にかへる。群衆これを見ておそれ、かかる能力を人に
一二 あたへ給へる神を崇めたり。

一三 イエス此處より進みて、マタイといふ人の收稅所に
一四 坐しをるを見て「我に従へ」と言ひ給へば、立ちて

一五 イエス言ひたまふ「狐は穴あり、空の鳥は罅あり、され
一六 ど人の子は枕する所なし」また弟子の一人いふ「主よ、
一七 先づ往きて我が父を葬ることを許したまへ」イエス言ひ
一八 たまふ「我に従へ、死にたる者にその死にたる者を葬ら
一九 せよ」

二〇 かくて舟に乗り給へば、弟子たちも從ふ。視よ、海
二一 に大なる暴風おこりて、舟波に蔽はるるばかりなるに、
二二 イエスは眠り給ふ。弟子たち御許にゆき、起して言ふ
二三 「主よ、救ひたまへ、我らは亡ぶ」彼らに言ひ給ふ
二四 「なにゆゑ臆するか、信仰うすき者よ」乃ち起きて、風と
二五 海とを禁め給へば、大なる風となりぬ。人々あやしみて
二六 言ふ「こは如何なる人ぞ、風も海も從ふとは」

二七 イエス彼方にわたり、ガガラ人の地にゆき給ひし
二八 とき、惡鬼に憑かれたる二人のもの、墓より出てきたりて
二九 之に遇ふ。その猛きこと甚だしく、其處の途を人の過ぎ
三〇 得ぬほどなり。視よ、かれら叫びて言ふ「神の子よ、われ
三一 ら汝と何の關係あらん、未だ時いたらぬに、我らを責め
三二 んとて此處にきたり給ふか」遂にへだたりて多くの豚
三三 の一群、食しあたりしが、惡鬼ども請ひて言ふ「もし我
三四 らを逐ひ出さんとならば、豚の群に遣したまへ」彼らに

三五 言ひ給ふ「ゆけ」惡鬼いてて豚に入りたれば、視よ、その
三六 群みな崖より海に墜け下りて、水に死にたり。飼ふ者
三七 ども逃げて町にゆき、すべての事と惡鬼に憑かれたりし
三八 者の事とを告げたれば、視よ、町人こそりてイエスに
三九 逢はんとて出てきたり、彼を見て、この地方より去り給
四〇 はんことを請へり。

四一 九章 イエス舟にのり、渡りて己が町にきたり給
四二 ふ。視よ、中風にて床に臥しをる者を、人々みもとに
四三 連れ來れり。イエス彼らの信仰を見て、中風の者に言ひ
四四 たまふ「子よ、心安かれ、汝の罪ゆるされたり」視よ、或
四五 學者ら心の中にいふ「この人は神を演すなり」イエス
四六 その思を知りて言ひ給ふ「何ゆゑ心に惡しき事をおもふ
四七 か。汝の罪ゆるされたりと言ふと、起きて歩めと言ふ
四八 と、孰か易き。人の子地にて罪を赦す權威あることを汝
四九 らに知らせん爲に」ここに中風の者に言ひ給ふ
五〇 「起きよ、床をとりて汝の家にかへれ」彼おきてその家
五一 にかへる。群衆これを見ておそれ、かかる能力を人に
五二 あたへ給へる神を崇めたり。

五三 イエス此處より進みて、マタイといふ人の收稅所に
五四 坐しをるを見て「我に従へ」と言ひ給へば、立ちて

一〇 家にて食事の席につき居給ふとき、視よ、多くの
 一 取税人・罪人ら來りて、イエス及び弟子たちと共に列る。
 二 バリサイ人これを見て弟子たちに言ふ「なに故なんぢ
 三 らの師は、取税人・罪人らと共に食するか」之を聞きて
 四 言ひたまふ「健かなる者は醫者を要せず、ただ病める者
 五 これを要す。なんぢら往きて學べ「われ憐憫を好みて、
 六 犠牲を好まず」とは如何なる意ぞ。我は正しき者を招か
 七 んとにあらで、罪人を招かんとして來れり」
 八 ここにヨハネの弟子たち御許にきたりて言ふ「われ
 九 らとバリサイ人とは斷食するに、何故なんぢの弟子たち
 一〇 は斷食せぬか」イエス言ひたまふ「新郎の友だち、新郎
 一一 と偕に在る間は、悲しむことを得んや。されど新郎を
 一二 とらるる日きたらん、その時には斷食せん。誰も新しき
 一三 布の裂を舊き衣につぐことは爲じ、補ひたる裂は、
 一四 その衣をやぶりと、破綻さらに甚だしかるべし。また新
 一五 しき葡萄酒をふるき革囊に入ること爲じ。もし然せ
 一六 ば、囊はりさけ酒はどばり出でて、囊もまた廢らん。
 一七 新しき葡萄酒は新しき革囊にいれ、かくて兩ながら
 一八 保つなり」

一八 イエス此等のことを語り給ふとき、視よ、一人の
 一九 司きたり、拜して言ふ「わが娘いま死にたり。されど來
 二〇 りて御手を之におき給はば活さん」イエス起ちて彼に伴
 二一 ひ給ふに、弟子たちも從ふ。視よ、十二年血漏を患ひ
 二二 たる女、イエスの後にきたりて、御衣の總にさはる。
 二三 それは、御衣にだに觸らば救はれんと心の中にいへる
 二四 なり。イエスふりかへり、女を見て言ひたまふ「娘よ、
 二五 心安かれ、汝の信仰なんぢを救へり」女この時より教は
 二六 れたり。かくてイエス司の家に行たり、笛ふく者と騒ぐ
 二七 群衆とを見て言ひたまふ「退け、少女は死にたるに
 二八 ならず、寐ねたるなり」人々イエスを嘲笑ふ。群衆の出
 二九 されし後、いりてその手をとり給へば、少女おきたり。
 三〇 この聲聞あまねく其の地に弘りぬ。
 三一 イエス此處より進みたまふ時、ふたりの盲人さげび
 三二 て「ダビデの子よ、我らを憐みたまへ」と言ひつつ從
 三三 ふ。イエス家にいたり給ひしに、盲人ども御許に來り
 三四 たれば、之に言ひたまふ「我この事をなし得と信ずるか」
 三五 彼等いふ「主よ、然り」爰にイエスかれらの目に觸り
 三六 て言ひたまふ「なんぢらの信仰のごとく、汝らに成れ」
 三七 乃ち彼らの目あきたり。イエス厳しく戒めて言ひたま

三三 一 夫「憤みて誰にも知らすな」されど彼ら出でて、あまね
 三三 二 くその地にイエスの事をいひ弘めたり。
 三三 三 盲人どもの出づるとき、視よ、人々、悪鬼に憑かれ
 三三 四 たる啞者を御許につれきたる。悪鬼おひ出されて啞者
 三三 五 ものいひたれば、群衆あやしみて言ふ「かかる事は未だ
 三三 六 イスラエルの中に顯れざりき」然るにバリサイ人いふ
 三三 七 「かれは悪鬼の首によりて悪鬼を逐ひ出すなり」
 三三 八 イエスあまねく町と村とを巡り、その會堂にて教
 三三 九 へ、御國の福音を宣べつたへ、もろもろの病、もろもろ
 三四〇 の疾患をいやし給ふ。また群衆を見て、その牧ふ者なき
 三四一 羊のごとく憫み、且たふるるを甚く憫み、遂に弟子たち
 三四二 に言ひたまふ「收穫はおほく労働人はすくなし。この故
 三四三 に收穫の主に、労働人をその收穫場に遣し給はんことを
 三四四 求めよ」
 三四五 かくてイエスその十二弟子を召し、穢れし
 三四六 靈を制する權威をあたへて、之を逐ひ出し、もろもろの
 三四七 病、もろもろの疾患を醫すことを得しめ給ふ。
 三四八 十二使徒の名は左のごとし。先づペテロといふシモ
 三四九 ン及びその兄弟アンデレ、ゼベダイの子ヤコブ及びその
 三五〇 兄弟ヨハネ、ピリポ及びバルトロマイ、トマス及び取税

三五一 人マタイ、アルバヨの子ヤコブ及びタダイ、熱心黨の
 三五二 シモン及びイスカリオテのユダ、このユダはイエスを
 三五三 賣りし者なり。イエスこの十二人を遣さんとて、命じて
 三五四 言ひたまふ、
 三五五 「異邦人の途にゆくな、又サマリヤ人の町に入るな。
 三五六 むしろイスラエルの家の失せたる羊にゆけ。往きて宣
 三五七 べつたへ「天國は近づけり」と言へ。病める者をいやし、
 三五八 死にたる者を甦へらせ、癩病人をきよめ、悪鬼を逐ひ
 三五九 いだせ。價なしに受けたれば價なしに與へよ。帯のなか
 三六〇 に金・銀または錢をもつな。旅の囊も、二枚の下衣も、
 三六一 鞋も、杖ももつな。労働人の、その食物を得るは相應し
 三六二 きなり。いづれの町いづれの村に入るとも、その中にて
 三六三 相應しき者を尋ねいだして、立ち去るまでは其處に留
 三六四 れ。人の家に入らば平安を祈れ。その家もし之に相應し
 三六五 くば、汝らの祈る平安はその上に臨まん。もし相應し
 三六六 けずば、その平安はなんぢらに歸らん。人もし汝らを
 三六七 受けず、汝らの言を聽かずば、その家その町を立ち去る
 三六八 とき、足の塵をはらへ。まことに汝らに告ぐ、審判の日
 三六九 には、その町よりもソドム、ゴモラの地のかた耐へ易か
 三七〇 らん。

二六 視よ、我なんぢらを遣すは、羊を豺狼のなかに入るが如し。この故に蛇のごとく慧く、鳩のごとく素直なれ。人々に心せよ、それは汝らを衆議所に付し、會堂にて鞭うたん。また汝等わが故によりて、司たち王たちの前に曳かれん。これは彼らと異邦人とに證をなさん爲なり。かれら汝らを付さば、如何に何を言はんと思ひ煩ふな。言ふべき事は、その時さづけらるべし。これ言ふものは汝等にあらず、其の中において言ひたまふ汝らの父の靈なり。兄弟は兄弟を、父は子を死に付し、子どもは親に逆ひて之を死なしめん。又なんぢら我が名のためは凡ての人に憎まれん。されど終まで耐へ忍ぶものは救はるべし。この町にて責めらるる時は、かの町に逃れよ。誠に汝らに告ぐ、なんぢらイスラエルの町々を巡り盡さぬうちに人の子は来るべし。

二七 弟子はその師にまさらず、僕はその主にまさらず、弟子はその師のごとく、僕はその主の如くならば足れり。もし家主をベルゼブルと呼びたらんには、ましてその家の者をや。この故に、彼らを懼るな。蔽はれたるものに露れぬはなく、隠れたるものに知られぬは無ければなり。暗黒にて我が告ぐることを光明にて言へ。耳を

二八 あてて聴くことを屋の上にて宜べよ。身を殺して靈魂をころし得ぬ者どもを懼るな。身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者をおそれよ。二羽の雀は一錢にて賣るにあらずや、然るに汝らの父の許なくば、その一羽も地に落つること無からん。汝らの頭の髪までも皆かぞへらる。この故におそるな。汝らは多くの雀よりも優るるなり。されば凡そ人の前にて我を言ひあらはす者を、我もまた天にいます我が父の前にて言ひ顯さん。されど人の前にて我を否む者を、我もまた天にいます我が父の前にて否まん。

二九 われ地に平和を投ぜんために來れりと思ふな、平和にあらず、反つて劍を投ぜん爲に來れり。それ我が來れるは、人をその父より、娘をその母より、嫁をその姑嬢より分たん爲なり。人の仇は、その家の者なるべし。我よりも父または母を愛する者は、我に相應しからず。我よりも息子または娘を愛する者は、我に相應しからず。又おのが十字架をとりて我に従はぬ者は、我に相應しからず。生命を得る者はこれを失ひ、我がために生命を失ふ者はこれを得べし。

三〇 汝らを受くる者は、我を受くるなり。我をうくる者

二一 は、我を遣し給ひし者を受くるなり。預言者たる名の故に預言者をうくる者は、預言者の報をうけ、義人たる名のゆゑに義人をうくる者は、義人の報を受くべし。凡そわが弟子たる名の故に、この小き者の一人に冷かなる水一杯にても與ふる者は、まことに汝らに告ぐ、必ずその報を失はざるべし。

二二 一 章 イエス十二弟子に命じ終へてのち、町々にて教へ、かつ宣傳へんとて、此處を去り給へり。

二三 ヨハネ牢舎にてキリストの御業をきき、弟子たちを遣して、イエスに言はしむ「來るべき者は汝なるか、或は他に待つべきか」答へて言ひたまふ「ゆきて、汝らが見聞する所をヨハネに告げよ。盲人は見、跛者はあゆみ、癩病人は潔められ、聾者はきき、死人は甦へらせられ、貧しき者は福音を聞かせらる。おほよそ我に蹟かぬ者は幸福なり」彼らの歸りたるをり、ヨハネの事を群衆に言ひ出たまふ「なんぢら何を眺めんとて野に出てし、風にそよぐ葦なるか。さらば何を見んとて出てし、柔かき衣を著たる人なるか。視よ、やはらかき衣を著たる者は王の家に在り。さらば何のために出てし、預言者を見んとてか。然り、汝らに告ぐ、預言者よりも勝る者

二四 「視よ、わが使をなんぢの顔の前につかはす。彼はなんぢの前に、なんぢの道をそなへん」と録されたるは此の人なり。誠に汝らに告ぐ、女の産みたる者のうち、バプテスマのヨハネより大なる者は起らざりき。されど天國にて小き者も、彼よりは大きなり。

二五 バプテスマのヨハネの時より今に至るまで、天國は烈しく攻めらる、烈しく攻むる者はこれを奪ふ。凡ての預言者と律法との預言したるは、ヨハネの時までなり。もし汝等わが言をうけんことを願はば、來るべきエリヤは此の人なり。耳ある者は聴くべし。われ今の代を何に比へん、童子、市場に坐し、友を呼びて、「われら汝等のために笛吹きたれど、汝ら踊らず、歎きたれど、汝ら胸うたざりき」と言ふに似たり。それは、ヨハネ來りて飲食せざれば「惡鬼に憑かれたる者なり」といひ、人の子來りて飲食すれば「視よ、食を食り酒を好む人、また取税人、罪人の友なり」と言ふなり。されど智慧は己が業によりて正しとせらる。爰にイエス多くの能力ある業を行ひ給へる町々の悔改めぬによりて、之を責めはじめ給ふ。「禍害なる説コラジンよ、禍害なる説ベツサイダよ、

二一 汝らの中にて行ひたる能力ある業を、ツロとシドンとに
 二二 行ひしならば、彼らは早く荒布を着、灰の中にて悔
 二三 改めしならん。されば汝らに告ぐ、審判の日にはツロと
 二四 シドンとのかた汝等よりも耐へ易からん。カペナウム
 二五 よ、なんぢは天にまで擧げらるべきか、黄泉にまで下ら
 二六 ん。汝のうちにて行ひたる能力ある業を、ソドムにて行
 二七 ひしならば、今日までもかの町は遺りしならん。されば
 二八 汝らに告ぐ、審判の日にはソドムの地のかた汝よりも耐
 二九 へ易からん。

三〇 その時イエス答へて言ひたまふ「天地の主なる父
 三一 よ、われ感謝す、此等のことを智き者慧き者にかくし
 三二 て、嬰兒に顯し給へり。父よ、然り、かくの如きは御意
 三三 に適へるなり。すべての物は我が父より委ねられた
 三四 り。子を知る者は父の外になく、父をしる者は子また子
 三五 の欲するままに顯すところの者の外になし。凡て勞する
 三六 者、重荷を負ふ者、われに來れ、われ汝らを休ません。
 三七 私は柔和にして心卑ければ、我が軛を負ひて我に學
 三八 べ、さらば靈魂に休息を得ん。わが軛は易く、わが荷は
 三九 輕ければなり」

四〇 二二節—第二章一五節
 四一 に、弟子たち飢えて穂を摘み、食ひ始めたを、パリサ
 四二 イ人見てイエスに言ふ「視よ、なんぢの弟子は安息日に
 四三 爲まじき事をなす」彼らに言ひ給ふ「ダビデがその伴へ
 四四 る人々とともに飢ゑしとき、爲しし事を讀まぬか、即ち
 四五 神の家に入りて、祭司のほかは、己もその伴へる人々も
 四六 食ふまじき供のパンを食へり。また安息日に祭司らは宮
 四七 の内にて安息日を犯せども、罪なきことを律法にて讀ま
 四八 ぬか、われ汝らに告ぐ、宮より大なる者ここに在り。
 四九 「われ憐憫を好みて犠牲を好まず」とは、如何なる意か
 五〇 を汝ら知りたらんには、罪なき者を罪せざりしならん。
 五一 それ人の子は安息日の主たるなり」

五二 イエス此處を去りて、彼らの會堂に入り給ひしに、
 五三 視よ、片手なえたる人あり。人々イエスを訴へんと思
 五四 ひ、問ひていふ「安息日に人を醫すことは善きか」彼
 五五 らに言ひたまふ「汝等のうち一匹の羊をもてる者あらん
 五六 に、もし安息日に穴に陥らば、之を取りあげぬか。人は
 五七 羊より優ること如何ばかりぞ。さらば安息日に善をな
 五八 すは可し」ここにかの手に言ひ給ふ「なんぢの手を伸べ
 五九 よ」かれ伸べたれば、他の手のごとく癒ゆ。パリサイ人
 六〇 いて如何にしてかイエスを亡さんと議る。イエス之を

六一 知りて此處を去りたまふ。多くの人が来たがひ來りたれ
 六二 ば、ことごとく之を醫し、かつ我を人に知らすなど戒め
 六三 給へり。これ預言者イザヤによりて云はれたる言の成
 六四 就せんためなり。曰く

六五 「視よ、わが選びたる我が僕
 六六 わが心の悦ぶ我が愛しむ者、
 六七 我が靈を彼に與へん、
 六八 彼は異邦人に正義を告げ示さん。
 六九 彼は争はず、叫ばず、
 七〇 その聲を大路にて聞く者なからん。
 七一 正義をして勝ち遂げしむるまでは、
 七二 傷へる草を折ることなく、
 七三 煙れる亞麻を消すことなからん。
 七四 異邦人も彼の名に望をおかん」

七五 ここに悪鬼に憑かれたる盲目の啞者を御許に連れ來
 七六 りたれば、之を醫して、啞者の物言ひ見ゆるやうに爲し
 七七 給ひぬ。群衆みな驚きて言ふ「これはダビデの子にあら
 七八 ぬか」然るにパリサイ人ききて言ふ「この人、悪鬼の首
 七九 ベルゼブルによらては、悪鬼を逐ひ出すことなし」イエ
 八〇 ス彼らの思を知りて言ひ給ふ「すべて分れ争ふ國はほろ

八二 び、分れ争ふ町また家はたたず。サタンもしサタンを
 八三 逐ひ出さば、自ら分れ争ふなり。さらばその國いかで立
 八四 つべき。我もしベルゼブルによりて悪鬼を逐ひ出さば、
 八五 汝らの子は誰によりて之を逐ひ出すか。この故に彼らは
 八六 汝らの審判人となるべし。されど我もし神の靈によりて
 八七 悪鬼を逐ひ出さば、神の國は既に汝らに到れるなり。
 八八 人まづ強き者を縛らば、いかで強き者の家に入りて、
 八九 その家財を奪ふことを得ん、縛りて後その家を奪ふべ
 九〇 し。我と憎ならぬ者は我にそむき、我とともに集めぬ者
 九一 は救すなり。この故に汝らに告ぐ、人の凡ての罪と瀆と
 九二 は赦されん、されど御靈を瀆すことは赦されじ。誰にて
 九三 も言をもて人の子に逆ぶ者は赦されん、されど言をもて
 九四 聖靈に逆ぶ者は、この世にても後の世にても赦されじ。
 九五 或は樹をも善しとし、果をも善しとせよ。或は樹をも
 九六 惡しとし、果をも惡しとせよ。樹は果によりて知らるる
 九七 なり。虵の裔よ、なんぢら惡しき者なるに、争て善き
 九八 ことを言ひ得んや。それ心に満つるより口に言はるる
 九九 なり。善き人は善き倉より善き物をいだし、惡しき人は
 一〇〇 惡しき倉より惡しき物をいだす。われ汝らに告ぐ、人の
 一〇一 語る凡ての虚しき言は、審判の日に糺さるべし。それは

汝の言によりて義とせられ、汝の言によりて罪せらるるなり」

ここに或學者・パリサイ人ら答へて言ふ「師よ、われら汝の徴を見んことを願ふ」答へて言ひたまふ「邪曲にして不義なる代は徴を求む、されど預言者ヨナの徴のほかに徴は與へられじ。即ち「ヨナが三日三夜、大魚の腹の中に在りし」ごとく、人の子も三日三夜、地の中に在るべきなり。ニネベの人、審判のとき今の代の人とともに立ちて之が罪を定めん、彼らはヨナの宜ぶる言によりて悔改めたり。視よ、ヨナよりも勝るもの此處に在り。南の女王、審判のとき今の代の人とともに起きて之が罪を定めん、彼はソロモンの智慧を聽かんとて地の極より來れり。視よ、ソロモンよりも勝る者ここに在り。穢れし靈、人を出づるときは、水なき處を巡りて休を求む、而して得ず。乃ち「わが出てし家に歸らん」といひ、歸りて、その家の空きて掃き淨められ、飾られたるを見、遂に往きて己より惡しき他の七つの靈を連れきたり、共に入りて此處に住む。されば其の人の後の狀は前よりも惡しくなるなり。邪曲なる此の代もまた斯くの如くならん」

イエスなほ群衆にかり居給ふとき、視よ、その母と兄弟たちと、彼に物言はんとて外に立つ。或人イエスに言ふ「視よ、なんちの母と兄弟たちと、汝に物言はんとて外に立てり」イエス告げし者に答へて言ひたまふ「わが母とは誰ぞ、わが兄弟とは誰ぞ」かくて手をのべ、弟子たちを指して言ひたまふ「視よ、これは我が母、わが兄弟なり。誰にても天にいます我が父の御意をおこなふ者は、即ち我が兄弟、わが姉妹、わが母なり」

その日イエス家を出でて、海邊に坐したまふ。大なる群衆もとに集りたれば、イエスは舟に乗りて坐したまひ、群衆はみな岸に立てり。譬にて數多の事を語りて言ひたまふ、「視よ、種播く者まかんとて出づ。播くとき路の傍らに落ちし種あり、鳥きたりて啄む。土うすき硬地に落ちし種あり、土深からぬによりて速かに萌え出でたれど、日の昇りし時やけて根なき故に枯る。茨の地に落ちし種あり、茨そだちて之を塞ぐ。良き地に落ちし種あり、あるひは百倍、あるひは六十倍、あるひは三十倍の實を結べり。耳ある者は聽くべし」

弟子たち御許に來りて言ふ「なにゆゑ譬にて彼らに

語り給ふか」答へて言ひ給ふ「なんぢらは天國の奧義を知ることを許されたれど、彼らは許されず。それ誰にても、有てる人は與へられて愈々豐ならん。されど有たぬ人は、その有てる物をも取らるべし。この故に彼らには譬にて語る、これ彼らは見ゆれども見ず、聞ゆれども聽かず、また悟らぬ故なり。かくてイザヤの預言は、彼らの上に成就す。曰く

「なんぢら聞きて聞けども悟らず、見て見れども認めず、この民の心は鈍く、耳は聞くに懶く、目は閉ぢたればなり。これ目にて見、耳にて聽き、心にて悟り、翻へりて、我に驚さる事なからん爲なり」

されど汝らの目なんぢらの耳は、見るゆゑに聞くゆゑに、幸福なり。まことに汝らに告ぐ、多くの預言者・義人は、汝らが見る所を見んとせしが見ず、なんぢらが聞く所を聞かんとせしが聞かざりしなり。されば汝ら種播く者の譬を聽け。誰にても天國の言をききて悟らぬ

ときは、惡しき者きたりて、其の心に播かれたるものを奪ふ。路の傍らに播かれしとは斯かる人なり。硬地に播かれしとは、御言をききて、直ちに喜び受くれども、己に根なければ暫し耐ふるのみにて、御言のために艱難あるひは迫害の起るときは、直ちに踏くものなり。茨の中に播かれしとは、御言をきけども、世の心勞と財貨の惑とに、御言を塞がれて實らぬものなり。良き地に播かれしとは、御言をききて悟り、實を結びて、あるひは百倍、あるひは六十倍、あるひは三十倍に至るものなり」

また他の譬を示して言ひたまふ「天國は良き種を畑にまく人のごとし。人々の眠れる間に、仇きたりて麥のなかに毒麥を播きて去りぬ。苗はえ出でて實りたるとき、毒麥もあらはる。僕ども來りて家主にいふ「主よ、畑に播きしは良き種ならずや、然るに如何にして毒麥あるか」主人いふ「仇のなしたるなり」僕ども言ふ「さらば我らが往きて之を抜き集むるを欲するか」主人いふ「いな、恐らくは毒麥を抜き集めんとて、麥をも共に抜かん。兩ながら收穫まで育つに任せよ。收穫のとき我かる者に「まづ毒麥を抜きあつめて、焚くために之を

東ね、麥はあつめて我が倉に納れよ」と言はん
 三二 また他の譬を示して言ひたまふ「天國は一粒の芥種
 三三 のごとし、人これを取りてその畑に播くときは、萬の種
 三四 よりも小けれど、育ちては他の野菜よりも大く、樹と
 三五 なりて、空の鳥きたり其の枝に宿るほどなり」

また他の譬を語りたまふ「天國はパンだねのごと
 三六 し、女これを取りて三斗の粉の中に入るれば、ことごと
 三七 く脹れいだすなり」

イエスすべて此等のことを、譬にて群衆に語りたま
 三八 ふ、譬ならては何事も語り給はず。これ預言者によりて
 三九 云はれたる言の成就せん爲なり。曰く、

「われ譬を設けて口を開き、

世の創より隠れたる事を言ひ出さん」

ここに群衆を去らしめて、家に入りたまふ。弟子た
 四〇 ち御許に來りて言ふ「畑の毒麥の譬を我らに解きたま
 四一 へ」答へて言ひ給ふ「良き種を播く者は人の子なり、畑
 四二 は世界なり、良き種は天國の子どもなり、毒麥は悪しき
 四三 者の子どもなり、之を播きし仇は悪魔なり、收穫は世の
 四四 終なり、刈る者は御使たちなり。されば毒麥の集められ
 四五 て火に焚かるる如く、世の終にも斯くあるべし。人の子

その使たちを遣さん。彼ら御國の中より凡ての顛頭と
 四六 なる物と不法をなす者とを集めて、火の爐に投げ入るべ
 四七 し、其處にて哀哭・切齒することあらん。其のとき義人
 四八 は、父の御國にて日のごとく輝かん。耳ある者は聴く
 四九 べし。

天國は畑に隠れたる寶のごとし。人見出さば、之を
 五〇 隠しおきて、喜びゆき、有てる物をことごとく賣りて
 五一 其の畑を買ふなり。

また天國は良き眞珠を求むる商人のごとし。價たか
 五二 き眞珠一つを見出さば、往きて有てる物をことごとく
 五三 賣りて、之を買ふなり。

また天國は、海におろして各様のものを集むる網の
 五四 ごとし。充つれば岸にひきあげ、坐して良きものを器に
 五五 入れ、悪しきものを棄つるなり。世の終にも斯くあるべ
 五六 し。御使たち出でて、義人の中より悪人を分ちて、之を
 五七 火の爐に投げ入るべし。其處にて哀哭・切齒すること
 五八 あらん。

汝等これらの事をみな悟りしか「彼等いふ「然り」
 五九 また言ひ給ふ「この故に、天國のことを教へられたる
 六〇 凡ての學者は、新しき物と舊き物とをその倉より出す

家主のごとし」

イエスこれらの譬を終へて此處を去りたまふ。己が
 六一 郷にいたり、會堂にて教へ給へば、人々おどろきて言ふ
 六二 「この人はこの智慧と此等の能力とを何處より得しぞ。

これ木匠の子にあらずや、其の母はマリヤ、其の兄弟
 六三 はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダにあらずや。又その姉妹
 六四 も皆われらと共にをるに非ずや。然るに此等のすべての
 六五 事は何處より得しぞ」遂に人々かれに蹟けり。イエス
 六六 彼らに言ひたまふ「預言者は、おのが郷おのが家の外に
 六七 て尊ばれざる事なし」彼らの不信仰によりて、其處に
 六八 ては多くの能力ある業を爲し給はざりき。

そのころ、國守ヘロデ、イエスの噂をきき

て、侍臣どもに言ふ「これバプテスマのヨハネなり。
 六九 かれ死人の中より甦へりたり、さればこそ此等の能力
 七〇 その内に働くなれ」ヘロデ先に、己が兄弟ピロポの妻
 七一 ヘロデヤの爲にヨハネを捕へ、縛りて獄に入れたり。

ヨハネ、ヘロデに「かの女を納るるは宜しからず」と言
 七二 ひしに囚る。かくてヘロデ、ヨハネを殺さんと思へど、
 七三 群衆を懼れたり。群衆ヨハネを預言者とすればなり。
 七四 然るにヘロデの誕生日に當り、ヘロデヤの娘その席上

に舞をまひてヘロデを喜ばせられたれば、ヘロデ之に何にて
 七五 も求むるままに與へんと誓へり。娘その母に唆かされて
 七六 言ふ「バプテスマのヨハネの首を盆に載せてここに賜は
 七七 れ」王憂ひたれど、その誓と席に在る者とに對して、之
 七八 を與ふることを命じ、人を遣し獄にてヨハネの首を斬
 七九 り、その首を盆にのせて持ち來らしめ、之を少女に與ふ。
 八〇 少女はこれを母に捧ぐ。ヨハネの弟子たち來り、屍體を
 八一 取りて葬り、往きてイエスに告ぐ。

イエス之を聞きて人を避け、其處より舟にのりて寂
 八二 しき處に往き給ひしを、群衆ききて町々より徒歩にて
 八三 從ひゆく。イエス出でて大なる群衆を見、これを憫み
 八四 て、その病める者を醫し給へり。夕になりたれば、弟子
 八五 たち御許に來りて言ふ「ここは寂しき處、はや時晩し、
 八六 群衆を去らしめ、村々に往きて、己が爲に食物を買はせ
 八七 給へ」イエス言ひ給ふ「かれら往くに及ばず、汝ら之に
 八八 食物を與へよ」弟子たち言ふ「われらが此處にもてる
 八九 は、唯五つのパンと二つの魚とのみ」イエス言ひ給ふ

「それを我に持ちきたれ」かくて群衆に命じて草の上に
 九〇 坐せしめ、五つのパンと二つの魚とを取り、天を仰ぎて
 九一 祝し、パンを裂きて、弟子たちに與へ給へば、弟子たち

二〇 之を群衆に與ふ。凡ての人食ひて飽く、裂きたる餘を
 二一 集めしに十二の筐に満ちたり。食ひし者は、女と子供と
 二二 を除きて凡そ五千人なりき。
 二三 イエス直ちに弟子たちを強ひて舟に乗らせ、自ら
 二四 群衆をかへす間に、彼方の岸に先に往かしむ。かくて
 二五 群衆を去らしめてのち、祈らんとて密に山に登り、夕に
 二六 なりて獨そこにみ給ふ。舟ははや陸より數丁はなれ、
 二七 風逆ふによりて波に難されたり。夜明の四時ごろ、
 二八 イエス海の上を歩みて、彼らに到り給ひしに、弟子たち
 二九 其の海の上を歩み給ふを見て心騒ぎ、變化の者なりと
 三〇 言ひて懼れ叫ぶ。イエス直ちに彼らに語りて言ひたまふ
 三一 「心安かれ、我なり、懼るな」ベテロ答へて言ふ「主よ、
 三二 もし汝ならば我に命じ、水を踏みて御許に到らしめ給
 三三 へ」「來れ」と言ひ給へば、ベテロ舟より下り、水の上
 三四 を歩みてイエスの許に往く。然るに風を見て懼れ、沈み
 三五 かかりければ、叫びて言ふ「主よ、我を救ひたまへ」
 三六 イエス直ちに御手を伸べ、これを捉へて言ひ給ふ「ああ
 三七 信仰すき者よ、何ぞ疑ふか」相共に舟に乗りしとき、
 三八 風やみたり。舟に居る者どもイエスを拜して言ふ「まこ
 三九 とに汝は神の子なり」

三九 遂に渡りてゲネサレの地に著きしに、その處の人々
 四〇 イエスを認めて、あまねく四方に人をつかはし、又すべ
 四一 ての病める者を連れきたり。ただ御衣の總にだに觸ら
 四二 しめ給はんことを願ふ。觸りし者はみな醫されたり。
 四三 第一五章 ここにパリサイ人・學者ら、エルサレムよ
 四四 り來りてイエスに言ふ、「なにゆゑ汝の弟子は、古への
 四五 人の言傳を犯すか。食事のときに手を洗はぬなり」答へ
 四六 て言ひ給ふ「なにゆゑ汝らは、また汝らの言傳によりて
 四七 神の誠命を犯すか。即ち神は「父母を敬へ」と言ひ「父
 四八 また母を罵る者は必ず殺さるべし」と言ひたまへり。
 四九 然るに汝らは「誰にても父また母に對ひて、我が負ふ
 五〇 所のものは供物となりたり」と言はば、父また母を敬ふに
 五一 及ばず」と言ふ。斯くその言傳によりて神の言を空しう
 五二 す。偽善者よ、宜なる哉、イザヤは汝らに就きて能く
 五三 預言せり。曰く
 五四 「この民は口唇にて我を敬ふ、
 五五 されど其の心は我に遠ざかる。
 五六 ただ徒らに我を拜む、
 五七 人の訓誡を教とし教へて」
 五八 かくて群衆を呼び寄せて言ひたまふ「聽きて悟れ、

二〇 口に入るものは人を汚さず、されど口より出づるもの
 二一 は、これ人を汚すなり」ここに弟子たち御許に來りてい
 二二 ふ「御言をききてパリサイ人の蹟きたるを知り給ふか」
 二三 答へて言ひ給ふ「わが天の父の植ゑ給はぬものは、み
 二四 な抜かれん。彼らを捨ておけ、盲人を手引する盲人なり、
 二五 盲人もし盲人を手引せば、二人とも穴に落ちん」ベテロ
 二六 答へて言ふ「その譬を我らに解き給へ」イエス言ひ給ふ
 二七 「なんぢらも今は悟なきか。凡て口に入るものは腹に
 二八 ゆき、遂に厠に棄てらるる事を悟らぬか。されど口より
 二九 出づるものは心より出づ、これ人を汚すものなり。それ
 三〇 心より惡しき念いづ、すなはち人殺・姦淫・淫行・竊盜・
 三一 偽證・誹謗、これらは人を汚すものなり、されど洗はぬ
 三二 手にて食する事は人を汚さず」
 三三 イエスここを去りてツロとシドンとの地方に往き給
 三四 ふ。觀よ、カナンの女その邊より出てきたり、叫びて
 三五 「主よ、ダビデの子よ、我を憫み給へ、わが娘、惡鬼に
 三六 つかれて甚く苦しむ」と言ふ。されどイエス一言も答へ
 三七 給はず。弟子たち來り請ひて言ふ「女を歸したまへ、
 三八 我らの後より叫ぶなり」答へて言ひたまふ「我はイス
 三九 ラエルの家の失せたる羊のほかに遣されず」女きたり

四〇 拜して言ふ「主よ、我を助けたまへ」答へて言ひたまふ
 四一 「子供のパンをとりて、小狗に投げ與ふるは善からず」
 四二 女いふ「然り、主よ、小狗も主人の食卓よりおつる
 四三 食屑を食ふなり」ここにイエス答へて言ひたまふ「をん
 四四 なよ、汝の信仰は大なるかな、願のごとく汝になれ」
 四五 娘この時より癒えたり。
 四六 イエス此處を去り、ガリラヤの海邊にいたり、而し
 四七 て山に登り、そこに坐し給ふ。大なる群衆、跛者・不具・
 四八 盲人・啞者および他の多くの者を連れ來りて、イエスの
 四九 足下に置きたれば、醫し給へり。群衆は、啞者の物
 五〇 いひ、不具の態え、跛者の歩み、盲人の見えたるを見て
 五一 之を怪しみ、イスラエルの神を崇めたり。
 五二 イエス弟子たちを召して言ひ給ふ「われ此の群衆を
 五三 あはれむ、既に三日われと借にをりて食ふべき物なし。
 五四 飢ゑたるままにて歸らしむるを好まず、恐らくは途にて
 五五 疲れ果てん」弟子たち言ふ「この寂しき地にて、斯く
 五六 大なる群衆を飽かしむべき多くのパンを、何處より得べ
 五七 き」イエス言ひ給ふ「パン幾つあるか」彼らいふ「七つ、
 五八 また小さき魚すこしあり」イエス群衆に命じて地に坐せし
 五九 め、七つのパンと魚とを取り、謝して之をさき弟子たち

三七 到與へ給へば、弟子たち之を群衆に與ふ。凡ての人
 くらひて飽き、裂きたる餘を拾ひしに、七つの籃に満ち
 たり。食ひし者は、女と子供とを除きて四千人なりき。
 三八 イエス群衆をかへし、舟に乗りてマガダンの地方に往
 き給へり。

第一八章

一 パリサイ人とサドカイ人と來りてイエスを
 試み、天よりの徴を示さんことを請ふ。答へて言ひたま
 ふ「夕には汝ら「空あかき故に晴ならん」と言ひ、また
 朝には「そら赤くして曇る故に、今日は風雨ならん」と
 言ふ。なんぢら空の氣色を見分くることを知りて、時の
 徴を見分くること能はぬか。邪曲にして不義なる代は
 徴を求む、されどヨナの徴の外に徴は與へられじ」かく
 て彼らを離れて去り給ひぬ。

弟子たち彼方の岸に到りしに、パンを携ふることを
 忘れたり。イエス言ひたまふ「慎みてパリサイ人とサド
 カイ人とのパン種に心せよ」弟子たち互に「我らはパン
 を携へざりき」と語り合ふ。イエス之を知りて言ひ給ふ
 「あめ信仰する者よ、何ぞパン無きことを語り合ふか。
 未だ悟らぬか、五つのパンを五千人に分ちて、その餘
 を幾箇ひろひ、また七つのパンを四千人に分ちて、その

二 餘を幾箇ひろひしかを覚えぬか。我が言ひしはパンの事
 にあらぬを何ぞ悟らざる。唯パリサイ人とサドカイ人と
 のパンだねに心せよ」ここに弟子たちイエスの心せよと
 言ひ給ひしは、パンの種にはあらで、パリサイ人とサド
 カイ人との教なることを悟れり。

三 イエス、ビリポ・カイザリヤの地方にいたり、
 弟子たちに問ひて言ひたまふ「人々は人の子を誰と言ふ
 か」彼等いふ「或人はバプテスマのヨハネ、或人はエリ
 ヤ、或人はエレミヤ、また預言者の一人」彼らに言ひた
 まふ「なんぢらは我を誰と言ふか」シモン・ペテロ答へ
 て言ふ「なんぢはキリスト、活ける神の子なり」イエス
 答へて言ひ給ふ「バルヨナ・シモン、汝は幸福なり、汝
 之を示したるは血肉にあらず、天にいます我が父な
 り。我はまた汝に告ぐ、汝はペテロなり、我この磐の上
 に我が教會を建てん、黄泉の門はこれに勝たざるべし。
 われ天國の鍵を汝に與へん、凡そ汝が地に縛る所は
 天にても縛る、地に解く所は天にても解くなり」ここ
 にイエス、己がキリストなる事を誰にも告ぐなど、弟子
 たちを戒め給へり。
 四 この時よりイエス・キリスト、弟子たちに、己の

エルサレムに往きて、長老・祭司長・學者らより多くの
 苦難を受け、かつ殺され、三日めに甦へるべき事を示し
 始めたまふ。ペテロ、イエスを傍にひき戒め出でて言ふ
 「主よ、然あらざれ、此の事なんぢに起らざるべし」
 三三 イエス振り反りてペテロに言ひ給ふ「サタンよ、我が後
 に退け、汝はわが蹟物なり、汝は神のことを思はず、
 反つて人のことを思ふ」ここにイエス弟子たちに言ひた
 まふ「人もし我に従ひ來らんとせば、己をすて、己が
 十字架を負ひて、我に従へ。己が生命を救はんと思ふ者
 は、これを失ひ、我がために己が生命をうしなふ者は、
 二六 之を得べし。人、全世界を贏くとも、己が生命を損せば、
 二七 何の益あらん、又その生命の代に何を與へんや。人の子
 は父の榮光をもて、御使たちと共に來らん。その時おの
 二八 おのの行爲に隨ひて報ゆべし。まことに汝らに告ぐ、
 二九 ここに立つ者のうちに、人の子のその國をもて來るを見
 るまでは、死を味はぬ者どもあり」

第一七章

一 六日の後、イエス、ペテロ、ヤコブ及び
 ヤコブの兄弟ヨハネを率きつれ、人を避けて高き山に登
 りたまふ。かくて彼らの前にてその状かはり、其の顔は
 日のごとく輝き、その衣は光のごとく白くなりぬ。視よ、

四 モーセとエリヤとイエスに語りつつ彼らに現る。ペテロ
 差出でてイエスに言ふ「主よ、我らの此處に居るは善し。
 御意ならば我ここに三つの廬を造り、一つを汝のため、
 一つをモーセのため、一つをエリヤの爲にせん」彼はほ
 語りをるとき、視よ、光れる雲かれらを覆ふ。また雲
 より聲あり、曰く「これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者
 なり、汝ら之に聽け」弟子たち之を聞きて倒れ伏し、
 懼るること甚だし。イエスその許にきたり之に觸りて
 「起きよ、懼るな」と言ひ給へば、彼ら目を擧げしに、
 二九 イエス一人の他は誰も見えざりき。

三〇 山を下るとき、イエス彼らに命じて言ひたまふ「人
 の子の死人の中より甦へるまでは、見たることを誰にも
 語るな」弟子たち問ひて言ふ「さらばエリヤ先づ來る
 べしと學者らの言ふは何ぞ」答へて言ひたまふ「實に
 三二 エリヤ來りて萬の事をあらためん。我なんぢらに告ぐ、
 三三 エリヤは既に來れり。されど人々これを知らず、反つて
 三三 心のままに待へり。かくのごとく人の子もまた人々より
 三三 苦しめらるべし」ここに弟子たちバプテスマのヨハネを
 指して言ひ給ひしなるを悟れり。
 三四 かれら群衆の許に到りしとき、或人御許にきたり

二五 跪づきて言ふ、「主よ、わが子を憫みたまへ。癩癩にて
 二六 難み、しばしば火の中に、しばしば水の中に倒るるな
 二七 り。之を御弟子たちに連れ來りしに、醫すこと能はざ
 二八 りき」イエス答へて言ひ給ふ「ああ信なき曲れる代なる
 二九 かな、我いつまで汝らと借にをらん、何時まで汝らを忍
 三〇 ばん。その子を我に連れきたれ」遂にイエスこれを禁め
 三一 給へば、悪鬼いてその子この時より瘡えたり。ここに
 三二 弟子たち密にイエスに來りて言ふ「われらは何故に逐ひ
 三三 出し得ざりしか」彼らに言ひ給ふ「なんぢら信仰うす
 三四 き故なり。まことに汝らに告ぐ、もし芥種一粒ほどの
 三五 信仰あらば、この山に「此處より彼處に移れ」と言ふと
 三六 も移らん、かくて汝ら能はぬこと無かるべし」
 三七 彼らガリラヤに集ひる時、イエス言ひたまふ「人
 三八 の子は人の手に付され、人々は之を殺さん、かくて三日
 三九 めに甦へるべし」弟子たち甚く悲しめり。
 四〇 彼らカナウムに到りしとき、納金を集むる者ども
 四一 ベテロに來りて言ふ「なんぢらの師は納金を納めぬか」
 四二 ベテロ「納む」と言ひ、やがて家に入りしに、逸速く
 四三 イエス言ひ給ふ「シモンいかに思ふか、世の王たちは税
 四四 または貢を誰より取るか、己が子よりか、他の者よりか」

二六 「ベテロ言ふ「ほかの者より」イエス言ひ給ふ「されば
 二七 子は自由なり。されど彼らを踏かせぬ爲に、海に往き
 二八 て釣をたれ、初に上る魚をとれ、其の口をひらけば銀貨
 二九 一つを得ん、それを取りて我と汝との爲に納めよ」
 三〇 第一八章 一 そのとき弟子たちイエスに來りて言ふ「し
 三一 からば天國にて大なるは誰か」イエス幼兒を呼び、彼ら
 三二 の中に置きて言ひ給ふ「まことに汝らに告ぐ、もし汝ら
 三三 續へりて幼兒の如くならずば、天國に入るを得じ。され
 三四 ば誰にても此の幼兒のごとく己を卑うする者は、これ
 三五 天國にて大なる者なり。また我が名のために、かくの
 三六 ごとき一人の幼兒を受くる者は、我を受くるなり。され
 三七 ど我を信する此の小さな者の一人を踏かする者は、寧ろ
 三八 大なる礫石を頭に懸けられ、海の深處に沈められんかた
 三九 益なり。この世は頭物あるによりて禍害なるかな。頭物
 四〇 は必ず來らん、されど頭物を來らす人は禍害なるかな。
 四一 もし汝の手または足なんぢを踏かせば、切りて棄てよ。
 四二 不具または蹇跛にて生命に入るは、兩手兩足ありて永遠
 四三 の火に投げ入れらるるよりも勝るなり。もし汝の眼なん
 四四 ぢを踏かせば、抜きて棄てよ。片眼にて生命に入るは、
 四五 兩眼ありて火のゲヘナに投げ入れらるるよりも勝る
 四六 に在るなり」

一〇 なり。汝ら慎みて此の小さな者の一人をも侮るな。我
 一一 なんぢらに告ぐ、彼らの御使たちは天にありて、天に
 一二 います我が父の御顔を常に見るなり。」
 一三 汝等いかに
 一四 思ふか、百匹の羊を有てる人あらんに、若しその一匹
 一五 まよはば、九十九匹を山に遺しおき、往きて迷へるもの
 一六 を尋ねぬか。もし之を見出さば、まことに汝らに告ぐ、
 一七 迷はぬ九十九匹に勝りて此の一匹を喜ばん。かくのごと
 一八 く此の小さな者の一人の亡ぶるは、天にいます汝らの父の
 一九 御意にあらず。
 二〇 もし汝の兄弟罪を犯さば、往きてただ彼とのみ
 二一 相對して諫めよ。もし聽かば其の兄弟を得たるなり。
 二二 もし聽かずば一人、二人を伴ひ往け、これ二三の證人
 二三 の口に由りて、凡ての事の儘められん爲なり。もし彼等
 二四 にも聽かずば、教會に告げよ。もし教會にも聽かずば、
 二五 之を異邦人または取税人のごとき者とすべし。まことに
 二六 汝らに告ぐ、すべて汝らが地に縛く所は天にても縛き、
 二七 地にて解く所は天にても解くなり。また誠に汝らに
 二八 告ぐ、もし汝等のうち二人、何にても求むる事につき地
 二九 にて心をついにせば、天にいます我が父は之を成し給ふ
 三〇 べし。二三人わが名によりて集る所には、我もその中

二一 ここにベテロ御許に來りて言ふ「主よ、わが兄弟
 二二 われに對して罪を犯さば幾たび赦すべきか、七度までか」
 二三 イエス言ひたまふ「否、われ「七度まで」とは言はず
 二四 「七度を七十倍するまで」と言ふなり。この故に、天國は
 二五 その家來どもと計算をなさんとする王のごとし。計算を
 二六 始めしとき、一萬タラントの負債ある家來つれ來られし
 二七 が、償ひ方なかりしかば、其の主人、この者と其の妻子
 二八 と凡ての所有とを賣りて償ふことを命じたるに、その
 二九 家來ひれ伏し拜して言ふ「寛くし給へ、さらば悉とく
 三〇 償はん」その家來の主人あはれみて之を解き、その負債
 三一 を免したり。然るに其の家來いてて、己より百デナリ
 三二 を負ひたる一人の同僚にあひ、之をとらへ、喉を締めて
 三三 言ふ「負債を償へ」その同僚ひれ伏し、願ひて「寛くし
 三四 給へ、さらば償はん」と言へど、肯はずして往き、その
 三五 負債を償ふまで之を獄に入れたり。同僚ども有りし事を
 三六 見て甚く悲しみ、往きて有りし凡ての事をその主人に
 三七 告ぐ。ここに主人かれを呼び出して言ふ「惡しき家來よ、
 三八 なんぢ願ひしによりて、かの負債をことごとく免せり。
 三九 わが汝を憫みしごとく、汝もまた同僚を憫むべきに

三〇 あらざや」斯くその主人、怒りて、負債をことごとく
 三三 償ふまで彼を獄卒に付せり。もし汝等おのおの心より
 三五 兄弟を赦さずば、我が天の父も亦なんぢらに斯くのごと
 三六 く爲し給ふべし」

一 第一九章 イエスこれらの言を語り終へて、ガリラヤ
 二 を去り、ヨルダンの彼方なるユダヤの地方に來り給ひし
 三 に、大なる群衆したがつたれば、此處にて彼らを醫し
 四 給へり。

三 パリサイ人ら來り、イエスを試みて言ふ「何の故に
 四 かかはらず、人その妻を出すは可きか」答へて言ひたま
 五 ふ「人を造り給ひしもの、元始より之を男と女とに造り、
 六 而して、「かかる故に人は父母を離れ、その妻に合ひて、
 七 二人のもの一體となるべし」と言ひ給ひしを未だ讀まぬ
 八 か。されば、はや二人にはあらず、一體なり。この故に
 九 神の合せ給ひし者は、人これを離すべからず」彼らイエ
 一〇 スに言ふ「さらば何故モーセは離縁狀を與へて出すこと
 一一 を命じたるか」彼らに言ひ給ふ「モーセは汝らの心づれ
 一二 なきによりて妻を出すことを許したり。されど元始より
 一三 然にはあらぬなり。われ汝らに告ぐ、おほよそ淫行の故
 一四 ならず其の妻をいだし他に娶る者は、姦淫を行ふなり」

二〇 弟子たちイエスに言ふ「人もし妻のことに於てかくの
 二二 ごとくば、娶らざるに如かず」彼らに言ひたまふ「凡て
 二四 の人この言を受け容るるにはあらず、ただ授けられたる
 二六 者のみなり。それ生れながらの閨人あり、人に爲られた
 二八 る閨人あり、また天國のために自らなりたる閨人あり、
 三〇 之を受け容れうる者は受け容るべし」

三三 ここに人々イエスの手をおきて祈り給はんことを
 三五 望みて、幼児らを連れ來りしに、弟子たち禁められたば、
 三六 イエス言ひたまふ「幼児らを許せ、我に來るを止むな、
 三七 天國はかくのごとき者の國なり」かくて手を彼らの上に
 三八 おきて此處を去り給へり。

一 視よ、或人みもとに來りて言ふ「師よ、われ永遠の
 二 生命をうる爲には、如何なる善き事を爲すべきか」イエ
 三 ス言ひたまふ「善き事につきて何ぞ我に問ふか、善き者
 四 は唯一とりのみ。汝もし生命に入らんとせば誠命を
 五 守れ」彼いふ「孰を」イエス言ひたまふ「殺すなかれ」
 六 「姦淫するなかれ」「盜むなかれ」「偽證を立つる勿れ」
 七 「父と母とを敬へ」また「己のごとく汝の隣を愛す
 八 べし」その若者いふ「我みな之を守れり、なほ何を缺く
 九 か」イエス言ひたまふ「なんぢ若し全からんと思はば、

三 往きて汝の所有を賣りて貧しき者に施せ、さらば財寶を
 四 天に得ん。かつ來りて我に従へ」この言をききて、若者
 五 悲しみつつ去りぬ。大なる資産を有てる故なり。

一 一三 イエス弟子たちに言ひ給ふ「まことに汝らに告ぐ、
 二 富める者の天國に入るは難し。復なんぢらに告ぐ、富め
 三 る者の神の國に入るよりは、駱駝の針の孔を通るかた
 四 反つて易し」弟子たち之をきき、甚だしく驚きて言ふ

一 「さらば誰か救はるることを得ん」イエス彼らに目を
 二 注めて言ひ給ふ「これは人に能はねど、神は凡ての事を
 三 なし得るなり」ここにペテロ答へて言ふ「視よ、われら
 四 一切をすてて汝に従へり、されば何をすべきか」イエス

一 彼らに言ひ給ふ「まことに汝らに告ぐ、世あらたまりて
 二 人の子その榮光の座位に坐するとき、我に従へる汝等も
 三 また十二の座位に坐して、イスラエルの十二の族を審か
 四 ん。また凡そ我が名のために、或は家、あるひは兄弟、

一 あるひは姉妹、あるひは父、あるひは母、あるひは子、
 二 あるひは田畑を棄つる者は、數倍を受け、また永遠の
 三 生命を嗣がん。されど多くの先なる者後に、後なる者
 四 先になるべし。

第二〇章

天國は勞動人を葡萄園に雇ふために、朝

二 早く出でたる主人のごとし。一日一デナリの約束をなし
 三 て、勞動人どもを葡萄園に遣す。また九時ごろ出でて
 四 市場に空しく立つ者どもを見て、「なんぢらも葡萄園に
 五 往け、相當のものを與へん」といへば、彼らも往く。
 六 十二時頃と三時頃とに復いてて前のごとくす。五時頃
 七 また出でしに、なほ立つ者どものあるを見ていふ「何ゆ
 八 ゑ終日ここに空しく立つか」かれら言ふ「たれも我らを
 九 雇はぬ故なり」主人いふ「なんぢらも葡萄園に往け」
 一〇 夕になりて葡萄園の主人その家司に言ふ「勞動人を
 一一 呼びて、後の者より始め、先の者にまで賃銀をはらへ」
 一二 かくて五時ごろに雇はれしもの來りて、おのおの一デナ
 一三 リを受く。先の者きたりて、多く受くるならんと思ひ
 一四 しに、之も亦おのおの一デナリを受く。受けしとき、
 一五 家主にむかひ呟きて言ふ「この後の者どもは僅に一時間
 一六 はたらきたるに、汝は一日の勞と暑さとを忍びたる我ら
 一七 と均しく之を遇へり」主人こたへて其の一人に言ふ
 一八 「友よ、我なんぢに不正をなさず、汝は我と一デナリの
 一九 約束をせしにあらざや。己が物を取りて往け、この後の
 二〇 者に汝とひとしく與ふるは、我が意なり。わが物を我が
 二一 意のままにするは可からずや、我よきが故に汝の目

六 あしきか」かくのごとく後なる者は先に、先なる者は後になるべし」

七 イエス、エルサレムに上らんとし給ふとき、竊に十二弟子を近づけて、途すがら言ひ給ふ「視よ、我らエルサレムに上る、人の子は祭司長・學者らに付されん。彼ら之を死に定め、また嘲弄し、鞭うち、十字架につけん爲に異邦人に付さん、かくて彼は三日めに甦へるべし」

一〇 ここにゼベダイの子らの母、その子らと共に御許にきたり、拜して何事か求めんとしたるに、イエス彼に言ひたまふ「何を望むか」かれ言ふ「この我が二人の子が汝の御國にて、一人は汝の右に、一人は左に坐せんことを命じ給へ」イエス答へて言ひ給ふ「なんぢらは求むる所を知らず、我が飲まんとする酒杯を飲み得るか」かれら言ふ「得るなり」イエス言ひたまふ「實に汝らは我が酒杯を飲むべし、されど我が右左に坐するとは、これ我の與ふべきものならず、我が父より備へられたる人こそ與へらるるなれ」十人の弟子これ聞き、二人の兄弟の事によりて憤ほる。イエス彼ら呼びて言ひたまふ「異邦人の君のその民を宰どり、大なる者の

民の上に權を執ることは、汝らの知る所なり。汝らの中に於ては然らず、汝らの中に大ならんと思ふ者は、汝らの役者となり、首たらんと思ふ者は汝らの僕となるべし。かくのごとく、人の子の來れるも事へらるる爲に、あらず、反つて事ふることをなし、又おほくの人の贖價として己が生命を與へん爲なり」

彼らエリコを出づるとき、大なる群衆イエスに従へり。視よ、二人の盲人、路の傍らに坐しをりしが、イエスの過ぎ給ふことを聞き、叫びて言ふ「主よ、ダビデの子よ、我らを憐れたまへ」群衆かれらを禁めて黙さしめんとしたれど、愈々叫びて言ふ「主よ、ダビデの子よ、我らを憐れ給へ」イエス立ちどまり、彼ら呼びて言ひ給ふ「わが汝らに何を爲さんことを望むか」彼ら言ふ「主よ、目の開かれんことなり」イエスいたく憐みて彼らの目に觸り給へば、直ちに物見ることを得て、イエスに従へり。

彼らエルサレムに近づき、オリブ山の邊なるベテバゲに到りし時、イエス二人の弟子を遣さんとて言ひ給ふ「向の村にゆけ、やがて繋ぎたる驢馬のその子とともに在るを見ん、解きて我に牽ききたれ。

三 誰かもし汝らに何とか言はば「主の用なり」と言へ、さらば直ちに之を遣さん」此の事の起しは、預言者によりて云はれたる言の成就せん爲なり。曰く

四 「シオンの娘に告げよ、
五 視よ、汝の王なんぢに來り給ふ。
六 柔和にして驢馬に乗り、
七 輓を負ふ驢馬の子に乗りて」

八 弟子たち往きて、イエスの命じ給へる如くして、驢馬とその子とを牽ききたり、己が衣をその上におきたれば、イエス之に乗りたまふ。群衆の多くはその衣を途にしき、或者は樹の枝を伐りて途に敷く。かつ前にゆき後にしたがふ群衆よばはりて言ふ「ダビデの子にホサナ、讚むべきかな、主の御名によりて來る者。いと高き處にてホサナ」遂にエルサレムに入り給へば、都擧りて驢立ちて言ふ「これは誰なるぞ」群衆いふ「これガラヤのナザレより出でたる預言者イエスなり」
一三 イエス宮に入り、その内なる凡ての賣買する者を逐ひいだし、兩替する者の臺、餽を賣る者の腰掛を倒して言ひ給ふ「わが家は祈の家と稱へらるべし」と録されたるに、汝らは之を強盜の巢となす」宮にて盲人・跛者

一五 ども御許に來りたれば、之を醫したまへり。祭司長・學者らイエスの爲し給へる不思議なる業と、宮にて呼はり「ダビデの子にホサナ」と言ひをる子等とを見、憤ほりて、イエスに言ふ「なんぢ彼らの言ふところを聞くか」イエス言ひ給ふ「然り」嬰兒の口に讚美を備へ給へり」とあるを未だ讀まぬか」遂に彼らを離れ、都を出でてベタニヤにゆき、其處に宿り給ふ。

朝早く都にかへる時、イエス飢ゑたまふ。路の傍なる一もとの無花果の樹を見て、その下に到り給ひしに、葉のほかに何をも見出さず、之に對ひて「今より後いつまでも果を結ばざれ」と言ひ給へば、無花果の樹たちどころに枯れたり。弟子たち之を見、怪しみて言ふ「無花果の樹の斯く立刻に枯れたるは何ぞや」イエス答へて言ひ給ふ「まことに汝らに告ぐ、もし汝ら信仰ありて疑はずば、實に此の無花果の樹にありし如きことを爲し得るのみならず、此の山に「移りて海に入れ」と言ふとも亦成るべし。かつ祈のとき何にても信じて求めば、ことごとく得べし」

宮に到りて教へ給ふとき、祭司長・民の長老ら御許に來りて言ふ「何の權威をもて此等の事をなすか、誰が

この權威を授けしか」イエス答へて言ひたまふ「我も一言なんぢらに問はん、もし夫を告げなば、我もまた何の權威をもて此等のことを爲すかを告げん。ヨハネのバプテスマは何處よりぞ、天よりか、人よりか」かれら互に論じて言ふ「もし天よりと言はば「何故かれを信ぜざりし」と言はん。もし人よりと言はんか、人みなヨハネを預言者と認むれば、我らは群衆を恐る」遂に答へて「知らず」と言へり。イエスもまた言ひたまふ「我も何の權威をもて此等のことを爲すか汝らに告げじ。なんぢら如何に思ふか、或人ふたりの子ありしが、その兄にゆきて言ふ「子よ、今日、葡萄園に往きて働け」答へて「主よ、我ゆかん」と言ひて終に往かず。また弟にゆきて同じやうに言ひしに、答へて「往かじ」と言ひたれど、後くいて往きたり。この二人のうち孰か父の意を爲しし」彼ら曰ふ「後の者なり」イエス言ひ給ふ「まことに汝らに告ぐ、取税人と遊女とは汝らに先だちて神の國に入るなり。それヨハネの道をもて來りしに、汝らは彼を信ぜず、取税人と遊女とは信じたり。然るに汝らは之を見し後も、なほ悔改めずして信ぜざりき。また一つの譬を聽け、ある家主、葡萄園をつくりて

籬をめぐらし、中に酒槽を掘り、樽を建て、農夫どもに貸して遠く旅立せり。果期近づきたれば、その果を受取らんとて僕らを農夫どもの許に遣ししに、農夫どもその僕らを執へて、一人を打ちたたき、一人をころし、一人を石にて撃てり。復ほかの僕らを前よりも多く遣ししに、之をも同じやうに遇へり。「わが子は敬ふならん」と言ひて、遂にその子を遣ししに、農夫ども此の子を見て互に言ふ「これは世嗣なり、いざ殺して、その嗣業を取らん」かくて之をとらへ、葡萄園の外に逐ひ出して殺せり。さらば葡萄園の主人きたる時、この農夫どもに何を爲さんか」かれら言ふ「その悪人どもを飽くまで滅し、果期におよびて果を納むる他の農夫どもに葡萄園を貸し與ふべし」イエス言ひたまふ「聖書に「造家者らの棄てたる石は、これぞ隅の首石となれる。これ主によりて成れるにて、われらの目には奇しきなり」とあるを汝ら未だ讀まぬか。この故に汝らに告ぐ、汝らは神の國をとられ、其の果を結ぶ國人は、之を與へらるべし。この石の上に倒るる者はくだけ、又この石、人の

うへに倒るれば、其の人を徹塵とせん」祭司長・パリサイ人ら、イエスの譬をきき、己らを指して語り給へるを悟り、イエスを執へんと思へど群衆を恐れたり、群衆かれを預言者とするに因る。

第二章 一 イエスマた譬をもて答へて言ひ給ふ「天國は己が子のために婚禮を設くる王のごとし。婚禮に招きおきたる人々を迎へんとて僕どもを遣ししに、來るを肯はず。復ほかの僕どもを遣すとて言ふ「招きたる人々に告げよ、晝餐は既に備りたり。我が牛も肥えたる畜も屠られて、凡ての物備りたれば、婚禮に來れ」と然るに人々顧みずして、或者は己が畑に、或者は己が商賣に往けり。また他の者は僕どもを執へて、辱しめかつ殺したれば、王怒りて軍勢を遣し、かの兇行者を滅して其の町を燒きたり。かくて僕どもに言ふ「婚禮は既に備りたれど、招きたる者どもは相應しからず。されば汝ら街に往きて、遇ふほどの者を婚禮に招け」僕ども途に出て、善きも悪しきも遇ふほどの者をみな集めたれば、婚禮の席は客にて満てり。王、客を見んとて入り來り、一人の禮服を着けぬ者あるを見て、之に言ふ「友よ、如何なれば禮服を着けずして此處に入りたるか」かれ

黙しむたり。ここに王、侍者らに言ふ「その手足を縛りて外の暗黒に投げいだけ、其處にて哀哭・切齒することあらん」それ招かるる者は多かれど、選ばるる者は少し」

ここにパリサイ人ら出て、如何にしてかイエスを言の綱に係けんと相議り、その弟子らをヘロデ黨の者どもと共に遣して言はしむ「師よ、我らは知る、なんぢは眞にして、眞をもて神の道を教へ、かつ誰をも憚りたまふ事なし、人の外貌を見給はぬ故なり。されば我らに告げたまへ、貢をカイザルに納むるは可きか、悪しきか、如何に思ひたまふ」イエスその邪曲なるを知りて言ひたまふ「偽善者よ、なんぞ我を試むるか。貢の金を我に見せよ」彼らデナリ一つを持ち來る。イエス言ひ給ふ「これは誰の像、たれの號なるか」彼ら言ふ「カイザルのなり」ここに彼らに言ひ給ふ「さらばカイザルの物はカイザルに、神の物は神に納めよ」彼ら之を聞きて怪しみ、イエスを離れて去り往けり。

復活なしといふサドカイ人ら、その日みもとに來り問ひて言ふ「師よ、モーセは「人もし子なくして死なば、其の兄弟かれの妻を娶りて、兄弟のために世嗣を擧ぐ

三〇 は預言者の墓をたて、義人の碑を飾りて言ふ「我らもし
 先祖の時にありしならば、預言者の血を流すことに與せ
 ざりしものを」と。かく汝らは預言者を殺しし者の子た
 三二 るを自ら證す。なんぢら己が先祖の俣目を充せ。蛇よ、
 三三 蝮の裔よ、なんぢら争てゲヘナの刑罰を避け得んや。
 三四 この故に視よ、我なんぢらに預言者・智者・學者らを
 三三 遣はさん。其の中の或者を殺し、十字架につけ、或者を
 三三 汝らの會堂にて鞭うち、町より町に逐ひ苦しめん。之に
 三六 よりて義人アベルの血より、聖所と祭壇との間にて汝ら
 三六 が殺ししバラキヤの子ザカリヤの血に至るまで、地上に
 三六 て流したる正しき血は、皆なんぢらに報い來らん。まこ
 三六 とに汝らに告ぐ、これらの事はみな今の代に報い來る
 三六 べし。
 三七 ああエルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、
 三六 遣はしたる人々を石にて撃つ者よ、牝雞のその雛を翼の
 三六 下に集むることく、我なんぢの子どもを集めんとせしこ
 三八 と幾度ぞや、されど汝らは好まざりき。視よ、汝らの
 三九 家は廢てられて汝らに遺らん。われ汝らに告ぐ「讀むべ
 三九 きかな、主の名によりて來る者」と、汝等のいふ時の
 三九 至るまでは、今より我を見ざるべし」

一 第一四章 イエス宮を出ててゆき給ふとき、弟子たち
 二 宮の建造物を示さんとて御許に來りしに、答へて言ひ給
 三 ふ「なんぢら此の一切の物を見ぬか。誠に汝らに告ぐ
 四 此處に一つの石も崩されずしては石の上に遺らじ」
 五 オリーブ山に坐し給ひしとき、弟子たち竊に御許に
 六 來りて言ふ「われらに告げ給へ、これらの事は何時ある
 七 か、又なんぢの來り給ふと世の終とは、何の兆あるか」
 八 イエス答へて言ひ給ふ「なんぢら人に惑されぬやうに
 九 心せよ。多くの者がわが名を冒し來り「我はキリストな
 一〇 り」と言ひて多くの人を惑さん。又なんぢら戦争と戦争
 一一 の噂とを聞かん、憤みて懼るな。かかる事はあるべき
 一二 なり、されど未だ終にはあらず。即ち「民は民に、國は
 一三 國に逆ひて起たん」また處々に饑饉と地震とあらん。
 一四 此等はみな産の苦難の始なり。そのとき人々なんぢら
 一五 を患難に付し、また殺さん。汝等わが名の爲に、もろもろ
 一六 の國人に憎まれん。その時おほくの人つまづき、且たが
 一七 ひに付し、互に憎まん。多くの偽預言者おこりて、多く
 一八 の人を惑さん。また不法の増すによりて、多くの人の愛
 一九 ひややかにならん。されど終まで耐へしるぶ者は救はる
 二〇 べし。御國のこの福音は、もろもろの國人に證をなさん

二一 ため全世界に宣傳へられん、而してのち終は至るべし。
 二二 なんぢら預言者ダニエルによりて言はれたる「荒す
 二二 惡むべき者」の聖なる處に立つを見ば（讀む者さこれ）
 二六 その時エダヤに居る者どもは山に遁れよ。屋の上に
 二六 居る者はその家の物を取り出さんとて下るな。畑にをる
 二八 者は上衣を取らんとて歸るな。その日には孕りたる者と
 二八 乳を哺まする者とは禍害なるかな。汝らの遁ぐることに
 二九 冬または安息日に起らぬやうに祈れ。そのとき大なる
 三〇 患難あらん、世の創より今に至るまでかかる患難はなく、
 三〇 また後にも無からん。その日も少しくせられずば、一人
 三二 だに救はるる者なからん、されど選民の爲にその日少く
 三三 せらるべし。その時あるひは「視よ、キリスト此處にあ
 三三 り」或は「此處にあり」と言ふ者ありとも信ずな。偽
 三三 キリスト・偽預言者おこりて、大なる徴と不思議とを
 三五 現し、爲し得べくば選民をも惑さんとするなり。視よ、
 三五 あらかじめ之を汝らに告げおくなり。されば人もし汝ら
 三六 に「視よ、彼は荒野にあり」といふとも出て往くな「視
 三七 よ、彼は部屋にあり」と言ふとも信ずな。電光の東より
 三六 出でて西にまで閃きわたる如く、人の子の來るも亦然ら
 三八 ん。それ死骸のある處には驚あつたらん。

二九 これらの日の患難ののち直ちに日は暗く、月は光を
 三〇 發たず、星は空より隕ち、天の萬象ふるひ動かん。
 三〇 そのとき人の子の光、天に現れん。そのとき地上の
 三二 諸族みな嘆き、かつ人の子の能力と大なる榮光とをもて、
 三二 天の雲に乗り來るを見ん。また彼は使たちを大なるラッ
 三三 パの聲とともに遣さん。使たちは天の此の極より彼の極
 三三 まで、四方より選民を集めん。
 三三 無花果の樹よりの譬をまなべ、その枝すてに柔かく
 三三 なりて葉芽ぐめば、夏の近きを知る。かくのごとく汝ら
 三三 も此等のすべての事を見れば、人の子すてに近づきて門邊
 三三 に到るを知れ。誠に汝らに告ぐ、これらの事ごとごとく
 三三 成るまで、今の代は過ぎ往くまじ。天地は過ぎゆかん、
 三三 されど我が言は過ぎ往くことなし。その日その時を知る
 三三 者なし、天の使たちも知らず、子も知らず、ただ父のみ
 三三 知り給ふ。ノアの時のごとく、人の子の來るも然あるべ
 三三 し。曾て洪水の前ノア方舟に入る日まで、人々飲み
 三三 食ひ、娶り嫁がせなどし、洪水の來りて悉く滅すまで
 三三 は知らざりき、人の子の來るも然あるべし。そのとき
 三三 二人の男畑にをらんに、一人は取られ一人は遺されん。
 三三 二人の女磨ひき居らんに、一人は取られ一人は遺され

れん。されば目を覺しをれ、汝らの主のきたるは、何れの日なるかを知らざればなり。汝等これを恐れ、家主もし盗人いづれの時きたるか知らば、目をさまし居て、その家を穿たすまじ。この故に汝らも備へをれ、人の子は思はぬ時に來ればなり。主人が時に及びて食物を與へさする爲に、家の者のうへに立てたる忠實にして慧き僕は誰なるか。主人のきたる時、かく爲し居るを見らるる僕は幸福なり。まことに汝らに告ぐ、主人すべての所有を彼に掌どらすべし。もしその僕悪しくして、心のうちに主人は遅しと思ひて、その同輩を排きはじめ、酒徒らと飲食を共にせば、その僕の主人おはぬ日しらぬ時に來りて、之を烈しく笞うち、その報を偽善者と同じうせん。其處にて哀哭・切齒することあらん。

第一五章 このとき天國は、燈火を執りて新郎を迎へに出づる、十人の處女に比ふべし。その中の五人は愚にして五人は慧し。愚なる者は燈火をとりて油を携へず、慧きものは油を器に入れて燈火とともに携へたり。新郎遅かりしかば、皆まどろみて寢ぬ。夜半に「やよ、新郎なるぞ、出て迎へよ」と呼はる聲す。ここに處女みな起きてその燈火を整へたるに、愚なる者は慧きものに

言ふ「なんぢらの油を分けあたへよ、我らの燈火きゆるなり」慧きもの答へて言ふ「恐らくは我らと汝らとに足るまじ、寧ろ賣るものに往きて己がために買へ」彼ら買はんとて往きたる間に新郎きたりたれば、備へをりし者どもは彼とともに婚筵にいり、而して門は閉されたり。その後かの他の處女ども來りて「主よ、主よ、われらの爲にひらき給へ」と言ひしに、答へて「まことに汝らに告ぐ、我は汝らを知らず」と言へり。されば目を覺しをれ、汝らは其の日その時を知らざるなり。

また或人とほく旅立せんとして、其の僕どもを呼び、之に己が所有を預くるが如し。各人の能力に應じて、或者には五タラント、或者には二タラント、或者には一タラントを與へ置きて旅立せり。五タラントを受けし者は、直ちに往き、之をはたらかせて他に五タラントを贏け、二タラントを受けし者も同じく他に二タラントを贏く。然るに一タラントを受けし者は、往きて地を掘り、その主人の銀をかくし置けり。久しうして後この僕ども主人きたりて、彼らと計算したるに、五タラントを受けし者は他に五タラントを持ちきたりて言ふ「主よ、なんぢ我に五タラントを預けたりしが、視よ、他に

五タラントを贏けたり」主人いふ「宜いかな、善かつ忠なる僕、なんぢは僅なる物に忠なりき。我なんぢに多くの物を掌どらせん、汝の主人の歡喜に入れ」二タラントを受けし者も來りて言ふ「主よ、なんぢ我に二タラントを預けたりしが、視よ、他に二タラントを贏けたり」主人いふ「宜いかな、善かつ忠なる僕、なんぢは僅なる物に忠なりき。我なんぢに多くの物を掌どらせん、汝の主人の歡喜に入れ」また一タラントを受けし者もきたりて言ふ「主よ、我はなんぢの嚴しき人にて、播かぬ處より刈り、散さぬ處より斂むることを知るゆゑに、懼れてゆき、汝のタラントを地に藏しおけり。視よ、汝はなんぢの物を得たり」主人こたへて言ふ「惡しくかつ情れる僕、わが播かぬ處より刈り、散さぬ處より斂むることを知るか。さらば我が銀を銀行にあづけ置くべかりしなり、我きたりて利子とともに我が物をうけ取りしものを、されば彼のタラントを取りて十タラントを有てる人に與へよ。すべて有てる人は、與へられて愈々豊ならん。されど有たぬ者は、その有てる物をも取らるべし。而して此の無益なる僕を外の暗黒に逐ひいだせ、其處にて哀哭・切齒することあらん」

人の子その榮光をもて、もろもろの御使を率ゐきたる時、その榮光の座位に坐せん。かくてその前にもろもろの國人あつめられん、之を別つこと牧羊者が羊と山羊とを別つ如くして、羊をその右に、山羊をその左におかん。ここに王その右にをる者どもに言はん「わが父に祝せられたる者よ、來りて世の創より汝等のために備へられたる國を嗣げ。なんぢら我が飢ゑしときに食はせ、渴きしときに飲ませ、旅人なりし時に宿らせ、裸なりしときに衣せ、病みしときに訪ひ、獄に在りしときに來りたればなり」ここに正しき者ら答へて言はん「主よ、何時なんぢの飢ゑしを見て食はせ、渴きしを見て飲ませし。何時なんぢの旅人なりしを見て宿らせ、裸なりしを見て衣せし。何時なんぢの病みまた獄に在りしを見て、汝にいたりし」王こたへて言はん「まことに汝らに告ぐ、わが兄弟なる此等のいと小き者の一人になしたるは、即ち我に爲したるなり」かくてまた左にをる者どもに言はん「詛はれたる者よ、我を離れて惡魔とその使らとのために備へられたる永遠の火に入れ。なんぢら我が飢ゑしときに食はせず、渴きしときに飲ませず、旅人なりしときに宿らせず、裸なりしときに衣せず、病み

また獄に在りしときに訪はざればなり」ここに彼らも答へて言はん「主よ、いつ汝の飢え、或は渴き、或は旅人、あるひは裸、あるひは病み、或は獄に在りしを見て事へざりし」ここに王こたへて言はん「誠になんぢらに告ぐ、此等のいと小さいもの一人に爲さざりしは、即ち我になさざりしなり」とかくて、これらの者は去りて永遠の刑罰にいり、正しき者は永遠の生命に入らん」

一 イエスこれらの言をみな語りて、弟子たちに言ひ給ふ「なんぢらの知るところ、二日の後は過越の祭なり、人の子は十字架につけられん爲に賣らるべし」そのとき祭司長、民の長老、カヤパといふ大祭司の中庭に集り、詭計をもてイエスを捕へ、かつ殺さんと相議りたれど、又いふ「まつりの間は爲すべからず、恐らくは民の中に亂起らん」

六 イエス、ベタニヤにて癩病人シモンシモンのの家に居給ふ時、ある女、石膏シモンのの壺に入りたる貴き香油シモンのを持ちて、近づき來り、食事の席に就き居給ふイエスの首に注げり。弟子たち之を見て憤ほり言ふ「何故かく濫なる費をなすか。之を多くの金に賣りて、貧しき者に施すことを

得たりしものを」イエス之を知りて言ひたまふ「何ぞこの女を憫すか、我に善き事をなせるなり。貧しき者は常に汝らと借にをれど、我は常に借に居らず。この女の我が體に香油を注ぎしは、わが葬りの備をなせるなり。まことに汝らに告ぐ、全世界いづこにても、この福音の宣傳へらるる處には、この女のなしし事も記念として語らるべし」

一〇 ここに十二弟子の一人イスカリオテのユダといふ者、祭司長の許にゆきて言ふ「なんぢらに彼を付さば、何ほど我に與へんとするか」彼ら銀三十を量り出せり。ユダこの時よりイエスを付さんと好き機を窺ふ。

一七 除酵祭の初の日、弟子たちイエスに來りて言ふ「過越の食をなし給ふために、何處に我らが備ふる事を望み給ふか」イエス言ひたまふ「都にゆき、某のもとに到りて「師いふ、わが時近づけり。われ弟子たちと共に過越を汝の家にて守らん」と言へ」弟子たちイエスの命じ給ひし如くして、過越の備をなせり。日暮れて十二弟子とともに席に就きて、食すると言ひ給ふ「まことに汝らに告ぐ、汝らの中の一人われを賣らん」弟子たち甚く憂ひて、おのおの「主よ、我なるか」と言ひいでしに、

三 答へて言ひたまふ「我とともに手を鉢に入る者われを賣らん。人の子は己に就きて録されたる如く逝くなり。されど人の子を賣る者は禍害なるかな、その人は生れざりし方よかりしものを」イエスを賣るユダ答へて

四 言ふ「ラビ、我なるか」イエス言ひ給ふ「なんぢの言へる如し」彼ら食しをる時、イエス、パンをとり、祝してさき、弟子たちに與へて言ひ給ふ「取りて食へ、これは我が體なり」また酒杯をとりて謝し、彼らに與へて言ひ給ふ「なんぢら皆この酒杯より飲め。これは契約のわが血なり、多くの人のために、罪の赦を得させんとて流す所のものなり。われ汝らに告ぐ、わが父の國にて新しきものを汝らと共に飲む日までは、われ今より後この葡萄の果より成るものを飲まじ」

二〇 彼ら讚美を歌ひて後オリブ山に出でゆく。三〇 ここにイエス弟子たちに言ひ給ふ「今宵なんぢら皆われに就きて躓かん」われ牧羊者を打たん、さらば群の羊散るべし」と録されたるなり。されど我よみがへりて後、なんぢらに先だちてガリラヤに往かん」ベテロ

三三 答へて言ふ「假令みな汝に就きて躓くとも我はいつまでも躓かじ」イエス言ひ給ふ「まことに汝に告ぐ、こよひ

三三 鶏鳴く前に、なんぢ三たび我を否むべし」ベテロ言ふ「我なんぢと共に死ぬべき事ありとも汝を否まず」弟子たち皆かく言へり。

三六 ここにイエス彼らと共にゲツセマネといふ處にいたりて、弟子たちに言ひ給ふ「わが彼處にゆきて祈る間、なんぢら此處に坐せよ」かくてベテロとゼベダイの子二人とを伴ひゆき、憂ひ悲しみ出でて言ひ給ふ「わが心いたく憂ひて死ぬばかりなり。汝ら此處に止りて我と共に目を覺しをれ」少し進みゆきて、平伏し祈りて言ひ給ふ「わが父よ、もし得べくば此の酒杯を我より過ぎ去らせ給へ。されど我が意の儘にはならず、御意のままに爲し給へ」弟子たちの許にきたり、その眠れるを見てベテロに言ひ給ふ「なんぢら斯く一時も我と共に目を覺し居ること能はぬか。誘惑に陥らぬやう、目を覺しかつ祈れ。實に心は熱すれども肉體よわきなり」また二度ゆき祈りて言ひ給ふ「わが父よ、この酒杯も我飲まば過ぎ去りがたくば、御意のままに成し給へ」復きたりて彼らの眠れるを見たまふ、是その目疲れたるなり。また離れゆきて、三たび同じ言にて祈り給ふ。而して弟子たちの許に來りて言ひ給ふ「今は眠りて

六 休め。視よ、時近づけり、人の子は罪人らの手に付さるるたり。起きよ、我ら往くべし。視よ、我を賣るもの近づけり。

四七 なほ語り給ふほどに、視よ、十二弟子の一人なるユダ來る、祭司長・民の長老らより遣されたる大なる群衆、劍と棒とをもちて之に伴ふ。イエスを賣る者あらかじめ合圖を示して言ふ「わが接吻する者はそれなり、之を捕へよ」かくて直ちにイエスに近づき「ラビ、安かれ」といひて接吻したれば、イエス言ひたまふ「友よ、何とて來る」このとき人々すすみてイエスに手をかけて捕ふ。視よ、イエスと偕にありし者のひとり、手をのべ劍を抜きて、大祭司の僕をうちてその耳を切り落せり。ここにイエス彼に言ひ給ふ「なんぢの劍をもとに收めよ、すべて劍をとる者は劍にて亡ぶるなり。我わが父に請ひて、十二軍に餘る御使を今あたへらるること能はずと思ふか。もし然せば、斯くあるべく録したる聖書はいかて成就すべき」この時イエス群衆に言ひ給ふ「なんぢら強盜に向ふごとく劍と棒とをもち、我を捕へんとて出て來るか。我は日々宮に坐して教へたりしに、汝ら我を捕へざりき。されどかくの如くなるは、

五七 みな預言者たちの書の成就せん爲なり」ここに弟子たち皆イエスを棄てて逃げざりぬ。
五八 イエスを捕へたる者ども、學者・長老らの集り居る大祭司カヤバの許に曳きゆく。ペテロ遠く離れ、イエスに従ひて大祭司の中庭まで到り、その成行を見んとて、そこに入り下役どもと共に坐せり。祭司長らと全議會と、イエスを死に定めんとて、いつはりの證據を求めたるに、多くの偽證者いてたれども得ず。後に二人の者いてて言ふ「この人は「われ神の宮を毀ち三日にて建て得べし」と云へり」大祭司たちてイエスに言ふ「この人々が汝に對して立つる證據に何を答へぬか」されどイエス黙し居給ひたれば、大祭司いふ「われ汝に命ず、活ける神に誓ひて我らに告げよ、汝はキリスト、神の子なるか」イエス言ひ給ふ「なんぢの言へる如し。かつ我なんぢらに告ぐ、今より後、なんぢら人の子の全能者の右に坐し、天の雲に乗りて來るを見ん」ここに大祭司おのが衣を裂きて言ふ「かれ演言をいへり、何ぞ他に證人を求めん。視よ、なんぢら今この演言をきけり。いかに思ふか」答へて言ふ「かれは死に當れり」ここに彼等その御顔に唾し、拳にて搏ち、或者どもは手掌に

六八 て批きて言ふ「キリストよ、我らに預言せよ、汝をうちし者は誰なるか」

六九 ペテロ外にて中庭に坐しおたるに、一人の婢女きたりて言ふ「なんぢもガリラヤ人イエスと偕にゐたり」かれ凡ての人の前に肯はずして言ふ「われは汝の言ふことを知らず」かくて門まで出て往きたるとき、他の婢女かれを見て、其處にをる者どもに向ひて「この人はナザレ人イエスと偕にゐたり」と言へるに、重ねて肯はず、契ひて「我はその人を知らず」といふ。暫くして其處に立つ者ども近づきてペテロに言ふ「なんぢも慥にかの黨與なり、汝の國訛なんぢを表せり」ここにペテロ盟ひかつ契ひて「我その人を知らず」と言ひ出づるをりしも、鶏鳴きぬ。ペテロ「にはとり鳴く前に、なんぢ三度われを否まん」と、イエスの言ひ給ひし御言を思ひ出し、外に出てて甚く泣けり。

一 夜明になりて、凡ての祭司長・民の長老、イエスを殺さんと相議り、遂に之を縛り、曳きゆきて總督ピラトに付せり。
三 ここにイエスを賣りしユダ、その死に定められ給ひしを見て悔い、祭司長・長老らに、かの三十の銀をかへ

四 して言ふ「われ罪なきの血を賣りて罪を犯したり」彼らいふ「われら何ぞ干らん、汝みづから當るべし」彼の銀を聖所に投げすてて去り、ゆきて自ら縊れたり。
六 祭司長らその銀をとりて言ふ「これは血の價なれば、宮の庫に納むるは可からず」かくて相議り、その銀をもて陶工の畑を買ひ、旅人らの墓地とせり。之によりて其の畑は、今に至るまで血の畑と稱へらる。ここに預言者エレミヤによりて云はれたる言は成就したり。曰く「かくて彼ら値積られしもの、即ちイスラエルの子らが値積りし者の價の銀三十をとりて、陶工の畑の代に之を與へたり。主の我に命じ給ひし如し」
一〇 さてイエス、總督の前に立ち給ひしに、總督問ひて言ふ「なんぢはユダヤ人の王なるか」イエス言ひ給ふ「なんぢの言ふが如し」祭司長・長老ら訴ふれども、何を答へ給はず。ここにピラト彼にいふ「聞かぬか、彼らが汝に對して如何におほくの證據を立つるを」されど總督の甚く怪しむまで、一言をも答へ給はず。祭の時には、總督群衆の望にまかせて、囚人一人を之に赦す例あり。ここにバラバといふ隠れなき囚人あり。されば人々の集れる時、ピラト言ふ「なんぢら我が誰を赦さん

一八 ことを願ふか。バラバなるか、キリストと稱ふるイエス
 一八 なるか」これピラト彼らのイエスを付ししは、嫉に因ると
 一九 知る故なり。彼なほ審判の座にをる時、その妻、人を
 二〇 遣して言はしむ「かの義人に係ることを爲な、我けふ
 二〇 夢の中に彼故にさまざま苦しめり」祭司長・長老
 二一 ら、群衆にバラバの赦されん事を請はしめ、イエスを
 二二 亡さんことを勸む。總督こたへて彼らに言ふ「二人の中
 二三 いづれを我が赦さん事を願ふか」彼らいふ「バラバなり」
 二四 ピラト言ふ「さらばキリストと稱ふるイエスを我いか
 二五 にすべきか」皆いふ「十字架につくべし」ピラト言ふ
 二六 「かれ何の悪事をなしたるか」彼ら烈しく叫びていふ
 二七 「十字架につくべし」ピラトは何の効なく反つて亂にな
 二八 らんとするを見て、水をとリ群衆のまへに手を洗ひて
 二九 言ふ「この人の血につきて我は罪なし、汝等みづから
 三〇 當れ」民みな答へて言ふ「その血は、我らと我らの子孫
 三一 とに歸すべし」ここにピラト、バラバを彼らに赦し、
 三二 イエスを鞭うちて、十字架につくる爲に付せり。
 三三 ここに總督の兵卒ども、イエスを官邸につれゆき、
 三四 全隊を御許に集め、その衣をはぎて、緋色の上衣を
 三五 きせ、茨の冠を編みて、その首に冠らせ、葦を右の手

にもたせ、且その前に跪づき、嘲弄して言ふ「ユダヤ人
 の王、安かれ」また之に唾し、かの葦をとりて其の首を
 叩く。かく嘲弄してのち、上衣を剝ぎて、故の衣をきせ、
 十字架につけんとて曳きゆく。
 その出づる時、シモンといふクレネ人にあひしか
 ば、強ひて之にイエスの十字架をおはしむ。かくてゴル
 ゴタといふ處、即ち髑髏の地にいたり、苦味を混ぜたる
 葡萄酒を飲ませんとしたるに、嘗めて、飲まんとし給は
 ず。彼らイエスを十字架につけてのち、籤をひきて其の
 衣をわかち、且そこに坐して、イエスを守る。その首の
 上に「これはユダヤ人の王イエスなり」と記したる罪標
 を置きたり。ここにイエスとともに二人の強盜、十字架
 につけられ、一人はその右に、一人はその左におかる。
 往來の者どもイエスを識り、首を振りていふ、「官を
 毀ちて三日のうちに建つる者よ、もし神の子ならば己を
 救へ、十字架より下りよ」祭司長らもまた同じく、學
 者・長老らとともに嘲弄して言ふ「人を救ひて己を救ふ
 こと能はず。彼はイスラエルの王なり、いま十字架より
 下りよかし、さらば我ら彼を信ぜん。彼は神に依り頼め
 り、神かれを愛しまば今すぐひ給ふべし」我は神の

四四 子なり」と云へり」とともに十字架につけられたる強盜
 四五 どもも、同じ事をもてイエスを罵れり。
 四六 晝の十二時より地の上あまねく暗くなりて、三時に
 四七 及ぶ。三時ごろイエス大聲に叫びて「エリ、エリ、レマ、
 四八 サバクタニ」と言ひ給ふ。わが神、わが神、なんぞ我を
 四九 見棄て給ひしとの意なり。そこに立つ者のうち或人々
 五〇 これを聞きて「彼はエリヤを呼ぶなり」と言ふ。直ちに
 五一 その中の一人はしりゆきて海綿をとり、酸き葡萄酒を
 五二 含ませ、葦につけてイエスに飲ましむ。その他の者ども
 五三 言ふ「まで、エリヤ來りて彼を救ふや否や、我ら之を見
 五四 ん」イエス再び大聲に呼はりて息絶えたまふ。視よ、
 五五 聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなり、また地震ひ、
 五六 磐さけ、墓ひらけて、眠りたる聖徒の屍體おほく活きか
 五七 へり、イエスの復活のち墓をいて、聖なる都に入りて、
 五八 多くの人に現れたり。百平長および之と共にイエスを
 五九 守りみたる者ども、地震とその有りし事を見て甚く
 六〇 懼れ「實に彼は神の子なりき」と言へり。その處にて
 六一 遙に望みたる多くの女あり、イエスに事へてガリラヤ
 六二 より従ひ來りし者どもなり。その中には、マグダラの
 六三 マリヤ、ヤコブとヨセフとの母マリヤ、及びゼベダイの

子らの母などもあり。
 日暮れて、ヨセフと云ふアリマタヤの富める人きた
 る。彼もイエスの弟子なるが、ピラトに往きてイエスの
 屍體を請ふ。ここにピラト之を付すことを命ず。ヨセフ
 屍體をとりて淨き亞麻布につつみ、岩にほりたる己が
 新しき墓に納め、墓の入口に大なる石を轉しおきて去り
 ぬ。其處にはマグダラのマリヤと他のマリヤと墓に向ひ
 て坐しめたり。
 あくる日、即ち準備日の翌日、祭司長らとパリサイ
 人らとピラトの許に集りて言ふ、「主よ、かの惑すもの
 生き居りし時「われ三日の後に甦へらん」と言ひしを、
 我ら思ひいだせり。されば命じて三日に至るまで墓を
 固めしめ給へ、恐らくはその弟子ら來りて之を盜み、
 「彼は死人の中より甦へれり」と民に言はん。然らば後
 の惑は前よりも甚だしからん」ピラト言ふ「なんぢら
 に番兵あり、往きて力限り固めよ」乃ち彼らゆきて
 石に封印し、番兵を置きて墓を固めたり。
 さて安息日ははりて、一週の初の日のほの
 明け頃、マグダラのマリヤと他のマリヤと墓を見んとて
 來りしに、視よ、大なる地震あり、これ主の使、天より

降り來りて、かの石を轉し退け、その上に坐したるなり。その状は電光のごとく輝き、その衣は雪のごとく白し。守の者ども彼を懼れたれば、戦きて死人の如くなりぬ。御使こたへて女たちに言ふ「なんぢら懼るな、我なんぢらが十字架につけられ給ひしイエスを尋ぬるを知る。此處には在さず、その言へる如く甦へり給へり。來りてその置かれ給ひし處を見よ。かつ速かに往きて、その弟子たちに「彼は死人の中より甦へり給へり。視よ、汝らに先だちてガリラヤに往き給ふ。彼處にて調ゆるを得ん」と告げよ。視よ、汝らに之を告げたり」女たち懼と大なる歡喜とをもて、速かに墓を去り、弟子たちに知らせんとて走りゆく。視よ、イエス彼らに遇ひて「安かれ」と言ひ給ひたれば、進みゆき、御足を抱きて拜す。ここにイエス言ひたまふ「懼るな、往きて我が兄弟たちに、ガリラヤにゆき、彼處にて我を見るべきことを知らせよ」

にいたり、凡て有りし事どもを祭司長らに告ぐ。祭司長ら、長老らと共に集りて相議り、兵卒どもに多くの銀を與へて言ふ、「なんぢら言へ「その弟子ら夜きたりて、我らの眠れる間に彼を盗めり」と。この事もし總督に聞えなば、我ら彼を宥めて汝らに憂なからしめん」彼ら銀をとりて言ひ含められたる如くしたれば、此の話ユダヤ人の中にひろまりて、今日に至れり。

十一弟子たちガリラヤに往きて、イエスの命じ給ひし山にのぼり、遂に調べて拜せり。されど疑ふ者もありき。イエス進みきたり、彼らに語りて言ひたまふ「我は天にても地にても一切の權を與へられたり。されば汝ら往きて、もろもろの國人を弟子となし、父と子と聖靈との名によりてバプテスマを施し、わが汝らに命ぜし凡ての事を守るべきを教へよ。視よ、我は世の終まで常に汝らと偕に在るなり」

マタイ傳福音書 をはり

マルコ傳福音書

神の子イエス・キリストの福音の始

預言者イザヤの書に
「視よ、我なんぢの顔の前に、わが使を遣す、
荒野に呼はる者の聲す
「主の道を備へ、その路すぢを直くせよ」
と録されたる如く、バプテスマのヨハネ出て、荒野にて罪の赦を得さする悔改のバプテスマを宣傳ふ。ユダヤ全國またエルサレムの人々、みな其の許に出て來りて罪を言ひあらはし、ヨルダン川にてバプテスマを受けたり。ヨハネは駱駝の毛織を着、腰に皮の帯して、蝗と野蜜とを食へり。かれ宣傳へて言ふ「我よりも力ある者、わが後に來る。我は屈みてその鞋の紐をとくにも足らず、我は水にて汝らにバプテスマを施せり。されど彼は聖靈にてバプテスマを施さん」

降るを見給ふ。かつ天より聲出づ「なんぢは我が愛しむ子なり、我なんぢを悦ぶ」
かくて御靈ただちにイエスを荒野に逐ひやる。荒野にて四十日の間サタンに試みられ、獸とともに居給ふ、御使たち之に事へぬ。

ヨハネの囚はれし後、イエス、ガリラヤに到り、神の福音を宣傳へて言ひ給ふ。「時は満てり、神の國は近づけり、汝ら悔改めて福音を信ぜよ」

イエス、ガリラヤの海にそひて歩みゆき、シモンと其の兄弟アンデレとが、海に網うちをるを見給ふ。かれらは漁人なり。イエス言ひ給ふ「われに従ひきたれ、汝等をして人を漁る者とならしめん」彼ら直ちに網をすてて従へり。少し進みゆきて、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネとを見給ふ。彼らも舟にありて網を繕ひおたり。直ちに呼び給へば、父ゼベダイを雇人とともに舟に遺して從ひゆけり。

かくて彼らカペナウムに到る、イエス直ちに安息日に會堂にいりて教へ給ふ。人々その教に驚きあへり。それは學者の如くならず、權威ある者のごとく教へ給ふゆゑなり。時にその會堂に、穢れし靈に憑かれたる

二四 人あり、叫びて言ふ、「ナザレのイエスよ、我らは汝と
 二五 何の關係あらんや、汝は我らを亡さんとて來給ふ。われ
 二六 は汝の誰なるを知る、神の聖者なり」イエス禁めて言ひ
 二七 給ふ、「黙せ、その人を出てよ」穢れし靈その人を牽攀け
 二八 させ、大聲をあげて出づ。人々みな驚き相問ひて言ふ
 二九 「これ何事ぞ、權威ある新しき教なるかな、穢れし靈すら
 三〇 命ずれば從ふ」ここにイエスの噂あまねくガリラヤの
 三一 四方に弘りたり。
 三二 會堂をいで、直ちにヤコブとヨハネとを伴ひて、
 三三 シモン及びアンデレの家に入り給ふ。シモンの外姑
 三四 熱をキみて臥しおたれば、人々ただちに之をイエスに
 三五 告ぐ。イエス往きて、その手をとり、起し給へば、熱
 三六 さりて女かれらに事ふ。
 三七 夕となり、日いりてのち、人々すべての病ある者・
 三八 惡鬼に憑かれたる者をイエスに連れ來り、至町こぞりて
 三九 門に集る。イエスさまさまの病を患ふ多くの人をいや
 四〇 し、多くの惡鬼を逐ひだし、之に物言ふことを免し給
 四一 はず、惡鬼イエスを知るに因りてなり。
 四二 朝まだき暗き程に、イエス起き出でて、寂しき處に
 四三 ゆき、其處にて祈りおたまふ。シモン及び之と偕にをる

三七 者ども、その跡を慕ひゆき、イエスに遇ひて言ふ、「人
 三八 みな汝を尋ぬ」イエス言ひ給ふ、「いざ最寄の村々に
 三九 往かん、われ彼處にも教を宣ふべし、我はこの爲に出
 四〇 來りしなり」遂にゆきて、徧くガリラヤの會堂にて教
 四一 を宣べ、かつ惡鬼を逐ひ出し給へり。
 四二 一人の癩病人みもとに來り、跪づき請ひて言ふ
 四三 「御意ならば、我を潔くなし給ふを得ん」イエス憫みて、
 四四 手をのべ彼につけて「わが意なり、潔くなれ」と言ひ給
 四五 へば、直ちに癩病さりて、その人きよまれり。やがて
 四六 彼を去らしめんとて、嚴しく戒めて言ひ給ふ、「つつしみ
 四七 て誰にも語るな、唯ゆきて己を祭司に見せ、モーセが
 四八 命じたる物を汝の潔のために獻げて、人々に證せよ」
 四九 されど彼いてて此の事を大に述べつたへ、徧く弘め始め
 五〇 たらば、この後イエスあらはに町に入りしがたく、外の
 五一 寂しき處に留りたまふ。人々四方より御許に來れり。
 五二 第一節 數日の後、またカペナウムに入り給ひし
 五三 に、その家に在すことを聞きて、多くの人あつまり來り、
 五四 門口すら隙間なき程なり。イエス彼らに御言を語り給
 五五 ふ。ここに四人に擔はれたる中風の者を人々つれ來る。
 五六 群衆によりて御許にゆくこと能はざれば、在す所の

二四 屋根を穿ちあけて、中風の者を床のまま縋り下せり。
 二五 イエス彼らの信仰を見て、中風の者に言ひたまふ、「子
 二六 よ、汝の罪ゆるされたり」ある學者たち其處に坐しお
 二七 たるが、心の中に、「この人なんぞ斯く言ふか、これは
 二八 神を演すなり、神ひとりの外は誰か罪を赦すことを得べ
 二九 き」と論ぜしかば、イエス直ちに彼等がかく論ずるを
 三〇 心に悟りて言ひ給ふ、「なにゆゑ斯かることを心に論ずる
 三一 か、中風の者に「なんちの罪ゆるされたり」と言ふと
 三二 「起きよ、床をとりて歩め」と言ふと、孰か易き。人の子
 三三 の地にて罪を赦す權威ある事を、汝らに知らせん爲に」
 三四 中風の者に言ひ給ふ、「なんちに告ぐ、起きよ、
 三五 床をとりて家に歸れ」彼おきて直ちに床をとりあげ、
 三六 人々の眼前にて往けば、皆おどろき、かつ神を崇めて
 三七 言ふ「われら斯くの如きことは断えて見ざりき」
 三八 イエスまた海邊に出でゆき給ひしに、群衆みもとに
 三九 集ひ來りたれば、之を教へ給へり。かくて過ぎ往くとき、
 四〇 アルバヨの子レビの收税所に坐しをるを見て「われに
 四一 從へ」と言ひ給へば、立ちて從へり。而して其の家に
 四二 食事の席につき居給ふとき、多くの取税人・罪人ら、
 四三 イエス及び弟子たちと共に席に列る、これらの者おほく

二四 居て、イエスに従へるなり。パリサイ人の學者ら、イエ
 二五 スの罪人・取税人とともに食し給ふを見て、その弟子た
 二六 ちに言ふ「なにゆゑ取税人・罪人とともに食するか」
 二七 イエス聞きて言ひ給ふ「健全なる者は醫者を要せず、
 二八 ただ病ある者これを要す。我は正しき者を招かんとに
 二九 あらで、罪人を招かんとて來れり」
 三〇 ヨハネの弟子とパリサイ人とは、断食しおたり。
 三一 人々イエスに來りて言ふ「なにゆゑヨハネの弟子とパリ
 三二 サイ人の弟子とは断食して、汝の弟子は断食せぬか」
 三三 イエス言ひ給ふ「新郎の友だち、新郎と偕にをるうちは
 三四 断食し得べきか、新郎と偕にをる間は、断食するを得
 三五 ず。されど新郎をとらるる日きたらん、その日には断食
 三六 せん。誰も新しき布の裂を舊き衣に縫ひつくることは
 三七 爲じ。もし然せば、その補ひたる新しきものは、舊き物
 三八 をやぶり、破綻さらに甚だしからん。誰も新しき葡萄酒
 三九 を、ふるき革囊に入ること爲じ。もし然せば、葡萄酒
 四〇 は、新しき革囊に入るなり」
 四一 イエス安息日に麥島をとほり給ひしに、弟子たち
 四二 歩みつつ穂を摘み始めたれば、パリサイ人、イエスに

言ふ「視よ、彼らは何ゆゑ安息日に爲まじき事をするか」答へ給ふ「ダビデその伴へる人々と共に乏しくして飢ゑしとき爲しし事を未だ讀まぬか。即ち大祭司アビアタルの時、ダビデ神の家に入りて、祭司のほかは食ふまじき供のパンを取りて食ひ、おのれと偕なる者にも與へたり」また言ひたまふ「安息日は人のために設けられて、人は安息日のために設けられず。されば人の子は安息日にも主たるなり」

一 又エルサレムより下れる學者たちも「彼はベルゼブルに憑かれたり」と言ひ、かつ「惡鬼の首によりて惡鬼を逐ひ出すなり」と言ふ。イエス彼らを呼びよせ、譬にて言ひ給ふ「サタンはいかてサタンを逐ひ出し得んや。もし國分れ争はば、其の國立つこと能はず。もし家分れ争はば、其の家立つこと能はざるべし。もしサタン己に逆ひて分れ争はば、立つこと能はず。反つて亡び果てん。誰にても先づ強き者を縛らざれば、強き者の家に入りて其の家財を奪ふこと能はじ。縛りて後その家を奪ふべし。まことに汝らに告ぐ、人の子らの凡ての罪と、けがす瀆とは赦されん。されど聖靈をけがす者は、永遠に赦されず。永遠の罪に定めらるべし」

三 三〇 これは彼らイエスを「穢れし靈に憑かれたり」と云へるが故なり。
 三二 ここにイエスの母と兄弟と來りて外に立ち、人を遣してイエスを呼ばしむ。群衆イエスを環りて坐したりしが、或者いふ「視よ、なんぢの母と兄弟姉妹と外にありて汝を尋ぬ」イエス答へて言ひ給ふ「わが母、わが兄弟とは誰ぞ」かくて周圍に坐する人々を見回して言ひたまふ「視よ、これは我が母、わが兄弟なり。誰

シドンの邊より夥多しき民衆その爲し給へる事を聞きて、御許に來る。イエス群衆のおしなやますを逃れんとて、小舟を備へ置くことを弟子に命じ給ふ。これ多くの人を醫し給ひたれば、凡て病に苦しむもの、御體に觸らんとて押迫る故なり。また穢れし靈イエスを見る毎に、御前に平伏し、叫びて「なんぢは神の子なり」と言ひたれば、我を顯すなとて、嚴しく戒め給ふ。

一 かくてイエス家に入り給ひしに、群衆また集り來りたれば、食事する暇もなかりき。その親族の者これを聞き、イエスを取押へんとて出て來る。イエスを狂へり

一 かくてイエスまた海邊にて教へ始めたまふ。夥多しき群衆、みもとに集りたれば、舟に乗り海に泛びて坐したまひ、群衆はみな海に沿ひて陸にあり。譬にて數多の事ををしへ、教の中に言ひたまふ、「聽け、種播くもの、播かんとて出づ。播くとき、路の傍らに落ちし種あり、鳥きたりて啄む。土うすき磽地に落ちし種あり、土深からぬによりて、速かに萌え出でたれど、日出てやけ、根なき故に枯る。茨の中に落ちし種あり、茨そだち塞ぎたれば、實を結ばず。良き地に落ちし種あり、生え出でて茂り、實を結ぶこと、三十倍、六十倍、百倍せり」また言ひ給ふ「きく耳ある者は聽くべし」

一 かくてイエスまた海邊にて教へ始めたまふ。夥多しき群衆、みもとに集りたれば、舟に乗り海に泛びて坐したまひ、群衆はみな海に沿ひて陸にあり。譬にて數多の事ををしへ、教の中に言ひたまふ、「聽け、種播くもの、播かんとて出づ。播くとき、路の傍らに落ちし種あり、鳥きたりて啄む。土うすき磽地に落ちし種あり、土深からぬによりて、速かに萌え出でたれど、日出てやけ、根なき故に枯る。茨の中に落ちし種あり、茨そだち塞ぎたれば、實を結ばず。良き地に落ちし種あり、生え出でて茂り、實を結ぶこと、三十倍、六十倍、百倍せり」また言ひ給ふ「きく耳ある者は聽くべし」

二五 播くなり。御言の播かれて路の傍らにありとは、かかる
 二六 人をいふ、即ち聞くとき、直ちにサタン來りて、その
 二七 播かれたる御言を奪ふなり。同じく播かれて磽地にあり
 二八 とは、かかる人をいふ、即ち御言をききて、直ちに喜び
 二九 受くれども、その中に根なければ、ただ暫し保つのみ、
 三〇 御言のために患難また迫害にあふ時は、直ちに頷くな
 三一 り。また播かれて茨の中にありとは、かかる人をいふ、
 三二 すなはち御言をきけど、世の心勞、財貨の惑、さまざま
 三三 まの懲りりきたり、御言を塞ぐによりて、遂に實らざる
 三四 なり。播かれて良き地にありとは、かかる人をいふ、
 三五 即ち御言を聽きて受け、三十倍、六十倍、百倍の實を
 三六 結ぶなり。

二二 又言ひたまふ「升のした、藁臺の下におかんとて、
 二三 燈火をもち來るか、燈臺の上におく爲ならずや。それ願
 二四 る爲ならて隠るるものなく、明かにせらるる爲ならて
 二五 秘めらるるものなし。聴く耳ある者は聴くべし」また言
 二六 ひ給ふ「なんぢら聴くことに心せよ、汝らが置る量にて
 二七 置られ、更に増し加へらるべし。それ有てる人は、なほ
 二八 與へられ、有たぬ人は、有てる物をも取らるべし」
 二九 また言ひたまふ「神の國は、或人たねを地に播くが

三〇 如し、日夜起臥するほどに、種はえ出でて育てども
 三一 その故を知らず。地はおのづから實を結ぶものにして、
 三二 初には苗、つぎに穂、つひに穂の中に充ち足れる穀な
 三三 る。實みのれば直ちに鎌を入る、收穫時の到れるなり」
 三四 また言ひ給ふ「われら神の國を何になすらへ、如何
 三五 なる譬をもて示さん。一粒の芥種のごとし、地に播く
 三六 時は、世にある萬の種よりも小けれど、既に播きて生え
 三七 出づれば、萬の野菜よりは大きく、かつ大なる枝を出して、
 三八 空の鳥その蔭に棲み得るほどになるなり」
 三九 かくのごとき數多の譬をもて、人々の聽きうる力に
 四〇 隨ひて、御言を語り、譬ならては語り給はず、弟子たち
 四一 には、人なき時に凡ての事を釋き給へり。

三六 その日、夕になりて言ひ給ふ「いざ彼方に往かん」
 三七 弟子たち群衆を離れ、イエスの舟にのみ給ふまま共に
 三八 乗り出づ、他の舟も從ひゆく。時に烈しき颶風おこり、
 三九 浪うち込みて、舟に滿つるばかりなり。イエスは艫の方
 四〇 に茵を枕として寝たたまふ。弟子たち呼び起して言ふ
 四一 「師よ、我らの亡ぶるを顧み給はぬか」イエス起きて
 四二 風をいましめ、海に言ひたまふ「黙せ、鎮れ」乃ち風
 四三 やみて、大なる風となりぬ。かくて弟子たちに言ひ給ふ

二一 「なに故かく臆するか、信仰なきは何ぞ」かれら甚く
 二二 懼れて互に言ふ「こは誰ぞ、風も海も順ふとは」

二五 かくて海の彼方なるゲラセネ人の地に到
 二六 る。イエスの舟より上り給ふとき、穢れし靈に憑かれた
 二七 る人、墓より出て直ちに遇ふ。この人、墓を住處とす、
 二八 鐘にてすら今は誰も繋ぎ得ず。彼はしばしば足絛と鐘と
 二九 にて繋がれたれど、鐘をちぎり、足絛をくだきたり、誰
 三〇 も之を制する力なかりしなり。夜も晝も、絶えず墓ある
 三一 ひは山にて叫び、己が身を石にて傷つけたり。かれ
 三二 遙にイエスを見て、走りきたり、御前に平伏し、大聲に
 三三 叫びて言ふ「いと高き神の子イエスよ、我は汝と何の
 三四 關係あらん、神によりて願ふ、我を苦しめ給ふな」これ
 三五 はイエス「穢れし靈よ、この人より出て往け」と言ひ給
 三六 ひしに囚るなり。イエスまた「なんぢの名は何か」と
 三七 問ひ給へば「わが名はレギオン、我ら多きが故なり」と
 三八 答へ、また己らを此の地の外に逐ひやり給はざらんこと
 三九 を切に求む。彼處の山邊に豚の大なる群、食しあたり。
 四〇 惡鬼どもイエスに求めて言ふ「われらを遣して豚に
 四一 入らしめ給へ」イエス許したまふ。穢れし靈いでて、
 四二 豚に入りたれば、二千匹ばかりの群、海に向ひて崖を

四三 駆けくだり、海に溺れたり。飼ふ者ども逃げ往きて、
 四四 町にも里にも告げられたれば、人々何事の起りしかを見んと
 四五 て出づ。かくてイエスに來り、惡鬼に憑かれたりし者
 四六 即ちレギオンをもちたりし者の、衣服をつけ、慥なる心
 四七 にて坐しをるを見て、懼れあへり。かの惡鬼に憑かれた
 四八 る者の上にあるし事と、豚の事とを見し者ども、之を
 四九 具に告げられたれば、人々イエスにその境を去り給はん事を
 五〇 求む。イエス舟に乗らんとし給ふとき、惡鬼に憑かれた
 五一 りしもの借に在らん事を願ひたれど、許さずして言ひ給
 五二 ふ「なんぢの家に、親しき者に歸りて、主がいかに大な
 五三 る事を汝に爲し、いかに汝を憫み給ひしかを告げよ」彼
 五四 ゆきて、イエスの如何に大なる事を己になし給ひしかを、
 五五 デカポリスに言ひ弘めたれば、人々みな怪しめり。

五七 イエス舟にて復かあなたに渡り給ひしに、大なる群衆
 五八 みもとに集る、イエス海邊に在せり。會堂司の一人、
 五九 ヤイロといふ者きたり、イエスを見て、その足下に伏
 六〇 し、切に願ひて言ふ「わが稚なき娘、いまはの際なり、
 六一 來りて手をおき給へ、さらば救はれて活くべし」イエス
 六二 彼と共にゆき給へば、大なる群衆したがひつつ御許に
 六三 押迫る。

ここに十二年血漏を患ひたる女あり。多くの醫者に多く苦しめられ、有てる物をことごとく費したれど、何の効なく、反つて増々悪しくなりたり。イエスの事をききて、群衆にまじり、後に來りて、御衣にさはる。その衣にだに觸らば救はれん」と自ら謂へり。かくて血の泉ただちに乾き、病のいえたるを身に覺えたり。イエス直ちに能力の己より出でたるを自ら知り、群衆の中にて、振反り言ひたまふ「誰が我の衣に觸りしぞ」弟子たち言ふ「群衆の押迫るを見て、誰が我に觸りしぞと言ひ給ふか」イエスこの事を爲しし者を見んとて見直し給ふ。女おそれ戦き、己が身になりし事を知り、來りて御前に平伏し、ありしままを告ぐ。イエス言ひ給ふ「娘よ、なんぢの信仰なんぢを救へり、安らかに往け、病いえて健かになれ」

かく語り給ふほどに、會堂司の家より人々きたりて言ふ「なんぢの娘は早や死にたり、争てなほ師を煩はすべし」イエス其の告ぐる言を傍より聞きて、會堂司に言ひたまふ「懼るな、ただ信ぜよ」かくてペテロ、ヤコブその兄弟ヨハネの他は、ともに往く事を誰にも許し給はず。彼ら會堂司の家に來る。イエス多くの人の、甚く

泣きつ叫びつする騒を見、入りて言ひ給ふ「なんぞ騒ぎかつ泣くか、幼兒は死にたるにあらず、寐ねたるなり」人々イエスを嘲笑ふ。イエス彼等をみな外に出し、幼兒の父と母と己に伴へる者とを率きつれて、幼兒のをる處に入り、幼兒の手を執りて「タリタ、クミ」と言ひたまふ。少女よ、我なんぢに言ふ、起きよ、との意なり。直ちに少女たちて歩む、その歳十二なりければなり。彼ら直ちに甚く驚きおどろけり。イエス此の事を誰にも知れぬやうにせよと、堅く彼らを戒め、また食物を娘に與ふことを命じ給ふ。

かくて其處をいで、己が郷に到り給ひしに、弟子たちも從へり。安息日になりて、會堂にて教へ給ひしに、聞きたる多くのもの驚きて言ふ「この人は此等のことを何處より得しぞ、此の人の授けられたる智慧は何ぞ、その手にて爲すかくのごとき能力あるわざは何ぞ。此の人は木匠にして、マリヤの子、またヤコブ、ヨセ、ユダ、シモン兄弟ならずや、其の姉妹も此處に我らと共にをるに非ずや」遂に彼に蹟けり。イエス彼らに言ひたまふ「預言者は、おのが郷、おのが親族、おのが家の外にて尊ばれざる事なし」彼處にては、何の能力

ある業をも行ひ給ふこと能はず、ただ少數の病める者に、手をおきて醫し給ひしのみ。彼らの信仰なきを怪しみ給へり。

かくて村々を歴巡りて教へ給ふ。また十二弟子を召し、二人づつ遣はしはじめ、穢れし靈を制する權威を與へ、かつ旅のために、杖一つの他は、何をも持たず、糧も囊も帶の中に錢をも持たず、ただ草鞋ばかりをはきて、二つの下衣をも著ざることを命じ給へり。かくて言ひたまふ「何處にても人の家に入らば、その地を去るまで其處に留れ、何地にても汝らを受けず、汝らに聽かずば、其處を出づるとき、證のために足の裏の塵を拂へ」ここに弟子たち出で往きて、悔改むべきことを宣傳へ、多くの惡鬼を逐ひだし、多くの病める者に油をぬりて醫せり。

かくてイエスの名顯れたれば、ヘロデ王ききて言ふ「バプテスマのヨハネ死人の中より甦へりたり。この故に此等の能力の中に働くなり」或人は「エリヤなり」といひ、或人は「預言者、いにしへの預言者のごとき者なり」といふ。ヘロデ聞きて言ふ「わが首斬りしヨハネ、かれ甦へりたるなり」ヘロデ先にその妻りたる己が

兄弟ピリポの妻ヘロデヤの爲に、みづから人を遣し、ヨハネを捕へて獄に繋げり。ヨハネ、ヘロデに「その兄弟の妻を納るるは宜しからず」と言へるに因る。ヘロデヤ、ヨハネを怨みて殺さんと思へど能はず。それは畏れ、之を護り、且つその教をききて、大に惱みつつもなほ喜びて聽きたる故なり。然るに機よき日來れり。ヘロデ己が誕生日に、大臣・將校・ガリラヤの貴人たちを招きて饗宴せしに、かのヘロデヤの娘いり來りて、舞をまひ、ヘロデと其の席に列れる者とを喜ばしむ。王、少女に言ふ「何にても欲しく思ふものを求めよ、我が國の半までも與へん」娘いいて母にいふ「何を求むべきか」母いふ「バプテスマのヨハネの首を」娘ただちに急ぎて王の許に入りきたり、求めて言ふ「ねがはくは、バプテスマのヨハネの首を盆に載せて速かに賜はれ」王いたく憂ひたれど、その誓と席に在る者とに對して拒むことを好まず、直ちに衛兵を遣し、之にヨハネの首を持ち來ることを命ず。衛兵ゆきて、獄にてヨハネを首斬り、その首を盆にのせ、持ち來りて少女に與ふ。少女

これを母に與ふ。ヨハネの弟子たち聞きて來り、その屍體を取りて墓に納めたり。
使徒たちイエスの許に集りて、その爲ししこと、教へし事をことごとく告ぐ。イエス言ひ給ふ「なんぢら人を避け、寂しき處に、いざ來りて暫し息へ」これは往來の人おほくして、食する暇だになかりし故なり。かくて人を避け、舟にて寂しき處にゆく。其の往くを見て、多くの人それと知り、その處を指して、町々より徒歩にてともに走り、彼等よりも先に往けり。イエス出でて大なる群衆を見、その牧ふ者なき羊の如くなるを甚く憫みて、多くの事を教へはじめ給ふ。時すでに晩くなりたれば、弟子たち御許に來りていふ「ここは寂しき處、はや時も晩し。人々を去らしめ、周圍の里また村に往きて、己がために食物を買はせ給へ」答へて言ひ給ふ「なんぢら食物を與へよ」弟子たち言ふ「われら往きて二百デナリのパンを買ひ、これに與へて食はすべきか」イエス言ひ給ふ「パン幾つあるか、往きて見よ」彼ら見ていふ「五つ、また魚二つあり」イエス凡ての人の組々となりて、青草の上に坐することを命じ給へば、或は百人、あるひは五十人、畝のごとく列びて坐す。

かくてイエス五つのパンと二つの魚とを取り、天を仰ぎて祝し、パンをさき、弟子たちに付して人々の前に置かしめ、二つの魚をも人毎に分け給ふ。凡ての人食ひて飽きたれば、パンの餘、魚の殘を集めしに、十二の筐に満ちたり。パンを食ひたる男は五千人なりき。
イエス直ちに、弟子たちを強ひて舟に乘らせ、自ら群衆を返す間に、彼方なるベツサイダに先に往かしむ。群衆に別れてのち、祈らんとて山にゆき給ふ。夕になりて、舟は海の眞中にあり、イエスはひとり陸に在り。風逆ふに因りて、弟子たちの漕ぎ煩ふを見て、夜明の四時ごろ、海の上を歩み、その許に到りて、往き過ぎんとし給ふ。弟子たち其の海の上を歩み給ふを見、變化の者ならんと思ひて叫ぶ。皆これを見て心騒ぎたるに因る。イエス直ちに彼らに語りて言ひ給ふ「心安かれ、我なり、懼るな」かくて弟子たちの許にゆき、舟に登り給へば、風やみたり。弟子たち心の中に甚く驚く。彼らは先のパンの事をさとらず、反つて其の心鈍くなりしなり。
遂に渡りてゲネサレの地に著き、舟がかりす。舟より上りしに、人々ただちにイエスを認めて、徧くあたり

を馳せまはり、その在すと聞く處々に、患ふ者を床のままつれ來る。その到りたまふ處には、村にても、町にても、里にても、病める者を市場におきて、御衣の總にだに觸らしめ給はんことを願ふ。觸りし者は、みな醫されたり。
パリサイ人と或學者らと、エルサレムより來りてイエスの許に集る。而して、その弟子たちの中に、潔からぬ手、即ち洗はぬ手にて食事する者のあるを見たり。パリサイ人および凡てのユダヤ人は、古への人の言傳を固く執りて、懇ろに手を洗はねば食はず。また市場より歸りては、まづ褌がざれば食はず。このほか酒杯・鉢・銅の器を濯ぐなど、多くの傳を承けて固く執りたり。パリサイ人および學者らイエスに問ふ「なにゆゑ汝の弟子たちは、古への人の言傳に違ひて歩まず、潔からぬ手にて食事するか」イエス言ひ給ふ「イザヤは汝ら偽善者につきて能く預言せり。
「この民は口唇にて我を敬ふ、されどその心は我に遠ざかる。ただ徒らに我を拜む、人の訓誡を教とし教へて」

と録したり。なんぢらは神の誠命を離れて、人の言傳を固く執る」また言ひたまふ「汝等はおれの言傳を守らんとて、能くも神の誠命を棄つ。即ちモーセは「なんぢの父、なんぢの母を敬へ」といひ「父また母を置る者は、必ず殺さるべし」といへり。然るに汝らは「人もし父また母にむかひ、我が汝に對して負ふ所のものは、コルバン即ち供物なり」と言はば可し」と言ひて、そののち人をして、父また母に事ふること無からしむ。かく汝らの傳へたる言傳によりて、神の言を空しうし、又おほく此の類の事をなしをるなり」更に群衆を呼び寄せて言ひ給ふ「なんぢら皆われに聽きて悟れ。外より人に入りて、人を汚し得るものなし、されど人より出づるものは、これを汚すなり」イエス群衆を離れて家に入り給ひしに、弟子たち其の譬を問ふ。彼らに言ひ給ふ「なんぢらも然か悟なきか、外より人に入る物の、人を汚しえぬを悟らぬか、これ心には入らず、腹に入りて剛におつるなり」かく凡ての食物を潔しとし給へり。また言ひたまふ「人より出づるものは、此人を汚すなり。それ内より、人の心より、惡しき念いづ、即ち淫行・竊盜・殺人、姦淫・慳貪・邪曲・詭計・好色・嫉妬・

三三 誹謗・傲慢・愚痴。すべて此等の惡しき事は、内より
三二 出でて人を汚すなり」

二四 イエス起ちて此處を去り、ツロの地方に往き、家に
二五 入りて人に知られじとし給ひたれど、隠るること能はざ
二六 りき。ここに穢れし靈に憑かれたる稚なき娘をもてる
二七 女、ただちにイエスの事をきき、來りて御足の許に平伏
二八 す。この女はギリシヤ人にて、スロ・フェニキヤの生な
二九 り。その娘より惡鬼を逐ひ出し給はんことを請ふ。イエ
三〇 ス言ひ給ふ「まづ子供に飽かしむべし、子供のパンをと
三一 りて小狗に投げ與ふるは善からず」女こたへて言ふ
三二 「然り、主よ、食卓の下的小狗も子供の食屑を食ふなり」
三三 イエス言ひ給ふ「なんぢ此の言によりて〔安んじ〕往け、
三四 惡鬼は既に娘より出でたり」をんな家に歸りて見るに、
三五 子は寢寢の上に臥し、惡鬼は既に出でたり。

三六 イエスまたツロの地方を去りて、シドンを通ぎ、
三七 デカポリスの地方を経て、ガリラヤの海に來り給ふ。
三八 人々、耳聾にして物言ふこと難き者を連れ來りて、之
三九 に手をおき給はんことを願ふ。イエス群衆の中より、
四〇 彼をひとり連れ出し、その兩耳に指をさし入れ、また
四一 唾して其の舌に觸り、天を仰ぎて嘆じ、その人に對ひて

四二 曰く、

四三 曰く、

四四 曰く、

四五 曰く、

四六 曰く、

四七 曰く、

四八 曰く、

四九 曰く、

五〇 曰く、

五一 曰く、

五二 「エバタ」と言ひ給ふ、ひらけよとの意なり。かくてその
五三 耳ひらけ、舌の纏ただちに解け、正しく物いへり。イエ
五四 ス誰にも告ぐなと人々を戒めたまふ。されど戒むるほど
五五 反つて愈々言ひ弘めたり。また甚だしく打驚きて言ふ
五六 「かれの爲しし事は皆よし、聾者をも聞えしめ、啞者をも
五七 物いはしむ」

五八 其の頃また大なる群衆にて食ふべき物な
五九 かりしかば、イエス弟子たちを召して言ひ給ふ「われ此の
六〇 群衆を憫む、既に三日われと偕にをりて、食ふべき物
六一 なし。飢ゑしなまにて其の家に歸らしめば、途にて疲れ
六二 果てん。其の中には遠くより來れる者あり」弟子たち
六三 答へて言ふ「この寂しき地にては、何處よりパンを得て、
六四 この人々を飽かしむべき」イエス問ひ給ふ「パン幾つ
六五 あるか」答へて「七つ」といふ。イエス群衆に命じて地
六六 に坐せしめ、七つのパンを取り、謝して之を裂き、弟子
六七 たちに與へて群衆の前におかしむ。弟子たち乃ちその
六八 前におく。また小き魚すこしばかりあり、祝して、之を
六九 もその前におけと言ひ給ふ。人々食ひて飽き、裂きたる
七〇 餘を拾ひしに、七つの籃に滿ちたり。その人おほよそ
七一 四千人なりき。イエス彼らを歸し、直ちに弟子たちと

七二 同りて、

七三 同りて、

七四 同りて、

七五 同りて、

七六 同りて、

七七 同りて、

七八 同りて、

七九 同りて、

八〇 同りて、

八一 同りて、

三三 共に舟に乗りて、

三二 共に舟に乗りて、

三一 共に舟に乗りて、

三〇 共に舟に乗りて、

二九 共に舟に乗りて、

二八 共に舟に乗りて、

二七 共に舟に乗りて、

二六 共に舟に乗りて、

二五 共に舟に乗りて、

二四 共に舟に乗りて、

二三 共に舟に乗りて、

二二 共に舟に乗りて、

二一 共に舟に乗りて、

二〇 共に舟に乗りて、

一九 共に舟に乗りて、

一八 共に舟に乗りて、

一七 共に舟に乗りて、

一六 共に舟に乗りて、

一五 共に舟に乗りて、

一四 共に舟に乗りて、

一三 共に舟に乗りて、

一二 共に舟に乗りて、

一一 共に舟に乗りて、

一〇 共に舟に乗りて、

九 共に舟に乗りて、

三三 思はば、己をすて、己が十字架を負ひて我に従へ。己が
 三五 生命を救はんと思ふ者は、これを失ひ、我が爲また福音
 三六 の爲に己が生命をうしなふ者は、之を救はん。人、全世界
 三七 を救くとも、己が生命を損せば、何の益あらん。人その
 三八 生命の代に何を與へんや。不義なる罪深き今の代にて、
 三九 我または我が言を恥づる者をば、人の子もまた、父の
 四〇 榮光をもて、聖なる御使たちと共に來らん時に恥づべ
 四一 し。

九 九 一 また言ひ給ふ「まことに汝らに告ぐ、此處
 一 二 に立つ者のうちに、神の國の、權能をもて來るを見るま
 二 三 ては、死を味はぬ者どもあり」

二 六 六日の後、イエスただベテロ、ヤコブ、ヨハネのみ
 三 七 を率きつれ、人を避けて高き山に登りたまふ。かくて彼
 四 八 らの前にて其の状かはり、其の衣かがやきて甚だ白くな
 五 九 りぬ。世の晒布者も爲し得ぬほど白し。エリヤ、モーセ
 六 〇 ともに彼らに現れて、イエスと語りたり。ベテロ差
 六 一 出でてイエスに言ふ「ラビ、我らの此處に居るは善し。
 六 二 われら三つの窟を造り、一つを汝のため、一つをモーセ
 六 三 のため、一つをエリヤのためにせん」彼等いたく懼れた
 六 四 れば、ベテロ何と言ふべきかを知らざりしなり。かくて

八 九 雲おこり、彼らを覆ふ。雲より聲出づ「これは我が愛し
 九 〇 む子なり、汝ら之に聽け」弟子たち急ぎ見回すに、イエ
 九 一 スと己らとの他には、はや誰も見えざりき。山をくだる
 九 二 時、イエス彼らに、人の子の、死人の中より甦へるまで
 九 三 は、見しことを誰にも語るなと戒め給ふ。彼ら此の言を
 九 四 心にとめ「死人の中より甦へる」とは、如何なる事ぞと
 九 五 互に論じ合ふ。かくてイエスに問ひて言ふ「學者たち
 九 六 は、何故エリヤやまづ來るべしと言ふか」イエス言ひ給ふ
 九 七 「實にエリヤ先づ來りて、萬の事をあらたむ。さらば人の
 九 八 子につき、多くの苦難を受け、かつ度せらるる事の錄さ
 九 九 れたるは何ぞや。されど我なんぢらに告ぐ、エリヤは
 一〇〇 既に來れり。然るに彼に就きて錄されたる如く、人々
 一〇一 心のままに之を待へり」

一〇二 相共に弟子たちの許に來りて、大なる群衆の之を
 一〇三 環り、學者たちの之と論じみたるを見給ふ。群衆みな
 一〇四 イエスを見るや否や、いたく驚き、御許に走り往きて
 一〇五 禮をなせり。イエス問ひ給ふ「なんぢら何を彼らと論ず
 一〇六 るか」群衆のうちの一人こたふ「師よ、啞の靈に憑かれ
 一〇七 たる我が子を御許に連れ來れり。靈いづこにても彼に
 一〇八 憑けば、痲癩け泡をふき、齒をくひしぱり、而して瘦せ

一〇九 衰ふ。御弟子たちに之を逐ひ出すことを請ひたれど能は
 一一〇 ざりき」ここに彼らに言ひ給ふ「ああ信なき代なるか
 一一一 な、我いつまで汝らと偕にをらん、何時まで汝らを忍ば
 一一二 ん。その子を我が許に連れきたれ」乃ち連れきたる。
 一一三 彼イエスを見しとき、靈ただちに之を痲癩けたれば、地
 一一四 に倒れ、泡をふきて轉び廻る。イエスその父に問ひ給ふ
 一一五 「いつの頃より斯くなりしか」父いふ「をさなき時より
 一一六 なり。靈しばしば彼を火のなか水の中に投げ入れて亡さ
 一一七 んとせり。されど汝なにか爲し得ば、我らを憫みて助け
 一一八 給へ」イエス言ひたまふ「爲し得ばと言ふか、信する者
 一一九 には、凡ての事なし得らるるなり」その子の父ただちに
 一二〇 叫びて言ふ「われ信ず、信仰なき我を助け給へ」イエス
 一二一 群衆の走り集るを見て、穢れし靈を禁めて言ひたまふ
 一二二 「啞にて耳聾なる靈よ、我なんぢに命ず、この子より出で
 一二三 よ、重ねて入るな」靈さけびて甚だしく痲癩けさせて
 一二四 出でしに、その子、死人の如くなりたれば、多くの者これ
 一二五 を死にたりと言ふ。イエスその手を執りて起し給へば
 一二六 立てり。イエス家に入り給ひしとき、弟子たち竊に問ふ
 一二七 「我等いかなれば逐ひ出し得ざりしか」答へ給ふ「この
 一二八 類は祈に由らざれば、如何にすとも出でざるなり」

一二九 此處を去りてガリラヤを過ぐ。イエス人の此の事を
 一三〇 知るを欲し給はず。これは弟子たちに教をなし、かつ
 一三一 「人の子は人々の手にわたされ、人々これを殺し、殺され
 一三二 て三日ののち甦へるべし」と言ひ給ふが故なり。弟子た
 一三三 ちはその言を悟らず、また問ふ事を恐れたり。
 一三四 かくてカペナウムに到る。イエス家に入りて弟子た
 一三五 ちに問ひ給ふ「なんぢら途すがら何を論ぜしか」弟子た
 一三六 ち黙然たり、これは途すがら、誰か大ならんと、互に争
 一三七 ひたるに因る。イエス坐して十二弟子を呼び、之に言ひ
 一三八 たまふ「人もし頭たらんと思はば、凡ての人の後となり、
 一三九 凡ての人の役者となるべし」かくてイエス幼兒をとり
 一四〇 て彼らの中におき、之を抱きて言ひ給ふ「おほよそ我が
 一四一 名のために斯かる幼兒の一人を受くる者は、我を受くる
 一四二 なり。我を受くる者は、我を受くるにあらず、我を遣し
 一四三 し者を受くるなり」
 一四四 ヨハネ言ふ「師よ、我らに従はぬ者の、御名により
 一四五 て悪鬼を逐ひ出すを見しが、我らに従はぬ故に、之を
 一四六 止めたり」イエス言ひたまふ「止むな、我が名のために
 一四七 能力ある業をおこなひ、俄に我を譏り得る者なし。我ら
 一四八 に逆はぬ者は、我らに附く者なり。キリストの者たるに

よりて、汝らに一杯の水を飲ます者は、我まことに汝らに告ぐ、必ずその報を失はざるべし。また我を信ずる此の小さな者の一人を顧みする者は、寧ろ大なる礫石を頸に懸けられて、海に投げ入れられんかた勝れり。もし汝の手ななちを顧みせば、之を切り去れ、不具にて生命に入るは、兩手ありてゲヘナの消えぬ火に往くよりも勝るなり。もし汝の足ななちを顧みせば、之を切り去れ、蹠にて生命に入るは、兩足ありてゲヘナに投げ入れらるるよりも勝るなり。もし汝の眼ななちを顧みせば、之を抜き出せ、片眼にて神の國に入るは、兩眼ありてゲヘナに投げ入れらるるよりも勝るなり。「彼處にては、その蛆つきず、火も消えぬなり」それ人はみな火をもて鹽つけらるべし。鹽は善きものなり、されど鹽もし其の鹽氣を失はば、何をもて之に味つけん。汝ら心の中に鹽を保ち、かつ互に和ぐべし」

イエス此處をたちて、ユダヤの地方およびヨルダンの彼方に來り給ひしに、群衆もまた御許に集ひたれば、常のごとく教へ給ふ。時にパリサイ人ら來り試みて問ふ「人その妻を出すはよきか」答へて言ひ給ふ「モーセは汝らに何と命ぜしか」彼ら言ふ「モーセは

離縁狀を書きて出すことを許せり」イエス言ひ給ふ「汝らの心つれなきによりて、此の誠命を録ししなり。されど開闢の初より「人を男と女とに造り給へり」一かか故に人はその父母を離れて、二人のもの一體となるべし」さればはや二人にはあらず、一體なり。この故に神の合せ給ふものは、人これを離すべからず」家に入りて弟子たち復この事を問ふ。イエス言ひ給ふ「おほよそ其の妻を出して他に娶る者は、その妻に對して姦淫を行ふなり。また妻もし其の夫を棄てて他に嫁がば、姦淫を行ふなり」

イエスの觸り給はんことを望みて、人々幼兒らを連れ來りしに、弟子たち禁められたれば、イエス之を見、いさどほりて言ひたまふ「幼兒らの我に來るを許せ、止むな、神の國は斯くのごとき者の國なり。まことに汝らに告ぐ、凡そ幼兒の如くに神の國をうくる者ならずば、之に入ることは能はず」かくて幼兒を抱き、手をその上におきて祝し給へり。

イエス途に出て給ひしに、一人はしり來り、跪づきて問ふ「善き師よ、永遠の生命を嗣ぐためには、我なに爲すべきか」イエス言ひ給ふ「なにゆゑ我を善しと

言ふか、神ひとり他に善き者なし。誠命は汝が知るところなり「殺すなかれ」「姦淫すなかれ」「盜むなかれ」「偽證を立つるなかれ」「欺き取るなかれ」「汝の父と母とを敬へ」彼いふ「師よ、われ幼き時より皆これを守れり」イエス彼に目をとめ、愛しみて言ひ給ふ「なんぢ尙ほ一つを缺く、往きて汝の有てる物をことごとく賣りて、貧しき者に施せ、さらば財寶を天に得ん。且きたりて我に従へ」この言によりて、彼は憂を催し、悲しみつつ去りぬ、大なる資産をもてる故なり。

イエス見回して弟子たちに言ひたまふ「富ある者の神の國に入るは如何に難いかな」弟子たち此の御言に驚く。イエスまた答へて言ひ給ふ「子たちよ、神の國に入るは如何に難いかな、富める者の神の國に入るよりは、駱駝の針の孔を通るかた反つて易し」弟子たち甚く驚きて互に言ふ「さらば誰か救はる事を得ん」イエス彼らに目を注ぎて言ひたまふ「人には能はねど、神には然らず、夫れ神は凡ての事をなし得るなり」ペテロ、イエスに對ひて「我らは一切をすて汝に従ひたり」と言ひ出でたれば、イエス言ひ給ふ「まことに汝らに告ぐ、我がため、福音のために、或は家、或は兄弟、ある

ひは姉妹、或は父、或は母、或は子、或は田畑をすつる者は、誰にても今、今の時に百倍を受けぬはなし。即ち家・兄弟・姉妹・母・子・田畑を迫害と共に受け、また後の世にては、永遠の生命を受けぬはなし。されど多くの先なる者は後に、後なる者は先になるべし」

エルサレムに上る途にて、イエス先だち往き給ひしかば、弟子たち驚き、隨ひ往く者ども懼れたり。イエス再び十二弟子を近づけて、己が身に起らんとする事どもを語り出で給ふ「觀よ、我らエルサレムに上る。人の子は祭司長・學者らに付されん。彼ら死に定めて、異邦人に付さん。異邦人は嘲弄し、鞭うち、遂に殺さん、かくて彼は三日の後に甦へるべし」

ここにゼベダイの子ヤコブ、ヨハネ御許に來りて言ふ「師よ、願はくは我らが何にても求むる所を爲したまへ」イエス言ひ給ふ「わが汝らに何を爲さんことを望むか」彼ら言ふ「なんぢの榮光の中に、一人をその右に、一人をその左に坐せしめ給へ」イエス言ひ給ふ「なんぢらは求むる所を知らず、汝等わが飲む酒杯を飲み、我が受くるパンテスマを受け得るか」彼等いふ「得るなり」イエス言ひ給ふ「なんぢら我が飲む酒杯を

四〇 飲み、また我が受くるバプテスマを受くべし。されど我が右左に坐することは、我の與ふべきものならず、ただ備へられたる人こそ與へらるるなれ」十人の弟子これを聞き、ヤコブとヨハネとの事により憤り出でたれば、イエス彼ら呼びて言ひたまふ「異邦人の君と認めらるる者の、その民を宰どり、大なる者の、民の上に權を執ることは、汝らの知る所なり。されど汝らの中にては然らず、反つて大ならんと思ふ者は、汝らの役者となり、頭たらんと思ふ者は、凡ての者の僕となるべし。人の子の來れるも、事へらるる爲にあらざ、反つて事ふることをなし、又おほくの人の贖價として己が生命を與へん爲なり」

四一 かくて彼らエリコに到る。イエスその弟子たち及び大なる群衆と共に、エリコを出でたまふ時、テマイの子バルテマイといふ盲目の乞食、路の傍に坐しをりしが、ナザレのイエスなりと聞き、叫び出して言ふ「ダビデの子イエスよ、我を憫みたまへ」多くの人かれを禁めて黙さしめんとしたれど、ますます叫びて「ダビデの子よ、我を憫みたまへ」と言ふ。イエス立ち止りて「かれを呼べ」と言ひ給へば、人々盲人を呼びて言ふ「心安かれ、

五〇 起て、なんぢを呼びたまふ」盲人らはぎを脱ぎ捨て、躍り上りて、イエスの許に來りしに、イエス答へて言ひ給ふ「わが汝に何を爲さんことを望むか」盲人いふ「わが師よ、見えんことなり」イエス彼に「ゆけ、汝の信仰なんぢを救へり」と言ひ給へば、直ちに見ることを得、イエスに従ひて途を往けり。

五一 彼らエルサレムに近づき、オリブ山の麓なるベテバゲ及びベタニヤに到りし時、イエス二人の弟子を遣さんとして言ひ給ふ、「むかひの村にゆけ、其處に入らば、やがて人の未だ乗りたることなき驢馬の子の繋ぎあるを見ん、それを解きて牽き來れ。誰かもし汝らに「なにゆゑ然するか」と言はば、「主の用なり、彼ただちに返さん」といへ」弟子たち往きて、門の外の路に驢馬の子の繋ぎあるを見て解きたれば、其處に立つ人々のうちの或者「なんぢら驢馬の子を解きて何とするか」と言ふ。弟子たちイエスの告げ給ひし如く言ひしに、彼ら許せり。かくて弟子たち驢馬の子をイエスの許に牽きたり、己が衣をその上に置きたれば、イエス之に乗り給ふ。多く人は己が衣を、或人は野より伐り取りたる樹の枝を途に敷く。かつ前に往き後に從ふ者ども

二〇 呼はりて言ふ「ホサナ、讃むべきかな、主の御名によりて來る者」讃むべきかな、今し來る我らの父ダビデの國「いと高き處にてホサナ」遂にエルサレムに到りて宮に入り、凡ての物を見回し、時はや暮に及びたれば、十二弟子と共にベタニヤに出で往きたまふ。

二一 かくる日かれらベタニヤより出で來りし時、イエス飢ゑ給ふ。遂に葉ある無花果の樹を見て、果をや得んと其のもとに到り給ひしに、葉のほかに何をも見出し給はず、是は無花果の時ならぬに因る。イエスその樹に對ひて言ひたまふ「今より後いつまでも、人なんぢの果を食はざれ」弟子たち之を聞けり。

二二 彼らエルサレムに到る。イエス宮に入り、その内にて賣買する者どもを逐ひ出し、兩替する者の臺、鵝を賣るものの腰掛を倒し、また器物を持ちて宮の内を過ぐることを免し給はず。かつ教へて言ひ給ふ「わが家は、もろもろの國人の祈の家と稱へらるべし」と録されたるにあらざや、然るに汝らは之を「強盜の巢」となせり」

二三 祭司長・學者ら之を聞き、如何にしてかイエスを亡さんと謀る、それは群衆みな其の教に驚きたれば、彼を懼れしなり。

二四 夕になる毎に、イエス弟子たちと共に都を出でゆき給ふ。

二五 彼ら朝早く路をすぎしに、無花果の樹の根より枯れたるを見る。ベテロ思ひ出してイエスに言ふ「ラビ、見給へ、詛ひ給ひし無花果の樹は枯れたり」イエス答へて言ひ給ふ「神を信ぜよ。まことに汝らに告ぐ、人もし此の山に「移りて海に入れ」と言ふとも、其の言ふところ必ず成るべしと信じて、心に疑はずば、その如く成るべし。この故に汝らに告ぐ、凡て祈りて願ふ事は、すべてに得たりと信ぜよ、さらば得べし。また立ちて祈るとき、人を怒むる事あらば免せ、これは天に在す汝らの父の、汝らの過失を免し給はん爲なり」

二六 かれら又エルサレムに到る。イエス宮の内を歩み給ふとき、祭司長・學者・長老たち御許に來りて、「何の權威をもて此等の事をなすか、誰が此等の事を爲すべき權威を授けしか」と言ふ。イエス言ひ給ふ「われ一言なんぢらに問はん、答へよ、さらば我も何の權威をもて、此等の事を爲すかを告げん。ヨハネのパプテスマは、天よりか、人よりか、我に答へよ」彼ら互に論じて言ふ「もし天よりと言はば「何故かれを信ぜざりし」と

言はん。されど人よりと言はんか……」彼ら群衆を恐れたり、人みなヨハネを實に預言者と認めたればなり。遂にイエスに答へて「知らず」と言ふ。イエス言ひ給ふ「われも何の權威をもて此等の事を爲すか、汝らに告げじ」

イエス言をもて彼らに語り出て給ふ「ある人、葡萄園を造り、籬を環らし、酒槽の穴を掘り、柵をたて、農夫どもに貸して、遠く旅立せり。時いたりて農夫より葡萄園の所得を受取らんとて、僕をその許に遣ししに、彼ら之を執へて打ちたたき、空手にて歸らしめたり。又ほかの僕を遣ししに、その首に傷つけ、かつ辱しめたり。また他の者を遣ししに、之を殺したり。又ほかの多くの僕をも、或は打ち或は殺したり。なほ一人あり、即ち其の愛しむ子なり「わが子は敬ふならん」と言ひて、最後に之を遣ししに、かの農夫ども互に言ふ「これは世嗣なり、いざ之を殺さん、さらばその嗣業は、我らのものとなるべし」乃ち執へて之を殺し、葡萄園の外に投げ棄てたり。さらば葡萄園の主、なにを爲さんか、來りて農夫どもを亡し、葡萄園を他の者どもに與ふべし。汝ら聖書に

「造家者らの棄てたる石は、これぞ隅の首石となるる。これ主によりて成れるにて、我らの目には奇しきなり」

とある句をすら讀まぬか」ここに彼等イエスを執へんと思ひたれど、群衆を恐れたり、この譬の己らを指して言ひ給へるを悟りしに因る。遂にイエスを離れて去り往けり。
かくて彼らイエスの言尾をとらへて陥入れん爲に、パリサイ人とヘロデ黨との中より、數人を御許に遣す。その者ども來りて言ふ「師よ、我らは知る、汝は眞にして、誰をも憚りたまふ事なし、人の外貌を見ず、眞をもて神の道を教へ給へばなり。我ら買をカイザルに納むるは、宜きか、惡しきか、納めんか、納めざらんか」イエス其の詐偽なるを知りて「なんぞ我を試むるか、デナリを持ち來りて我に見せよ」と言ひ給へば、彼ら持ち來る。イエス言ひ給ふ「これは誰の像、たれの號なるか」カイザルのなり」と答ふ。イエス言ひ給ふ「カイザルの物はカイザルに、神の物は神に納めよ」彼らイエスに就きて甚だ怪しめり。

また復活なしと云ふサドカイ人ら、イエスに來り問ひて言ふ「師よ、モーセは、人の兄弟もし子なく妻を遺して死なば、その兄弟かれの妻を娶りて、兄弟のため嗣子を擧ぐべしと、我らに書き遺したり。ここに七人の兄弟ありて、兄妻を娶り、嗣子なくして死に、第二の者その女を娶り、また嗣子なくして死に、第三の者もまた然なし、七人とも嗣子なくして死に、終には其の女も死にたり。復活のとき彼らみな甦へらん、この女は誰の妻たるべきか、七人これを妻としたればなり」イエス言ひ給ふ「なんぢらの誤れるは、聖書をも神の能力をも知らぬ故ならずや。人、死人の中より甦へる時は、娶らず、嫁がず、天に在る御使たちの如くなるなり。死にたる者の甦へる事に就きては、モーセの書の中なる柴の條に、神モーセに「われはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神なり」と告げ給ひし事あるを、未だ讀まぬか。神は死にたる者の神にあらず、生ける者の神なり。なんぢら大に誤れり」

なり「イスラエルよ聽け、主なる我らの神は唯一の主なり。なんぢ心を盡し、精神を盡し、思を盡し、力を盡して、主なる汝の神を愛すべし」第二は是なり「おのれの如く汝の隣を愛すべし」此の二つより大なる誠命はなし」學者いふ「善きかな師よ「神は唯一にして他に神なし」と言ひ給へるは眞なり。「こころを盡し、智慧を盡し、力を盡して神を愛し、また己のごとく隣を愛する」は、もろもろの矯祭および犠牲に勝るなり」イエスその聽く答へしを見て言ひ給ふ「なんぢ神の國に遠からず」此の後たれも敢へてイエスに問ふ者なかりき。イエス宮にて教ふるとき、答へて言ひ給ふ「なにゆゑ學者らはキリストをダビデの子と言ふか。ダビデ聖靈に感じて自らいへり
「主わが主に言ひ給ふ、我なんぢの敵を汝の足の下に置くまでは、我が右に坐せよ」
と、ダビデ自ら彼を主と言ふ、されば争てその子ならんや」
大なる群衆は喜びてイエスに聽きたり。イエスその教のうちと言ひたまふ「學者らに心せよ、彼らは長き

衣を着て歩むこと、市場にての敬禮、會堂の上座、饗宴の上座を好み、また寡婦らの家を呑み、外見をつくりて長き祈をなす。その受くる審判は更に厳しからん」

イエス賽銭函に對ひて坐し、群衆の錢を賽銭函に投げ入るるを見給ふ。富める多くの者は、多く投げ入れしが、一人の貧しき寡婦きたりて、レプタ二つを投げ入れたり、即ち五厘ほどなり。イエス弟子たちを呼び寄せて言ひ給ふ「まことに汝らに告ぐ、この貧しき寡婦は、賽銭函に投げ入るる凡ての人よりも多く投げ入れたり。凡ての者は、その豊なる内よりなげ入れ、この寡婦は其の乏しき中より、凡ての所有、即ち己が生命の料をことごとく投げ入れたればなり」

イエス宮を出て給ふとき、弟子の一人いふ「師よ、見給へ、これらの石、これらの建造物、いかに盛ならずや」イエス言ひ給ふ「なんぢ此等の大なる建造物を見るか、一つの石も崩されずしては石の上に残らじ」オリブ山にて宮の方に對ひて坐し給へるに、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレに問ふ「われらに告げ給へ、これらの事は何時あるか、又すべて此等の事の成し遂げられんとする時は、如何なる兆あるか」イエス語り出

給ふ「なんぢら人に惑されぬやうに心せよ。多くの者がわが名を冒し來り「われは夫なり」と言ひて多くの人を惑さん。戦争と戦争の噂を聞くと怯るな、かかる事はあるべきなり、されど未だ終にはあらず。即ち「民は民に、國は國に逆ひて起たん」また處々に地震あり、饑饉あらん、これらは産の苦難の始なり。

汝等みづから心せよ、人々なんぢらを衆議所に付さん。なんぢら會堂に曳かれて打たれ、且わが故によりて、司たち及び王たちの前に立てられん、これは證をなさん爲なり。かくて福音は先づもろもろの國人に宣傳へらるべし。人々なんぢらを曳きて付さんとき、何を言はんと預じめ思ひ煩ふな、唯そのとき授けらるることを言へ、これ言ふ者は汝等にあらず、聖靈なり。兄弟は兄弟を、父は子を死にわたし、子らは親たちに逆ひ立ちて死なしめん。又なんぢら我が名の故に凡ての人に憎まれん、されど終まで耐へ忍ぶ者は救はるべし。

「荒す惡むべき者」の立つべからざる所に立つを見ば（讀むもの悟れ）その時ユダヤに在る者どもは、山に遁れよ。屋の上に在る者は、内に下るな。また家の物を取り出さんとて内に入るな。畑に在る者は上衣を取らんとて

歸るな。其の日には孕りたる女と、乳を哺まする女とは禍害なるかな。この事の冬おこらぬやうに祈れ、その日は患難の日なればなり。神の萬物を造り給ひし開闢より今に至るまで、かかる患難はなく、また後にもなからん。主その日を少くし給はずば、救はるる者一人だになからん。されど其の選び給ひし選民の爲に、その日を少くし給へり。其の時なんぢらに「視よ、キリスト此處にあり」「視よ、彼處にあり」と言ふ者ありとも信ずな。僞キリスト、僞預言者ら起りて、徴と不思議とを行ひ、爲し得べくば、選民をも惑さんとするなり。汝らは心せよ、あらかじめ之を皆なんぢらに告げおくなり。

其の時、その患難ののち、日は暗く、月は光を發たず。星は空より隕ち、天にある萬象ふるひ動かん。其のとき人々、人の子の大なる能力と榮光とをもて、雲に乗り來るを見ん。その時かれは使者たちを遣して、地の極より天の極まで、四方より其の選民をあつめん。

無花果の樹よりの譬を學べ、その枝すてに柔かくなりて葉芽ぐめば、夏の近きを知る。かくの如く此等のことの起るを見ば、人の子すてに近づきて門邊にいたるを知れ。まことに汝らに告ぐ、これらの事ことごとく

成るまで、今の代は過ぎ逝くことなし。天地は過ぎゆくん、されど我が言は過ぎ逝くことなし。その日その時を知る者なし。天にある使者たちも知らず、子も知らず、ただ父のみ知り給ふ。心して目を覺しをれ、汝等その時の何時なるかを知らぬ故なり。例へば家を出づる時、その僕どもに權を委ねて、各自の務を定め、更に門守に、目を覺しをれと命じ置きて、遠く旅立したる人のことし。この故に目を覺しをれ、家の主人の歸るは、夕か、夜半か、鶏鳴くころか、夜明か、いづれの時なるかを知らねばなり。恐らくは俄に歸りて、汝らの眠れるを見ん。わが汝らに告ぐるは、凡ての人に告ぐるなり。目を覺しをれ」

さて過越と除酵との祭の二日前となりぬ。祭司長、學者ら詭計をもてイエスを捕へ、かつ殺さんと企てて言ふ「祭の間は爲すべからず、恐らくは民の亂あるべし」

イエス、ベタニヤに在して、癩病人シモンの家にて食事の席につき居給ふとき、或女、價高き混なきナルドの香油の入りたる石膏の壺を持ち來り、その壺を毀ちてイエスの首に注ぎたり。ある人々、憤りて互に言ふ

「なに故かく濫に油を費すか、この油を三百デナリ餘に賣りて、貧しき者に施すことを得たりしものを」而して甚く女を咎む。イエス言ひ給ふ「その爲すに任せよ、何ぞこの女を憐れすか、我に善き事をなせり。貧しき者は常に汝らと借にをれば、何時にても心のままに助け得べし、されど我は常に汝らと借にをらず。此の女は、なし得る限をなして、我が體に香油をそそぎ、あらかじめ葬りの備をなせり。まことに汝らに告ぐ、全世界いづこにても、福音の宣傳へらるる處には、この女の爲しし事も記念として語らるべし」

ここに十二弟子の一人なるイスカリオテのユダ、イエスを賣らんとて祭司長らの許にゆく。彼等これを聞きて喜び、銀を與へんと約したれば、ユダ如何にしてか機好くイエスを付さんと謀る。

除酵祭の初の日、即ち逾越の羔羊を屠るべき日、弟子たちイエスに言ふ「逾越の食をなし給ふために、我らが何處に往きて備ふることを望み給ふか」イエス二人の弟子を遣さんとして言ひたまふ「都に往け、然らば水をいれたる瓶を持つ人、なんぢらに遇ふべし。之に従ひ往き、その入る所の家主に「師いふ、われ弟子らと

共に逾越の食をなすべき座敷は何處なるか」と言へ。さらば調へ備へたる大なる二階座敷を見すべし。其處に我らのために備へよ」弟子たち出て往きて都に入り、イエスの言ひ給ひし如くなるを見て、逾越の設備をなせり。

日暮れてイエス十二弟子とともに往き、みな席に就きて食するとき言ひ給ふ「まことに汝らに告ぐ、我と共に食する汝らの中の一人、われを賣らん」弟子たち憂ひて一人一人「われなるか」と言ひ出して、イエス言ひたまふ「十二のうち一人にて、我と共にパンを鉢に浸す者は夫なり。實に人の子は己に就きて録されたる如く逝くなり。されど人の子を賣る者は禍害なるかな、その人は生れざりし方よかりしものを」

彼ら食しをる時、イエス、パンを取り、祝してさき、弟子たちに與へて言ひたまふ「取れ、これは我が體なり」また酒杯を取り、謝して彼らに與へ給へば、皆この酒杯より飲めり。また言ひ給ふ「これは契約の我が血、おほくの人爲に流す所のものなり。まことに汝らに告ぐ、神の國にて新しきものを飲む日まで、われ葡萄の果より成るものを飲まじ」

かれら讚美をうたひて後、オリブ山に出てゆく。イエス弟子たちに言ひ給ふ「なんぢら皆頭かん、それは「われ牧羊者を打たん、さらば羊散るべし」と録されたるなり。されど我よみがへりて後、なんぢらに先だちてガリラヤに往かん」時にペテロ、イエスに言ふ「假令みな頭くとも、我は然らじ」イエス言ひ給ふ「まことに汝に告ぐ、今日この夜、鶏ふたたび鳴く前に、なんぢ三たび我を否むべし」ペテロ力をこめて言ふ「われ汝とともに死ぬべき事ありとも、汝を否まず」弟子たち皆かく言へり。

彼らゲツセマネと名づくる處に到りし時、イエス弟子たちに言ひ給ふ「わが祈る間、ここに坐せよ」かくてペテロ、ヤコブ、ヨハネを伴ひゆき、甚く驚き、かつ悲しみ出でて言ひ給ふ「わが心いたく憂ひて死ぬばかりなり、汝ら此處に留りて目を覺しをれ」少し進みゆきて、地に平伏し、若しも得べくば此の時の己より過ぎ往かんことを祈りて言ひ給ふ「アバ父よ、父には能はぬ事なし、此の酒杯を我より取り去り給へ。されど我が意のままを成さんとあらず、御意のままを成し給へ」來りて、その眠れるを見、ペテロに言ひ給ふ「シモン

よ、なんぢ眠るか、一時も目を覺しをること能はぬか。なんぢら誘惑に陥らぬやう、目を覺しかつ祈れ。實に心は熱すれども肉體よわきなり」再びゆき、同じ言にて祈り給ふ。また來りて彼らの眠れるを見たまふ、是の目いたく疲れたるなり、彼ら何と答ふべきかを知らざりき。三度來りて言ひたまふ「今は眠りて休め、足れり、時きたれり。觀よ、人の子は罪人らの手に付さるるなり。起て、われら往くべし。觀よ、我を賣る者ちかづけり」

なほ語りぬ給ふほどに、十二弟子の一人なるユダ、やがて近づき來る、祭司長・學者・長老らより遣されたる群衆、劍と棒とを持ちて之に伴ふ。イエスを賣るもの、あらかじめ合圖を示して言ふ「わが接觸する者はそれなり、之を捕へて確と引きゆけ」かくて來りて直ちに御許に往き「ラビ」と言ひて接觸したれば、人々イエスに手をかけて捕ふ。傍らに立つ者のひとり、劍を抜き、大祭司の僕を撃ちて、耳を切り落せり。イエス人々に對ひて言ひ給ふ「なんぢら強盜にむかふ如く、劍と棒とを持ち、我を捕へんとて出て來るか。我は日々なんぢらと借に宮にありて教へたりしに、我を執へざりき、されど

十字架より下りよかし、さらば我ら見て信ぜん」共に十字架につけられたる者どもも、イエスを罵りたり。
 三三 晝の十二時に、地のうへ徧く暗くなりて、三時に及ぶ。三時にイエス大聲に「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」と呼はり給ふ。之を釋けば、わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給ひし、との意なり。傍らに立つ者のうち或人々これを聞きて言ふ「視よ、エリヤを呼ぶなり」。一人はしり往きて、海綿に酸き葡萄酒を含ませて葦につけ、イエスに飲ましめて言ふ「待て、エリヤ來りて、彼を下すや否や、我ら之を見ん」。イエス大聲を出して息絶え給ふ。聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなりたり。イエスに向ひて立てる百卒長、かかる様に息絶え給ひしを見て言ふ「實にこの人は神の子なりき」。また遙に望み居たる女たちあり、その中にはマグダラのマリヤ、小ヤコブとヨセとの母マリヤ、及びサロメなども居たり。彼らはイエスのガリラヤに居給ひしとき、從ひ事へし者どもなり。此の他イエスと共にエルサレムに上りし多くの女もありき。
 三四 日既に暮れて、準備日すなはち安息日の前の日となりたれば、貴き議員にして、神の國を待ち望める、

アリマタヤのヨセフ來りて、憚らずピラトの許に往き、イエスの屍體を乞ふ。ピラト、イエスは早や死にしかと訝り、百卒長を呼びて、その死にしより時經しや否やを問ひ、既に死にたる事を百卒長より聞き知りて、屍體をヨセフに與ふ。ヨセフ亞麻布を買ひ、イエスを取下して之に包み、岩に鑿りたる墓に納め、墓の入口に石を轉し置く。マグダラのマリヤとヨセの母マリヤと、イエスを納めし處を見たり。
 三五 安息日終りし時、マグダラのマリヤ、ヤコブの母マリヤ及びサロメ、往きてイエスに抹らんとて香料を買ひ、一週の首の日、日の出でたる頃いと早く墓にゆく。誰か我らの爲に墓の入口より石を轉すべきと語り合ひしに、目を舉ぐれば、石の既に轉しあるを見る。この石は甚だ大なりき。墓に入り、右の方に白き衣を着たる若者の坐するを見て甚く驚く。若者いふ「おどろくな、汝らは十字架につけられ給ひしナザレのイエスを尋ねれど、既に甦へりて、此處に在さず。視よ、納めし處は此處なり。されど往きて弟子たちとペテロとに告げよ」。汝らに先だちてガリラヤに往き給ふ、彼處にて調ゆるを得ん、曾て汝らに言ひ給ひしが如し。女たち

甚く驚きをののき、墓より逃げ出でしが、懼れたれば一言をも人に語らざりき。
 三六 (一週)の首の日の拂曉、イエス甦へりて先づマグダラのマリヤに現れたまふ。前にイエスが七つの惡鬼を逐ひいだし給ひし女なり。マリヤ往きて、イエスと偕にありし人々の、泣き悲しみ居るときに之を告ぐ。彼らイエスの活き給へる事と、マリヤに見え給ひし事を聞けども信ぜざりき。
 三七 此の後その中の二人、田舎に往く途を歩むほどに、イエス異なりたる姿にて現れ給ふ。此の二人ゆきて、他の弟子たちに之を告げたれど、なほ信ぜざりき。
 三八 其ののち十一弟子の食しをる時に、イエス現れて、己が甦へりたるを見し者どもの言を信ぜざりしにより、

其の信仰なきと、其の心の頑固なるを責め給ふ。かくて彼らに言ひたまふ「全世界を巡りて凡ての造られしものに福音を宣傳へよ。信じてバプテスマを受くる者は救はるべし、然れど信ぜぬ者は罪に定めらるべし。信する者には此等の徴ともなはん。即ち我が名によりて惡鬼を逐ひだし、新しき言をかたり、蛇を握るとも、毒を飲むとも、害を受けず、病める者に手をつけなば癒えん」
 三九 語り終へてのち、主イエスは天に擧げられ、神の右に坐し給ふ。弟子たち出でて、あまねく福音を宣傳へ、主も亦ともに働き、伴ふところの徴をもて、御言を確らし給へり。
 四〇 マルコ傳福音書 をはり

ルカ傳福音書

第一章 我らの中に成りし事の物語につき、始よりの目撃者にして、御言の役者となりたる人々の、我らに傳へし其のままを書き列ねんと、手を著けし者あまたある故に、我も凡ての事を最初より詳細に推し尋ねたれば、テオピロ閣下よ、汝の教へられたる事の儘なるを悟らせん爲に、これが序を正して書き贈るは善き事と思はるるなり。

ユダヤの王ヘロデの時、アビヤの組の祭司に、ザカリヤといふ人あり。その妻はアロンの裔にて、名をエリサベツといふ。二人ながら神の前に正しくして、主の誠命と定規とを、みな缺なく行へり。エリサベツ石女なれば、彼らに子なし、また二人とも年邁みぬ。

さてザカリヤその組の順番に當りて、神の前に祭司の務を行ふとき、祭司の慣例にしたがひて、籤をひき主の聖所に入りて、香を焼くこととなりぬ。香を焼くとき、民の群みな外にありて祈りたり。時に主の使あらはれて、香壇の右に立ちたれば、ザカリヤ之を見て、心さわざ懼を生ず。御使いふ「ザカリヤよ、懼るな、汝の

願は聴かれたり。汝の妻エリサベツ男子を生まん、汝その名をヨハネと名づくべし。なんちに喜悅と歡樂とあらん、又おほくの人もその生るるを喜ぶべし。この子、主の前に大ならん、また葡萄酒と濃き酒とを飲まず、母の胎を出づるや聖靈にて満されん。また多くのイスラエルの子らを、主なる彼らの神に歸らしめ、且エリヤの靈と能力とをもて、主の前に往かん。これ父の心を子に、戻れる者を義人の聰明に歸らせて、整へたる民を主のため備へんとてなり」ザカリヤ御使にいふ「何に據りてか此の事あるを知らん。我は老人にて、妻もまた年邁みたり」御使こたへて言ふ「われは神の御前に立つガブリエルなり、汝に語りてこの嘉き音信を告げん爲に遣さる。視よ、時いたらば必ず成就すべき我が言を信ぜぬに因り、なんち物言へずなりて、此らの事の成る日までには語り、なんち能はじ」民はザカリヤを俟ちあて、其の聖所の内に久しく留るを怪しむ。遂に出て來りたれど語ることを能はねば、彼らその聖所の内にて異象を見たることを悟る。ザカリヤは、ただ首にて示すのみ、なほ啞なりき。かくて務の日満ちたれば、家に歸りぬ。此の後その妻エリサベツ孕りて、五月ほど隠れ

をりて言ふ、「主わが恥を人の中に雪がせんとて、我を願み給ふときは、斯く爲し給ふなり」

その六月めに、御使ガブリエル、ナザレといふガリラヤの町に在る處女のもとに、神より遣さる。この處女はダビデの家のヨセフといふ人と許嫁せし者にて、其名をマリヤと云ふ。御使、處女の許にきたりて言ふ「めでたし、恵まるる者よ、主なんちと備に在せり」マリヤこの言によりて心いたく騒ぎ、斯かる挨拶は如何なる事ぞと思ひ廻らしたるに、御使いふ「マリヤよ、懼るな、汝は神の御前に恵を得たり。視よ、なんち孕りて男子を生まん、其の名をイエスと名づくべし。彼は大ならん、至高者の子と稱へられん。また主たる神、これに其の父ダビデの座位をあたへ給へば、ヤコブの家を永遠に治めん。その國は終ることなかるべし」マリヤ御使に言ふ「われ未だ人を知らぬに、如何にして此の事のあるべき」御使こたへて言ふ「聖靈なんちに臨み、至高者の能力なんちを被はん。此の故に汝が生むところの聖なる者は、神の子と稱へらるべし。視よ、なんちの親族エリサベツも、年老いたれど、男子を孕めり。石女といはれたる者なるに、今は孕りてはや六月になりぬ。それ神の言には

能はぬ所なし」マリヤ言ふ「視よ、われは主の婢女なり。汝の言のごとく、我に成れかし」つひに御使はなれ去りぬ。

その頃マリヤ立ちて山里に急ぎ行き、ユダの町にいたり、ザカリヤの家に入りてエリサベツに挨拶せしに、エリサベツその挨拶を聞くや、兒は胎内にて躍れり。エリサベツ聖靈にて満され、聲高らかに呼はりて言ふ「をんなの中に汝は祝福せられ、その胎の實もまた祝福せられたり。わが主の母われに來る、われ何によりてか之を得し。視よ、なんちの挨拶の聲、わが耳に入るや、我が兒、胎内にて喜びをどれり。信ぜし者は幸福なるかな、主の語り給ふことは必ず成就すべければなり」マリヤ言ふ

「わがこころ主をあがめ、わが靈はわが救主なる神を喜びまつる。その婢女の卑しきをも願み給へばなり。視よ、今よりのち萬世の人われを幸福とせん。全能者われに大なる事を爲したまへばなり。その御名は聖なり、そのあはれみは代々

五二 かしこみ恐るる者に臨むなり。
 五三 神は御腕にて權力をあらはし、
 五四 心の念に高ぶる者を散し、
 五五 權勢ある者を座位より下し、
 五六 いやしき者を高うし、
 五七 飢ゑたる者を善き物に飽かせ、
 五八 富める者を空しく去らせ給ふ。
 五九 また我らの先祖に告げ給ひし如く、
 六〇 アブラハムとその裔とに對する
 六一 あはれみを永遠に忘れじとて、
 六二 僕イスラエルを助けたまへり」
 六三 かくてマリヤは、三月ばかりエリサベツと偕に居りて、
 六四 己が家に歸れり。
 六五 さてエリサベツ産む期みちて男子を生みたれば、
 六六 その最奇のもの親族の者ども、主の大なる憐憫をエリサ
 六七 ベツに垂れ給ひしことを聞きて、彼とともに喜ぶ。八日
 六八 めになりて、其の子に割禮を行はんとて人々きたり、
 六九 父の名に因みてザカリヤと名づけんとせしに、母こたへ
 七〇 て言ふ「否、ヨハネと名づくべし」かれら言ふ「なんぢ
 七一 の親族の中には此の名をつけたる者なし」而して父に

六三 首にて示し、いかに名づけんと思ふか、問ひたるに、
 六四 ザカリヤ書板を求めて「その名はヨハネなり」と書き
 六五 しかば、みな怪しむ。
 六六 ザカリヤの口たちどころに開け、舌ゆるみ、物いひ
 六七 て神を讚めたり。最奇に住む者みな懼をいだき、又すべ
 六八 て此等のこと偏くユダヤの山里に言ひ囁かれたれば、
 六九 聞く者みな之を心にとめて言ふ「この子は如何なる者
 七〇 にか成らん」主の手かれと偕に在りしなり。かくて父
 七一 ザカリヤ聖靈にて満され預言して言ふ、
 七二 「讚むべきかな、主イスラエルの神、
 七三 その民をかへりみて贖罪をなし、
 七四 我らのために救の角を、
 七五 その僕ダビデの家に立て給へり。
 七六 これぞ古へより聖預言者の口をもて言ひ給ひし
 七七 如く、
 七八 我らを仇より、凡て我らを憎む者の手より、取り
 七九 出したまふ救なる。
 八〇 我らの先祖に憐憫を垂れ、その聖なる契約を思し、
 八一 我らの先祖アブラハムに立て給ひし御誓を忘れず
 八二 して、

七四 我らを仇の手より救ひ、
 七五 生涯、主の御前に、
 七六 聖と義とをもて懼なく事へしめたまふなり。
 七七 幼兒よ、なんぢは至高者の預言者と稱へられん。
 七八 これ主の御前に先だちゆきて、其の道を備へ、
 七九 主の民に罪の赦による
 八〇 救を知らしむればなり。
 八一 これ我らの神の深き憐憫によるなり。
 八二 この憐憫によりて朝のひかり、上より臨み、
 八三 暗黒と死の蔭とに坐する者をてらし、
 八四 我らの足を平和の路にみちびかん」
 八五 かくて幼兒は漸に成長し、その靈強くなり、イスラエル
 八六 に現るる日まで荒野にいたり。
 八七 其の頃、天下の人を戸籍に著かすべき詔令、
 八八 カイザル・アウグストより出づ。この戸籍登録は、クレ
 八九 ニオ、シリヤの總督たりし時に行はれし初のものなり。
 九〇 さて人みな戸籍に著かんとて、各自その故郷に歸る。
 九一 ヨセフもダビデの家系また血統なれば、既に孕める
 九二 許嫁の妻マリヤとともに、戸籍に著かんとて、ガリラヤ
 九三 の町ナザレを出でてユダヤに上り、ダビデの町ベツレヘ

八四 ムといふ處に到りぬ。此處に居るほどに、マリヤ月満
 八五 ちて、初子をうみ、之を布に包みて馬槽に臥させたり。
 八六 旅舎にをる處なかりし故なり。
 八七 この地に野宿して、夜群を守りける牧者ありしが、
 八八 主の使その傍らに立ち、主の榮光その周圍を照したれ
 八九 ば、甚く懼る。御使かれらに言ふ「懼るな、觀よ、この
 九〇 民一般に及ぶべき、大なる歡喜の音信を我なんぢらに
 九一 告ぐ。今日ダビデの町にて汝らの爲に救主うまれ給へ
 九二 り、これ主キリストなり。なんぢら布にて包まれ、馬槽
 九三 に臥しをる嬰兒を見ん、是の徴なり」忽ちあまたの
 九四 天の軍勢、御使に加はり、神を讚美して言ふ、
 九五 「いと高き處には榮光、神にあれ、
 九六 地には平和、主の悦び給ふ人にあれ」
 九七 御使等さりて天に往きしとき、牧者ががひに語る「い
 九八 ざ、ベツレヘムにいたり、主の示し給ひし起れる事を
 九九 見ん」乃ち急ぎ往きて、マリヤとヨセフと、馬槽に臥し
 一〇〇 たる嬰兒とに尋ねあふ。既に見て、この子につき御使の
 一〇一 語りしことを告げれば、聞く者はみな牧者の語りしこ
 一〇二 とを怪しみたり。而してマリヤは凡て此等のことを心に
 一〇三 留めて思ひ回せり。牧者は御使の語りしごとく凡ての